
やみなべごはん

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やみなべごはん

【Nコード】

N3547E

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

2008年初頭からの作品を集めます（一部を除く）。ジャンルは様々で、企画作品も展示します。基本短編。不真面目なあとがき付き。作品が50くらい溜まったらタイトルが過去作品集2に変わる予定です。でも良いタイトル案があればその前に変えたいです。

五月に『過去作品集』からタイトルを変えました（最近まったく過去作品集じゃなくなってることに気づいたため）。

動かぬ時計（ギフト企画・文学）（前書き）

これは風海さん主催のギフト企画に書き下ろした短編です。

動かぬ時計（ギフト企画・文学）

祖父の危篤が知らされたのは、大学の講義をしていたときだった。淀んだ空がちぎれて牡丹雪に変えられていく中、凍えた足を駅まで進ませる。夏に帰ったときには死ぬかもしれないと経験が漠然と訴えていた。とつくに覚悟は出来ていて、だからさほど痛みはなく、ただ雪に埋もれてゆく世界が冷たかった。いや、突然死んだとして、そこに悲しみをはらんでいたかは疑いを挟むが。

新幹線に揺られて三時間ほど上へのぼると、牡丹雪はさらに身をすくめてしまい、完全な氷の粒が羽のように舞う。数百キロ場所を移しただけで空気から違うものだと思えていると、ふいに祖父の言葉が滲み出た。

——あまり面倒をみてやれなくてすまなかった。

それは簡単にほぐれてゆき、跡形もなく現在に流される。切符を握りしめ改札に通し、タクシーに滑り込む。

病院につく頃には、死んでいた。

昔、私に祖父はいなかった。

正確に言つと、私という人間が認識し続けた範囲に祖父の姿は少なかった。

父も母も夜遅くまで働いていたので、私は保育所を終えると祖母の迎えて祖父母の家に帰った。家はいつもがらんどろで薄暗く、祖母と二人で密やかに食事をし風呂に入り、眠る前には父や母が戻るので隣接する家にやっと帰り、眠る。

祖父と会うことはまずなかった。祖父は私と離れた仕事場でずっと、時計を直していた。懐中時計を専門とした職人で、それなりの腕を持っていたらしく、常にせわしなく机に向かっていた。常に私

ではなく、時計の側にいた。

たぶん、幼い私を仕事場に近づけなくなかったに違いない。朝から晩まで丸眼鏡をつけた目を細め、か細い光を皺で爛れた手元に点らせ、一心不乱に時計を睨みつける祖父を初めて黙視したのは中学のときだ。

もしかしたら本当に、中学まで祖父はいなかったのかもしれない。障子の向こうにいる祖父は、はたを織る鶴かなんかだったかもしれない。

「ですからあまり、祖父の記憶はないんですよ」

客人に酒を注ぎながら言葉をこぼすと、愉快そうな笑いが宴に弾けた。

「違いない。俺は鶴が作った時計を使っていたのかもしれない」

白髪交じりに口髭まで白い、上品そうなその客人は胸ポケットから懐中時計を取り出すと丁寧に指で払う。

「羽はついていないみたいだな」

その動作に、また四方八方と談笑が漏れる。私はどこがそんなに面白いのだろうと考えながら隣にもビール瓶を傾けた。年を取ると反応も大袈裟になるのかもしれない。

それはそうと。と、一番歳を感じさせる老人が呟いた。

「惜しい男をなくしたな。弟子もいなかったんだろう」

「ああ。これから時計が壊れたら誰に頼もうかね」

その会話に、私は息をつめた。存在を主張するようなことはひとつもなく、ただそこに“あった”祖父。まるで田圃に佇み、時という木枯らしの中でひたすらくびれてゆくようだった彼の死を悼んでいる者がいる。

なんだか不思議な気持ちに陥った。祖父はそこにあっただけではなく、確かに何かをしていたのだ。

時計を作っているらしい、というあやふやな行為が、時計を作っ

ていた、という明らかな輪郭を持つ。そのことに私は無意識に驚き、驚いたことに驚く。おかしい認識ではあるが――、祖父は人間だったのだ。

「君はお孫さんだよね。跡は継がないのかい」

「え、はい……」

急に話を振られて、どもりながらなんとか答えると、客人たちは目を合わせてひそひそと意見を交わし始めた。なんだか居たたまれなくなり、空のビール瓶を回収するふりをして大広間を後にする。

呼吸がくすぶる。廊下には暖房がない。二重窓の外には暗闇に浮かぶように白が横たわっている。どこまでも降り積もり、やむことを知らない。

冷えきった廊下に足が痛みをささやく。靴下の中はかじかみ、赤くなっているだろう。なのに誰の相手もしたくない。居間には親戚がいるし、大広間には客人がいて、台所には女たちがいて、寝室に入って早々に休むことは年齢的に許されない。

どこにもゆく宛がなくて、光の少ない方向を見つめた。廊下の奥で橙色の光が淡く瞬いている。まるで夢遊病者のように、私は歩をそちらへと滑らした。その先には、祖父がいる。

布団の上に、彼はいた。部屋の明かりは、切らしてはいけなと言われた太く長い蠟燭のみ。それに照らされた肌は依然見たときより少し若返っているような気がした。ゴム鞆に似た無機質な白濁色をしている。

畳に腰を下ろし、凝視しているうちに、ふいにまたあの声が聞こえた。

――あまり面倒をみてやれなくてすまなかった。

改めて思いたし、深く噛みしめて、私は違和感を覚えた。奇妙な台詞じゃないか、そんな風な考えが波音をたてる。

「後悔をいつしていたの」

囁きは言霊にはならなかった。ただの隙間風となつて心を揺らす。いつ後悔をしたの。面倒をみたかったの。どうして申し訳なく思うの。感情はあったの。何を考えていたの。

かつて、祖父にこんなにも近づいたことがあつたろうか。気づくと私は吸い込まれるように魅入つていた。そのまま、恐る恐る額に触れる。冷たい。死体というものはこんなにも冷たいのか。

どこかの書籍で読んだ。記憶は定かではないが、大江健三郎だつたと思う。タイトルはそう、死者の奢りだつたか。

それによると死亡から火葬までの死体は、意識と物との曖昧な中間状態を推移しているのだという。

物語では私と同じくらいの年頃の青年が、ホルマリン漬けされた死体は“物”として確固たる感覚を悟つていた。彼は死を物だと推測していた。

私も今、彼と同じようなことを感じている。これは物だ。蠟人形と大差はない、正確な“物質”なのだ。

祖父はやはり、鶴だつたかもしれない。それも縁日で売っているような飴細工の鶴だ。私にとって彼は、人間になれないまま逝つたのだ。そして私もまた、それを当然のものとして受け入れている。なんとも寂しく侘びしい人生じゃないか。機械と同じ、懐中時計と同じ、壊れても実の孫に涙を流させることも出来ないのだから。嘲るわけではない。それはあくまで祖父の生き方だ。けれどどこか、個人的な同情もある。

——すまなかつた、そう彼は言つたのだから。

哀れみを、もう二度と熱の戻らない祖父にかけながら私は、壇を仰ぐ。写真の表面、焦点の動かない祖父は厳格で、やはり人間味は微塵もない。

虚しい。やはり寝室のある二階にあがってしまおうか。私がそんな風に考えあぐねていると、祖父の手が布団からはみ出ているのが目に引かかった。運ぶときにでもそうだったのか、誰かが手を握ったのか。

仕方なく、私は祖父の腕に手を伸ばした。片づけてさっさと寝てしまおう。そう思い、だが、そこで気づいた。

祖父の白い手首に、更に白い羽が落ちている。

……いや。

「日焼けのあと？」

途端に、ある記憶が頭蓋を駆け抜けた。

柔らかな牡丹雪が、慄然とした六角形あるいはアスタリスクを描いた雪へと硬化するように、輪郭が浮き彫りとなる。坂を転がる歯車が重力に反し逆行するように過去が転がり込んでくる。

私は飛び出した。祖父を背にして廊下を走りすぎ、なだれるように祖父の仕事場に入る。記憶が落としたある物を求め、端から端まで見渡す、懐中電灯の部品が散らばった仕事机。ついに私は探し出した。

それは、邂逅に近い衝撃だった。

ふらふらと祖父の眠る部屋へ戻る。布団の脇に正座し、そして私はそれをかけてやった。白い肌と雪のように白い肌と。薄すぎるその境界に、それはさも当たり前のようにつくりと合った。

時計。私の作った時計だ。

保育所の年長組だったろうか。私はその頃に祖父の仕事を教えてもらった。どうやら、時計を作っているらしいと。

あまり姿を見ることがない祖父の正体に初めて触れ、私は感激した。しかも機械を作っているのだという。時計を作っているのだと。

素直に、格好いいと思った。

ちょうどクリスマス前の時期。サンタクロース宛に、ほしいものを書いた手紙を書こうという内容で図工作業があった。

その中、私は作業で一人もくもくと、余った手紙をちぎり、色紙と糊、クレヨンで腕時計を作った。私は自分がサンタになるうと決めていたのだ。祖父に、とびきりのプレゼントとして時計を贈ろうと。

不器用な私が組んだ時計は随分とアンバランスで、糊代はボロボロ、接合部もちぐはぐ。なにより紙切れでできているのだから動かない。常におやつの時間を指し示した、お世辞にもオモチャとも言えない時計であった。それでも当時の私にとってそれは時計で、時計職人の祖父は喜ぶだろうと思った。

私はお手製の時計を持ち帰ると、時計と靴下を片手に祖父の仕事場に向かった。

しかし祖父の姿はない。そのかわり、懐中時計が並んでいた。

金色、銀色、木の模様。

様々な円は同じ針を差し、それはおやつの時間ではなく、なににより正確に時を刻んでいた。爪先立ちをするとようよう伺える卓上には小指よりも小さい粒が星のように光り、分解されて盤を開かれた時計は迷宮のように精密だった。あまりにも耽美な世界が、匠による複雑かつ壮麗な技巧の数々が、単純で矮小な私を観察していた。

困惑した。その時、私はあまりにも幼く、祖父の技どころか懐中時計という時計を知らなかった。

自分の時計は形が違うから、細かくないから、綺麗じゃないから、祖父にはいらないかもしれない。そんな不安を感じていると、ぬつと祖父がやって来た。

「何している」

祖父は大きく、少し臭った。声は重油のようだった。予期していなかった緊迫感に、私は縮みあがり、たじろぎ、机に頭をぶつかる。カチャン、と、金属音が響いた。

「部品が飛び散ったろうっ！！」

怒りの瀑布。絶叫が全身を叩き部屋を殴り、私は頭を抱えて懸命に逃げた。号泣しながら祖母のいる台所に、崩落した洞窟から避難するように。

関係は閉ざされた。紙の時計はそのとき、無くした。

祖父の声が木霊する。

何が鶴だ。何が同情だ。近寄らなかったのは自分じゃないか。許さなかったのは自分じゃないか。

仕事熱心で寡黙な祖父は、私が仕事場に落つこと物を見て何を思ったろう。何を感じたろう。知りたい。その気持ちを分かりたい。教えてほしい。どうして自分自身が創作した時計ではなく、ハサミも糊も満足に使えない孫の時計を使ったのか。何年も、何年も、日焼けができるまで腕に巻き続けたのか。粗雑な贈り物から一体、何を繋げようと思っていたのか。

祖父が、祖父が。

「“物” なわけがないじゃないかつ……！」

外から宴の騒ぎが小さく響いてくる。畳に突っ伏して祖父の残滓を握りしめる。それでも雪が降っていることは分かる。切り裂くような冷たさが、匂いが喉から肺へと深く沈み込んで締めあげ、しんしんという、無いはずの音が鼓膜をたゆたう。

降ってくれ。もっと降ってくれ。

あまりにも遅い、理解。あまりにも遅い、後悔。

こんな絆を選んだ自分を、それで良しとしようとした自分を埋めてくれ。じたばたと喘ぐ惨めな子供を追いやってくれ。

雪が降る。降り続く。闇色に黙り込んだ夜に狼狽える白、羽のよ
うな粉雪が。こみ上げる。とても近い場所で、今一度祖父は、
柔らかな息の根をとめる。忘却と悔恨が支配する。
もう針は、動くこと叶わない。

動かぬ時計（ギフト企画・文学）（後書き）

祖父との思い出をベースにして書いたものです。時計屋さんではありませんが、自分には勿体無いくらい立派な祖父です。

あと、頂いた感想から地域によって葬式の仕方は異なるのだと知り、いつかお葬式をテーマにした作品を書きたいなあと思った記憶があります。

パパ妊娠マシーンズ（ホームドラマ）

腰から腹にかけて重いつたりやありやしない。

マイハニーこと町子さんが持つてきたバンドを、僕は腰に巻いている。妊婦教室で渡された、父親が妊婦体験を出来るマシーンなのだという。胎児、羊水、出産のため身に付く脂肪を想定した重さで約十キロ。時折、胎児の動きも疑似体験できる。小学生のパンチくらの痛みで、その度に僕はグフツと呻いた。

おかげで、先ほどから晩ご飯の調理は遅々として進まない。

「ワシが味わっている苦しみはどんなじゃ？」

気まぐれか、居間でドラクエに興じていた町子さんが僕を後ろから抱きしめてきた。

「ボス退治終わったの？」

「二回全滅したのじゃ……」

僕は背中にすりつき地鳴りのような声を絞り出す町子さんに注意しながら、キュウリを刻む。今日は久しぶりにサラダボールを作るのだ。胎教のために、僕の。

「やっぱり遊び人しかないメンバーなんて無謀だと思うよ」

「うー、もうっ私のことは良いから！ 妊婦体験バンド！ のご感想は！？」

「……ヘルニアになりそ」

町子さんは僕からパツと離れると、

「もつと苦しむがよい、ケケケ」と、不気味な台詞を残してキッチンを立ち去った。一体なにがしたいんだ。

ため息が漏れる。町子さんは妊婦なのだが（もちろん僕の子だ）、先日、バスに乗ったときに席を譲って貰えなかったらしい。優先席を占領していたのが僕と同じく健康的な若いサラリーマンで、町子

さんは怒りに震えた。

男はもつと妊婦の苦しみを知るべきだ！

妊娠三十七週目の妊婦にしてはスレンダーで、いつも腹の目立たないフリルだらけの服を着ている町子さんは、だから僕に痛みを押しつけた。僕、関係ないのに。つまるところ、町子さんはDSなのである。

ドンッ。

疑似胎児の蹴りが一発。気づくと、鍋が嘔きこぼれていた。慌てて火力を押さえる。

しばらく使っていて気づいたのだが、こいつ、妙にタイミングが良い。

町子さん曰く、バンドは音や体温に反応して蹴りをかますのだという。例えば、僕は鍋に入れる大根をイチヨウ切りしてゆく。

トトトトト。

ドドドドドン。

すごい。まな板と包丁の刃が奏でるリズムと寸分の狂いもない。驚くべきセンスを持ったバンドだ。これで重たくなければ日常にも有効利用でき……ないか。

僕はうんと背伸びをしてから、大根を鍋に投げ入れた。家の中でしかつけていないというのに、こうでもしなければ本当にヘルニアになってもなってしまうくらい、地味に重たいバンド。いや、疑似胎児。

妊婦って大変だ。いや、妊婦でもないのにこんなことをさせられる旦那の方が大変か？ 産休入ってないしな。

「あーあ、おまえがもつと軽ければなあ」

僕は舌打ちをしつつ悪態をかました。すると、

ドン。

まるで粗暴な態度を責めるように、バンドが振動した。思わず、「ぐふっうんッ」と足の小指をぶつけてしまったような声が出る。なんだ？　いくらなんでもタイミングが良すぎないか？　現代の科学はそんなに高性能なのだろうか、いや確かに、人類文化の進歩はすさまじい。近年に到っては目を見張るもので、高性能すぎる携帯電話はすべての機能を把握出来ないほどだし、その説明書は人を軽く撲殺出来そうだし、犯行告白をブログという形で全世界の人に伝えることが出来る。

……今のところそんな予定はないけど。
それはさておき、ちょっとこれは凄い。まるで、
「生きてるみたいだ」

ドン。

なんと！　驚くべきことに相づちを打つじゃないか。

心底たまげて僕は、

「もしかして、言ってること分かるの？」

バカバカしい独り言だ。たかがバンドだ。深夜番組で昔えんえんと宣伝されていた脂肪燃烧バンドと酷似した、或いは、アメリカで今話題のファッショブナルな腰巻きだと言っても誰も疑わなさそうな機械が、そんな機能を……。

ドドン。

「……まじですか」

最近の科学の発展はとんでもない。そういえば二十二世紀にはドラえもんが出来る予定なのだ。人類はこんなバンドにさえ高度なAI機能を付属するようになったのか。まるでグリコのおマケ。まる

で……ああもう、巧い例えが見つからない！

「君、すごいね」

僕が褒めると、誇らしげにバンドは二回弾けた。本当に分かるらしい。僕はワクワクしながら、煮立つ鍋に味噌を溶かし込んだ。

「今日はサラダと、味噌汁と、魚の煮物です」

バンドが返事をする。

「嬉しいですか？」

今度はまるでダンスを踊るように何度も跳ね回る。

突然、なんだろう？ 胸がキュンとした。僕の言葉に振動で反応する、ただかそんな機能なのに、ただの機械ではないような気がしてくる。

そういえば小学生の頃に、たまごっちという玩具が流行した。卵形で、小さな画面と三つのボタンが付いていて、画面の中でうようとデジタルペットが動いている。餌をやったり、うんこ流してやつたり、その程度の機能しかないのに愛着が湧いてきて、最初の一匹目が死んで幽霊になった時は悔しくて虚しくて、仮病を使って学校をサボろうとして親に尻を叩かれた。僕より溺愛した人は、わざわざペット霊園に本当の墓を作ってニュースになった。

八百万の神の精神、人はどんなものにも命を与えられるのだ。

バンドが妙に愛おしく感じられて、僕は思わず腹を撫でさすった。自分の子どもを慈しむ、本当の妊婦のように。

……町子さんは、こんな気持ちなんだろうか。

ういやつ、ういやつと愛を注ぎながら、晩ご飯の準備を終え、料理を居間へ運ぶ。町子さんはドラクエを中断したらしく、彼女にしては珍しくテレビさえつけていなかった。

「遅い。腹が減ったぞ勇者よ」

「ねえねえ町子さん、これすごいんだよ」

僕は早速、町子さんにバンドのことを話した。

「こいつさ、相づちとか打つの！　なんだか生きてるみたいだよ。可愛くて、可愛くてさ。なんだか今、お母さんな気分」

「バカこくでねー」

町子さんはまるで酒癖の悪い酔っぱらい親父のように舌打ちをした。

「そんな機能はありません。やあね、腰ヘルペスならぬ脳ヘルペスですか？」

えっと息を飲み込む。

そんな機能はない、だって？

「そんなハズないよ。ほら、触ってて」

必死に両手で促すと、町子さんはやれやれといった様子でバンドに左手を置いた。すかさず僕は、「もしもし、いたら返事してください」

ドン。

町子さんの目が丸くなる。僕はにやりと唇をあげた。

「ね、言っただしょ」

「こりやあたまげた。私、こんな機能、お医者さんから聞いてないなあ。このバンドは音や熱に反応するけど、それでも、不定期で、いつ振動するか分からないように出来てるんだよ」

今度は僕が目丸くする番だった。そんな機能がないのなら、僕に呼応するようなこの動きはなんなのか。まるで、生きているようなこの胎動は。

「さっきから私のお腹の方はサッパリ反応しないんだよ。もしかしたら、赤ちゃんの魂が私のお腹からバンドへ、一時的に引っ越してるのかも」

町子さんの言葉はとても非現実的だ。僕はそんなわけないと思いつつも、ぱあっと全身が温くなるのを感じた。僕のお腹に、僕たちの赤ちゃんが……。

「そうなのか？」

感動で震える喉でゆっくりと、訊ねる。

ドン。

その一蹴りに、目の前がふにやりと揺れた。目がきゅつと萎んで、熱い涙がゆったりと眼球を漂う。僕は思わず、目頭を押さえ、それからお腹を優しく抱えた。

「む、息子よ……っ」

「さっ。テレビ見よ」

興味なさげに町子さんがテレビの電源を入れた。ぱくぱくとご飯を食べている。しかしながら僕は涙を止められず、愛のダム崩壊を止められず、むせび泣いた。

「良いパパになるから、安心して生まれてくるんだよおお！」

テレビでは健康番組が流れている。町子さんは芸人が踊る健康体操というものにゲラゲラと笑いながら自分の分の苦手なサラダを僕の皿に投げ込む。それでも僕は構わなかった。愛故に、すべては愛故に。

「いろんなところに連れてくからね、キャッチボールとかしようね！？」

健康番組ではゲストが芸人と一緒に体操の一部であるコマネチのポーズをとっている。体操に飽きた町子さんは大好きな魚の煮物をぺろりと平らげると、僕の皿の煮物までキツツキのようにつつきだす。僕はというと、もうなにがなんだか分からない。

と、テレビが愛に溺れて酸欠状態の僕でもピクンと耳を動かしてしまつようなテーマに移った。

「さて、今話題の妊婦体験バンドのご紹介です！」

ジャーンという派手な効果音とともに、僕と同じバンドを腰に巻いた男たちが出てきた。彼らはまるでスーパーマンのように腰に手を置き、白い歯を輝かせている。

「このバンドは十キロの重さで、男の方でも妊婦になったような気持ちになれるのです」

耳覚えある解説にうなづく僕。こんなに大衆へと浸透し始めたバンドだったとは。さすが高性能、さすが人類の英知の結晶。

だけど。

僕はひとり、優越感に身を委ねながらバンドを撫でさすった。みんなが素晴らしい体験をしている。けれど、奇跡の体験をしているのはこの僕だけだ。この僕と、この子だけ。

「しかもコレ、手動機能もあるんです！」

瞬間、耳を疑った。

悦に入っていた意識がテレビに戻り、まさかと思いながら凝視する。

テレビの女性司会者が手のひらにすっぽりと隠れるくらい小さな卵型のリモコンを取り出すと、ピツとボタンを押した。すると、後ろで横並びに立つ男たちのバンドが己を鼓舞し、司会者が指を話した途端ピタリとやんだ。

これはいかに。

啞然としていると、空腹を満たし終えた町子さんが僕の膝の上に甘えてきた。

「ワシが味わっている苦しみはどんなじゃ？」

上目遣いに、極めて小悪魔的微笑を浮かべる町子さん。その右手に握られた、たまごつちに似たアイテム。

「……参りました」

すべてを理解した僕はガツクリと肩を落とす。やられた。ドS嫁

にしてやられた。

完全なる敗北に傷悴していると、ドン、と振動が響いてきた。見やると、僕の左腕を町子さんがたぐり寄せ、手のひらを自身の腹に乗せている。

「感じましたか、パパ。命はここにあります。もうすぐ、生まれてくるんです。あなたの子どもです」

じんわりと温かい、確かな温もり。人の肉体だけが持つ、形容しがたい弾力。機械とは違い、お腹の子は言葉を理解して返事をするようなことはしない。けれど宿っているに違いない、命。

僕は何故か、あるはずのないあの一蹴りを、自分の腹に感じた。

——僕はここにいるよ。そんな、聞こえるはずの声が。

「うん、分かったよ町子さん。苦しみだけじゃなさそうだ」

僕の切り返しが意外だったのか町子さんはキョトンとしてから、小悪魔的な、だけど聖母のような笑みを浮かべた。それがとても綺麗で、眩しくて、僕は町子さんを抱きしめる。お腹の子ごと、愛しつくす。

どうやらバンドの効力は絶大だったようだ。僕はそんなことを思いながら町子さんといっしょに笑った。そして出来るだけハッキリと、愛してると言った。

パパ妊娠マシーンス（ホームドラマ）（後書き）

あるカップルをもとに書きました。こんなバンドがあれば良いです
ねという感想を頂いて、うれしかった記憶があります。

ある傘の話（ほのぼの文学）

夕暮れ時、唐突に雨が降りだした。

僅かに残った桜の花びらを叩き落とすための雨だろうか。瞬く間に豪雨に染められ、街はおぼろになる。

白んだ街で一番大きな駅。その入り口で、一人の年老いた女性がため息をついていた。雨を見上げる彼女の右手には杖、左手には駅に隣接するデパートの紙袋。

「ひどい雨……」

どうやら、傘を持っていないらしい。眉を八の字下げて、彼女は淀んだ雲から虚ろな街へと視線を下ろした。雨は激しさを増し、アスファルトを堤にして川のように流れている。車が水を掻いて走る、傘を差す歩行者たちの足は冷たいグラデーションを描く。

とてもではないが、出られそうにない光景に、彼女のため息はより大きくくゆった。

駅からどやどやと人混みが外へ出る。制服に身を包んだ学生たちが学を終えて帰宅するのだろう。彼らは強い雨にひとはく躊躇い愚痴をこぼしながらも、次々と彼女を背中にし、傘を差し、あるいは鞆を抱えて豪雨へと飛び出して行った。

彼らのような行動は、足も悪くなった彼女には出来ないものだ。

彼女は幾分羨ましそうに、遅しい彼らの背中を見送っていた。そうしてまた、ため息が唇から漏れそうになった時、横からすると、何かが差し出された。見やると、傘だった。

俯きぎみだった顔を上げると、薄茶色に髪を染めた黒縁眼鏡の学生が傘を差しだしている。

「これ、どうぞ」

彼女は目を丸くしてから、反射的に手を振った。

「とんでもない！ 私は大丈夫ですから」

当然の所作だ。見知らぬ若者から傘を受け取るわけにはいかない。
「俺は傘あるんで」

しかしながら彼は彼女に傘を握らせると、そのまま雨の中へと飛び出した。学生の群に入り、その中のひとつの傘に割り込んで、相合い傘で立ち去ってゆく。

瞬く間の出来事。

あまりのことに、ぽかんとして彼女はその背中を見送ってしまった。

啞然として確認する手。握られているのは杖と荷、そして一本のビニール傘。学生らしいその品に、もちろん名前など記されていない。

「困ったわ……」

呟く彼女、その目の前に一台の軽自動車が停止した。

「やっと見つけた。携帯持たなきゃ意味ないだろ、ばあちゃん」

助手席の窓を軽く開かれ、運転席から青年が身を乗り出す。

「あれ、迎えは幸恵さんに頼んだんだけどね。あんた学校は」

「前期は木曜日休みなんだってば。良いから乗って」

青年の声に急かされて、彼女は傘を差して助手席のドアを開け、荷を足下に置いた。それからよつこらと腰をかける。

「ばあちゃんビニール傘買ったの」

「ああ、これねえ」

彼女は塗れそぼった傘の滴を払いながら、

「あんたと同じ年くらい……」

視線をはたと止めた。

透明なビニール。簡単に折れてしまいそうな骨組み、安っぽい柄。白いその部分をかじかむ指で撫でさすると、

「ゆたか、あんた一人で帰んなさい」

「え？」

傘を再びパンツと開いた。

「ちよつ、ばあちゃん雨ひどいよ。寄りたいたいところあるなら行くし」

「今日はせつかくの雨だからね、傘差して帰るよ」

彼女はさらりとそう言うと、元気に学生たちが立ち去っていった歩道へと足を向けた。

透明な膜から仰ぐ空は薄暗い。先ほどよりは落ち着きながらも、雨は依然激しいはまだ。バタバタとアスファルトを叩いて、止むことを知らない。肌寒い。

けれど彼女の年齢にそぐわない傘は、不器用に彼女を雨から庇うだろう。

その柄は白。そして少しの赤、駅ビルの中にあるコンビニのシール。買ったばかりの証が、照れくさそうについている。

「ほんに、ひどい雨」

吐息をもらす。その一方で微笑みながら、彼女は白む街へと足を向けた。

ある傘の話（ほのぼの文学）（後書き）

言いたいこともいえないこんな世の中じゃ、ポイズン。

ということで、荒んだ、あるいはエロい作品ばかり書いた反動で
ものすごくホノボノのした話になりました。

パトスフィア（文学）（前書き）

五分企画用に書き下ろした短編です。

パトスフィア（文学）

西岡さんの話をしよう。

彼女はアルツハイマーを患い、いくつかの施設を転々とした末に僕が勤めている病院へとやってきた。

まだ五十代後半で髪も黒いけれど、時折とても落ち込み、錯乱してしまうので、精神薬投与は欠かせない状態だ。治らないだろうと言われていて、とにかく状態を保つことを目標に治療計画を立てている。

僕はというと、しがない看護学生だ。昼間は食事やトイレといった生活のための介助を任され、夜間には看護師資格を取得するための学校に通っている。

僕はその日、半袖短パンという格好で風呂場に腰を下ろしながら西岡さんを待っていた。

「西岡さん来ましたー」

同じく介助を仕事にしているワーカーさんにつれられて、西岡さんがやってきた。一人で歩くことが出来るし、服も着脱出来る。そして何より風呂が好きな西岡さんを入浴させるのは比較的簡単だ。

「脱ぎましょう」

「入りましょう」と説明を添えただけで西岡さんはすんなりと裸になつて風呂場へと進んでくれる。体を丁寧に洗ってから、僕は彼女をバスタブへと浸からせ、お湯をつぎ足した。

「湯加減いいですか」

「はい」

嬉しいことに彼女は気持ちよさそうに肩まで体を沈め込んだ。口元を緩ませ、瞼を閉じる。

「若い男の子にこんなことさせて悪いわ」

御年十八の僕はなるべく視線を合わせないように配慮しながら、手で湯を攪拌させた。彼女は女性だ。男性に入浴を見られるという

ことは羞恥心が伴うことだ。

僕は彼女が恥ずかしさを感じにくいように、脳味噌の津々浦々から適当な世間話を探した。

「そつえば今日も娘さんが来てましたね」

「娘じゃないのよ、お父さんの妹なの」

つまり旦那さんの妹ということか。殆ど毎日訪問されていて、その都度衣類などを持つてくることから、かなり近い人だと思っていたが、意外にも遠い。妹さんと仲が良いのだろうか。もしかしたらお子さんは離れた場所に暮らしているのかもしれない。

「私ね、かなりワガママを言ってたから、お父さんがなかなか来てくれないのよね」

湯船によって赤みの差し始めた頬に、微細な影が落ちる。

アルツハイマーは脳萎縮によって記憶力が下がってしまう病だ。

原因は殆どの場合不明で、治療薬にアリセプトというものはあるが根元的な治療にはなりえない。性格変化もあるために家族とのトラブルは耐えず、憔悴しきった家族が医療保護入院を求めるケースは少なくない。

旦那さんはつまり、そういうことだ。

考えを巡らせて、

「寂しいですね」という言葉が口をついた。

「でもね。すごく良い人なのよ。こんな私をね、愛してくれるただ一人の男性なの」

「またまた。昔はそれなりに合ってたでしょう」

「いいえ。彼一人だったの。優しくて、誠実で……」

彼女の目が虚ろに漂う。僕は慌てて、

「素敵な人ですね。きつとお仕事が忙しいんでしょうね」と、無理矢理に会話の尻を持ち上げた。

「そうなのよ。お仕事は、内科のお医者さんでね」

上手い具合に気分を変えられたらしく、それから明るく談義が花開いた。お陰様で少々長の風呂、ワーカーさんに急かされての入浴

介助となつてしまった。

そして話は、今日のことに結びつく。

休憩時間に西岡さんの話題が出てきた。看護師さんいわく、妹さんが今日もまた訪問に来られるらしい。よくいらつしゃって幸せだなと相づちをし合つて、僕はふいに風呂場での話を思い出した。

「そういえば、西岡さんは旦那さん一筋みたいですね」

机に広げられたお菓子を啄みながら語り、締める。

「なんだか羨ましい話です」

率直な意見だった。僕は西岡さんが羨ましい。確かに若くしてアルツハイマーという病にかかってしまったが、彼女の環境は恵まれているように思えた。施設の入院費だって安くはないし、こんなにも愛情を傾けてもらえることなんてそうそう無いことだ。

話の余韻に浸ろうとして、だが妙な空気に挫かれた。看護師さんやワーカーさんが、気まずそうに目配せしている。

「君は入ったばかりだから知らないのよね」

「何をです？」

意味深げな口振りに首を傾げると、

「西岡さんの旦那さんはね。もう十年ほど前に亡くなっているのよ」肩をふいに叩かれたような感覚だった。

ぼやけていた視界が定まって、背筋がしゃんとするような。大事な物を忘れたことを思い出すような小さな衝撃。

僕はほんの少しだけ上へと視界を転がすと、言葉を次いだ。

「そうかも、とは思っていました」

本当は引つかかっていたことだ。

アルツハイマーという病気の重さ、この病院へ来たことの意味。まだたった一ヶ月働いていないけど、その間にしっかりと染み込んだ空気は僕の中で静かに息を潜めていた。幸福なことを幸福と思いつながらも、病がある限り安心は存在しない。

休憩を終えてから、ぶらぶらとレクリエーション室へ向かった。窓には短いレースのカーテンだけなので、豊かな斜陽が満ちている。

西岡さんは光に包まれながら、ソファに体を預けていた。

看護師さんの歌う童謡が静かに響いていて、彼女は共にさえずる。

「西岡さん」

横に座りと、膝に触れた。僕に気づいて、微笑んでくれる。

「あのね。今日も妹さんがいらっしやいますって」

彼女はパツと顔色を明るくすると、

「お父さんはまた来ないのね。残念だわ」

静かに指を組み、また微笑んだ。

「そうですね」

僕は大きく頷くと、鈍い動作で部屋を見渡した。

壁は淡く白に近い黄色。光をよく吸い込んで、今はだいたい色に
灯る。その中で、様々な病気を抱えた人々が思うように生活をして
いる。

彼らには過去があり、人生がある。僕なんか比べものにならない
くらいの長い日々、悲しい日があり、嬉しい日もあり、今へと伝っ
ている。

一見、伸びやかに見える。健やかに見える。

しかしここは穏やかな、戦場。生きることの意味を刻み続ける場
所。思い出し、僕は思い知る。

深く目を閉じた。それからはっきりと喉を震わせた。世界中に、
深く染み渡るように。

「ただどいつかきつと いらっしやいますよ」

パトスファイア（文学）（後書き）

病院実習を終えて、その経験を生かして書きました。

パトスファイアは造語で、「パトス」と「ソファイア」を合体させたものです。ファンタジーだと勘違いされた方が意外と多かったです。タイトルにカタカナはあんまり使っちゃいけないなんて反省しました。

第二回五分企画の、二番目の賞をいただきました。ありがとうございました。

アマゾンズ（ファンタジー）（前書き）

春エロス2008企画のために書き下ろした短編です。

アマゾネス（ファンタジー）

森の中を、馬に跨った一人の戦士が疾駆する。
木の仮面で覆った頭部からは長い黒髪が流れ、短刀を握り締める腕は筋肉により無駄なく引き締まっていた。なめし皮で覆った鎧を纏った皮膚は焼けていて汗が滲み、森の木漏れ日を反射させながら躍動している。

戦士は群れを追っていた。

驚くことに、鉄鎧で頭の中から爪の先まで完全武装した騎士騎馬兵団である。馬までも別の生き物のように甲冑を纏い、雄雄しく息を鳴らしていた。

「二手に分かれろ、退避！！」

群れの中央にいる人物が命令を出すと、群れが一齐に千切れ真逆に走り出した。

無言のまま、戦士は追尾する。命令を出した人物の紛れる右の群れに狙いを定める。短刀をしまいこむと、戦士は背中の短弓を外し、矢を持ち、流れるような動作で引いた。

風を切る音。

放たれた矢が、見事に群れの一人に突き刺さる。それも首、鉄と鉄の接合部に深々と刺さり、鮮血が高く散った。
それを見て、群れは恐慌状態に陥った。

「馬鹿なっ、くそ！」

隊列が乱れ、散り散りに逃げ惑う群れ。群れの中心人物は舌打ちをすると、一人、手綱を翻し、戦士へと向かった。

「素晴らしい。気に入った！」

戦士は高らかに笑うと、短刀を握りこみ、騎士の突撃に対峙する。ふたつの銀色の円弧が空に舞い、鉄の悲鳴が二人の間に爆ぜた。交差する、二人。

更なる攻撃をと、騎士の馬が身を返す、が、それは叶わなかった。騎馬の首から突如として鮮血が噴出し、がくりと崩れ始めた。咄嗟に騎士は飛び降りる。馬は大木に自らぶつかると、拉げる。

受身を取って地に転がる騎士、瞬く間にけつ然と立ち上がる、しかし。

「終わりだ」

騎士の首下に、冷たい銀の光が当てられていた。俊敏な戦士は恐ろしいほどの腕を持ってニタリと笑うと、剣を握らぬ左の手で仮面の淵を握り、取り払う。

仮面の下に現れたのは正に美貌。凛々しく目鼻の整った、女だった。

アマゾネス。広大なステイキュイアの大森林に住む部族は、軍神を祖とする女ばかりの部族である。

豊かな恵みをもたらす大滝の傍に里を置き、狩猟を主とするこの部族は、森の外の人間たちにはこう呼ばれていた。

屍を踏みしだく民、と。

広葉樹と枯れ草を組んだ簡素な家々。それに囲まれるようにして、石の宮殿ニユンペスはあった。

最も奥にある王の間。

緑多い森の中で唯一、白亜で統一されたそこから、湿った音が絶え間なく響いている。

くぐもった声、卑猥な肉の音。耳にしたものであれば誰もがそこで何が行われているかは分かるだろう。その部屋の、石灰で出来た扉を、戦士は丁寧に開いた。

「いま、帰りました」

「おかえりなさい……、アリア」

寝台の形をした玉座には金の長髪を真っ直ぐ伸ばした女が、はあはあと激しい息遣いで跨っていた。

まるで小便でもしているかのような体制、手枷足枷で繋がれた男の上で、激しく腰を動かしているというのに、そこには美しさがある。

肩越しに振り向き、戦士を見た面容もまた、髪に負けぬほど美しい。

睫毛の長い目は宝石のように輝き、可憐な匂いを漂わせている。完璧な曲線を描く顔は幼げで、身体は女としての瑞々しさに満ちている。白い陶器のような肌は薄く紅潮し、艶やかにほてっていた。

「イリア王、具合がよろしそうですね」

「ええ。貴女が捕まえてくる男たちは皆、たまらないわ」

嘆息すると、王は優しく男を撫でた。しかし、男の表情は胡乱である。目の焦点は合わず、だらしなく唾液を垂らしている。媚薬を使いすぎ、狂ったのだ。

「でも、足りないの。アリア……」

強請るように、王が上目遣いでアリアを見詰める。柔らかな笑みをたたえ、アリアは王の要望に無言で応えた。

狩猟と戦闘で鍛えられた腕が王を後ろから抱きすくめ、幼顔には似つかぬ豊満な乳房を掴む。アリアは丁寧に、腋の下から乳の先へと揉み解すように指をわななかせた。

アリアの指に呼応するように、王の腰つきがうねる。湿り、吸い付くような肌が次第に、強張ってゆく。激しさを増す。

「もつと、もつとよ」

精悍なアリアは、王の命令に従う。

王の顔を左に逸らせ、華奢なうなじに、瑞々しい耳たぶに、熟した唇に舌を這わせる。開かせ、歯をなぞり、口内を吸い上げる。

熱をもった口付けの合間、王は懸命にか細い息をつなく。

やがて王は、左の乳房を揉んでいたアリアの手に手を添えると、下へと導いた。

薄く浮かぶ肋骨を過ぎ、儚げなくびれを過ぎ、悩ましげな骨盤を過ぎ、身体を中心へと流れる。金色に茂るものを掻き分け、轍をゆく。

ぴくりと王の身体が乱れる。その様を見られた恥ずかしさが、王は不満げに俯くと、

「アリアは裸にならないの？」

甘えるように頬を皮鎧の胸元に摺り寄せた。

「まったく」

そうこぼしつつも、アリアに呆れたような表情はなかった。恋慕の情に目を細めると、皮鎧を繋ぐ紐に手を伸ばす。

「我儚な人だ」

アリアはそのまま、王の唇に自身の唇を寄せた。

情事を終えた王座の下に、皮鎧を纏った女たちが集う。

王は裸体のまま、尚も男の上に横たわっていた。しかしながら、男に息は無い。精が費えたと、戯れに王が首を絞めたのだ。

「屈強なアマゾネスの戦士長たちよ」

若き女の王が声を放つ。その声色は先ほどとは打って変わって、鷹揚と、王の威厳を持って王の間に響く。

「西の民が北のカトリアと手を組み、この地を攻めようとしている。アリアが捕獲した先兵の情報によると、一週間の後、夜襲をかけるとのこと」

王座の周囲が囁きを散らす。王は平静を留めたまま、続ける。

「カトリアも愚かではない。捕虜を取られたことに警戒するだろう。襲撃の機を別に回すに違いない。一月先か、一年の後か分からぬがな。これは消耗戦だ」

「では！」

王の言葉に、一人の女が声をあげた。弓隊を抱える長、メイサである。

彼女は大柄な身体を揺らして一歩踏み出ると、

「地下牢に捕縛している男たちを全て殺しましょう。子を孕んだ者が民に多くては速やかな戦闘は出来ません」

「ならん」

割って入ったのは、アリアであつた。

「子には必要だ。男を殺しても、一時的な兵力強化にしかない。

未来を見据え、産み、増やすべきだ」

「その通り」

颯爽と王は立ち上がると、自身を取り囲む勇ましい者たちに告げた。

「あえて、先手を打ちます」

どよめいた。戦士たちは皆、王の指示に耳を疑い、目を瞬く。当然の動揺である。

しかし王は、そんな彼らに冷眼を注ぐと、

「消耗戦では、不利だ。我々は、力はあるが数はない。時に力を奪われれば、数に負けてしまう。ならば先手を打ち、敵の数を減らし、森の淵に置かれた奴らの駐屯地を攻めるのだ。……アリアよ」

王の、可憐ながら猛々しい面容が向けられる。アリアは跪き、両手を組んだ。主従の誓である。

「勇敢なアリア、その下の戦士たちにこの運命^{さだめ}をやる！」

「王の御心のままに」
応え、深く頭を垂れた。

夜襲には夜襲を。この命令は単純にして深い意味を持っていた。アマゾネスにとって、森は庭である。地の利は当然のこと、彼らの身体に深く刻み込まれている。

そして、森の朝は夜である。夜にこそ森の生き物たちは活発に動き、獲物を狙うのだ。アマゾネスに森の闇を与えることは神の鉄槌を与えること。そのことに敵は気付いていない。

こんな愚かな兵ども、造作ではないわ。

口に笑みを浮かべながら、崖上から駐屯地を俯瞰するアリア。後ろには十の歩兵。皆、戦闘に戦闘を重ね鍛え上げられてきた狂戦士たちである。

アリアは駐屯地を囲むように戦士たちを配置させると、機を待った。

森の空がアマゾネスに微笑む。

先ほどまで鮮やかな光を下ろしていた月光が暗雲に隠れた。辺りが見る見るうちに漆黒へと変化する。

アリアは暗闇の中で麗しき獣となって剣を握り締めると、一気に崖を駆け下りた。

戦士たちが続く。アリアは豹を思わせる俊敏な動きで見張り台に上ると、一瞬のうちに敵を専断した。戦士たちはまるでアリアの触手のごとく滑らかな動作で、下々に散らばる火を消してゆく。

襲撃に気付き、戦闘態勢に入る敵兵たち。しかし統率は微塵も無い。

「下らん、消し去ってくれろ！」

荒々しい咆哮。

戦士の雄叫びをあげると、アリアは見張り台から飛翔した。人の背丈を遥かに凌駕した見張り台から、まるで猛禽のように着地し、敵兵の前を塞ぐ。

「覚悟！」

敵兵の群れへと、アリアの肢体が突撃する。短刀が流れる楯円を描き、流れる。

木霊する、絶叫。飛散する、血飛沫。敵兵にとっての恐怖の一瞬は、アリアにとって泥のよう。

次々となぎ倒し、やがて血と肉塊の海が広がった。

「眠気は、覚めたか？」

漆黒の闇に溶け込む、森の死神。

彼女の周囲を囲む敵兵は、恐れおののき、一步また一步と後じさる。

「これだから、男は」

くつくと笑い、彼女は短刀を握る力を強めた。早々に終わらせてやろう。アリアは軽く腰を沈め、剣舞の姿勢を取った。

刹那……！

爆裂音が鳴り響いた。光が炸裂し、アリアのすぐ傍で火柱が燃え上がる。

舌打ちをして、アリアは横に飛んだ。追撃する、火柱。壁の裏に隠れるも、壁に噛み付き、木屑が舞う。

「くそ、目が……」

暗闇で剣を振るっていたアリアの目は、突然の光に耐えられず、眩む。勘と気配を頼りに、彼女は目蓋を閉じて走った。辺りは絶え間なく爆ぜている。

四面楚歌、一切の隙もなく駐屯地に火が吹き荒れる。その様を風と熱で感じ、アリアは動揺した。

これは内の攻撃ではない、外の攻撃だ。

自分たちは囲まれている――。

視力が徐々に戻る。あえて涙を流し、視界を鮮明にする。

アリアの感覚は正しかった。周囲の小高い丘を見やると、駐屯地は石弓に囲まれていて、次々と火のついた大槍が投げ込まれていた。まるで味方の兵もろとも消し炭にするかの如く。

「罨……」

直感的に悟る。なんということだ、これは罨だったのだ。駐屯地に置かれた兵は餌であり、この場所は落とし穴だったのだ。

敵兵の行為がアマゾネスの戦士アリアの逆鱗に触れる。憤怒に身体を燃やし、彼女は雄叫びをあげると、崖へとひた走った。

飛び交う槍は闇を切り地面をえぐる。その中をくぐり抜け、アリアは猛然と立ち向かう。

剥き出た岩肌、絡みつくツタ。それらを足蹴に、アリアは崖を登った。

死角に入ったアリアを打ち落とそうと岩が放たれる。しかし素早いアリアにとって、そんなものは無意味だった。

駆けるように上がると、岩を押す敵兵の首を掻っ切り、アリアは岩の上に屹立した。

激しい、野生の勇姿。生まれた場所が異なれば、傾国に値していただろう美しさを露わに、睨みつける。

敵兵たちは陶醉したように立ちすくんだ。月すら彼女の姿に惹かれ、身を乗り出した。

戦女神の飛来に、恐れおののいて。

だが、一人の女は、悠然としていた。

「まさかここまでとはね、アリア」

石弓の間から、何者かが姿を現す。

アマゾネスの戦士、弓隊長メイサであった。

「メイサ……、まさか貴様」

敵の罠にはしては出来すぎだと感じていたが、まさか戦士長に密通者がいたとは。

思えば王の間でのメイサの言動はいささか不自然だった。まるで戦力をあえて減らせようと目論んでいたかのように。

「やはりあんたを舐めずにかかって正解だったよ」

「王を裏切るとは、……恥を知れ」

「恥を知るのはあんたたちさ！」

アリアの侮蔑に、メイサは噛み付いた。

「アマゾネスは古いんだ！　良いか、これからは男と女の時代なんだよ」

「男に惑ったか。そういえば、やけに世話を焼いていた男がいたな」

メイサの表情が朱に染まる。

眉間に皺を寄せ、わなわなと身体を震わし、

「そうだよ。あのクソアマが犯して殺した……、まるで玩具のように。私は、あんたたちアマゾネスを許さないよ！」

「貴様、王を侮辱したな？」

メイサの罵声がアリアの堪忍袋を切る。瞬く間にアリアの伶俐な目には怒りの血脈が浮いた。

獣のたてがみは逆立つ。

アリアは短刀を両手にすると、大地を蹴り上げた。俊足がアリアの喉に歯を向ける。

「あんたを舐めてないと言っただろう」

刹那、アリアの後ろから何者かが投げ出された。流れる金の髪、麗しい容貌。

「王！」

刃の勢いを殺すためにアリアはあえて体勢を崩した。土ぼこりを足に絡めながら、アリアが止まる。受身をとって、大地に転がり、すぐに立ち上がる。

「貴様！」

「なんとでも言え。王の命が惜しければ、短刀を捨てるんだな」

メイサは王の喉下に剣を押し付けながら唇を歪めた。

刃の傍には、涙を浮かべ恐怖にうち震える王。アリアの頭にはこれ以上ないほど血が上っていた。出来ることならば敵を八つ裂きに、砂になるまで叩き壊してやりたい……。

空しく、硬質な音が静かに鳴り響いた。

「いい子だね」

メイサが顎をあげるのを合図に、敵兵がアリアに近づき、その身体を掴んだ。アリアはなすままになって、鎖を巻きつけられながら、ただただメイサを目で刺した。

それを見やって、メイサは……、剣を王の喉から外した。

啞然とする。アリアが息を吞んで凝視する中、王はすつくと腰をあげると、落ち着きのない動作で小首を回した。その所作に、違和感を覚える。

「まさか」

「あんたが猪みたいに素直で助かったよ」

偽者――。

アリアは臍を噛んだ。

青ざめ、己の失態を恨む。慙愧の念に襲われる。

そんな彼女に、メイサは優越を隠さずに含み笑いを浮かべると、ひとつの提案を差し出した。

「なあ。こちらの軍に入らないか。あんたが抜ければ、さすがのアマゾネスも戦意を喪失するだろう」

「何を」

「別に可笑しな話じゃない。きっとあんたはアマゾネスを抜けたら幸せになるよ。男は安らぎをくれるんだ」

「馬鹿が。男など、ただの種にすぎん」

アリアの失笑。メイサは、落ち着き払って次の言葉を放った。

「まさか、あんた男を知らないんじゃないだろうね」

「……それがどうした」

狩猟に勤しむアリアにとって、男との性交は無意味だ。子は他の女が孕む。

そしてなにより、彼女は王の寵愛を受けていた。性欲を男で満たす必要などどこにもない。男を知る必要もまた、ない。

「ふうん……」

なにか思いついたように、メイサの眉があがった。兵士の群れに目を配り、一人の青年に顔を向ける。

「よし、あんたで良い。アマゾネスの女戦士を抱きたくはないか」

その言葉に、アリアの心臓が跳ねた。彼女を囲む兵士たちも互いの顔を見合わせる。

「なあに噛み付きやしないよ。この通り。よく見るんだ、なかなかいない美しい女だぞ」

メイサがアリアに指を差す。確かにアリアは、戦士であるが、一方で見目麗しい絶世の美女である。

涼しげな眼と通った鼻筋、薄い唇、黄金比に愛された輪郭。緩いウェーブを描く髪は戦いの最中においても艶やかで、柔らかそうだ。

青年が喉を鳴らした。ゾツとして、アリアは抵抗したが、がつちりと鎖が身体に食い込んでいるために、ろくに動けない。

無力にも身じろぐ女戦士の肢体をくるむ皮鎧。胸と腹と腰を守る。それ以外は、引き締まった体を健全に晒す、アリア。

年齢はまだ二十に達していないが、見事な女の肉をしている。男ならば誰もが、申し分ないと思うだろう。

「さあ、やるんだ」

メイサに促され、青年はアリアの身体を包む簡素な胸当てに触れた。脇にのびる、きつく締められた紐を乱暴に引きちぎり、胸が曝け出される。

アリアは唇を噛んで、次の瞬間を耐えた。

「なんと……！」

メイサは驚愕した。

アリアの胸当ての下。そこには成熟した女の乳房が揺れていた。

しかし、それは片方だけ。信じられないことに、右の乳房は切り落とされ、醜い傷跡となっていた。

「メイサよ、お前は弓隊を率いているな」

「何を……」

「弓を引いていて、右乳が邪魔だと思ったことはないか」

その問いかけの意味成すところに、メイサは恐怖し、口元を押さえながら後退した。その顔に張り付くのは怯え。闘争の極限を住処とする狂戦士への畏怖が、そこにはあった。

「分からぬだろうな。石弓に頼りきり、アマゾネスにとっての夜襲を忘れるほどだ」

アリアは吐息をくゆらせ、

「抱くなら抱け。しかし男が抱く身体に、私の魂はない」

目を瞑り、目蓋の裏に愛しい人を浮かべた。

アマゾネスの偉大なる王、イリア。白き宮殿に住まう絶対的な存在。

自身の、腹違いの姉。

その高貴な微笑を思い浮かべてから、齒と齒の間に舌をのばした。忠誠を心から誓う。永遠に。そう、永遠に。

「アリア様！」

はっと、目を開いた。怒号があたりに木霊し、再び火花が弾けた。眩い視界。その中に、傷を負いながらも果敢に立ち向かう戦友たちが飛び込んだ。

あつという間に、アリアを束縛していた兵士たちが一陣の風に伏せる。身体が軽くなり、士気が漲る。

アリアは兵士の剣を奪い取ると、次々と斬りかかった。もはや独壇場であった。距離をつめてしまえば、石弓を倒すことなど歩兵にとって赤子の手を捻るように容易なこと。

蜂の巣を叩いたような戦場を戦友たちに任せると、アリアは脱兎と逃げるその背を追い、斬りつけた。

「ぎゃあ！」

絶叫をあげて、メイサがつんのめる。尻をつき、ひいひいと恐怖に顔をひきつかせ、アリアを仰いだ。

「アマゾネスは戦乙女の民。戦いのために生まれ、戦いのために生きる」

気高い戦士の腕が、高らかに剣を持ち上げる。

「私は男を愛さない。私が愛する者は、一人。……ただそれだけのことだ！」

そして一気に、振り下ろした。

……朝日が昇る。

石の宮殿ニユンペスの背後には滝がある。

豊かな冷たい飛沫は清い光を照らしながら、瑞々しい緑に注がれる。漂う深く芳しい薫香。可愛らしい木漏れ日の舞。

自然の敬愛を一身に受けて、王は背を反らし、高く喘いだ。

茂みの中に横たわる、アリアに白く眩い裸体を預ける。肩を揺らして息をして、少しずつ高まりすぎた身体の熱を空に逃す。

アリアは儚げな王の中心から濡れた指を抜き取ると、静かに口角

をあげた。

「ねえアリア、どうして笑ったの」

王が首を傾げ、アリアを覗き込む。

「愛しいと想って」

「そう。私が好き？」

アリアの胸の傷に頬を寄せて、王は問いかけた。

無邪気な子どもの声色。一人の戦士にだけ幼さを晒す瘦躯を、アリアは強く抱きすくめ、その耳元に囁く。

「ええ、あなたは私の王だから」

その声はどこまでも甘く響き、二人のアマゾネスを包んでいった。

アマゾネス（ファンタジー）（後書き）

春エロスでは様々なえっちい小説が集まりましたが、「レズが少ないなあ」と思って書いた作品です。

レズ↓女同士↓女だらけ↓ファンタジー書きたい↓アマゾネスだ！という発想展開で、ウィキペディアでアマゾネスのことをちゃちゃっと読んで、ちゃちゃっと書きました。

書くのがものすごく早かった記憶があります。三十分くらいかな、読みながら書きました。一時間かかってないはず。そのためか、授かり物のような感覚のある作品です。

アリアは個人的にとっても気に入っているキャラクターなので、また機会があつたら書いてみたいです。

ドラゲノア胎動（ファンタジー）（前書き）

竜の血と肉で出来た世界ドラゲノア。月に行きたいと願う聖女の依頼から、竜の血飲み子ディノの冒険譚が始まる。
というあらすじの、長編小説です。

ドラグノア胎動（ファンタジー）

ドラグノア。海に大地に空に、竜が住まうという土地。星は竜により巡り、支えられると言い伝えられる世界。

「ドラグノア最果て、東部火竜山脈：山頂」で、物語は始まる。

エアドラド皇国騎士団団長ガアプ、団員オルセ、キリアの三人は、山脈ふもとの村アレの長きの要請により火竜退治すべく、登山していた。

霧が深く、錆びた色をした大地。人の住めぬ過酷な山を、もう三日以上登っている。重装備に騎士団の強固な体を武器にしても、辛いものがある。体力も気力も、もう長くは続かないだろう。

ガアプは、もしや自分達は殺される為に派遣されたのでは無いのか、と考えていた。聖女であり竜皇国エアドラド皇女王レマの直々の命。

いくら相手が皇国のシンボル、竜であっても、直々の命とは珍しい。その上、派遣人数はたったの三人。

たとえ王族護衛騎士団金獅子に属す皇国一の腕のガアプ、天才騎士オルセ、天才魔法騎士キリアの三人でも、低竜相手では少なすぎる人数だ。

時期皇王候補のジオ皇子の皇王としての資質を、ガアプ、オルセ、キリアの三人が危ぶんでいるのを、感付かれたか。可能性はある。

ガアプは背後のオルセとキリアを見た。ガアプの考えを気付いて

いるのだろっ、二人の表情は暗い。

ガアプは、一週間前に見た、皇座に座るレマの知的な瞳の冷たさがまだ残るようで、寒感を覚える。

「アレ村を襲う火竜山脈の竜の退治を命じます。騎士団団長が皇都にいない状況を知られてはならないので、至極隠密に。」

ガアプは、レマの言葉を思いだし苦笑する。

今死んだら、まるで亡命か暗殺でもされたような扱いになるのだろっ。あの言葉が、本当にレマから発せられたのか。

ガアプは、時の流れによる人の変化を、苦痛にも似た感覚で思った。

ガアプとレマは、元々同じ村に住む、幼馴染みの間柄であった。

二人は、仲が良い、友人であった。

変化が訪れたのは、二人が共に十四の時であった。突然、レマに聖女の力が現れたのだ。

予知夢、治癒力、占星術、魔法力、聖なる力。加えて、その美貌が皇都までの噂になるまでに、さほど時間はかからなかった。

レマは皇帝と呼ばれ、村を去った。その後、レマが皇帝の正妃となると聞いて、ガアプは騎士団の入団試験を受けるのを理由に、皇都に会いに行った。

しかし、既に正妃となっていたレマは、後宮に住む、一般人の目に触れることの許されない存在となっていた。

二人がようやく出会ったのは、ガアプが騎士団長にまで登り積めた頃。皇帝が死に、なんとレマが女帝となったのだ。その知性までも、誰もが認めるものであったからだろう。

戴冠の式。ガアプは、レマに剣を捧げるといふ役を頂き、二人の視線は、ようやく重なった。

レマは、村の少女そのままであった。目尻に皺が目立つものの、明朗な微笑みは変わらず、ガアプの目の前にあった。

ガアプは、もう四十を過ぎていたが、その時初めてレマに恋心を抱いていたのだと気付き、戸惑ったほどに。

懐かしい、笑みだった。

だが、女帝としての時を送り、レマは変わった。

英俊だが、冷徹な帝王となったのだ。ガアプが反乱を起こすかも知れないという僅かな可能性を百とするほどに。

危険な老兵は、切り落とす女帝に。

「ガアプ団長！見てください！」

ガアプは、我に帰り、オルセの指差した方向を見上げた。薄霧の向こう、どうやら洞窟のようだ。

近付き、ガアプ達はそのあまりの作りに驚いた。精巧に作られた階段が、光苔の壁に囲まれ、果ての見えない地下の闇へと伸びている。

ガアプ達は、顔を合わせると、ガアプを先頭として、松明を掲げながら、ゆっくりと階段を降り始めた。

次第に、暖かくなる周囲。火竜の住みかかもしれない。まるで、春の日差しの中にいるようだ。

途端、松明の火が消えた。いや、周囲が異常まで明るくなった。

「これは・・・。」

思わず、感嘆の声が出る。それは、あまりにも美しい世界であった。

城ひとつ入りそうな大広間。その四方を、七色の輝きが囲み、中央に集まり、一筋の光の大柱。

その中に、聖母のような美しい女性が立っている。

「・・・人間か。」

女性が赤い口腔を開く。反射的に、三人は剣を構えた。女性に不釣り合いな、獣の声。

「お前が、火竜か？」

キリアが防御呪文で三人の防御を高めながら問う。

「火竜」

女が、吹き出すように呟いた。

「我が血を、肉を、魂を、あんな下等なものだと言うか。この愚者どもが！」

ガアプは女の言葉に、戦慄を覚えた。まさか、そんなまさか。

「古の神竜（エンシエント、ドラゴン）・・・？」

・・・神竜・・・

オルセの言葉に、女がにたりと笑う。何て事だ。

三人は、その場を動く事が出来なかった。何故なら、古の神竜とは、火竜と根本的に違い、皇国のシンボルそのもの、人類が誕生する遙か前から存在し、知性も魔力も潜在能力も人間とは桁が違う。

この世界において最強の存在、まさに神なのだ。

何故だ。ここにいるのは火竜ではないのか。アレ村は、火竜の魔力により、干ばつに襲われているのではないのか。火竜が、村に降りては作物や畑を暴いていたのではないのか。

ガアの心臓に、疑問の刃が刺さる。

その時。

「おぎゃああ！」

三人の騎士の耳に、確に人間の赤ん坊の鳴き声が響いた。

「赤ん坊?!」

「違う。」

ガアの問題掛けに、古の古竜が囁いた。

「餌だ。」

その言葉が、激闘を告げる合図となった。

ガア達は、同時に声をあげ、剣を構えた。

この竜は、我々が山を登る間に、村から赤ん坊を餌として盗んできたのか。許すわけにはいかなかった。

勝ち目は殆んど無い、だが、騎士として逃げることの許されない戦いが始まる。

ドン！

まず、ガアプが女に向かい、剣をふりかぶった。しかし、女はガアプの岩おも砕く一太刀を片手で捕える。そして、ガアプを睨みつけた。

「食事の邪魔だ！」

見る見る内に、女の肉が膨れあがり、皮膚を引き裂き、赤い鱗が増殖する。女がメリメリと巨大化する。

ガアプは女を蹴りあげ離れると、体制をたて直した。

ガアプ達の目の前で、変化を遂げる女。首がのび、足が丸太の束のようになる。やがて竜は、まるで一つの小山ほどの大きさとなり、雄叫びをあげた。

雄叫びと共に、地面を割り何かが飛び出す。土でできた火竜だ。

「下僕か！」

竜が魔法で作った動く土人形ども。偽物といえ火竜を象っただけあり、あなどれない。

「私におまかせを！」

魔法騎士キリアが、巨大な竜巻魔法を起こし、火竜ども薙払う。

火竜はキリアにまかせ、ガアプとオルセの二人は神竜へと走った。

神竜の火炎の息。

二人はそれをかわすと、左右に分かれた。

オルセの剣がしなる。それを、神竜の尾が弾く。

ガアプが神竜に向かい剣をふるうが、今度は歯で太刀を塞がれ、火炎をあびる、寸前でかわす。

神竜は、まるで蠅を払うようにオルセと、溜め息を吐くようにガ

アップと対峙していた。まるで、子供の遊びだ。

「ぐああ！」

ガアの耳に、オルセの叫び声が聞こえた。神竜の、自身の体よりも大きい面により見えないが、竜の尾をまともに食らったのだろう。ガアの全身を、焦りが貫く。

絶対的な力の差。必死で神竜の歯の刃を弾くが、攻撃のチャンスが全く無い。

「おぎゃああ！」

赤ん坊の鳴き声。我々が死んだら、赤ん坊の命はない。騎士としての誇りが、赤ん坊の叫びが、二人を強く支えていた。

瞬間。

光の矢が、神竜の横顔に突き刺さった。キリアの魔法。

火竜を全て倒したキリアが、更にガアに身体能力増加の魔法を、尾により深い傷を負ったオルセに治癒魔法を放つ。

ガアの心身に力がみなぎる。

神竜が叫び、ガアを背にした。尾が切断され、血を滝のように流している。オルセか。

「私に背を見せるとは、いい度胸だな！」

ガアは叫ぶと跳躍し神竜の背を駆け上がった。

神竜は、ガアが自身の背を走るのを、オルセへ復讐の業火を吐き出すのに夢中で気付かない。

キリアが、ガアの剣に鋭利の魔法を浴びせる。

ガアの剣が、更に大きく鋭い刃となって、神竜の長い首もとを

突き刺した――！

「ぐ、ごあがああああっ――！」

神竜の首が半分切れ、血が吹き出し、ガアプを染める。

神竜は大きく痙攣すると、そのまま力無く倒れた。

竜の肉体から、とめどめが無く血が流れる。錆び付いた濃厚な匂いと共に、竜の瀕死の吐息が伽藍をみたす。

神竜ではない、この程度の存在が、古の偉大な竜の神の筈がない。

殺すか。

剣を掲げ、竜の切断されかけた首に狙いを定める。生ぬるい竜の血吐戸と、その瞳とぶつかる。

竜は抵抗もせずに、ただただガアプの最後の一太刀を待っているようだ。ふと、ガアプの体に、ふつつつと気持の悪い疑問が吹きこぼれた。

この、竜のあまりの無抵抗さは何なのか。竜が、何故この程度の戦いで虫の息なのか。竜相手に、この手応えの無さは、なんなのか。

竜の瞳が、長い睫から覗く。強い、瞳。

まるで、殺されるのを待っていたかのような。

ガアプは掲げた剣を振り下ろそうとして、やめた。強い躊躇と疑問が、彼をそうさせた。

「ガアプ様……？」

「赤ん坊が先だ。どうせ竜は、動けまい。」

「再生するのでは？」

「これほどの傷だ、竜でも半刻はかかる。」

赤ん坊の更なる強い叫び。ガアプは惹かれるように、赤ん坊の声をたどり始めた。

赤ん坊がいる場所は、安易に見付かった。輝く広間の壁に、たった一枚だけ桑の木で出来た扉がついており、その向こうから、鳴き声が続いているからだ。

ガアプは扉に畏がないか調べつつ、慎重にノブに手をついた。重く、ふるめかしい音を立てて、扉が開く。

瞬間、扉から黒い影が飛び出した。

ガアプは後方に跳躍し、その影をかわす。

影は、ガアプのいた場所に、小さな悲鳴と共に倒れ込んだ。

子供である。

それも二人。幼い双梓が、濡れて揺らめく。白い寝巻きを見に纏う、少年と、少女。あの竜が、盗んできたのか。

ガアプはゆつくりと、二人に手を伸ばした。

「もう大丈夫だ、竜は退治した。」

ガアプが安心させようと言った言葉に、幼子達は、電撃に打たれたような顔をし、それに脅えを含ませ、寄り添う。そして、

「触らないで！」

少女が叫んだのを、少年が口を押さえて止める。

ガアプ達は、啞然として、二人を見た。少女は、少年に口を塞がれているものの、その目つきに、そして、その両瞳の色、赤に、ガアプ達は口で言われるよりも素早く理解した。

竜の、血飲み子。

生け贄として、竜に捧げられながらも、餌となること無く、そればかりか、竜に血を与えられ、育った子供。竜皇国初代皇王ヒルドや、極西の氷の大国ウェハイバルの化石の王ラキューなど、今は亡き過去の英雄の人々の出生のそれ。

珍しい赤い瞳を持ち、竜の英知と魔力を持ち、人々を救い主として導くという。

また、人間の子供を食わず、そればかりか子供に竜族の英知の力を与える事が出来るのは、高い知性と先読みの力を持つ竜と言われている。

だが、それは伝説どころか神話である。先読みの力までも持つ竜は、神竜だけとされているのだから。

だが、神話は目の前に、そしてガアプ達に声を放った。

「貴方が、ガアプ・ロジエ、ですね。」

五才くらいだろう、見た目と全く釣り合わない、知的な少年の声。

「僕達を、どうか導いてください。」

扉の奥から、もう一人の血飲み子の鳴き声がした。

「オルセは、二人を。キリアは赤ん坊を。」

ガアプは指示を出すと踵をかえした。

竜の巨軀から滴った血が、小さな湖川となっている。竜から流れる血は既に無く、首の傷以外、傷口も殆んど確認できない。切られた筈の足は、視覚できる程の速度で再生している。並の竜では無い事は、その治癒力からも分かった。

「お前は、何者だ。」

ガアの強い問掛けに、竜は苦し気に、しかしはっきりと答える。

「既に知っているだろう。そして、お前は何よりも理解している。」

そう、ガアは、その騎士団長まで上り積めた知性で、誰よりも状況を理解していた。

眼前で苦しんでいるのは、やはり、神竜。

そして神竜は今まさに自分達に何かを下そうとしている。

「何故、村を偽の火竜を使役してまで、我々を呼んだのです？あの子供達は何なのですか？」

悲痛な声が、ガアから漏れた。神と対峙しているという事が、ガアの腰を鎮座させ、剣を下ろさせ、言葉を畏怖の含むものにさせる。

「子供は、餌だよ。人間の愚劣さが凝り固まった、餌。」

竜がその剪断されかけた首をもたげ、紡ぐ。

「……四年前か、子を孕んだ女が二人、山を登ってきた……。女共は二人とも、とても若く美しく、そして悲しみに魂を奪われていた……。」

二人は、さまよいの果てに、この地下にやってきた。

竜は、自分は火竜山脈の竜を奉る神殿を守る尼だと偽り、二人を向かえた。すると二人は、竜にこう討げた。

私達は贅。神竜は何処にいますのですか、と。

聞くと二人は、山脈の麓、メルン川のほとりの村に二年ほど前から現れる、源が分からぬ死病を止めるために下された贅だという世界を見守る神竜に、腹の子供と共に食われる為にやって来たのだと。

「愚かな事よ。病など私の範疇ではない。我を人は神竜と崇めるが、我は創世の日から息をしていたにすぎん。我は無力よ……。」

無力、その言葉に強い衝撃をガブは受けていた。

神竜が無力だという話は聞いたことがない。神竜が世界を作り、世界を動かす。それがこの世の定説だというのに。その定説の上に人間は歴史を生んできたというのに。

「我は無力だよ。」

ガブの意思を読んだろう。竜がその美しい瞳孔をガブに真に向ける。その神々しさに、ガブはめまいに揺れた。女帝と対峙しても、これほどの高貴さは感じられなかった。

「貴方は、無力ではない。」
ガブの叫び。

「女共は、死んだ。」
神竜の呟き。

私の言霊で死んだ。

「神竜はここにはいない。」

尼は、二人の腹の大きな妊婦に訃げた。尼には、神竜には、病を止める力など無かったからだ。そればかりか。

「我は、山を降りる事すら、出来ないのだよ。」

ガアプは、神竜の感情の無い言葉に、ただただ立ち尽くすだけであつた。神竜の教えは、世界の定説は、弱い人間が作り出した幻想であり、妄想なのか。

「犠たちは、山を降りたのですか？」

答えは分かっていた、だが、ガアプは絶望から逃れる為の、少しの可能性を望んだ。

「……山をさまよい、死んだ。」

ガアプの予測通りの現実。若い娘たちは、重い肉体を引きずるようにさまよい、死んだのだ。

人間達が熱望のままに思う、竜を求めて。

「我は、女共と腹の子の屍を慰めるべく、土人形を使役し、我が元へ運んだ。…骸は、母の生を全うしていた。二人は、赤ん坊を産み落とし、死んでいた。」

失望の末の、希望。

神竜は、無力という罪を償うために、赤ん坊に血を与えたのだ。村に返しても、不幸にも生き残った贅として殺されるか、口減らしで川に流されるだけの命を、自分の僅かな力で、生かそうと思ったのだ。

「あの赤ん坊も、贅なのですか？」

「…山の中央に、放置させられていた十二人の赤ん坊の、唯一の生き残りだ。」

贅という名の、人間の愚劣。

ガアプは、登山の前に立ち寄ったアレ村を思い出した。僅かにとれる農作物と砂金で生活する、村。

竜の被害で、死傷者はなくとも、枯れた井戸と焼けた田畑が横たわる。貧しい農民と、裕福な商人の生活の差が激しい、村。

「王の手、竜皇国騎士団のみ、竜殺しは認められている。裕福な皇都の人間である我々を呼ぶために、竜を使役したのですね。あわよくば、子を皇都に運ぶために。」

「……それほど、簡単な理由ではない。我の命を、竜の血飲み子を狙うものがある。」

ガアプの心臓に、氷の矢が刺さる。神竜を殺そうと企てる者が、いる。

「多くの星が、空に瞬く魂が、叫んである。我は近い日に殺される。とな。世界が、破滅へと向かおうとしている。お前達の女帝は、だからこそ、お前を生かそうとしておるのだ。お前は、お前の王の意思の下、血飲み子とともに名を捨てる。」

……何を。

「何を、おっしゃっているのです。」

ガアプの跪く体躯が、揺れる。

「その者が、知っている。」

ガアプは、神竜の瞳を指す者を、見た。

「オルセ。」

「ガアプ様、お許し下さい。」
オルセの目から、一筋の涙が流れた。

「ガアプ様、貴方様には、このまま我々とともに名を捨て、新しい名で生きていただきます。騎士団長ガアプという存在は、竜との戦いで、すでに死んだこととなっているのです。これは、聖女からの直々の命。」

線と線が交わってゆく。

「貴方様のお命を、狙う者がいます。」

自分の命を狙う者、それは最大候補であるジオを次期皇帝としようと動いている一派だろう。

ガアプは、ジオの特有な稚子のような残虐性を正す教育を早々に行うべきである、と訴えていた。それを、謀反や暗殺に繋がると考えたのだ。

自分の騎士として、王族につかえる者としての誇りを、あまりにも軽視する判断に、ガアプは虚しさを感じた。貴族は、農民からいでた者を、同種とは見ていないのだ。

慈悲ある聖女は、ガアプを理解し、あわれみ、のがしたのか。騎士の誇りを最も汚す方法で。

ガアプは、それでもほどこけない解を紡いだ。

「神竜を、聖女は知っていたか。」
オルセは、一度身震いし、沈黙した。

「我の存在までは、聖女にはわからぬ。我がいると知っておったら、

このような策はせぬよ。我はだからこそ、お主らを利用する。」

竜の首が少しずつ繋がり始めたからか、声に美がとれる。竜は首をもたげ、ガアプとオルセを真に見つめた。

「我を神と崇めるのなら、私の願いをききいれよ。血飲み子を託す。どうか、彼等を導けよ。」

幼子の、あの言葉が浮かぶ。

これも、運命のようなものだろうか。何者かにたぐられ、気付かぬ内に結ばされた。

ガアプは剣を取ると、刃を下にし、目を閉じた。

「剣と、失われた翼に誓いを。」

それは、帝国の騎士の、承諾の言葉だった。

神竜は、ガアプの誓いを真に受け止めると、口を開く。

「我を殺してはくれぬか。」

ガアプはその問いに、きっぱりと答えた。

「出来ません。竜皇国の民として、竜を信仰する人間として、それは出来ません。」

「…すまぬ、愚問であつたな。」

竜は一呼吸置くと、そのまま天に瞳を向ける。七色の光に満ちた伽藍に、それはガアプとオルセには、自分達の神以外には見えない。「他に、方法は無いのですか。火竜を使役し、竜皇国に申告し、保護を求め……。」

ガアプの言葉の羅列が、そのまま拡散し、分解されていく。

「神竜、貴方様の命を狙う者は、まさか。」

あまりに嫌な予感にガアの顔は青ざめていく。

神竜は、未だ完全に繋がってはいない首を弱く左右に振ると、ガアにその美しい漆黒の双眼を傾けた。

「お前が愛しく思う者は、氷ではなく水晶の心を持つ者。我の命は、欲と憎悪に捕われた冷酷な人間の基面に乗る。その基面は、やがてドラグノアに広がるだろう。我を殺し、我の肉を使役し、その者はやがて天に浮かぶ竜さえも打ち落とす。」

絶望的な神竜の予言に、ガアと背後のオルセは雷撃に打たれるようであった。

「…我はその悪魔の足に杭を刺そう。悪夢の使者の歩みを捕えよう。生むは一時の猶予だが、それは僅かな光を放つ糸を紡ぐだろう。」

我は、人に賭けよう。

神竜の肉体が、その全てが、吠え立つように震えた。長い首がたわめき、やがて山脈のような牙が、先ほどガアが付けた傷口を噛んだ！

血の奔流。

猛々しい雄叫び。

神の首が、千切れ飛んだ。重い振動。ガア達は、背けていた瞳を正した。

神竜の長い首が胴体から離れ、生臭い血の池を作り出している。おびただしい血にまみれながらも、神竜の足は巨軀を支え、瞳は熱くガア達を見据えている。

…神竜は、何度か瞬きをすると、そのまま深く瞼を閉じた。神の、最期。

ガアプ達は打たれたようにすぐさま、長く黙祷を捧げた。

なんという壮絶な終焉だろう。暗く残酷な惨劇。

それでもそれは、か細く曖昧な未来に、可能性と希望、そして選択の糸を力強く紡ごうとしている。

ガアプは震える肉体を懸命に整えた。武者震いだろうか？なんと重い。

ガアプは、神竜に礼すると、そのまま踵を返した。託されているのは自身で、押されている背中もまた、自身のものだ。

「……ゆっつ。」

ドラグノア出会い

ドラグノア極東の国、竜皇国の歴史の陰に起こった皇国の神の死、そして勇敢な騎士達の死。皇国の民は知らぬ、抹消された真実。

運命がゆつくりと繰り始めた日から、十四年が経とうとしていた。

竜皇国の皇都・シオンは、世界の果て、東の火竜山脈から流れる大河・メルン川の恵みを受ける。数々の竜を象り祭る独特の建築文化神竜殿に因るその美しい街並みから、美の都と世界から称されている。

都を巡るいくつもの水路は全て、アルタナ湖と呼ばれるメルン川の水を溜めるドラグノア最大級の人工の湖から流れる。

遠く西にあるという海を彷彿とさせる湖の中央には、帝都から陽炎のように見える城がある。五本の石作りの強大な橋を民への血管とする聖なる城・エアドラド城、竜の城である。

… 蜃気楼のように輝くその城を、ひとり見つめる少年がいた。

「城まで透き通ってら。今日は帝国晴れだな。」

黒に数束の白が揺れる髪が風になびく。黒い革製の服に小さな体を納め、胸元には銀の鎖と刃。背中に自身の胸ほどの太剣を担いだ少年が、背を伸ばした。

黒髪の網目から覗く珍しい赤の瞳を細めると、少年は歩き始めた。

帝都の外れに、少年の目的の場所がある。ラルシエムという団体く大工から僧侶までを団員に個人契約を主に様々な仕事を受ける、いわゆる何でも屋の仕事引き受け場・シエムバス。

少年はシエムバスの扉を開けると中に入った。酒屋と全く同じ作りの店内は、今日も無駄に賑やかだ。

「よう、ディノ！仕事はもう終りか？相変わらず早えな」

椅子を丸机にぎつちりと埋めて話し合う戦士団のひとりが、少年に片手をあげた。

「まあな、お前らみたいに全体が筋肉で重くないし。」

「相変わらず生意気だねえ。おねえさんが調教してやろうか」

女戦士が色っぽく言うと、周囲が飽和するように笑った。

「うるせーよ。」

ディノは、適当に戦士達をあしらうと、受付に向かう。受付には、白い毛に覆われ、真つ赤な鼻に丸眼鏡をかけた受付嬢、といっても百才を越えている魔女バーバが紙に判子をベタベタ押している。

「バーバ嬢、仕事。」

「さっき渡したばかりなのにもう終ったのかい、せわしない餓鬼だね。女に嫌われるよ。」

「風馬一族は迅速な忍者の血筋だからね。」

「ふん、そんなの旧王国の話じゃないか。まあいい、この街でマトモに働くのはお前だけだしね。」

「違うない。なあ、良い仕事ないのか。世界を旅するようなさ。」

「本当に珍しい奴だね、お前は。」

「…ふうん。アンタに丁度良い仕事があるよ。めんど臭そうなヤツがね」

バーバが、片隅に目を向ける。

そこには一人、巨人種用の丸椅子にぼつねんと座る十六、七位の

年若い女性がいた。卓上の花を撫でている。

「国境の街ハシェイブまでの案内、加えて旅の知識を教えてください者。」

「ハシェイブに行く気なの、アレ。」

アレ、とデイノが指差した女性は、どこからどう見ても国境を越えられるような玉に見えない。少女の殻を脱がないでいる、そんな印象を与える弱々しく華奢な女性。

国境までは長く、野宿は当たり前。そして獣や盗人が蔓延る街道もある。皇都から離れるにつれ危険は高まる。おとなしかった魔物が近年凶暴化し、人を襲うことだって希ではなくなった。死ぬ者だっている。

「道楽か？家出か？自殺願望か？そんなのに付き合うなんて御免だ。」

「力試しにはいいんじゃないかい。羽振りも良さそうだ。へへ、それにもう契約は済んでいてねえ。」

「……まったく、面倒な仕事は直ぐ俺に押し付けやがって。」

デイノは溜め息をつくとしんまり笑うバーバを背に、スタスタ歩き始めた。

「おい。」

声をかけたのが急だった為か一瞬飛んで、女性は立ち上がった。

巨大な椅子に座っていた為に小さく見えていたが、デイノより頭ひとつ分高い。とは言っても、デイノは同年齢の男子に比べると、小さい方であるが。

「こんにちは。」

上品な口ぶり。薄茶の目に長い髪、白い肌。
右手に美しい杖を持ち、絹に赤い花の刺繍のマントを纏う。
下には革製コルセットを身に付け上品に笑う姿は、ディノが嫌いな上流階級の女のそれだ。

ほんわか微笑む女性にディノは無愛想に「仕事」と言った。

「え、貴方が請け負い人さんなのですか。失礼ですが、大変お若いんですね」

「…ラルシエム専属剣士ディノ、これでも年は十四。ランクは…」

「ディ、ノ…？」

「アンタの名前は？」

ディノの問掛けに、少しの沈黙の後。

「…私は、アーシエ、ともうします…」

「ふうん、初めましてアーシエさん。」

いかにも思考を巡らしているといったアーシエの表情。

（ 契約破棄でも考えてんのかな…。）

ディノはラルシエムでも一級に近い力の持ち主ではあるが、幼い容貌の為に会った途端に契約破棄される事は珍しくなかった。いつぞ破棄してくれと思う。

考えが決まったのか、アーシエはディノに嬉しそうに笑いかけた。
「よろしく願います！」

契約は成立のようだ。

「その様子じゃ装備はまだか。金はあるんだろうな。」

ディノの問掛けにアーシエは曖昧に頷いた。

「えっと、宝石はあるのですが、お金は少ししかないのです…。」

（まさか本当に家出娘なんじゃねえのか… 面倒なことにならなきゃいいけどな。）

ラルシエムは一度契約したら最後、それを終えたという書類に契約相手からサインを貰うまで、基本的に仕事を続けなければならぬ。

これはラルシエムのもっとも重要な掟のひとつだ。たとえ家出娘との契約であろうと掟は掟である。

「宝石を取り合えず換金するか。お買い物はそれからだな。」
ディノはシエムバスの奥へと足を進めた。アーシエもそれに続いて行く。

シエムバスの中にはいくつかの店が繋がっている。その内容は質屋、換金所、武器屋、金貸し、カジノなど様々だ。

唯一の共通点は、大量の金が動く店、といった所だろうか。
力が集まる所には自然と金が集まるものだ。その為に皇国の聖職者団体や軍人やらには、かなりの警戒心と偏見をもたれている。

だが、力と金、一見その組み合わせは危険なようで、安全と等しい。
故にラルシエムは今まで潰される事無く、その力と金を保ち続けている。

ラルシエムの力と金の証、質屋換金所も、そのひとつだ。

「いらつしゃい。」

身体中を黄色い毛で覆われたバーバと同じ人種のラーラ。ここの質屋換金所の受付嬢だ。

「ラーラ、宝石を金に変えて欲しい。」

ラーラは直ぐに虫眼鏡を取り出す。

「アーシェ、宝石。」

「はい、分かりました。」

アーシェは腰にぶら下げていた皮袋から青い宝石をひとつ取り出すと、ラーラに手渡した。

「…見事な聖の魔宝石だね。あんた試練の者か。これは聖者達から下ったのかい？」

はい、というアーシェのしっかりとした返事に、ディノが少し驚く。

「聖なる祈り子様ってヤツか。聖なる者なんて初めて見たな。って、先に言えよ。」

「馬鹿だね、ディノ。聖なる者が試練の時は、なるべく自身では身分を明かさないのが務めだよ。」

ラーラの目線に気付いてアーシェが赤くつつ向く。

聖なる者とは、魔法には出来ない保護や治癒などが出来る聖なる力と呼ばれる力を生まれながらに持ち、竜と聖王につかえるさだめの中を生きる者達の総称である。

聖なる者の階級に「聖なる祈り子」という階級があり、更なる上位階級になるために、聖なる者は試練の旅を行わなければならない。世界に散らばる竜の神殿のひとつで、祈りを捧げるための試練の旅をするのである。

「大体、そうだね。三万、って所かね。」

「さ、三万リタもすんの、こんなんが!？」

ディノは飛び上がった。アーシェもまた驚いている様子である。三万リタといえば、庭つきの家が皇都にドカンとたてられる位の金である。皇都一般大衆の平均年収の実に五倍は下らない。

「…普通の試練じゃあこんな高価なの与えられないよ。アンタ、大変な事をしようとしているんだね。…その選択は、重くないかい？」

アーシェは柔らかく微笑むと、試練ですから、と言った。

物腰に隠れる、鋭いナイフのような決意に、ディノは頭がくらくらした。面倒な女を依頼主にしてしまったという、後悔で。

「でもどうしましょう。こんな大金を持って歩くのは…」

「この石を、いくつかの石と交換してやる。それを持ち歩くと良いそうだね、ただの石ころに見える魔法もかけておこう。取り合えず旅の装備には百リタで十分だね？」

「ああ、多いくらいだよ。」

ラーラの提案にディノは素直に傾いた。

シエムバスを出、商店街で地図や食糧など旅に必要なものを購入すると、二人はヒルポポスという粘土を皮膚にしたような巨大な生き物がひく荷車に乗って、皇都の端へと向かった。

アーシェは何か思う所があるのか、じいっと荷車の格子を流れ去る皇都の街並みを見つめていた。もうすぐ旅立つのだし無理も無いな、とディノは思った。

「なあ、アーシェ。あんた一体どこに行くつもりなんだ？」

「とても遠い所だと思います。」

まるで行き先を知らないような言葉。

「?…あんさぁ試練って皇都神殿でも受けれるんじゃないの?」

「そうですね。それも試練の選択のひとつですけど、私は皇都神殿を選びませんでしたから。」

「まさか、まだ試練を受ける神殿を決めてなくて取り合えず外へとか思ってるんじゃないかな。」

ディノの茶化するような台詞にアーシエは沈黙でかえす。

(マジで?)

ディノの背中を冷えた汗が落ちた。

「知らない所に行くのです。気持の上では近いのかもしれませんがね…」

「知らない神殿って、ああ?どーいう、」

「あちらにあるそうです。」

アーシエが照れ臭そうに差し示したのは。
上。

…上?

……上!?

「嘘だろ!?!」

アーシエの差し示す場所、それは誰もが知っていて誰もが知らないという、場所。

その名は古き都ルシファン。

創世記に登場する、天空の聖都。別名、

「…月に行く気なのか!?!」

創世記は語る。

古き世、世界は上下に浮かび相對する二つ半球であった。すなわち、球。そして卵。

神竜、卵を産み、それを永遠より遠い日々、あたためる。

やがて卵は二つに割れ、中から産声をあげる者あり。すなわち、世界。

溢れる世界の体液は海となり、また肉は大地となりて古き時の中、生命を抱く。

神竜は名付ける。上の大地、人と魔法の地、ドラグフレアなり。下の大地、獣と精霊の地、ドラグノアなり。

神竜その身を六つに割りて上の地に三つを下の地に三つを捧ぐ。

（中略）

ドラグフレア、魔の石を抱き、争いを好む者あり。生命の生き血をすり肉をほふりて、文明を育てるなり。文明、やがて大きな戦を産みて、死す。

戦火、上の大地焼きはらい、多くの生命食らう。

殻は形骸まで失いて消え去るなり。残る大地は僅かなり。すなわち、滅亡。

獣と精霊の地ドラグノア、僅かに生き残りし人の子ら包む。

残された大地、文明の知識秘め、死者をまつる聖都となり眠る。ルシファンの都、ここに誕生す。

人の子ら、帰れぬ大地に涙を流し、詠うなり。
下の地の者ども、眠りの大地を月と呼び、憂うなり。

「行けるワケないじゃん」

「行くつて決めたんです。だから……」

うつ向くアーシェに、デイノは溜め息をついた。

この女は、空にどうやって行くつもりなのだろう。

そう思い、そして気付いた。自分でも知らない旅とは、そういう事なのだろう。行き先も行き方も終りも分からない旅路。

だからこそ聖者達は極めて高価な宝石を渡したのだ。

「……ハシェイブの向こうは灰の大地だろ。あんな無法地帯に一人で行く気かよ」

「……はい。試練ですから」

デイノは自身の口腔が苦くなるのを感じた。自身の力を過信し無謀な行為で死んでいったラルシエムの者達の顔が浮かんた。堪らず思ふ事を端から言う。

「命が惜しくないのかよ。行ける筈無いだろ。ってか月に行く迄に死ぬのがオチだ。第一月まで行つてどうするつもりだよ。觀光気分で行くのか、それとも苦行を積んで人々の幸せを願うとか？馬鹿か？おまえ」

「違います。私には目的があるんです」

デイノの辛辣な言葉の数々に、それでも怒る事無く聖なる者は真っ直ぐデイノを見つめた。

「目的？なにが？」

「…あの、その…」

途端にうるたえるアーシエ。言えないのか。

「まあ、頑張れば良いさ。あんたが国外で死のうが生きようが俺には関係無いからな。」

荷車に冷たい沈黙が満ちた。

国境の街ハシェイブは竜皇国エアドラドの西に位置する。まず
はゼルダ街道を通る事となる。

「アベドルト平原を通って行くからな。その方が近い」

沈黙を破るデイノの声に、うつ向いていたアーシエが顔をあげる。

「え？でも、平原をまっすぐ通るのは普通の方には…」

「ああ、その点は大丈夫だ。俺、風馬一族だから」

「風馬…遊牧民族さんなんですな。」

おつとりとアーシエが驚く。無理もない。風馬の人間は大抵、平原から出ないからだ。また、デイノのように十二歳の成人の式の後すぐ平原を出る者は極めて少ない。

「まあな。…平原を通ったら、ハシェイブはすぐだ。」

盗賊や魔物にさえ会わなければ、案外楽な仕事かもしれない。
…
会わなければならないが。

何気無い会話をかわしている内に、車は皇都の端についたらしく停止した。二人はすぐに車から下りる。続け様に、車に皇都へと向かう客が乗り、再び皇都へと向かって行く。車の向こうに、湖を囲むように広がる皇都が花のように見えた。

「ここからは歩きだ。気合い入れろよ。」

「はい、頑張ります。」

二人は、皇都から東西南北、十字に広がる街道の一つ・ゼルダ街道の入り口の両脇に立つ二つの竜の巨像を見上げた。

ゼルダ街道。

かつて皇国の西に繁栄していたバーミア王国との貿易のために作られた街道である。

バーミア王国が数々の内乱により滅亡してから貿易のための使用は少なくなったものの、今も皇国の貿易には欠かせない。

また石畳の整備された街道は商人の他にもさまざまな職種の者や旅人が使用している。

だがそれゆえに盗賊や魔物に襲われやすい。雇われ兵等の守り人で周囲を大量に固めて進む商人達が襲われる事は少なく、彼等の主なターゲットは、少人数の旅団等が大半である。

「本当に行くのか？」

ディノは、最後の問いをアーシェに与えた。

「あ、はい。ディノは大丈夫ですか？」

あっけらかんとしたアーシェの返答にディノは溜め息をつく、あつたり前だろ、と紡いだ。

二人の旅は、こうして始まった。

苔むした石畳の街道を深い森が囲む。

太陽は傾いて綾線が橙に染まりはじめていた。もうすぐ夜か。

「そろそろテントを張らなきゃ…」

ディノの言葉に前を歩いていったアーシェが嬉しそうに後ろを向いた。

大分歩き疲れていたらしい。無理もない、白衣の裾から見える腕や足はあまりに細い。

「えーと、旅の技言うぞ」ディノの旅の知識の講義。アーシェが途端に真面目な表情になる。

「テントを張るのは日が暮れる前、周囲にテントがないか見渡す。あつたら隣接していいか交渉！何故？」

「群れをなすと襲われる確率が低くなる。あともし襲われた時に逃げれる確率もあがる…かな？」

「ご名答と言うと、ディノは街道の先を指差した。そこにはテントがまるで集落のようになり始めていた。

二人は早速向かう。

「ディノじゃないか、駆け落ちかい？」

（この悪い冗談は…）

「バンシャ！って事は…」

見渡すとテントを張っている者達に見覚えがあつた。

女戦士バンシャを頭とするバンシャ戦士団——今朝方シエムバスで会った戦士達だ。どうやら大きな隊商の護衛をしているらしい。

「隣接ね。うちの雇い主に聞くと良いよ。おいで」

バンシャに促されテント村を通っていく。老若男女の商人達、見習いの子供。荷を運ぶ大小の動物。

まるで民族移動のようだ。

一番大きく派手なテントに入り、ようやく気付いた。

噂に聞く長い兔のような耳、顔を持つヒュームの子供ほどの背丈の人物。

隊商の長は、竜皇国で最も金持ちだと言われている男。ロッゾ商会の会長ロッゾそのひとであった。

「やあやあ、こんばんはシエムバスの風馬さんと依頼主さん」

「はじめまして」

挨拶に促されるように二人は頭を下げた。

「隣接希望？だよね？いいいいよ、ドンドンね」

「あ、そう、サンキュー！」デイノは踵を返そうとした。だが、待つてよ！という大声にとめられる。

「ロッゾも頼みがあるな、聞いたよ、ハシェイブに行くんでしょ？じゃさ一緒に街道渡らない？」

ロッゾの提案にデイノはピンと来た。

ロッゾはラルシエムを支える大商人のひとりだ。彼は自分を守る者をひとり増やそうとしているのである。こちらにも得ではあるが…。

「俺の雇い主次第」デイノの発言にアーシエが目を丸くする。

「え、えと、どうしましょう？」知識が足りないアーシエが逆に問う。デイノは溜め息をついた。

「俺の雇い主が全ての優先だ」

デイノの発言にロッゾは手を叩いた。

二人は暫くの間、隊商と同行する事となった。

商隊との穏やかな旅路。デイノはアーシエに旅の合間合間に知識

を与え、アーシェが水を吸う砂漠のように覚える。

時間がゆっくり流れてゆく。だが、変化は唐突にして起った。

群れをなして二日目の昼の事であった。

ボロ切れのようなものが道に転がっているのを、先頭護衛の戦士が見付けた。隊商は、一時停止する事となった。

「デイノ、来てくれ」

戦士に呼ばれ、デイノはアーシェに待つように言い戦士の元へ走った。

先頭に戦士達の垣根が出来ている。割るように中心に入る。

悪臭、肉と血が腐った臭い。

目に飛込んできたもの、それは旅人の死体であった。

「酷いな、これは」

死体は無惨にも肉を食われ内蔵をさらけ出していた。魔物に食われたのだ。持ち物が散乱しているのを見ると、死者の金品をさらに盗賊が奪っていったようである。

「噂通り、ひでえ事しやがるな」

「つたく、警備兵共は何をやってやがるんだ」

戦士は悪態をついた。

「ゼルダ街道は無駄に長いからな。治安悪化に兵が対応しきれないんだ。それにしても…魔物とは対峙したくないな…」

以前はこんな事はなかった筈である。

魔物の食物は大気に巡る魔力、また魔力を蓄積する力を持つ一部の草木だった。魔物が人を食らい始めたのは近年の事だ。

「国は早急に手を打つべきだな。そのうちみさかえ無く魔物が村や街を襲う日が来るかもしれない」

ひとりの戦士の言葉に、皆ゾツとした。

そんな悪夢がいつか始まるのだろうか。目の前に横たわる虐殺は、序章に過ぎないのだろうか。

商隊は旅人を埋葬すると、静かに歩み始めた。

それから五日がたっていた。襲われた旅人の無惨な姿をもつ何度も見ていた。隊商に同行を頼んで良かったと、デイノは心底思っていた。

ゼルダ街道の端まであと一、二日といった所だろうか。もうすぐ、端に付く。それまで、何もなければ良いが…

隊商は自分達は襲われないだろうと信じきってた。いや、誰もがそう祈っていた。だが、祈りは脆くも崩れ去る事となる。

月が漆黒の夜空に唯一の光源として瞬いていた。

デイノとアーシエは狭いテントの中で八日目の夜の帳にまどろみ始めていた。

突然、デイノはその気配を感じ飛び起きた。遠くの空気が震えたような感覚。アーシエも気付いたのか、素早く体をあげた。暗闇に、耳をそばだてる。

「デイノ…」

「静かにっ」

雪に冷えたような緊迫した空気。そして糸は、何者かの咆哮によ

って断ち切られたー！

「がぁぁあうっ！！」

獣らしき声が奔流となつて四面を囲う。
戦士達がぶち叩く警鐘の音が木霊する。

ディノは揺籃を蹴るように立ち上がると、直ぐ様に剣を担ぎアーシエの手を取りテントから走り出た。

辺りでは既に戦士達の戦いが始まり、四方八方で刃が爆ぜている。完璧に囲まれている。よりによって大群に。

隊商を襲っているのは魔物であつた。

魔物の群れとはディノも対峙した事があるが、その時の比ではない。百近くいるだろう。もしかしたら超えているかもしれない。

そればかりか種族も様々で、旅人がよく目にする狼魔だけではなく泥魔や木魔、見慣れない魔物までいる。魔物が別種族と群れなして人を襲うなど聞いた事がない。

アーシエが周囲を見て震えている。

ディノはアーシエの手を強く握ると「走るぞ！」と叫んで大地を蹴りあげた。

逃げ場を失った武器を持たない人々が一箇所に集中するべくひた走る。

その列を容赦無く魔物が牙を向ける。風が駆け抜け、魔物の腹から血が吹き出し跳ね返される。

「はやくロツゾのテントへ！」

戦士達に守られるようにして人々がロツゾの元に駆け込んでゆく。空では騎士達に向けられた、救済を求めるのろしと火花がもつれあい戯れていた。

テントに入ると、人々が祈り、泣き、震えているのが二人の目に飛込んだ。それは宛ら、狼に襲われる羊の姿だ。中心にいるロツゾと目があった。

「お嬢さんはコチラに！デイノさん、お願いする！」

「ああ、任せろ！ここは頼んだ！」

デイノはアーシェをロツゾの元へと導くと、踵を返して戦場に向かった。

体は震えている。ぶるぶると。恐怖？いや、デイノはそれが武者震いである事を知っていた。

「うおお！」

テント横の戦士を囲む狼魔の固まりめがけて突進する。

狼魔が気付いて拡散する。逃げ遅れた何匹かを切り伏せる。

続け様に横へ刃を伸ばす。狼魔が跳躍、かわす。デイノがそれを追わず大剣を翻す、背後に詰め寄っていた狼魔を弾いた。

「ふあー、やるじゃねえか、ガキ」

「まあね」

狼魔に囲まれていた戦士は傷をおっていた。

バンシヤの戦士に傷とは敵はかなりのようだ。戦士は斧でデイノが叩いた残りの狼魔を退くと叫んだ。

「ありがとよ、ここはいい。頭の所が一番てこずってる、行け！」

戦士に促されデイノは再び戦場を駆ける。

左右の森や切り立った崖からウヨウヨと魔物が出て来ているのをデイノは横目に疾駆する。

「くそ！」

デイノは魔物達を威嚇しつつ大テントの北東部に向かう。
。回り込んだ途端、吐気を感じた。生命が、食らい合う様だ。

女戦士バンシャと仲間が両手に斧を持ち魔物を弾いてゆく。
魔物が次々と両断され、魂が空に飛弾する。魔物の屍を魔物が食らい、さらなる獲物を得る為に戦士達を襲う。

むちゃくちゃだ。まるで終りがないじゃないか。

デイノは魔物達の飢餓状態の人間と変わらない瞳の色に、背筋が凍るのを感じた。

人間は多少ではあるが皆、魔力を持っている。その為に魔物にとって人間の魔力を帯た肉は美味なのだという生命論がある。

だが、これは飢えだ。

枯渇に近づく生命が水からに力を注ぎ生き残る為に決行する殺戮だ。

何故、こんなにも飢えている？

「きりがない！」

バンシャの声が聞こえた。それは泥のような焦りに染まっていた。

テントの中にも周囲の殺戮が響く。

布地に血のりが爆ぜる音は激しい雨音に似ているが、叫び声が雨

である事を許さない。

刃が肉を切る音、血の落ちる音、獣の息遣い、足音、罵声…戦いの音、臭い。それらはテントの隙間を抜け、あるいはテントの布地を叩いて人々を残酷に揺さぶり続ける。

アーシエは杖を握りながら、必死に考えを巡らせていた。

今まで教わってきた様々な呪文が頭の中を右へ左へ駆けてゆく。魔物への魔法や聖なる力の実践は一度もない。

失敗したら？

戦士達も巻き込んでしまったら？

アーシエは迷いの沼地を彷徨っていた。

ふと、視線を感じた。

それは、震える熱と共にアーシエの皮膚に触れた。

子供である。幼いペルシャー族の子供がアーシエにしがみつきながら見つめている。ガタガタと、恐怖に凍えながら。

腹をきめた。

「ごめんね、少し離れていて」

アーシエの言葉に子供が痙攣するように離れる。怒られたと思ったようだ。

違っよ、ごめんなさい。

言葉は、出なかった。子供が離して直ぐに、アーシエは目をつむり自らの思考の海に落ちたのだった。

しんと静まっている。魂が空間の中に揺れたり走ったりしている。

密集してちじこまっている魂の群れ、アーシェは世界を魂の欠片で見下ろしながら、群れは自分達だと知る。

感じ慣れた魂、私自身だ。

あれは子供、商人達、ロッゾさん。

ああ、あれはバンシヤさん、戦士達。

……ディノ。

守りたい。

「冷徹なる死神、全ての魂を溶かした黒衣、終幕の運び、導く、あ
るいは引きずり、空の門を叩けよ、……………死の世界。」
瞬間、光が放たれた。

「ごめんなさい」

狼魔が風を切るように駆ける。

ぐるぐると戦士達を囲み回り、隙あらば牙で喉を貫こうとしている。
一瞬たりとも気を休める事は出来ない。

「うじゃうじゃと……」

焦りが戦士達の精神を蝕んでゆく。あまりの敵の数の多さ。異常な死線に摩擦され続けた肉体と魂は今にも壊れそうだ。

「騎士団はまだかつ」

バンシヤが叫ぶ。

のろしをあげてから未だ半刻も経っていないという現実が冷たくあざ笑う。

「負けるかつ」

ディノが剣を大きく狼魔に降り下ろす。
かわされた！

ディノは焦りに捕われた自身を憎んだ。大きく下ろした剣が地面の土にぶつかり爆ぜる。

狼魔がディノの首に牙を向けるー！。

死。

いや、違う。

狼魔の牙がディノの首の動脈を切り裂く寸前。狼魔の体を光が突き刺した！

狼魔の悲痛な叫びが轟く。叫んだのは、ディノを襲った一体だけではなかった。

魔物、テントを囲んだ魔物の全てが、叫び、床に倒れ、苦痛にうめきながら痙攣している。

「どうなってるんだ！」

ディノの疑問の声に、バンシャが呆然として呟いた。

「…魔法だ」

戦士達は皆、その一点を見つめていた。テント。ロッゾのテントが、内から淡く優しい緑色に輝いている。

ディノがテントに向かい猛然と走り出す。

魔法、そんなものを使えるのは、あいつしかない。

「アーシェー！」

ディノの声に気付いて、アーシェが顔をあげる。

信じられない事に、アーシェが全身から光を放っている。いや、全身の皮膚を覆う紋様が緑に輝いているのだ。

古代文字だろうか？先程までは皮膚にあんなものは無かった。

「アーシェ、それ、なに！？」

ディノの酷く驚いた様子に戸惑い、しどろもどろになりながらアーシェは答えた。

「…麻痺の呪文の魔法紋です。体を痙攣させるのです。死の世界、といいます。」

魔法紋とは、別名聖紋と呼ばれ、聖なる力特有の魔法陣の事だ。聖なる力には、人体に魔法陣が浮かびあがるという特徴があると噂には聞いていたが…。

死の世界。確かに魔物が悶え苦しむ光景は、さながら死の世界だ。

アーシェの体から段々と光が弱まっていく。力が切れようとしているのだ。

「ありがとっつ」

ディノは一言感謝の言葉を投げ込むと、早々と踵を返した。

魔法が切れたら再び襲ってくるかもしれない。

バンシヤの元へと駆けるディノの目に、魔物達が体を震わせうろたえる姿が飛込む。あるものは走り、あるものは這うようにテントの周囲から離れていく。

効いている。勝ち目が無いと判断したのか。遠くにいる魔物すっかり戦意を喪失している様子である。

「やった…」

だが、それはほんの一息の安息だった。

デイノはその揺らぎに、地震が起こったのだと思った。

だが、そのあまりにも激しく且つ微弱な振動にリズムのようなものを感じた。

そしてすぐ、その揺れの正体に気付いた。信じたくはなかったが、目の前にした以上、現実には夢幻に成り得ない。

「伏せろ！」

デイノとバンシャの声が折り重なり響いたと思うと、轟音が宙を切り裂いた。

風が奔流となり、逃げ遅れた魔物達を八つ裂きにする！

それは、三本の太くて鋭い爪だった。

「化け物だ！」

戦士達が悲鳴をあげた。

無理もない。眼前で爪に刺さった魔物を食らうのは、異常なまでに大きな熊だった。

爪が発達し、肩まで覆っている。背は戦士達の実に三倍はある。

「親玉、いやガキ大将の登場か。禍禍しいな。旅人を食ったのはコイツか」

食われた魔物がボロ衣と寸分変わらない姿で捨てられていく。魔物を優雅に食いながら、その目は既に戦士達に向けられていた。

逃げられないだろう間違いない。ならば

「やるまでだ！」

バンシヤを筆頭に戦士達が駆け出す。

大熊が気付いて爪を戦士達に振り下ろす。何人かが暴風と鋭い爪に押され吹き飛んだ。

攻撃をかわし、バンシヤが大斧を振った。

がちんと硬い音が響いた。爪でバンシヤの巖も砕く一撃をとめたのだ。

バンシヤの後に続くように走り込んだ戦士達の斧や剣までも。生臭い匂い。

大熊は小さく息をすると、軽々と人々を弾き飛ばす。かわしきれなかった者達の体が子供が投げた玩具のように宙へ放られる。血しぶきと悲鳴が拡散する。

先程、大量の魔物達と対峙した後である為に、既に体力が限界に近付こうとしている者達は、大熊の爪から逃れられない。

大熊は傷付き血を流す弱った個体に目をつけた。

「うわあああ！！」

腕から血を流していた戦士のひとりが爪に捕えられる。

抵抗するも身動きが出来ないようだ。そればかりか、今にも潰される勢いだ。

戦士達が青ざめ爪にめがけて怒涛の攻撃を集中させるもビクともしない爪は、戦士を空に掲げる。

獣が口を開く。

「させるか！」

バンシヤが大斧を熊の胴体めがけて投げつける。片方の爪が難無く弾いた。

が、それが一瞬の隙を作った。風より早く跳躍したディノの剣が

熊の額をかちわる！

「あぎゃああつ」

まるで理性のない赤ん坊のような声。戦士を掴んでいた爪に力がかもる、が、戦士の体が柔らかな果実のごとく潰される寸前に、バンシヤの大斧が熊の腕を切断した！

絶叫が爆ぜる――

大熊が叫び、のけぞる。倒したか、そう戦士達は思ったが、全くの逆であった。

雄叫び。大熊の怒りが頂点に達したのだ。

「くるぞ！かわせ！」ディノの叫びに似た戦士達への命令が無様に熊の地響きのような足音にかき消される。怒涛の突進！

戦士達の群れを太鼓のように熊の巨体がぶつかり、跳ね飛ばされる。

戦士達は何が起こったのかも分からずに地面にたたき付けられた。頭から、背から強く打ち付けられ、戦士達は足を失った蟻のようにつろたえる。熊が地面に横たわりうごめく彼等に更に向かう。

させるか、と突進を避けた者達が熊に向かうが、回避により離れた距離はあまりに大きかった。間に合わない――。

「光の矢！」

洗練された音楽のような言葉。瞬間、熊の肩に輝く細い矢のようなものがあたり、熊が横に崩れた。

「火であり土であり水であり風である者よ、その肉体のあるべき力を表せ。器の癒し！」

アーシエである。

テントを抜けて聖女は飛び出した。彼女の全身がこの世のありとあらゆる光に包まれ、光が爆ぜる。

それは、四散し、傷付いた者達の全身をつつむ。戦士達の傷口がみるみるうちにただの皮膚となってゆく。

それを横目に、バンシヤとディノの二人はまるで二対の刃のように熊に向かって大地を蹴ってゆく。

「でええい!!」

十字の切っ先の煌めき。その光に押されるように、熊の体が吹き飛んだ！

飛弾する熊の最期の叫びと血。熊はそのまま地面にめり込み、ぴたりとその動きをとめた……。

終わった？ 終わった！

戦士達の間から歓声が沸き、まっすぐに彼等はある人物の元にひた走ってゆく。彼等が囲んだのは、熊を薙ぎ倒したバンシヤやディノではなく……。

「アーシエさん、凄いっす！」

「魔法か！」

「助かった！」

称賛のあらし。アーシエが戸惑ってディノをちらちらとみつめる。その光景は、肉食獣の獅子達に囲まれた一匹の兎のよう。

「…なにあれ」

全身で激しく息をし足りない酸素にうめきながら、大量の汗をばうたと流すディノがバンシヤにぼつりと漏らす。

同等の様であるバンシヤは、更にボスにいつもは見せる尊敬の眼差しを一片も向けない部下達を、眉間に怒りの皺を刻んで睨んでいる。目立ちたがりの二人の自尊心がぶちぶちと湯気をたてる。

「お前ら!!」

二人がキレたのは、見事に同時であつた。

地上が微かに輝いている。

肉の器の破壊に耐えかねた魂が星となり空を巡るため、ひとつまたひとつと上昇してゆく。

人々の口の隙間から僅かな風となり、振動は地に落ちた雨のように沈んでゆく。

鎮魂歌。

それを歌いながら、戦士は獣の体を解体し肉や内臓に塩をまき或いは煙で焙る。食料となるのだ。

人は剥いだ獣の皮を叩き、撫でる。

牙や爪などを磨ぐ。

衣類や剣や装飾品となるのだ。

人々のナイフや箒などの道具の奏でる音が、歌が、夜に染み入る終りの頃、その蹄はやってきた。騎士だった。

「どうどう」

土埃をあげて馬を停止させ次々と地に足をつけてゆく。

黒い鎧の騎士が一人、他の四人は緑。なんとも場違いな色合いだ。

「おいおいっヘッポコどもがやって来たゾ！」

「のろまな口バが馬に乗ってやって来た！」

戦士達の笑いが沸く。怒りを隠す、叩き付ける為の笑い方だ。

緑の騎士達が震えている。恥ずかしいのか、誇りを傷つけられて耐えられないのか。だが、悪態を浴びせられて当然だった。

のろしをあげてから二時間はゆうに過ぎていた。はつきり言うと、普通は死んでいる。彼等は間違い無く死体を確認するつもりだったろう。

黒騎士が兜を外して辺りを見渡す。その表情は驚愕であるのは無理もない。彼等の前で人々が始末しているのは、力に自信ある者達を切り刻み食らい、彼等が何度も取り逃がしていた大熊の魔物ダークベアである。

「驚いた。素晴らしい勇者達がいたようだな。」

中年の黒騎士の素直で柔らかな言葉に、戦士達が一斉に笑う。そこに、跳ねるように商人の長口ソゾがやってきた。

「はじめまして、私口ソゾと申します。いらっしやいませ騎士様、お買い物ですか？」

騎士のおおらかな性格を読み取って、明らかに酷い洒落を付け加えての口ソゾの陽気な登場に、騎士は微笑んだ。

「私はゼルダ街道第五区間騎士隊隊長カズン。鎮魂歌を買いに来たよ。…その様子だと、死人も怪我人もいないようだな、なんと凄い者達を護衛にしているようだな」

「ええ。ラルシエムの戦士達は皆、屈強です」

「…そういじめないでくれ。よかつたら戦士達の長と会わせてくれないだろうか。素晴らしい戦士達をまとめる者をこの目で見てみたい。それと専属の魔法使いと」

カズンはどうやら戦士達の殆んど傷のない様子から魔法使いの存在に気付いたようだ。

ロツゾはカズンの賢さに嬉しくなって、すぐさまバンシヤとアーシエ、デイノを呼んだ。

「戦士団長バンシヤです。こっちはデイノ。そして魔法を使いました、アーシエ」

バンシヤに握手を交すと、黒騎士は頭をひとつ下げた。

「私は街道守りのカズンです。遅れてしまいお力添え出来なかった事を謝罪すると共に、貴方方の力に敬意を表したい。」

そして再び一礼した。騎士にしてはあまりに腰が低い男にバンシヤは戸惑い、ああ、うんと照れ臭そうに漏らす。

「所で、」

カズンがふいに騎士らしい表情でアーシエを見つめ、跪いた。

「聖なる者にこんな辺境で会えるとは思いませんでした。その上、貴方様はアーシエ嬢だといいます」

「私を知っていらっしゃるの」

「ルキという騎士からかねがね」

「ルキは騎士となったのですか」

驚きのあまり、アーシエは口元を押さえた。

「アーシエ、こいつと知り合い？」

「私はアーシエ様の兄上の元教師でございます」

「ええ！」

三人の中でアーシエが最も驚いている。

「以前、剣の士官学校で教員を勤めておりました。アーシエ様、あの方は異例の早さで御卒業後、王国騎士試験どころか金獅子団の試験に王国史上最年少で合格し、今は金獅子の騎士でございます」

「金獅子…」

金獅子団とは、王専属の護衛騎士団である。普通の騎士でさえ、剣で岩を斬れるほどの腕を持たなければならぬ。

金獅子団に入るには、年に一度開催される王国騎士大会の上位三位に入り、獅子の牙と呼ばれる試験に合格しなければならぬ。腕だけでなく精神も屈強で頭もキレなければ。

「ふええ、アーシエのにちゃん天才？」

「ただの天才ではありません。百年に一度、いや五百年に一度の天才でございます」

立ち上がって興奮するように声を出すカズンの目の前で、アーシエの頬が赤くなる。嬉しさが花開く。

「ルキは、兄はお元気なですね？」

どうやら、兄の素晴らしい経歴よりも体調が気になっていたらしい様子に、カズンは目を丸くした。

「ええ、お元気ですよ」

「…よかった」

まったく自分の生徒が優秀であるという興奮が空回ってしまったカズンは、アーシエの林檎のような頬より顔を赤くした。

「それより騎士さん、酒でも飲んでいかないか。いい肉が入ったんだよ」

バンシャが恥ずかしそうにうつ向くカズンに助け舟を出す。カズンは首を振ると、「今からすぐに皆に報告をし、見回りを強化するので、お心だけいただきます。ありがとうございます」と微笑んだ。そして、踵を返し立ち去った。

隊商が街道を下る。ヒルポスに引かれ、ゆっくり荷車はディノとアーシェを乗せ進んでゆく。

「ですから、会場は大盛り上がりで……」

カズンが興奮しながら、大会でのアーシェの兄の活躍を語る。アーシェがうきうきと聞きいつている。

ディノは空を見ながらカズンの話を聞きながしていた。カズンが同行するようになってから、ずっとアーシェの兄のルキという人が会話の種となっている。

最初は興味があつたディノだったが、えんえん続く顔も知らない人物の華々しい経歴の話に、もう飽々していた。

カズン達は隊商を端まで誘導、警護してくれるらしい。

戦士達は魔物達との戦いで疲れきっていたから、それを受け入れたのだった。

ディノだけ、正直、気が進まないでいた。

ルキという金獅子のせいではない。何だかよく分からないが、騎士の鎧を見ていると胃がむかついてくるのだ。

力がない癖に偉そうな騎士にばかり会ってきたからかもしれない。カズンはいいい男ではあるが、やはり騎士だ。

荷車に合わせ横に並んで騎士達が進む。軽快な蹄の音が音楽のようになど大地を蹴ってゆく。

「おー、竜と平原が見えるゾ」誰かの感嘆の声に、ディノ達は首をあげた。

隊商の前方、遙か遠くに、ゼルダ街道の入り口と同じく二頭の竜の像が、背景に女の腹のような、なだらかな草原を広げ、陽炎に僅かに揺られ佇んでいる。

「これがアベドルト平原ですか。地平線が緑色ですね」

「ああ、この国で、いや東の国々の中で最も大きな平原だ」

隊商が街道の端に立ったのは正午の事であった。

カズンと部下の騎士達は隊商が竜の像を横切るのを確認すると、馬を街道に向け、もと来た道を優雅に帰っていった。

街道の端には、無事に街道を渡り終えた者、これから街道を渡る者が作った多くのテントと、旅人のための小さな村がある。

隊商はそこで一時休み、日が暮れる前に平原の脇のカンシエという都市に入る予定だ。隊商とも、ここで分かれる事となる。

「いやはや、色々ありましたねえ。本当にありがとうございました。あなた方のお力がなければ、今頃熊の餌です」

ロツゾがケラケラと笑いながらディノとアーシエに頭を下げる。

「お互い様だよ」

ディノの言葉に、アーシエが頷いた。

「いえいえ、契約以上の警護をしてもらったと思ってますよ。そこで、お礼としてですが」

そう言つと、ロツゾは両手に布に巻かれた何かを持ってきた。受け取ると、軽い。それは、あの熊の爪だった。

「うわ、いいの、貰っちゃって!」

あの大熊の爪。堅く、鋭く、そのくせ羽のように軽い。武器に加
工すればかなりの品になる。

「頂けません!」

アーシエが戸惑ったように答える端で、ディノがいかにももった
いなさそうな顔をした。

二人の顔を交互に見ると、ロツゾは熊の爪に手を置いて更にディ
ノに強く押す。

「いやいや。貰ってくださいな。気持ち、ってヤツですし」

ロツゾがにんまりと笑う。

「アーシエ、貰っておこう、悪いし」

アーシエはディノの言葉を受けると、両手に熊の爪を大事そうに抱
え、深々と頭を下げた。

過大なお礼が、本当に申し訳なさそうなアーシエの表情に、ディ
ノは心の中で、この男は聖なる者と金獅子の騎士に恩を売りたいだ
けだよ、と呟いた。

ロツゾ、バンシヤ達に別れを告げ、二人はアベドルト平原へと足
を向ける。

平原は地平を金に染め、なだらかに線を描いている。広大すぎる
のだ。

「ディノ、装備などは揃えなくてもよいのですか」

なにもない、ただ緑の草が覆う平原を見据えてアーシエは言った。
ディノは、自分より少し背の高いアーシエを横目に見ると、だい
じょーぶだいじょーぶ、と首を上下に振る。

アーシエは小さな疑問を胸に抱きながらも、ディノの横に添うよ
うに歩き出した。

青い空が、どこまでも伸びていた。

ドラゲノア過去

アベドルト平原。

皇都シオンの真西に位置するこの平原は、横断するのに徒歩で一ヶ月はゆうにかかり、また、星を読むことの出来ない者は迷い死ぬと言われている。

それはまごうことない真実で、紛れもなくアベドルト平原は竜皇国で最も広大な平原である。

遊牧民族風馬が住み、平原を遊牧して一生をおえる彼等にとって平原は庭であり、母体である。

彼等は東の民から総じて、《永遠の旅の人》とも呼ばれている。

平原は、何処までも続き、地平までも緑色だった。
風がディノの額を撫でる。

「風馬…俺の族はさ、元々は旧王国王家の家来だったんだ。暗殺とか、なんだろうな、隠密ってやつ。やってたらしくて。これなんかその時代の武器が元になってるんだ。クナイってな。」

ディノは胸元に下げられた小さな刃を摘むと、アーシエにゆらゆらと揺らして見せる。逆二等辺三角形の細長い刃が太刀魚の腹のようになまめかしく輝いた。

「それは武器ではないのですか」

アーシエの質問にディノは唇の右端をニヤリと軽くあげて刃を唇に当てた。

「これは、こうして使うんだ」

ディノの肋骨が小さく膨らんで、肺から喉へ口の先へ、そして切っ先へと細く長い呼気が触れる――。

「笛……」

大気が小さく震えているようだ。刃と唇の間で揺らめく風が、何処か荒い重低音の旋律となって、草原の彼方へと吸い込まれていく。

「……ん。こんな感じかな。まあ、聞こえるだろ」暫くクナイで音を奏でた後、ディノが小さく呟いた。

「聞こえる？」

「まあまあ、少し座っててよ」

ディノの考えが分からず、アーシェは地面に座した。

草独特の芳香が駆ける子供のような風に連れ添い、アーシェのマントの端を摘んで逃げてゆく。

そのまま暫く、二人は空ばかりを見ていた。

「風馬は、旧王国が倒れた後、平原へ逃れた。王の命令とは言え、暗殺や虐殺も数多く行っていた風馬の長は、罪を忘れないために武器を笛に変えて、鎮魂の音楽を作り、平原を鎮魂の魔法陣を描くように渡り歩いた。それが元で、風馬は音楽と共に旅する遊牧民となった……」

どれほど時間が経ったのか、急にディノがそれまで瞑っていた目を開いた。

キラリと、赤い虹彩が光る。そして再び、今度は力強く何より清く高らかに笛を吹いた。

透き通る閃光のような高音。さつきとは真逆の音。

「来るぞ」

ディノの声と直後に、アーシエはいななきと大地の振動を感じた。それは女の腹部のようなならかな平原の向こうから始まり、確かにこちらへ向かって来るようだ。

地平に煌めく点が現れたと思うと、それはぐんぐんと大きくなり、一筋の疾風となって二人を横切った。

「きゃあ！」

空を貫く槍のように現れたそれは、金色の短毛を纏った獣であった。

「大丈夫、アーシエ。これは、シンガだ。平原のシンガは風馬が全て調教とかしてて…風馬の足って呼ばれてるけど、どっちかと言うと家族みたいなもん」

ディノはシンガの頭を撫でると、干し肉をやった。うまそうにほふる姿は、いかにも逞しい肉食獣そのものだ。

「初めて拝見します」そう言うと、アーシエはまじまじとシンガを見つめた。

獅子のような顔と体付き、四本の足は毛で覆われている。立派な角が一本、額から伸び、犬歯も長く首もとまである。

「りりしいですね」

「はは。じゃあコイツに乗って集落まで行くぞ」

「え、風馬の、ですか？」

「当たり前だろ！それに親戚から旅の道具貰えば良いしな！」

ディノの言葉にアーシェはディノの考えにピンときた。

「…ディノ」

「知ってる？タダより高いモノはない、アレ馬鹿の造語なんだぜ。」

ディノは弾けるように笑うと、シンガに飛び乗って、すぐさまアーシェに手を差しのべた。

ゆっくりと太陽が地平に沈んでゆく。大地が火の粉をあげるかのように、暮れる日の色に染まっていくのを、獣の骨と皮、僅かな木で組み立てられた高い見張り台の上で、じいっと見つめる青年と少女がいる。

二人とも黒い牛皮の衣服を纏っていた。

「ユズ、もう日が沈む。帰れ」

「ヤ。綺麗なんだもん」

ユズと呼ばれた少女は、青年に大きく首を振ってみせると、すぐに地平へと視線を戻した。

「毎日見て、よくもまあ飽きないものだ」

青年は呆れるように呟く。

それもそうだ。東西南北、集落を囲むように立つ見張り台から見る晴れた夕焼けは、いつも同じ色をしている。

それを毎日飽きずに見に来るユズは、すこし変わり者かもしれない。

彼女の目には、毎日違う色に見えるのだという。しかも、彼女が見つめるのは東。ここは東の見張り台であり、太陽が沈む西とは真逆の景色に彼女はみとれているのだ。

なんとも稀有な事だ。

青年には、いくら見ても、たそがれどきは変わらぬ色に見える。

狩りや訓練などで忙しくなった時など、ふいに見た夕焼けに心を奪われることはある。

だがそれは、多忙な日々はその色を忘れていた時に限る。

しかも、青年が心捕われるのは夕日の輝きであり、のびた光の矢が差し込む大地や夜の混じり始めた空ではない。

そんなふうに、青年がボンヤリと考えていると、ユズが突然、弾けるような声を出した。

「何かがこっちに来る！」

ユズの一言に、青年は大きく見張り台の柵から乗り出して、ユズの指差す方を見た。

金の草原を駆け抜け、確かにこちらに向かってくる黒い影。

青年は首にかけた望遠鏡を手に取り、除いてみるも、光の反射の為に何なのか分からない。物凄いスピードで近付いてきているようだ。

「シンガだ。シンガに誰かが乗ってる！」

ユズは興奮していた。

流浪の民の集落を指す者など珍しい。遊牧の友シンガを連れている。敵ではないようだ。

ああ、あれは…。

青年は乱暴に見張り台についている鐘をうちならした。

呼応するように、鐘の音を北、西、南の見張り台の鐘がうちならされる。

各見張り台に三つある、敵、客、家の鐘。そのひとつ、家の鐘の音が、橙に柔らかな黒い影をのばす集落を、優しく包んでいた。

慣れないシンバの背にしがみつかながら、うつ向いてアーシエは大声を出した。口に疾風が入る。

「ディノ、そろそろ休みませんか？もう夕刻ですよ！」

「もうちよつとで着くつて！大丈夫大丈夫！」

シンバは小さな跳躍を繰り返すように走る。黒い影が大きく伸び、より勇ましく感じられた。ふと、その影の足取りが緩やかになる。

「見る、あれが風馬達の集落だ！」

その言葉に直ぐ様アーシエは、顔をあげた。

地平に沈みゆく夕日の輝きが、もう一筋の光の線のように見える。逆光の中に、巨人の家族がテーブルを囲んでいるような固まりがあった。

巨人はどんと背を伸ばし、怪物のようになった頃、ようやく全貌が窺えた。

それは骨や木や土、様々なものから作られた高い壁だった。

一見、鳥の巣のように乱雑に積み上げられたそれらは、よく見るととても精巧に出来ているのだと分かる。

その壁から、四本の塔のようなものが顔を出していた。遠く火竜山脈から吹き降りてくる力強い風に軋み揺れている。

皇都シオンではけして見られないだろう建造物に、みとれていると、突然アーシエの耳を高い金の音が襲った。

「これは!？」

「客の鐘だ!!」

銅で出来ているのか、まるで耳元でならされているようだ。

パツと二人を乗せたシンバが暗がりにはさまれた。建物の影に入っ
たようだ。壁がずんずんと迫る。

「ディノ、ぶつかります!」

アーシェの悲鳴に似た声に気付かないように、ディノはどんどん
シンバを加速させてゆく。

「ディノ、ディノ! キャア!」

アーシェは薄く目を閉じた。

ぶつかる――。

瞬間、フツと体が壁をすり抜けた。いや、壁が直前に口を開いた。
そのままゆっくり、やがてストンとシンバは足をとめた。

アーシェは恐る恐る目を開くと、周囲を見渡した。

壁の内側。人の二倍の背丈ほどの半球のテントが不規則に並んで
いる。

そのテントから、ひとりまたひとりと早足で出て、二人を囲むよ
うに集まってくる。ざわざわと祭りに集まるように。みな、ディノ
と似たファーのついた黒い革製を着ている。また、口元を黒いきれ
で覆っている。

「あーディノだディノ」

「嫁つれて帰ってきてるわー」

ぼんやりとした気が抜けた驚き顔で、風馬の者たちがまつたり騒ぐ。

穏やかな人種のような。まるで珍種の生き物のように二人を歓迎、もとい観察している。

「山！」

突然、はつきりと大きく、女性の声がした。

「マジで？まだやってんの」

「何いつてるんだ、伝統だよっ？アンタはホント天邪鬼だね」

「はいはい、合言葉ですね、かゝわゝ」

「はい、よくできました」

人混みからズンズンと女性と少女が出てきた。少女がすぐさまデイノに飛び付く。

「おかえんなさい！」

「おう、ただいまだ、ユズ」

ユズと呼ばれた少女が弾けるように笑う。

「デイノが女の人つれてきた！」

「まったく、おかしな話だね」

ユズと共に出てきた女性が微笑んだ。少し獣人が混ざった容貌の、明るい笑みだ。

「本当に嫁かい？やだね、この子は」

「嫁じゃないって！仕事の雇い主で、アーシエっていうんだ」

デイノは周囲のみなに聞こえるような声を付けてアーシエに向いた。

…なんとも様子が変だ。照れたような、困ったような、驚いたよ

うな。アーシエがやけにもじもじしている。

「どうした、アーシエ？…まさか嫁に来たいのか！？」

「いいえ！そうじゃなくて、あの…」

もじもじと人みしりの激しい子供のような様子のアーシエに、突然、女性が大声を出した。

「アーシエ、だつて！？」

ずい、とアーシエに近付く。アーシエは、じつと目を合わされて、やがて観念したような顔で軽くお辞儀をした。

「…お久しぶりです」

「やっぱりかいっ！」

「し、知り合い！？」

仰天するデイノに、女性があきれたように苦笑した。

「なにが雇い主だよ、覚えてないのかい？やっぱり頭が悪いんだね」
「なにになに？」

デイノの腕に全身をまかせるように揺れるユズが跳ねる。

「…あんたは知らなくて当然だね。わたしは僅かな大人のほかに誰にも言つたことがないからね」

女性はデイノをこつくと、アーシエに向き直った。

「元気だったかい？」

女性の微笑みに緊張をほぐされ、アーシエはハッキリと答えた。

「はい、…キリア母さん」

ざわめく風馬の人々に「あとで説明する」と言つと、すぐさまキリアは自身のテントに二人を導いた。

テントではキリアの夫のキリコが食材を切っていた。

外からの音に状況を理解していたのか、デイノを挨拶がわりに寡黙に叩き、アーシェに礼をすると、そのままユズを引きずって外に出ていってしまった。

キリアは、デイノとアーシェをテントの中央にある円卓の回りに座させると、水を入れた椀を円卓にふたつ置き、自身も腰を下ろした。

「さて、随分といきなりだが…ああ、いったい何から話せばいいのかね…あまりにも色々な事が…」

そして、宙をほんのすこし仰ぎみた。

あの日、十四年前、神が私の前で自ら命を絶った日。

「…キリア。私の名前はキリアというんだよ」

オルセの両肩に、三人の背後にある、遠のいていく自分達の育った場所をただただ見つめながら、しがみついている二人の子供に、キリアは優しく言った。

赤ん坊は、キリアの腕の中でスヤスヤ眠っている。

「…」

右肩の女の子は、ただめそめそと泣いている。

左肩の男の子は、決心しているようにジッとキリアに目を合わせた。

洞窟を出る前に、爆破の魔法陣をいくつか神殿に敷き、離れてから呪文をつむいで発動させた。

洞窟も、神殿も、とうに崩れてしまったはずだ。神竜と共に。

背後にそびえる山脈は、二人の、そしてキリアが抱いている赤ん坊の育ての親の墓標だ。その事実を、この小さな体で受け止めようとしているのか。

…この私でさえ、竜を殺して、あまつさえ、名を捨てるという命を飲み込むのに、何日もかったというのに。

事実、登山の最中ずっと自問自問していた。

何故、騎士団長の為に自分まで名を捨てなければならないのか。

騎士試験、獅子の牙、あれらの辛い試験を越える為に、故郷・風馬から出て、必死に努力した。

金獅子に入り、魔法騎士として、故郷に届くほどの名をあげた。

金獅子では、団長ガアブ、騎士オルセ、騎士パピコ、彼等についての力を持っていた。四元素を操る魔法で四天のキリアと呼ばれた。

その名を捨てると、言われた。

実力がある他のものは選ばなかった。後で気付いたが、キリアもオルセも、独り身だ。

洞窟に着いた時は逃げ出したいと体が訴えていた。今なら、逃げられると。

…何故、私は逃げなかったのだろう。オルセ、何故お前は逃げなかった？

両の腕に支えられる、赤ん坊の顔を見つめる。

挙げ句、子どもを背負って、神の命さえ狙うという正体の分からないものから、逃げ続ける運命をも背負わされた。

《神竜に導かれた》

本当に、そうか？

分らない。

これから私たちは、どうなってしまふのだろう。

心臓を驚捕まれているような暗い感覚に、めまいを感じているキリアの耳に、風が囁いた。いや、風ではなく、かすれるような少女の声だった。

「…ア、…シエ」

「え？」

突然に現れる、真紅の月のような、目だ。

「…アーシエ」

ああ、この子の？

「…ルキ。隣は、ルキ。あとね、ディノ」
そう。

「…私はキリア。」

手をのばした。ああ、なんて小さい手なんだろう？

「あんたたち、よろしくね」

逃れるように、流れるように。私たちはある街に向かった。

国籍不明のものや、力しか取り柄がないもの、行き場のないもの、家出人、娼婦、盗人…。様々な人種が、集まるエアドラドのさいたる形のような街。まるで食材をレシピを見ずに鍋に詰め込んで混ぜたような…。

木は森へ、人は人混みの中へ。命を狙われている人間が隠れるには、丁度いい場所だったよ。

——三年後。

ならず物の街、エドガー。

その街の外れの裏山の、小さな家に、雷が落ちた。

「どうやったらそんなに泥だらけの傷だらけになれるんだい！」
キリアの怒鳴り声に、一斉に二人は間にたつ子供を指差した。

「「デイノが悪い!!」」
指をさされた子どもは、一番泥をかぶりながらヘラヘラと笑っている。

「信じらないのっデイノったらジジの沼に入ったのっ」
女の子が半泣きで訴える。

「うんうん、アーシエの言う通り、あと少しまギフロッグに食べられる所だった」
男の子がウンウンと相槌をうつ。

ジジの沼とは、街の外れの魔法使いの老人ジジが魔物を育てている沼の事である。

マギフロッグは、人間の背丈ほどの肉食魔蛙だ。

「ああそうか、またジジの所に魔法を習いに行ってたんだね」
ギクリと二人が目丸くする。デイノだけクスクスと嬉しそうにしている。

「あれほどあそこには行くなと言ったろう！駄目！禁止！一週間外出禁止！」

外出禁止という言葉に、一瞬固まって、すぐに三人の子ども達が喚き出した。

ピーチクパーチクの抗議の大合唱と一緒に、三人の体にべったりとついた泥がダンスをするように部屋に飛び散る。

耳を押さえながら、ついにキリアは我慢の限界をこえた。

「ええい、うるさい！ルキ、アーシエ、ディノ！さっさと風呂で泥を落としてくるっ命令だよっ」

三人はすぐさま玄関から外に駆け出した。キリアもそれを追っていく。

走りながらポイポイと泥付きの服を脱いでいく、三人の器用さに呆れながら、次々服を掴む。

家の裏手にある風呂に飛込むと、またざわめきだした。

「水ー水ー」

「きゃあ冷たいっ」

「母さん、氷水？コレ！」

溜め息をつくとき、キリアは呪文を詠唱した。途端に、水は湯気をとてる。三人が、漸く黙った。

さっきの元気はどこへ行ったのか、と心底キリアは不思議に思った。

…いつまでも、飽きないもんだね。

三年前の不安が嘘のような生活がある。何もなく、日々が過ぎていく。

あの出来事が、夢のように。

キリアが過去を臆気に見ていると、庭の脇にある深い森がユサユサと揺れた。

現れたのは、これまた泥に塗みれたオルセであつた。

「…おとーさん、泥んこー！」

デイノが嬉しそうに奇声をあげる。ルキとアーシエは必死に笑いを堪えている。

「蛙さんと喧嘩をしました…」

オルセが両手をあげると、服の裾から泥が滝のように落ちた。それを見て、子ども達は堪らず吹き出し、一斉に笑い始めた。

「アンタってヤツは…」

あきれて物も言えないという顔をして、キリアは自身の眉間を抓んだ。

最近はいつもこうである。子ども達と散歩に行き、子ども達に巧くまかれて置き去りにされ、危険地帯に遊びに行く子ども達を追い掛けては、このような目にあつて帰ってくるのだ。

すっかり子どもの玩具である。

（これが三年前、金獅子だったなんて言っても誰も信じないだろうね）

「こども達があがったらアンタも風呂に入るんだよ」

キリアは溜め息混じりにそう言つと、小屋の裏口に向かった。

「今日の晩御飯なーに？」

背にかけられた言葉に、キリアは顔だけ振り向くと、「蛙以外だよ」と言つて、裏口の戸を開けた。

パチパチと、暖炉の薪が爆る。先ほどまで仄かに浮遊していたゆうげの匂いが風に溶けてゆく。

「怪獣が眠りにつきましたよ」

子ども達を寝かし付けたオルセが、居間に入ってきた。
「ご苦労だな、オルセ」

ガアプは円卓にオルセを招くと、木の杯に果実酒を注いだ。

「いいえ、ガアプ様も…。うん、美味しい果実酒だ」

オルセは杯を口につけると、感嘆するように言った。

「当たり前だ。私とガアプ様の二人で毎日丹誠込めて育ててる畑から採れたぶどうから作ったんだからね」

「そう、お前が蛙と遊んでいる内にな」

「…そんなにいじめないで下さいよ」

照れ笑いを含む。だが、すぐに真面目な表情に変える。

「…あの子達は、元気がいいです。とても。どんどん成長してゆく…」

ルキもアーシェも、今年で七歳になった。デイノは三歳。

三人とも、大人の手を放して走るのが巧くなった。目を少し離すと、もう何処かに行ってしまう。

「街の人々が三人を大事にしてくれているから、まだ助かっています。…ルキは騎士坊や、アーシェは姫様、デイノは小鬼なんて言われている。フッフ」

オルセが笑う。目はどこか悲しみに淀んでいる。

「…過去が嘘みたい」

「…そう、ガアプ様は何も言わなかったが、みんな過去が幻のように思えていたんだ。それほど、平凡で穏やかな貧乏農民のような生活だった」

キリアは目を細めながら言葉をつむいだ。

「俺、ぜんっぜん覚えてない」

キリアの話に、ディノは首を左右に振る。

「ディノはとつても小さかったから、仕方ないです」

「仕方ないこともあるもんかい。あんなに、みんなに心配させて迷惑かけて、あげくアーシェを全然覚えてないだなんて、我が子ながら本当に呆れるよ」

「わりい」

ディノのあつけらかなとした謝罪にアーシェはクスクスと笑うと、懐かしい、と呟いた。

「もう、十一年も経つんだね…」

「えいやっ」

ポコツと軽い音がして、木刀が返される。

ぴゅんぴゅんぴよこぴよこ、小さいルキとアーシェの体が飛び跳ね、二本の木刀が、ガアプに向かってゆく。

「そんなんじゃ二人とも、憧れの金獅子にはなれんぞ…」

ガアプの木刀が、素早い動きで次々と二人の太刀をはねかえす。まるで緩いリズムの太鼓のようだ。

ガアプは平然としている。対照的に、幼い二人は必死のようだ。ぜいはあ、と荒い息をして、ガアプめがけて木刀を振る。汗が滴る。

ふと、二人がチラリと両者を見つめた。キラリ、と小悪魔な目が光る。

「わあっ」

瞬間、つるり、と木刀がルキの手を滑って、ガアプの顔の横を鳥のようにすり抜けた。バランスを崩して、そのままズデンと転ぶ。

「むっ」

ルキが転んだのを抱き起こそうとガアプが手を伸ばす。

「すきあり〜!!」

すかさず、しゃがんだガアプの頭にアーシェの太刀が振られる。

だが、それはスルンとかわされて地面に不時着した。

ポコン！ポコン！！

「「いたいっ」」

ガアプの太刀が、二人の頭を叩いた。

「…姑息な作戦だな。そんな事ばかり考えていては、いつまでたっても強くなれんぞ。堂々と剣を交えなさい」

ガアプが諭すように言うと、ついには二人ともめそめそと泣き出した。

「だっておじいちゃん強いんだもんっ」

「そうだよっ」

涙に鼻声混じりで二人がいじける。二人の様子に、ガアプはおろおろとうろたえた。ガアプは、二人を溺愛しているため、泣かれるのが苦手なのである。

「わかった、手を抜かないおじいちゃんが悪かった」

よしよし、と二人をなだめすかす。だが……

「「すきありっ!!」」

ズテンツ。

二人の同時攻撃。難無くかわされてしまった。そればかりか…

「ルキ、アーシェ…刀を置いてそこに座りなさいっ!」

街の外れの、沼の横。

樹で出来た、というよりも大きな樹の中に、そのまま人が住み始めたような家。

魔法の臭いが立ち込める、そこは魔法使いジジの家――。

「…でね、おじいちゃんったらさ、昨日ずっと同じこと言ったのっずつとよ、きつと一時間くらい!」

「お前たち、そんな卑怯なことをしていると墮落の道を歩き、しまいいには…だつて!」

アーシェの憤慨の側で、ルキがガアの真似を交え乍ら状況を訴える。

「君達のおじいさんは正しいよ、とつてもね」

「ジジはおじいちゃんの味方するのね?」

ジジ、と呼ばれた初老の樹の魔人は、フフと笑うと、「大人になつたら分かるじやろよ」と言つて、片手に持っていた試験管に呪文を唱えた。

試験管は緑色のゲップをすると、七色に光輝き始めた。

「ジ―、なに?」

ディノの質問に、ジジはニコリと微笑むと、机に乗る燭台の火をひとつ残して吹き消した。

たったひとつの小さな光源のみ。部屋には、子ども三人の真っ赤な目が六つ、そしてジジの樹の窪みに水晶をはめたような目が二つ、そして七色に輝く試験管一つしか見えない。

「この試験管にはある魔法気流が流れとる。ここに魔法植物の種を

入れる…」

ジジの指先の小瓶から試験管へと種が落ちる。すると、途端に種は芽をだした。

「これはなんの魔法気流か？」

ジジの問いに、ルキが素早く、土！と言った。ジジが左右に首を振る。

「種には魂が入っとる。この種という状態の時、魂が欲するのは…」

「…水！土は、魂が肉体を種から芽に変えてから必要なの」

「ご名答！」

アーシェの答えにジジはニンマリと笑うと、試験管に土の魔法気流を送り込んだ。

「さて、これはなんの植物になるかのう…」

そういうと、ジジは試験管を試験管立てに置いた。蠟燭に火をともす。

「それは、時間と、この植物の体と魂、そして魔法の流れが教えてくれる…」

試験管の中の植物は、豊かな茶色をしていた。

「ジジみたいになる？」

ディノがジジに問う。

「…時間をかけて魔法を蓄積し、そして他の生命が接することで魂を少し分け与え、その魂に引き付けられ、魂と魂の核である星が降ったら、もしかしたら実に樹の魔人が生るかもしれないがのう。」

ジジの答えに、三人ともつぶれたような顔をした。

「なんだかとても難しいね、世界の仕組みって」

ジジはルキの言葉に、

「…だからこそ人々は、学び、探すのじゃよ」

そう言って微笑んだ。

ぐつぐつとスープが煮立つ。キリアがスープを執拗な程、掻き混ぜている。

「…ですから、そのジジというのはですね…」

キリアはジジの事を非難しているようだ。その言い方はぐつぐつと煮立つスープに酷似しており、何処か笑いを誘う。

小言を聞きながら、ガアプとオルセは茶をすすっていた。

「…でもまあ、悪い人ではないよ。沼に結界を張ってくれたし、正直、良い託児所になってるし」

オルセがやんわりと言うと、キリアが振り替えた。

「あの子達は竜の血飲み子なんだよっ命を狙われているかもしれないんだっ」

「…ああ、私もな」

ガアプの言葉に、キリアが二人をじっと見る。何か言いたげに、けれど背を向け、スープに向かう。

ガアプと血飲み子の命を狙う者の正体は分かっている。三年もその陰に脅えている。きっと、これからも。

全く音沙汰が無く、過去の出来事が嘘のように思えていても、警戒は常に心の中にある。

だが、自分達が生きていく為には働く事が必要だ。それが、酷い緊張を生んでいる。

「正直、ジジの存在には助かってます。彼は、沼に精神力が特に鍛えられた元騎士の私でも近付けない結界を張れるほどの力の持ち主です。その彼が、一定時間こどもたちを保護してくれている。とても力強いですよ」

キリアには、否定できなかった。

だが、それでも小言は何処からか知らないが湧いてくる。

「力がそんなにある魔法使いがこんな街で蛙なんかを飼って生活してるのが、そもそもおかしいんですよ。しかもモグリでしょう」

それは、キリアの勝手な考えであり解釈である。力ある魔法使いが低階級の街にいる事がおかしいとは限らないし、魔法を学校で学んだ、或いは教えた経験がないとも言えない。

ようは、焼きもちなのだ。

子どもの面倒を取られて、キリアは無意識に嫉妬を抱いているのである。

それに、彼は魔法使いだという。キリアも一応、魔法を学んでいた者だ。自分だって子どもに魔法を教えられる、そんな闘争心もあるのだろう。

…と、ガアプとオルセの二人はそんな事を考えていたが、口にするとキリアが今度は憤慨しそうなので黙っていた。

「きつと、ろくな奴じゃないよっ！」

ついに荒く言葉を吐き出す。キリアは首元まで赤くなっていた。仕方ない。

ガアプは少し考え、そして言葉をついだ。

「ならば、今日は私が子ども達の迎えに行こう。ろくな奴じゃないかどうか、一度会ってみよう」

「…そうして、魔法使いアランは姫を救い、王様になりました、めでたしめでたし…」

ジジは魔法物語の魔法使いアランの章に琴を挟むと、ゆっくり分

厚い魔法物語の本を閉じた。

ちらりと見ると、子ども達の反応は様々である事が窺えた。

アーシエの目はキラキラと瞬き、ルキは何でもなさそうな顔をしていて、ディノはすっかり眠っている。

全く性格が違う兄弟である。

「素敵だわっ魔法って！ああ、私もアランみたいな魔法使いになりたい……」

「つまり、王様になりたいんだね」

ルキの言葉に、アーシエがキツと横目に見る。

「ルキって本当に夢がないっ。でも、確かにそうね。それに、魔法使いが王様になれるわけないわ…物語だもの」

「なれるとも」

の突然な言葉に、二人がハッと顔を上げた。

「ふふ、今のエアドラドの王、レマは元々は魔法使いなのじゃよ」

「「本当っ！？」」

途端に元気になる二人に、ジジはゆっくり首を上下に振ると、

「ああ、本当じゃよ。正確には、聖なる者じゃが……」

「「聖なる、者？」」

ジジは、本棚に魔法物語を納めると、かわりにエアドラド歴史書と書かれた本を取り出した。

「…これには、エアドラドの歴史が記されておる」

ジジは最初の頁を開いた。タイトルの上に、一枚の挿絵が載っている。革命の王、ヒルドと記されていた。

右目を眼帯でかくし、左目は燃えるように赤い。鷹揚と一本の剣

を両手に大きく掲げており、背に大きな神竜が描かれている。

「これが、初代の王ヒルドじゃよ」

「知ってる。母さんから聞いた」

気付くと、二人の目は真剣そのものであった。いつの間にか、
デイノが起きてヒルドをつついていてる。

「ほう、キリアさんがのう…」

「違う。本当のお母さん。」

安穩と相槌つジジに、アーシエがきつぱりと言う。ジジは軽く眉
をひそめると、何も詮索せずに続けた。

「神竜の血を飲んで育ったそうじゃ。真っ赤な目はその証と言うが
どうだか分からぬよ。目が赤い子は獣人にはよくおるし、時折ヒュ
ームにも産まれおる。お前達のようにじゃな」

ちらりとジジは三人の子どもの瞳を見た。三人とも、赤い目をし
ている。挿絵の、ヒルドのように。

「ヒルドは革命を起こしたのじゃ。獣魔人革命と言ってな、それま
で人間としてではなく、獣や奴隷として扱われておった獣人や魔人
の、人としての権利を訴えたのじゃ」

「…人として扱われなかった…」

デイノの言葉に一瞬顔を曇らせ、ジジはかぶりを振った。

「そんなものではない。正に獣以下、石ころ以下じゃった」

ジジは更にページを捲った。

エアドラドの国地図。皺くちやの固い指先は、皇都シオンの真ん
中をさした。

「エアドラド城。世界でも有数の美しき竜の城。ここには昔、悪い
ヒュームの王様がいた」

指先は更に、城の周りの大きな湖をくるりとなぞる。

「アルタナ湖。世界最大と言われる人工の湖。悪い王は獣人、魔人、反抗的なヒュームに城と湖を強制的に作らせた。男も女も子どもも老人も関係なく、粗末な餌に汚水を飲ませ、痩せた体に鞭を打ち休みもなく働かせ、毎日何人も何人も死んだ」

ジジの目は悲しみに沈んでいる。

この樹の魔人は、その長命さから、もしかしたらその場にいたのかもしれない。思い出を語るような、悲哀に満ちたさえずりだ。

「やがて城が出来た。それから数年後、湖が出来た。人々はやっと解放されると思った。彼等の多くは貧しい農民じゃった。重い税と赤貧に苦しむ日々の方がまだ幸せじゃったから。皆、村に帰れると思っておった」

子ども達は、皆不思議そうにジジを見上げた。

「…帰れなかったの？」

ルキの憶測は残酷にも正しかった。ジジは重く息を吐くと、指を移動させた。

城、アルタナ湖、アルタナ湖に注ぐメルン川。水門。

水門に指は止まった。

「奴隷達が、王に命ぜられ水門を開けた」

水門、アルタナ湖に注ぐメルン川、アルタナ湖、城。

「ここで王族は宴をし、獣人、魔人が突然の水に逃げ惑い、流されてゆくの見下ろしておった。死んだ人間の数は、数百万とも、数千万ともいわれておる。湖の底に、皆が沈んだ…皆、死んだ…」

子ども達の息を飲む音が、僅かにページをゆらした。三人とも、怒りにうち震えているようだ。そう、その姿は、その時のヒルドそのものだろう。

いや、ヒルドは…

「ヒルドだけが、生き残った」

ヒルドはヒュームだった。彼はだが、獣人魔人を愛していた。彼は彼等が人間だと知っていた、理解していた、認めていた。だからこそ、ヒルドは革命の準備をしていた。それが、王の密偵の一族、風馬に悟られた。

「革命を企てていたヒルドと、その仲間を根絶やしにする為に、そして戒めの為に、王族は人々を沈めたのじゃ。」

だが、ここに誤算があった。

ヒルドは生き残った。

そして、無慈悲な王に絶望した風馬の長がいた。

風馬の長こそが、ヒルドの命を救ったのである。そして彼を匿った。うちひしがれ、絶望していた 彼に、懺悔と共に喝を入れた。

「立ち直り、ヒルドは風馬の長と和解し、義兄弟の契りを結び、国中をかけずりまわり、力を蓄え、そして革命の狼煙をあげた。国事犯の牢獄に使用されていたイリバスト城塞を襲撃し、解体したのじや」

革命の火は瞬く間に広がった。

人々は、王の元に蝟集した。手に手に頑丈な棒や、鍬や鋤やらを掲げ、暴徒と化して。

それが生き残る為に残された、唯一の方法であり、人間の自覚だった。

力への意思が燃えたぎり、革命王・ヒルドは叫んだ。

「我々は、人間だ!!」

「かつこいいつ」

アーシェが嬉しそうに手をたたいた。ジジはにんまりと口を右にあげた。

「絶対血縁王制の定義は、実質、その日に崩れたのじゃよ。ヒルドは王になったが、ヒルドが王になった理由は、革命を起こした者としての責任を払う為じゃ。すぐにヒルドは、王とは血ではなく、優れた者が司る、と王制のシステムを作り替えた。王の剣、盾、杖により選ばれた…な」

何、何、と子ども達が一斉に説明を要求する。まるで、親鳥に餌をねだる雛のようだ。幼い頃の知的欲求は、食欲と同質の渴きをもっているのかもしれない。

ジジは三人を順に見ると、更にページを進めた。

今度は、美しい正三角形の midpoint に冠が、各頂点に剣、盾、杖が描かれた挿絵がのっていた。ジジの力サカサの指が紙と摩擦して、柔和で柔らかな音を奏でる。

剣。

「警護と秩序を司る。つまり、騎士などのお仕事じゃな。この王さまは護王と言いよる」

盾。

「政治を司る。国の約束事をみんなで話し合う。この王さまは治王じゃ」

杖。

「法律を司る。聖なる者もあるな。聖王」

「これらを三身といい、王を一天と言う。三身が王を選ぶのじゃ。現王レマは元々は前王アレオンの妻じゃったが、妻じゃから王になれたのじゃあない。この三身に選ばれたのじゃ。そして王は…」

「…ジジ、ジジ」

ディノが机を揺らし手をあげている。

「なんじゃ？ディノ」

「せえなるのつて何っ」

ディノが興奮ぎみに訪ねたのを、ルキが驚きぎみに答えた。

「え、ディノそんなこともしらないの？聖なる者は魔法使いだよ」

「ちっが~~~~うっ!!」

いきなりのジジの大声に子ども達は一気に目を落ちそうなくらいに開いた。

その様子にジジは赤面し咳き込むと、更にページをめくった。

「聖なる者は聖なる力を持つものじゃ。魔法使いじゃあないわい」

そういつて、ジジが開いたページには、竜の城のある島の地図。

ジジの指の先は城の隣である。

「ここが彼等の住んどる所じゃな、聖園という。聖なる力とは治癒など魔法では出来ない事が出来る。元々は様々な地方におったが、一ヶ所に集められるようにのうたのは、日中は太陽の光で押さえられておるアルタナ湖に沈められた人々の怨念を、毎夜癒してゆく為じゃ。怨念は魂の歪みであり、癒された怨念は空に上れる。これはアベドルト平原にもいえる事じゃ。アベドルト平原は改心した風馬の長がアベドルト平原に渡りて聖なる力ではないのじゃが聖なる……」

すでに、子ども達は何が何だか分からなくなっていた。

アーシェとルキは、まるで苦いものを嚙むよう言われているような、デイノにいたっては泣きそうな顔である。

だが、そんな事には気付かず、一心にジジは本に向かって説明をしている。

ジジは教えるのが好きなようだ。狂ってると言っても差し支えがないくらいに。

気持に火がついてしまったらしい老人は、熱に浮かされ、有り得ない加速度で舌を回してゆく――。

と。

『カラン、カラン、カラン』

「すみません、オルセです」

「おやおや、もうお迎えの時間じゃな。時が経つのは早いのだ」

ジジとは逆に、時間が経つのは遅い、と苦痛と共に思い始めている子ども達は思わず、互いの表情を見た。にやり。

ジジは残念そうに本を閉じると、部屋の扉を開けて玄関へと歩み出した。子ども達も一斉に駆け出す。いつの間にやら、ジジを追い越して。

「わ、おじいちゃんっ」

玄関には普段迎えに来るオルセの他にガアプがいた。

「おや、これはこれはガアプさん。お話はかねがね…」

「お初にお目にかかります」

そう言つて、ガアプは深深と頭を下げた。ジジも続く。

「じー、今日、王さまの事ならつたよ」

ディノはガアプの足に掴んで体重を乗つけた。

「そうか。…いつもありがとうございます」

「いえいえ、ただのお喋りな年よりの道楽ですじゃ。」

ジジはそう言つと照れたように鼻を搔いた。

ふと、ガアプは、心に引つ掛かるものを感じた。

…何処かで…

「何処かで、一度お会いしませんでしたか？」

ガアプの言葉に、はて、とジジは首を傾げた。そして、

「申し訳ないのじゃが、覚えがありませんのう。…はじめましてですじゃ」

ジジは微笑んだ。

「おじいちゃん、早く！」

ガアプは心に引つかかりを感じながらも、子供達の催促の聲に押されるように玄關を出た。

「ガアプさん」

ジジが、ふと思いついたように声を出した。

「裏の道を通つてお帰りなされ。花畑がありましてな、丹精込めて子供達と育てたものなんじゃが、これがなかなかでしてな」

子供達が一斉に咲いたの？と声をたてた。ジジは微笑んで首を上を下する。

「花畑ですか。行きましようよ」

オルセの言葉に、弾かれる様にして子供達が走り出した。

「・・・では」

ガアプはジジに頭を下げると、子供達の背中に早足で続いていっ

た。

ジジの強い視線を、背中に感じながら。

風景が柔らかに背後へと駆けて行く。

子ども達は瞬く間にいくつもの風を切った。

すぐに、花の力強い芳香が、した。

ジジの家に隠れるようにして広がる畑に、その花達は咲き誇っていた。

黄色。赤。白。

極上の色彩世界。

山陰に下ろうとしている鮮やかなたそがれの光の帯に彩られ、しなやかに風に揺れる。

「見事なものですね。遠回りになりますが、うん。これはそれだけの価値がありますね」

「ああ、素晴らしい」

子ども達が兎のように跳ねながらだんだん進むのを、オルセが転びますよ、と注意するのを、まるでガアプは夢の中で聞いているように感じた。

心に、棘があった。

それが、ちくちくと痛む。

幻想的な景色の中、ぼんやりとその正体を探しても、まるで分からない。

目の前の美しい無数の花花から、灰色の花を一本見掛けてしまったように。心にぽつんと、雨の滴がおちたように。

「おじいちゃん…！」

痙攣。

足元に、アーシェがいた。

「はい、これ」

差し出されたものに、ガアプはひざまずいた。アーシェの両手から、ガアプの白髪混じりの頭の上へ。…それは、花の冠であった。

戴冠式の、ようだ。

アーシェの頬が、林檎よりも赤く誇らしげに綻んでいた。

「あなたは、王の杖、剣、盾に選ばれました」

ふと、目頭が熱くなった。何故だ？

「おおせの儘に…」

立ち上がり、アーシェを抱き締めて抱えあげた。また少し、重くなった。

「王の杖、剣、盾を学んだのか」

ガアプの言葉に、頷く。

「王は、三身に選ばれるんだって。わたしね、ずっと王様って血で選ばれると思っていたの。だからね、とても嬉しい。だってそれって平等で、正しくて、素晴らしい事だと思うのっ」

——何？

「…ジジさんは、そう教えてくれたのか？」

「とても凄い人なのね、革命の王ヒルドさんって。わたし、好き！」
アーシェの幸せそうな顔に、ガアプは苦いものを感じた。

——あの老人は、そう教えたのか。

それは多分に詳細で、だが間違っている。

ガアプはそう言おうとして、だが言葉を飲み込んだ。否定してど

うなるのか。

確かに歴史の書や法では、王は血で選ばれないとされている。三身が、平等に選ぶと。

だが、実際は違う。

この国が生まれかわってから、王は皆、ヒルドの末裔かそれらの血族、あるいは親族である。三身は、その中から選び続けているのである。

ヒルドは望まなかったろう現実には、あまりにも彼が突出した男であつたから生まれたと言える。

まさに、王と呼べる男だったのだろう。虐げられた人々が、或いは王を奪われた人々が、すがりついた男。だからこそ、皮肉にも矛盾は産まれたのだ。

この国は、ヒルドの血に今だすがり続けているのである。

それに異論を吐いていた過去の自分。そして今、反逆者の汚名を着せられ、命を狙われている、自分。

まさに、腐敗——。

だが、そんな事を子ども達に語ってどうするのだ？

平等を否定しなくとも、彼等はこれから大人になるに連れ、嫌と言つほどその矛盾をつきつけられるだろう。

無論、教えない事が罪になりえる事は、ガアプ自身しっていた。

だが、この笑顔を壊してまで教える事だとは思えなかった。

「きつと、レマ様も素晴らしい方だわ。わたし、会いたい」

瞬間。

ズキリ、と。

棘が心の臓の壁を食らった。

「ああ、そうだな。きつと素晴らしい方だ。…きつと」

ガアプは、幸せだ。

人は、金や地位など無くとも、例えば鳥籠のように狭い世界でも、幸福を歌うことが出来る。

自身の中に、幸福の青い鳥を容易く飼育する事が出来る。

愛しい子ども達に囲まれ、愛や夢や、或いは希望に胸を膨らます。

至福という名の、幸福で美しく、平凡な日々。甘く、優しく、抱擁されるような日々。

ガアプは、幸せだった。

鋭い棘から、細く線を描いた血にさえ、無意識に目を瞑ってしまふほどに。

木々が、ざわめいている。

ジジはガアプ達の姿が見えなくなった頃、正面の道をゆっくりと歩みだした。

道の向こうから、ゆっくりと近づいてくる三つの影があった。

影は、橙に染まり始めていた道を、普段子供達が行き帰りに使う道を、静々と足を進めていく。

ジジもまた、歩みを寄せる。

…ゆっくりと…

近付くにつれ、その姿がくつきりと見え始めた。

三人とも、白い装束で身を隠している。

フードを深く被り、きりりと締まった口元しか顔は確認できない。だがジジは、三人が何者なのか分かっているようだ。立ち止まり、

真つ直ぐ彼等を見据える。

ついに、三人がジジの前に、立つ。

「久しぶりじゃのう、セリス」

「ええ、全く… お久しゅうございます、ジジ」

年老いた、女の声。

三人の中心に立つ人物が、深々と頭を下げた。ジジも続く。どうやら、長い杖をついた中央の人物―セリスの―が、最も地位が高いようだ。

斜め後ろの両脇に立つ人物は青年と言って良いほど若く、白い槍を片手に持っているところを見ると、護衛のようである。

「ここではなんじゃから、まあ汚い家じゃが、入りなさい」

そう言つて、ジジは集団を迎えた。

三人は、ゆつくりとジジの後について進んでゆく。

護衛らしき青年は二人とも、ひどく緊張しているようだ。同じく、セリスも。

ジジの言動に神経を行き渡らせているという事が、端からみても分かる。

三人はゆつくりとジジの後について、玄関、廊下と渡る。通されたのは、客間であつた。

「さて、お茶をいれますかな。よいヒマワリ茶が…」

客人に対し、にこにこ微笑むジジに、セリスは首を左右にふつた。

「いいえ、結構です。それより…」

——意を決するようにな。

「お迎えにまいりました」

セリスは、よく通る声で、ジジの背に言った。

「はて、何の事じやろうか…」

「お迎えに、まいりました」

今度は更に、ハツキリとした口調だった。

「分かっているでしょう、ジジ。あなたは選ばれたのです。それに…あなた以外にはいないのですよ。」

すぐるような口ぶりだ。ジジは溜め息をつく、振り返った。顔の皺が目立つ。

「わしの代わりはいくらでも」

「—おりません。あなた以外には。あなたは…」

セリスの目がフードの隙間からちらりと見えた。強い、目。

「あなたは、ただ一人、」

そう、ただ一人

「イエズガルドの名を受け、そして——」

聖王になるお方です——

「…聖王、のう…」

ジジは床に視線を移動しながら、途端に嘲笑した。

「…女皇帝レマの教育係が聖王、とな…」

セリスは小さく、関係ありませんと答えた。それに素早く、ジジは首を振る。

「…関係はあろう。もし、レマが悪政を行おうとした時は、どうなる？ わしはその芽を摘めるじやろうか？」

「あなたなら出来ます。あなたは本当の意味でレマ様を教え子として愛していच्छやる」

凜と背を伸ばし語るセリスに、ジジはその水晶のような目をやっ

た。

「何故そんな事がいえるのじゃ？どうしてわしが、悪政を行うような者を育てたと言う汚点を隠そうとはしないと。聖王という権力の椅子にしがみつくと事なく、正しく事が行えると、どうして言えるのじゃ？」

セリスは、睨んだ。

「わたしはあなたの妻ですよ。」

ずい顔と顔を近付ける。その目は、まるで鉄を錬金する槌、女傑の目である。

「自分の役目の大きさにうろたえて聖園と妻から逃げようような腰抜けと赤縄を結んでも、耄碌の拳句、そんなつまらぬ事をやらかすような愚か者を夫になどしません。聖園管理人セリス・ビンセントを舐めないで頂きたい」

ジジはうつ向き陰にセリスをチラリと見た。

何か言おうとして…だが言えないようである。その姿に、更にセリスは語る。

「あなたの妻としての私は、あなたなどどうでも良いのです。ですが、聖園管理人として私は伝えたい。――聖園はあなたを選びました、国もまた、あなたを選びました。あなた以外の、何者でも無いのですよ」

そこでジジは、溜め息を吐いた。

「…もう一度、考えさせてくれんか」

空がじわりじわりと、東から暗闇に侵食されてゆく。

桃と漆黒と紫が、雲に融解し風に流れてゆく。

夜になると、エドガーは、不思議な活気で充ち溢れる。

朝にも昼にも無い、静かに燃えるような活気だ。露店が並び、街道には人が溢れる。

ドラグノア各地から集まった珍品、芸術品、中には販売が制限されている筈のものまで、太陽を失った月の影に乱雑に並ぶ。

月が美しい年頃の娘のように輝く時、この街は、言わずとした闇市と化するのだ。

これは旧王国時代に、獣魔の商人達が、ヒュームに隠れて市を開いていた事を発端にする。ならず者の街エドガーの、艶のあるもう一つの顔だ。

そして。

街の最も高い建物の屋上に、一つの人影があった。長いマントが突風に扇がれ、はためく。

「…竜の、血飲み子…」

その呟きに気付く者は、誰もいない。

梟がホーホーとまのびした歌を、雲の少ない夜に響かせている。

囁きはとても遠く、月にでも向けているようだ。

ディノ、アーシエ、ルキの三人は川の字に、ベットに横になっていた。

布団を頭から被り、その隙間から窓に浮かぶ月を、僅かに見上げながら。小さく、今日の出来事を囁きながら。

と、突然、三人の真ん中で、うとうとしていたディノがむくりと起き上がった。

「おしっこー」

「さつき行つたじゃない」

「おしっこ、行こっ？」

「一人で行けよ」

眠りの甘さが少し降りてきている二人は、ベットから離れたくないので、ディノにとってもそっけない。

「ねえ、行こっ！」

ディノはベットの上をピョコピョコ跳ねた。子供用の樹で作られたベットが、ガタガタ音を鳴らす。

二人は完全に無視をしていたのだが、ついにあの人が反応したようである。

「ガタガタうるさい！さっさと寝なさいっ何時だと思ってるっ」

子供部屋の扉を、ボタン、とキリアが開いた。アーシェとルキはすかさず狸寝入りをしたので、ぽつんとディノだけ睨まれる。

「おかーさん、おしっこー」

「はいはい」

キリアはベットに近付くと、ひょいとディノを抱え上げると、そのまま反転して扉に向かう。そして。

「あんた達も、さっさと寝なさい！」

ボタン、と扉を閉めた。

…狸寝入りはバレバレだったようである。

二人は顔を見合わせると、布団から素早く顔をだした。クスクスと忍び笑いをする。眠気は、どうやら今ので吹っ飛んでしまったよ

うだ。

ルキは立ち上がると、音をなるべくたてないように、ゆっくりベットの前にある窓を開けた。

ふわりと冷たい風がカーテンを押しやる。夜の光に照らされて、それは、踊る死霊のスカートのように揺らめいた。

アーシェはというと、ベッドの間から小さな熊の形をした木彫の箱をとりだした。パカリと熊を割ると、中からナッツを摘む。それを、外の窓枠に丁寧に並べてゆく。魔法の紋様でも、密かに象るように。

そして、窓は閉められた。

小さな夜の恐怖と、小さな夜の興奮の中、二人は布団の中にちぢこまる。視線は、窓の外。

二人は、息を殺して待った。

暫くすると、遠くの木々がわさわさと揺れる音がした。風ではない、生き物の出す、音。

ひゅん、と、それは華麗に風を切った。

森の風馬と呼ばれる、蝙蝠のような翼が生えた小さな羽リス。

羽リスは、窓枠に着陸すると、端から器用にナッツを拾い始めた。

この羽リスは、二人が毎晩、窓際にナッツを置いて、最近になって漸く来るようになった夜のお客である。

羽リスは遠慮なく、次から次へと頬袋にナッツを詰め込み、モソモソと口を動かした。最後の一個に手をのばした手は、だがナッツを胸に抱えるだけである。

「この子、九個が限界みたい」

アーシェの呟き。

「十、食べれたら区切りがいいのになあ」

ルキの呟き。

羽リスは、窓の側でそんな観察をされているとは露知らず、ひたすらガシガシとナッツを歯で削っていた。

ふと、再び遠くの木々がざわめいた。羽リスが、途端に痙攣するように立ち上がる。

「…あれ？仲間でも来たのかな？」

ルキは布団からノソリと出ると、羽リスに気付かれないよう注意を払いながら窓の外を見た。

羽リスは、震えていた。

そして、

突然、消えた。

居間で、ガアプとオルセが寝酒を組み交していた。

「…で、ジジさんに見覚えがあると…」

オルセの言葉に、静かにガアプが傾く。

「そうだ。何処かで会ったような気がするのだが…だが、思い出せん」

「剣には樹人はいませんし…」

「うむ。樹人は珍しい人種だ。街中か何処かで樹人を見掛けて、それでジジさんに会ったような気がするだけかな」

「…樹人は皆、似たような顔をしていますから…案外そうなのかもしれないね」

オルセは酒瓶からガアの盃に酒を注ぎながら、微笑んだ。

と、そこに、ドタドタという独特の足音と共に、ディノが駆け足で廊下から飛び出した。

「ディノ、まだ寝てないのか。早く寝なさい」

「おじーちゃん、まぜてゝえ！一緒にね、ごはんするっ」

「ディノ！」

ずい、現れたキリアに、ディノは軽々と担がれる。

「全く、目を離すとすぐだね、あんたは」

キリアの肩の上で、じたばたとディノは抵抗するものの、キリアには意味は無いようだ。

「はなしてゝずるいつ」

オルセは立ち上がると、キリアにぶらんと垂れ下がったディノの頭を撫でた。

「大人になったら一緒に飲みましょう。」

「くさいゝつやゝつ」

ディノは、酒臭いオルセの顔を両手で押しやると、鼻を摘んだ。思わず、その仕草に笑みが溢れる。

「ふふ、それじゃ、おやすみなさ………！？」

それは、あまりに突然の衝撃だった。

小屋が振動した。刹那の間を置かず響く、バリバリと何かが破壊される、雷に似た音。

「キャアアアア！！」

アーシェの、悲鳴――。

ガアプとオルセは立ち上がり、廊下に飛び出した。
そのまま、音の源へと土煙を蹴りながらひた走る。

「アーシエ、ルキッ!？」

——闇の中に、血の臭いが凝縮していた。

男が立っている。

だが、男はすでに死んでいた。頭がパツクリと割れ、中から破壊された脳がみえた。汚濁の黄色にぬめった目玉がふたつ、獯猛に光っている。

死霊。

それも街の人間の死体である。遠隔呪文により、操られているのか。

その体躯に生えた二本の太い腕が、がっちりとアーシエ、ルキを抱えこんでいる。

二人とも、気を失っているようで、ぐったりとしていた。

死霊は、ガアプとオルセに気付くと、素早く踵を返した。

「くっ…！先に行きますっ！」

オルセは叫ぶように言うと、子供部屋にぱくりと空いた穴から飛び出した。そのまま、死霊を追う。

「何があつたんですか…!？」

ディノを担いだキリアが、子供部屋をみて、はっと息を飲む。

「今、オルセが死霊を追い掛けていった」

「…死霊!？」

死霊とは、生命が死んだ後の、あつてはならない姿の事だ。

生命は死すると、魂が肉体を離れ星になり、天空で流転すること

で浄化し、生まれ変わる事が出来るとされている。

だが、生前の憎悪や怨恨や愛情が強すぎたり、魂操師こんそうしに魂を奪われたりすると、死霊と呼ばれるモノとなる。

前者の場合は、ただただ燃えるような負の感情に侵され生けるものに危害を加えようとする。

また、生への執着が底無し空腹を生み、なりふり構わず生けるものの肉体、そして魂まで食らうのだ。

だが、近付くと、大抵の生けるものは寒気を感じ存在に気付く。己の魂が、歪んだものの存在に警告を発するからだ。

後者の場合は、気付かない。魂そのものが術者に操られており、ただの糸引き人形のようなものだからだ。魂はそれに警告を発しないのだ。

だから人々は年の始めに、生者の守りと呼ばれる魔法陣を、街の周囲を練り歩き、かける。

それにより、死霊が街に入らないようにするのだ。魔法使いが正式にかける魔法ではないとはいえ、大勢で念をかけるので、効力は普通の魔法使いがかかる守護魔法よりもある。

「…そんなつまさか…」

——街の中に魂操師がいる。

しかも、魂操師は街の人間を殺し、術に使ったのだ。間違はなく、ただの人さらいでは無い。

——竜の血飲み子を狙っている——

「キリア、すぐにデイノをつれて、隣の山を越え、アルベルト平原に、風馬の元へ行きなさい」

「……なっ！」

「風馬は、鎮魂文化を持っている。そこなら安全な筈だ。二人を助けたした後、我々も向かう」

「そんなっ…私も」

——戦います。

そう言おうとして、キリアはその言葉を飲み込んだ。

騎士の、金獅子騎士団団長の男の目が、強くキリアを見つめていた。

ふと、キリアの頭に、あの言葉が浮かんた。

「剣と、失われた翼に誓いを」

神と騎士の、あの誓いの言葉が。

「…お前はデイノを守るのだ」

キリアは、その言葉に震えた。

忘れていた、感覚。自分は、騎士なのだという、紛れもない事実。それが、蘇った。

「はい…！」

キリアは心臓に右拳をあてて、凜と返答した。

何が起こったのか分からず、不安そうにしていたデイノが、途端に笑顔になる。そして、キリアの真似をした。

ガアプはそれをみやると、すぐに背にして、オルセの後を追う。

キリアもまた、すぐに行動をうつした。

居間に戻ると、床に片膝をつけ、敷かれた板を押し上げた。

「うわぁー秘密基地？お母さんすごいねえ」

「まあね」

地下へ続く石の階段。キリアは床板の扉を閉じて、駆けるように下った。何もない暗がり、ディノが怖がって胸に顔を埋める温もりが痛いほど感じられる。

…ああ、ここを本当に使う日が来るとは。

そこには、一頭のシンガがいた。

普段は、家の横に広がる畑を耕す時に使うシンガだった。よく、なぜヒルポスを使わないのかと言われたものだ。

全ては、この日の為に。

キリアは地下室の隅に積まれた藁を崩した。中から長い外套を二つと、大入りの革袋を取りだし、ディノの寝巻きの上に長外套を着せる。

「これからどこ行くの？」

「あんたの友達がいる所だよ」

「おともだち？」

不思議そうに眉をよせるディノを、シンガの鞍橋に乗せると、自身も跨った。

「よろしく頼むよ」

眠りを邪魔されて荒い鼻息をたてるシンガをなだめるように、その首を擦ると、ディノに腹から覆い被さるようにシンガに捕まる。そして、軽く尻を蹴った。

途端にシンガは暗闇を疾走した。ぐんぐんと風を切り裂き、視界がだんだん明るくなる。

月の光。

その周囲に今夜もまた、星となった魂たちが、円を描き、夜空をさ迷っていた。

これが、キリアとディノが騎士たちと暮らした、最後の夜となった。

月は雲に隠されて、辺りは闇が闇とおり重なり合い、虚ろな夜の植物の匂いをもしだしている。

その中に、僅かに血の芳香があった。

「くっ」

オルセは、アーシェとルキを担ぎ逃走する死体を懸命に追う。

森の茂る下り坂を、風を全身で切り裂くように疾駆する。木の葉や枝が、皮膚を弾くのも気にもとめずに。

だが、歯がゆさを感じるほどに、全く距離が縮まらない。

そればかりか、ぐんぐん開いているようだ。無理もない。相手は、操られた死体なのだ。

肉体が操られ、本来ある肉体の運動能力を越え、そればかりか限界を無視して動いているのである。

並大抵の早さではない。操られた死霊が最も敬遠される理由のひとつである。

死霊の割れた頭骸から滴った血が、宙を飛んでオルセの目に入る。陰もない漆黒では、つんとくる死の独特の臭いだけが頼りであった。

やがて、視界に僅かに星のような明かりをオルセは見た。伸びた葉樹の無数の手の間から、瞬き光る。

街だ。エドガーに向かっているのか。

何故だ？

考える余地は無い。ただ、追うのみか。

オルセは大地を蹴りあげる。

視界が一気に広がる。獣道を切り裂いて、ついに森を出た。そして、信じたくはない現実をみてしまった。

街の入り口。そこに、二体の竜の像の中央に並ぶように、十人はいるだろう死霊が、頭を揺らして立っていた。

一体、何人の街の人間を殺したんだ…！？

二人を担いだ死霊の足が、あらぬ方向に螺子曲がった。

そして無様にくずおれる。慣性のままに、アーシエとルキはまるで人形のように飛ばされ、それを死霊たちががちりと掴んだ。

しまった！

アーシエとルキを丸太でも運ぶように担いだ死霊達は、二手に分かれて、左右の通りに消えて行く。

左へは、二人を担いだ群れが、路地裏へと。

右は、よりによって、繁華街へと。

オルセは立ち止まり、左右を交互に見た。

…どうする！？

「右へ行け！」

背後から、ガアの勇ましい声が聞えた。弾かれるように、オル

セは右の通りへとひた走る。

そしてガアプは左へと、更なる暗闇へと消えて行つた…。

エドガーの街は活気に充ちていた。

通りには人と光が溢れ、歓声とも罵声とも取れる声が飛び交っていた。松明と人の体臭が充満し、絡み合いながら夜空に上っていく。

「さあ、安いよ！その兄さん、この剣はどうだっ！」

「いやいや、そんなものなど玩具だ、飴だ！こちらが最強の剣だよっ！」

商人達は競いながら客寄せをしている。今にも、暴動でも起きそうなほどの熱に、皆浮かされているようだ。

酒場からは、既に喧嘩する声まで歌姫の歌に乗せて、踊るように爆ていた。

音が、光が、人が。

安宿の二階の窓辺で、一人の娼婦が、細くしなやかな腕で、キセルを吹かして何もない夜の虚空を見上げていた。行為を終えた気だるそうな瞳で。

ふと、その瞳が、奇妙なものを見付けた。

「あれはあ、なあに？」

娼婦がキセルを空につきだした。その先を、娼婦の腰に手を回していた酔っぱらい男がみやる。

「なんだあ、男の尻でも見付けたかあ」

冗談まじりの酒くさい息を吐き出して、赤い鼻が雲に月を奪われた暗い空を向けられた。

「…はあ？」

…そこには、男が産まれてこの方、見たことも聞いたこともない

ものが、あつた。街の、中に。

男は、目をしばたいた。更に重い目をこすって、見つめた。

……山？

「なんだあ？」

男がほうけた声を出して、女と共に窓から体をのりだした時。突然、悲鳴が夜を切り裂いた。

「し、死霊だああ！！」

絹を切り裂くような悲鳴に、二人は山らしきものを一瞬で忘れ、東を見た。

人がまるで波を描くように次々と逃げて行く。繁華街は川にでもなつたかのような。

人が人を押し、押しへしあい、潰されながら、我先へと逃げる。

猟氣的な、パニック。

その波の端に、ばりばりと複数の死霊が、人間を生きたまま肉体を引き千切り、もて遊ぶように食らっている。

ふいに、死霊達は人間の肉片を体に絡ませながら再び走り出した。

そのつま先に、人々の混乱の渦で怪我をし、足をひきずり地に伏せながらも、懸命に逃げようとする一人の毛纏系の商人がいた。

獲物を狙う死した狂人達の目が光る。

商人は、怪物を目の前にして体をちぢこませ目を瞑った。おしまいだ。

長い毛で覆われた商人震える体軀に、血まみれの手が伸びる――
！。

ズンッ！

商人の耳に、そして街道に重たい音が、響いた。そして、

「早く逃げて下さい！」

商人が目をあけると、そこには一人の青年が立っていた。

先ほどまで商人が売っていた、剣が死霊の背中に塔のように生え、輝いている。

青年の勇気に震え立ち、商人は感謝の言葉を呟きながら、足を引きずり走り出した。それを商人仲間達が介抱する。

青年は「オルセ」は、それをみやると、死霊に向き直った。死霊の口に、潰れかかった眼球があつた。そして次の瞬間、果実の粒の如く、噛み砕かれる。

オルセは、切長のかなしげな目でそれをみやると、呟いた。

「すみません」

「斬ります。」

オルセは猛々しく叫ぶと、柄を持つ左手に力を込めた。

肉が裂ける音と骨が断たれる音が剣を共振させたかと思うと、刹那の間もおかず、死霊は切り裂かれた。

二手に分かれた体躯から肉体のあらゆる汚物が爆ぜる――。

それが、火蓋となった。

猛然と死霊が、オルセに突進する。

剣を横に振り切断し、更に心臓を突く。なぎ払う。

死霊がオルセの腕に噛みつく、否、かわす。

後退しつつ死霊の頭をかち割り、瞬間、踏み込んで背後に近付いていた死霊をかわす、首を斬る！

逃げ隠れ、武装し、或いは建物の窓から、人々は、青年の剣さばきを見た。

そして、口をあぐりと開けた。

人々には、まるで、舞いでも舞っているかのよう見えた。なんて華麗で、残虐な、剣士。

たまらず、窓から娼婦が声をあげた。

「……が、頑張つてえください……！」

そのひと声で、人々は怒濤の如く湧き出した。

「がんばれっそこだっ負けるなあ！」

「左右、左からも来てるぞっ」

「ぎゃー！後ろっ」

オルセは割れんばかりの応援や歓声さえ聞こえないかのように、冷静に斬り続けてゆく。

敵は、一度切ったとしても、魂が残れないほどに肉体を斬らなければ、胴体や足だけでもオルセに向かってくる。

かわし、蹴り、オルセは剣を振った。

オルセの剣に、次々と死霊は倒れていく。

そして、最後の、ひとり。

オルセは、血に塗みれた剣柄を強く握ると、突き上げるように心臓から喉、後頭部へと一気に切り裂いた！

―死霊が、小さくうめく。―

オルセは無言のまま、剣をひいた。死霊の傷口から血が吹き出し、オルセにかかる。

そして、死霊の体は糸の切れた操り人形のように、ごとんと、石畳に落下した。

風が強いのか、雲は漆黒の炎のように流れている。雲に隠されていた月が、ふいにその肌を露にした。

血しぶきに濡れたオルセと剣が、月光を寂しく反射させるのを、人々はいっしか言葉を忘れて見つめていた。

先ほどまであった割れんばかりの歓声が嘘のように。

最後の一人、死霊が、大量の血を噴き出しながら大地に崩れた時、最高潮に達していた筈の人々の熱気は、見る影もなく消え失せた。

何故なら、死霊が剣で無惨に貫かれた瞬間、人々には、オルセが自分達を救った英雄というよりも、自分達とは全く異質なものに見えたのだ。

石畳の道に転がる死霊は、ぴくりとも動かなくなった為に、すでにただの街の人間の死体に他ならなかった。少なくとも、人々にはそう見えていた。

そして、血だまりの上に立つ、自分達を救った筈の戦士が、まるで残虐で冷徹な、死神のように見えていた。

自分達を救った戦士に対する労りや感謝の言葉が、不思議と喉から出てこない。

まるで海よりも深い、心の奥底に沈んでしまったかのように。それほど非現実的に、彼は強すぎた。

オルセもまた、忘れかけていた自身の強さに呆然としていた。

ああ、自分は金の獅子だったのだ、と。

オルセは、自身が残酷に切り捨てた死霊達を見下ろした。黄色く濁った皮膚から除く、醜い茶色の肉が、どんどんすえた鉄の匂いを含んで赤すぎる真紅に染まる。

オルセは思わず、目を背けた。

心臓と肺が、せわしなく空気を欲する。全身が、粘土のように重い。

剣を握ったのは、恐ろしく久しい。

人を切ったのは、何年ぶりだろう。

私は何故こんなにも躊躇なく切れるのだ。何故こんなにも強いんだ。

何故、ガアプ様と、キリアと、子ども達と過ごした日々が頭にちらつくんだろう？

もう戻れない気がするのは何故だ？

ふと、オルセは手を見た。

その手は、血まみれだった。

「…ねえ死霊つてえ、どういう事お？」

窓から乗り出して、娼婦が隣に同じく乗り出す男に尋ねる。

「さあ、わっかんねー…あ。」
「なあに？」

途端に、男が青ざめ、窓から一気に離れた。

「逃げるぞ」

「ええ、だつてえ退治したよ」

娼婦は、頭を揺らして男に抱きついた。なんでえ帰らないでえ、としがみつく。男は蒼白のまま、窓の外を指差し、呟いた。

「山なんかじゃ、ない」

死霊達の、まるで遊びに興じる子どものような背を見失わぬよう、ガアプは狭い路地を駆ける。

今にも暗がりには足をとられてしまいそうになりながら、それでも交錯させる。

街の静脈を走るような、うねる道は、やがて石畳では無く、踏み固められた土に変貌していった。

更なる闇の外れへと、誘われているのか。

次第に両手に広がる建物が減少し、ついにはただの田畑と移る。

家々の密集地は、既に背後であった。

その頃に漸く、この道が何処に続いているのか、ガアプは悟った。

——悪趣味極まり無い——

そこは、墓地へ続く街道であった。

ひとつの竜の巨像へと道がのびており、道の横には小さい竜の石像が並んでいる。それよりいくばかりか大きい竜の像が、円を描き巨像を囲む。

巨像は、ガアの背丈の実に三倍以上はある。

エアドラドの多くの地域は、土葬でなく火葬である。

死した者は燃やされた後、この竜の巨像の下に集められ、巨像の下にある巨大な地下室に納められる。皆、ここで静かに眠る。

ふざけている。

ガアはついに、竜の像の円の中へと入った。

猛烈な風が天をめぐるっている。雲は漆黒の炎のように流れている。雲に隠されていた月が、ふいにその肌を露にした。

月光に照らされ、闇の中から巨像の前に立つ者の姿がくっきりと浮かぶ。

男だ。

黒衣に身を包み、定かではないがほくそえんでいるようだ。螺子曲がった猫背が、厚い布地に覆われていても分かる。

背後に、数十の死霊になった街人を従えており、街人の幾人かは槍や剣などの武器をぶらぶらと両手で揺らしている。

「何者だ」

男がにんまりと口を歪めると、茶色に汚れた歯が、ぬめぬめと月光を撥ねた。

「ガア、お前ガアだろう」

男はそう呟くと下品な笑声を出した。意外にも若々しい声質だが、それは喘息に似て、不快なものであった。

ガアは沈黙のまま、男の横に放置された子ども達を確認した。ぐったりとしてはいるものの、確かに息はしているようだ。

「…聞こえないのかぁ！お前ガアプだろぉー！この老いばれ騎士がよぉー！！」

男が、努声をあげる。どうやら、かなり沸点の低い男のようだ。しかもこの男は、ガアプが騎士だと知っている。

この男、一体…。考えを巡らせながら、ガアプは答えた。

「…そうだ。私の名はガアプという。」

その返事に、男は手を叩いた。

「ガアプ！やったぁ！ガアプ！」

そして、

「じゃあ死ね」

男の言葉に、首輪が外された飢えた犬のように死霊が放たれた。その牙は、勿論ガアプに向けられている――。

「むう…！」

ガアプは気合いを入れると、自ら死霊の荒波へと飛込んだ。

ガアプはまず、首に噛みつこうと顔を寄せた死霊の腹部を正拳突きし、吹き飛ばした。死霊の群れが、一気にその列を乱し、或いは崩れる。

ガアプは更に踏み込む。

今度は回し蹴りを行い、ガアプを囲んでいる死霊を弾き飛ばす。円を描き死霊が崩れる。

後ろに潜んでいた、武器を持った死霊達の刃が煌めく。

ガアプはその乱雑な打ち込みを一瞬でみきると、その刃と刃の間にスルリと入り込む。

剣を持った死霊の一人の手根骨を上から手刀で打つ。死霊の手から反動で落ちた剣を握ると、そのまま死霊を蹴る。

そして上腕に力を込め、叩き斬る！

「ああ〜？」

黒衣の男はうめくと、頭に触れた。フードのように男の顔を隠していたそれが、黒の両翼を広げた。それは、烏であった。

烏は男の頭から離れると、弧を描き男の周囲を飛び回りながらゲエゲエと鳴きわめく。

男は、烏の作り出す風の中で、がりがりとした乱暴に頭を掻きむしり、ぶちぶちと髪を抜き、じたんだを踏んだ。

「…あんだよつふざけやかっでああ…！」

男の苛立ちを剥き出しにする姿を、ガアプは死霊の肩と肩の間から見た。

と、光が突然に瞬いた。瞬時に、体を振り、かわす。

爆裂音。

ガアプが先程まで足をとめていた大地が輝き、次の瞬間吹き飛ぶ。

「魔法…」

厄介な相手だ。死霊を操り、しかも魔法まで使うとは。

だが、ガアプの脳裏には引っ掛かるものがあつた。

死霊を操る方法を知っているという事は、魔法の知識をある程度持った上で、更に独学か裏で学んでいるのだろう。

魔法を学んでいるのなら、魔法学校に属していた可能性がある。

魔法学校を落ちこぼれ、闇に手を染めたのか？

だが、死霊をこんなにも操る点を見ると、相当の使い手である。

成績がかなり優秀であつた筈だ。だが、男の様子や使役の仕方を見ると、魔法戦術を含む魔法の知識にたけているとはとてもではないが、思えない。

…そんな事よりも、男は何故「竜の血飲み子」そして「騎士ガアプ」を知っているのか。

「竜の血飲み子」を探す内に「名を失つた騎士の存在」そしてそれは「金獅子ガアプ」という事象にたどり着いたとでも言うのか？

この男が？そもそも何故、血飲み子を狙う？

そしてガアプは、気付いた。

——これは、組織的なものだ。

血飲み子を追つてガアプに辿り着いたのか、ガアプを追つて血飲み子に辿り着いたのか、それとも両者を追っていたのかは分からない。

だがどれにせよ、この広いエアドラドから、たった三年でこの男が血飲み子とガアプを見つけたとはとても考えられない。

ならば、この男は何者かが仕向けた下の人間かもしれない。また、ガアプをそもその狙いとしていたのだとしたら、一天三身の…多分、盾の、それも地位が高い人間が絡んでいるのだろう。

——なんて、厄介な——

「死ねよ、死ねよ、何で当たらないの？！」

男は魔法を弾きながら犬のようにわめき続けている。

男の放つ魔法は敵味方の焦点さえも乱雑なもので、男の魔法によ

り何体もの死霊がその体をえぐられてゆく。

無論、痛みを感じない死霊達は、魔法で腕や足といった体の一部が吹き飛んでも、ガアプにその牙を向ける。

ガアプは魔法弾の間を抜け、次々と死霊に剣を振るう。

その刃は、恐ろしく正確に死霊の首を撥ね、或いは心臓を突いていく。

だが、この緻密な動きが長く続かないだろう事を、ガアプは知っていた。

体が思うように動かない。そればかりか、重く感じた。

自分は剣の代わりに鍬を振るい過ぎたのだと、痛感していた。

だが、ここで終るわけにはいかない。諦めたら最後、ガアプのみならず血飲み子の命さえ危ういだろう。

ここで倒れるわけには、ゆかぬ……！！

「あんだよ、なんでだよ、ふざけんなよ……！」

ガアプが死なない事に、そして魔法が当たらない事に、黒衣の男は罵声をあげた。見境無く、次々と魔法を放つ。

男の頭上を、ギアアギアと烏が叫び飛び回っている。殺人を促すような、頭に響く、汚らしい、音。

ふと、ルキの体がびくんと痙攣した。気が付き始めたのだった。

薄目を開けて、小さくうめく。

そして、一気に目を覚ます。

「……あ、う……」

その小さな赤い瞳は、信じられぬ光景を映した。

わけもわからず、混乱した頭で、横に倒れるアーシェの肩を激し

く揺する。

「アーシェ！起きて！」

小さく寝起きのような声を出して、アーシェが瞳を開いた。
そして、直ぐ様、ルキに抱きつく。

「……！」

アーシェは恐怖に顔を引きつらせ、人垣の向こうのガアプを見た。
全身がガクガクと震える。疑問が頭を駆け回る。

おじいちゃん…何故剣を、振るっているの？

…どうして、人を殺しているの？

あなた方に、大切な事を、伝えなければなりません。

なあに、お母さん。

もうすぐ、ある御方が、この場所にいらっしやいます。

ある、御方？

よいですか、何があってもその方に付いてゆくのです。

その御方は、あなたたち二人を、導く者です。

導く、者？

ええ、その御方はあなたたちを守り、

愛して下さい。御方です――。

お母さん、

死んじゃうよ…。

おじいちゃんが、

「
…やだ。
」

ガアの背中を、容赦なく剣と槍が打ちつけ、切り裂いて、ゆく。

「
やだ。
」

その肉を、爪と歯で噛みつき、食らってゆく者が、いる。

「やだ。」

あかい、

あかいあかいあかいあかいあかい。

あかいあかいあかいあかいあかいあかい……！！

あかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかい……！！！！！！

「やだああああ！！！」

月が、輝く。

オルセは、煌めき乍ら刃から滴りおちる血を、ひとつだけ目にした。そして、頭を振った。

今は、呆然としている場合ではない。自身のほうけた頭を瞬時に冷ますと、踵を返す。

ガアプと血飲み子を守らなければ。それが彼の使命であり、騎士としてのわずかな誇りであり、生き甲斐なのだから。

が、その足は反転はしたものの、走り出すのをふいにやめた。

最初に、違和感があった。

暗い。先ほどまで月下にあった周囲が、何故か暗い。月が雲に隠れたのか？

だが、この妙な恐怖心はなんなのだ。

オルセはゆつくりと顔をあげた。人々もまた、オルセにならった。騎士も、救助者も、傍観者も、野次馬も、その場にいた誰もが、衝撃を受けた。

「あなたのお相手も、ですか？」

オルセは自身の心臓が肋骨を叩くのではないかと思った。化け物。

そう、化け物、あまりにも巨大な。

闇市に並ぶどのテントより高く、どの建物よりも高いそれは、首

が無い巨大な赤ん坊を彷彿させるような形をしていた。

それは、人間の肉体やヒルポスやテントや車や生活家具——まるでひとつの隊商を、巨人が土と水で混ぜて泥人形にでもしたようだった。その表面には、キラキラと何かが光を反射している。

人々は、夢だと思い込むことすら許されなかった。

次の瞬間、それは、路地からぬるりとい出、最初の一步を踏みだした。

激震。

「逃げる——！！」

誰が叫んだのかは分からなかった。

人々は巢をあばかれた蟻のように一気にバラバラに散り、走り出す。大移動の一部は、オルセの横を濁流の如く駆ける。

奔流の中で、彼は剣を握りしめた。

「仕方ありませんね……」

神竜ほどではないが、あまりにも敵は大きい。しかもあたりは人間が住む建物が囲む。

このような敵には、広範囲一点集中型の魔法で、一気に叩くのが最も良い方法だが、あいにくキリアはいない。

細かく切り刻み続けるのみか。

一体どれほど時間がかかる？

こうしている間に、ガアプと血飲み子に何かあったら？

だが、迷っている暇はない。

「本当に仕方ない……！」

オルセは電光石火の早さで大地をかけると、テントを台にして、

建物の上へと飛翔した。

まずは一撃。右腕の先を切り落とす。

怪物がオルセに気付き、ガチャガチャと音を立て右腕を振る。瞬時に蹴りあげ、それをかわし、左腕の先も切り落とす。

怪物が腕を振る。

かわす、右、左、右――！

オルセは冷静に巨体を切り刻む。

本体から離れた物体が、轟音をたてて地面に落ち、大地をひしゃげてゆく。

素早く回避するオルセの残像を追う粘土の巨人は、ついに両腕を振り回そうとした。

だが、時既に遅く、腕は振り回せる長さでは無かった。

思ったより早く終りそうですね…。

オルセは、巨人の腹を蹴り後退、そのまま着地した。巨人は、上体をぐるぐる回している。

巨人は、目も、耳も無い、所詮は土人形のようなものである。正体はよく掴めないが、このままいけば順調に巨人を、ただの瓦礫と出来そうだ。

すぐに終らせる、そう思い再びオルセは大地を蹴った。

が、その動きを何者かが邪魔をした。

「……………」

突然オルセの体に、前触れ無く激痛が襲った。

痛みを追い、オルセは背後を見た。

——死霊！？

目線の先に、先程切り刻んだ筈の死霊達が、それぞれ武器を手にしていた。

死霊のひとりの槍が、深くオルセの背中を突き刺している。その刃は貫通し、わずかに自身の腹から銀色が光っているのを、オルセは見た。

しまった、とオルセは自身の浅はかさを恨んだ。

だが、同時に疑問が浮かぶ。確かに先程、魂操さえ出来ぬ程に斬った筈だった。何故、切り刻んだ筈の肉片が再び接合し、動いているのか。

頭を巡らせ、強烈な痛みにも耐えながらも、オルセは背後に剣を振るった。

死霊が後退し、乱暴にオルセの槍が引き抜かれる。血が大量に吹き出す。

「……」

片手で燃えるように痛みが暴れる傷口を押さえながら、死霊を分断してゆく。

足に力が入らない。心臓と体が躍動するままに、出血も止まらない。体が燃焼するに熱い。

武器を持ち攻撃を繰り返す死霊、激しすぎる痛み、刻々と過ぎる時間への焦燥。そして再び、オルセは油断した。

爆音。

足が大地から離れ、体が吹き飛ぶ。そしてその儘、オルセは街の外壁に叩き付けられる！

ガラガラと崩れた外壁が、オルセに滝の如く降りかかった。砂埃が爆風と共に舞い、オルセを食らう。

身体中が麻痺し、身体中が痛み、声を荒げた。

「ぐう…あ、…っは…」

オルセは何度か咳き込み、次に血を吐き出した。どうやら、口内を切ったらしい。油断して、焦って…ざまあない。

先程の巨人が、両腕をブラブラと回している。あの腕に叩かれたらしい。酷い衝撃だ。

「…可愛くないなあ」

そう呟くと、オルセは横に疾駆した。

第二打。

再び、砂塵と瓦礫が舞う。

最悪な攻撃のふたつめを避けて、オルセはひた走った。

痛みで頭は脳髓まで悲鳴をあげているようで、全身は鉛をまとったように重い。肉体が大地に降りたがっているようだ。

慟哭する体を意思でねじ伏せて、無理矢理に剣を振るう。

先程斬った場所を的確に打つ。玩具の如く、死霊の首が跳ねる、が。

オルセは愕然とした。感覚が殆んどなかったのだ、つまり、再生したのではない、確実に斬れているのだ。

勝ち目は、あるのか？

絶望が先程斬った死霊の首を瞬時に繋げ、オルセに牙をむく。オルセは、赤く染まり始めた視界の中でそれを専断する。

が、それで再び隙をみせる事となった。
瞬間、ぴたりとオルセの体は停止した。

「…な！」

体に、糸のようなものが絡み付いている。それはどんどん数を増やし、肥大してゆく。

抵抗するものの、その行為は糸の絡まりを加速させるだけであった。

バランスを崩し、ついにオルセは、受け身も出来ず転倒した。
無防備をさらし、オルセは見た。

糸が、巨人の体から無数に吹き出しているのを。
そして今まさに、オルセに向かって巨人が両腕を降り下ろす――

――！

ドンッ！

大地に物質がぶつかり、碎かれる音が、響く。
だがそれは、オルセの肉体が破壊された音ではなかった。

「助太刀いたします」

白い長外套がはためく。

一人の青年が、オルセの目の前に槍を持ち立っていた。
槍についた竜の杖の紋に、彼が何者かオルセには瞬時に分かった。

――聖園護衛隊！？

刹那、するりとオルセの体が軽くなった。気付くと、横にも同じ装備の青年。

「その身を縛りし悪魔の手綱、我が力に解せよ、締結の焼失！」

青年の呪文に、オルセに絡まった糸が、熔融された鉄のように光り、綻んだ。

「…器の癒し！」

次に発動された聖紋で、オルセの傷が塞がり、瞬時に肉体が回復される。その動きは、金騎士時代に聞いていた噂以上に俊敏で適切だった。

「あ、ありがとうございます。あなたがたは…、何故？」

オルセは立ち上がると、再び剣を強く握り、敵を牽制しながら問うた。

「私の名前はカツキユ、あちらはスイク。我々の主が今、呪文を詠唱しております。それまで敵を押さえましょう。…その前に」

そう呟くと、カツキユの全身が七色に輝き始めた。

スイクの体も、同じく。そして、信じられない変貌を遂げた。

「…それでは、行きます！」

それは、成人に満たない少女だった。

巨人の背に、ひとつの半円形魔法障壁が築かれていた。

その中に、セリスとジジはいた。

セリスは巨人と死霊、そしてそれらと懸命に戦う一人の騎士と、二人の少女の様子を冷静に見つめている。

一方、ジジは、早鐘のように打ち付ける心臓を押さえながら、一心に呪文を呟き、羅列していく。

その指に、輝く石を持つ指輪があつた。

石が放つ高貴な紫色の光線は、緩やかに魔法陣と姿を変えながら、ジジを中心にみるみる内に肥大してゆく。

その指輪は、街の異変に気付き此処に来る途中に、セリスが差し出したものであつた。

何故、これを？とジジは驚きと共に尋ねた。するとセリスは、こう言い放つたのだつた。

——これは、貴方の命です——

セリスの言葉は、全くその通りであつた。

もしも自分が、聖王となるならば。そう、イエズガルドの名を受け継ぐのならば。

ジジの脳裏に、前聖王であり既に故人のシェイダの姿が。

そして、彼等の姿が浮かんだ。

なんとという皮肉だろうか。

まさか自分が、この力を使う日がくるとはのう……。不思議じゃないか、師・イエズガルドよ…。

「てえいつ！」

カツキユが槍を振り回し死霊の武器を弾いてゆく。

牛系の獣人特有の二対の太い角が生えたその姿は、まるで気高い自然の王者のようだ。

一方、一見カツキユとは対象的に穏やかな様相の羊系獣人スイクは、その可愛い風貌とは裏腹に、堂々と巨人の体を蜂のように突き刺している。

若い女性ではあるが、二人はなかなかの腕前のようなのである。

オルセは、巨人から放たれる糸を回避し、或いは次々とたたつ切る。

「しかし、この糸はなんなんでしょうか、ね!？」

「肉食系魔虫です」

「……そういう事ですか。」

スイクの返答に漸くオルセは、埃を被った海馬から記憶を弾き出した。敵は死霊だという、その思い込みが、全てを暗く閉ざしていたのだ。

肉食系魔虫の中には、綿のように柔らかく、鉄のように固い糸を吐き出す生き物がいる。

その糸で生き物を絞め殺し、食べるのだ。

また更にその中には、生き物に寄生して殺した後、その生き物の全身に糸をはり、操るものがある。

そうして、安全で温かい場所に移動し、死体に卵をうえつけて、命を繋ぐという。

つまり、死霊を操っていたのは虫なのだ。

だからこそ、斬っても斬っても、再生して見える。正確には、糸で繋いでいるだけなのだ。

――敵は人の魂を操っているのではない、虫の魂を操っているのだ――

それでは、ガアプがオルセと同じ状況だとしたら、まず勝ち目はない。

ガアプも金獅子団長だった事から、多少の魔法を使える。

だが、この怪物達は、多少の魔法で倒せるようなものではない。その上、ガアプは敵が虫を操っているとは知らない。明らかに、不

利である。

焦りの中、オルセは円形保護魔法陣で術を唱える者をチラリと見やった。

その姿にオルセは先程、目を疑ったものだ。まさか、彼が聖園に關係するものとは…。

ガアプ様はあの人に見覚えがあるようだった。聖園の上位階級者なら、それは理解できた。

様々な謎や疑問が、頭を巡る。

だが、考えはまとまらない。どの仮説も仮説の域をこえる事はない。

ジジ達は味方であるという事さえ確証はない。だが今は、彼等の力を借りるしか道はない。

オルセは敵が魔法陣に近付かないよう、牽制と攻撃を加える。力ツキユとスイクもまた、それに習う。

オルセには、この攻防が酷く長く感じられた。

ジジもまた、魔法詠唱の長さに痺を切らし始めていた。

なんという長さ、なんという精密さ、難解さ。

また、唇から呪文がこぼれおちるほどに、体も重くなつてゆく。

体力がどんどん削られてゆく、おぞましい感覚。それが、精神をもそぎおとしてゆくようだ。死に近づく恐怖とは、このようなものを指すのかもしれない。

「…我、光の殉教者。我、闇の殉教者。」

ジジの言の葉に、音律と周波紋とともに、神羅万象に絡み付いている魔法流が、次々と影響されてゆく。

「東西南北から出でる、認識への包括、そして知識への愛撫。」

数々の反応が、パズルのように組み取られ、世界が結合してゆく。

「導くものよ、輝ける守護者よ、涅槃の森から覚醒せよ……！」

ジジはその石を掲げた。

「出でよ！魔聖霊・イエズガルド……！」

瞬間、ジジの周囲の光が、爆裂した。

「な！」

オルセは、強烈な光に思わず目を瞑った。それでも、瞼の薄皮を貫くそれは、一切弱まる事無く、瞬き、彼を包んだ。この世の全ての可視光線が膨張するかのように。

それは、どこまでも四散し、やがて呪詛となり始めた。

幾何学模様の光の束が、雪崩のように大地を埋め尽くす。

巨大な魔法力がけたたましく世界を揺らす。

やがてそれらは、収束して、見慣れた形を築いてゆく。

「……ひ、人？」

光が漸く元の形に戻ったのを合図に、オルセは目を見開いた。

「「はあ……い、こんにちは」」

宙に、先ほどまでいなかった筈の巨大な男性がひとり、浮かんでいた。いや、正確には、ふたり。

「……これは？」

オルセはそのあまりにも奇怪な形に呆然とした。四本の足にほっそりとした肩からふたつに分かれて、顔がよきりと生えている。

「魔聖霊、イエズガルド様です。」

カツキユがいかにも感動をしているような様子で、イエズガルドを見上げる。その脇に立っていたスイクが洩惚を露に「聖典の通り麗しい御姿ですわ…」とやけに艶っぽく呟いた。

「…はあ、麗しい、ですか…」

オルセは、紫の長外套に半裸を隠したそれを仰面する。彼女が言う麗しいポイントがイマイチ掴めない。

――魔聖霊――

徳が高く、強い魔法力・聖なる力を持った人物の魂が封印された宝石を魔聖石、封印された偉人を魔聖霊と呼ぶ。その程度は、一般常識だ。

だが、まさか、イエズガルドが魔聖霊だとは…。しかも、奇形？…と、イエズガルドのふたつの首がオルセに傾いた。

「あらあ、タイプだわ♪」

「師は…全っ然お変わりが無いようで」

足元にぼつねんと佇むジジに気づき、それが同時に毒づいた。

「やだわあ、なにアンタ、ジジ？ちよっと見ない間に随分枯れちゃったのねえ、なに？今、冬？」

ジジとセリスは苦々しい顔で小さくため息をつく。

「魔聖霊イエズガルドよ…師よ、実に30年ぶりじゃ。…まあ、師を呼んだ所為でまた100年は年をとったような気がするがのう。」

「そう、今度は貴方が聖王なのね…。」

「いやあね、因果だわ」

右の顔と左の顔、同じ顔が全く別のことを同時に話す。

「で、お相手はあの子？」

「やだあ、結構素敵な子じゃない」

「やあよ、なんだか金獅子野郎を思い出すわ、あの構え」

「やん、騎士なのね！」

「金獅子は騎士じゃないわよ、騎士オタク糞野郎でしょ」

「あの超絶救済不能馬鹿と騎士サマは違うわよ、ああ、ホントいいわ」

四つつの目に捕らえられて、思わずオルセは後ずさる。何だか、妙な身の危険を感じた。

「違う違う、あっちじゃ、あのでかいのと、死霊じゃあ、見りゃわかるじゃろつがあ。」

その会話を黙って聞いていたジジがついに声をあげた。痩せほそりかわいたジジの指先が、巨人と死霊をズバリと差ししめす。

「そこが分からないのが」

「私たちなのよね」

イエズガルドは、ぶらぶらと上体を動かす巨人と死霊を交互に見やると、鼻で笑った。

「…蟲ね」

イエズガルドは即答すると、四本の腕をするりと真横に伸ばした。

「「消えなさい」」

刹那。

突然に、雷撃が空気を切り裂いた。

光線が膨張し、飛散する。

猛烈な火柱が直立し、激しい熱風を噴出する。

爆裂音が、嵐のように街道を突っ切る——！！

…それは、あまりにも一瞬の出来事であった。

「…な…」

次の瞬間、オルセ、カツキュ、スイクは、自身の目を疑い、愕然とした。

先程いた筈の巨人も、死霊もそこにはいなかった。

ただ、彼等のいた場所には、円形の小さな影のような、存在と焼失の結果だけが大地を焦がしていた。

「…炎系高度魔法？雷と組み合わせ…？詠唱もなく？」

カツキュが眉間に皺を寄せて、その現実を口にした。

ゾツとする。なんて強大な力なのか。

これが、魔聖霊――。

オルセは、イエズガルドを見上げた。全くもって、平然としている。だが、

「聖王！」

セリスが、ジジの体を支えている。ジジの顔は、すっかり青ざめている。

「…ほんに、容赦ないのう。」

ジジは咳き込みながらイエズガルドを睨んだ。

イエズガルドは遠くを眺めてジジを無視している。どうやら、魔聖霊の魔法の付加は、そのまま魔聖霊を召喚したものにかかるようだ。

オルセはジジに歩み寄ると、すぐさま剣を下ろし膝をつき、躊躇なく額衝いた。

「聖王様。お力添え、まことにありがとうございます。何卒、様々な無礼をお許し下さい」

オルセは、頬が熱くなるのを感じた。

まさか聖王だったとは。

知らなかったとはいえ、ジジをただのモグリの魔法使いの老人だと思い接していた事に、オルセは青ざめ、恥じた。

なんという失態を犯してきたのか。

「顔をあげては下さいませんか。わたしはただの老いぼれですじゃ」
ジジが酷く困ったような声を出した。それをセリスが直す。

「なりません。貴方はイエズガルドを召喚いたしました。貴方は既に聖王です」

それは明らかに聖園管理人の戒めの言葉だった。ジジはうつ向き、溜め息を噛み殺した。

…と、遠くの景色を傍観していたイエズガルドが、ふいに言葉を吐いた。

「アンタ達、そんな形式じみたお遊戯やってる場合じゃないんじゃないんじやなくて」

「アレを見なさい」

イエズガルドの言葉に、全員が彼等の視線の先を見た。

街の外れの墓地。

オルセは、身体中の血が地獄の底に沈められたように感じた。

そこには、誇り高き竜の巨像が、赤く燃えていた。

ガアの背中に、蟻のように死霊が群がる。

死霊達はガアの体を機械的に切り刻み、或いはむさぼる。

それを、ガアは必死に耐えていた。

ガアの胸の下に震える子ども達の周囲を、血だまりが侵食してゆく。

黒衣の男は、ガアの懸命な血飲み子への愛に、腹を抱えて笑った。

「……あはははは！馬鹿！すっげー馬鹿！面白いつすげーマジ面白いよ！」

ガアは無言に、ただ子ども達を守る。それしか、彼には方法がなかった。

男は、哄笑にむせながら、ガアにゆっくり近付いく。男が歩み出すと、途端に死霊達の動きがピタリと止んだ。

「……微笑みをありがとう、おじいちゃん」

男は巧笑を柔らかに繕いながら、ガアの後頭部に靴底を下ろす。そしてそのまま、蹴仆した。

ガアの額が、鈍い音をたてて大地にめり込む。男は更に、ぐりぐりと踵を押し付ける。

「君達、素敵なおじいちゃんを持てて良かったね……」

勝利に陶醉しながら、男は語りかけた。子ども達の目が、ルビーのように輝いている。

男はその色に興奮を覚えた。それほどまでに、それは純粹で無垢で、血のように赤かった。汚してやりたい。壊してやりたい。凌辱してやりたい。もっともっと。

「……でもね」

男は、腰から短剣をひいた。女の白眼のような鈍い光をたたえる。「もう、おじいちゃん」

片手に持ちあげる。そして、

「…殺すから」

振り下ろす——、が。

おかしな事に、感覚が、なかった。

「あ？」

瞬間、男の体が吹き飛んだ！

まるで巨人にでも弾かれたかのように無様に宙を飛んで、そのまま受け身も出来ず落下する——！

「ぎゃっ」

蛙が潰されたような声を出して、男は石畳の地面に強かに叩き付けられる。

「…うう」

身体中、どこもかしこもズキズキと痛む。

何故だ？

どうしてだ？

何があっただ？

男は、動かない体に鞭打って、僅かに体を起こした。そして、目玉に入った景色に驚愕した。

世界が、ぐにぐにと歪んでいる。

色彩が境を失い、渦を描きながら混濁している。

まるで、断末魔のような声が、上から下からも横からも聞こえる。周囲を万の馬が駆け回っているような激震。

重力が体の中央から派生しているような、無茶苦茶な感覚。異世界だ。

これは、魔界だ。

「あかい」

幼い、声だ。

「あかい、あかい」

子どもだ。子どもが二人、宙に浮いている。…違う！違う、違う！

——竜だ！！

そう、男の目の前には、竜がいた。

その竜は、全くもってごく普通の人間のヒュームの形をしている。だが、その小さな体躯は宙に浮いており、男の身長と同じくらいの高さに、彼らの赤い視線は存在していた。そして驚くべきことに、彼らには通常のヒュームには存在しない「翼」があった。

右の肩甲骨から白い鳩のような翼を3、左の肩甲骨から黒い蝙蝠のような翼を3。計6つつの、ツタのような血管を這わせた、血みどろの翼を。

空中に足を揺らしながら、二人は感じていた。

怒りが奔流のように動脈を、殺意が瀑泉のように静脈を流れていくのを。

強烈な力が底もなく生まれてくるのを、二人は感じていた。

肉体の隅々が、どこかしこも電気を放っているかのように痺れている。

皮膚から下の全てがマグマのような熱を発しているかのように、熱い。

頭蓋は中身を失ったかのようにクラクラしている。
心臓ばかり生き物のように継続的に跳ねている。

二人は、自分たちが今一体何をしているのか分からなかった。
そればかりか、何処にいるのかさえ明確ではない。
ただ、烈火のような憎しみだけが、敵を殺せと体中を蠢いている。
そして何故か、とても悲しいような…。

二人が、ぐったりとうつ伏せになったガアプを見下ろす。

ガアプは、泣いていた。黄色く濁った目玉から目尻の皺、白髪まじりの髪へと、涙がうつすら線を描いている。

「…痛いのか？」

「…苦しいのか？」

二人の問掛けに答える事も出来ず、ガアプの虹彩はただただ二人を映している。ふと、瞳の中の子ども達が優しく微笑んだ。

アーシエが、小さな小さな手を広げ天に掲げ、呟いた。

「治してあげる」

細くしなやかな腕に、輝く紋様が走るように現れる。そして、ゆつくりと放出される。

蛍の光。

あまりにも小さな、眩い光たち。

それが、たちまち膨張し、傷付いたガアプを抱擁するように包み込んだ。

みるみる内に、ガアの外傷が塞がってゆく。まるで、傷などついた事がなかったかのように。

…それは、あまりにも高度な聖なる力だった。

ガアが回復したのを確認すると、二人はくるりと男に向き直る。

瞬間、二人に火の玉が襲いかかった。

男が体を無理矢理動かし、放った魔法弾。それは爆炎となり、二人を包んだ。

「化け物が…！」

男は、卑下た笑みを浮かべた。だが、それは一瞬にして、男の顔から失われた。

「あかい」

二人は、自分の唇から小さく零れ落ちるその言葉に気づいていなかった。

「あかい、あかい」

柔らかくて幼く鈴の音のような可愛らしい声は、本質を剥き出しにしているかのように、男の恐怖心を掻き立てた。

「なんだよ、…どうなってるんだよ！」

子ども達は無傷だった。黒焦げになる筈の皮膚は、艶やかで健康的だった。

子ども達はただ、男を見下すように見つめていた。

男は、必死で目の前にある分けの分からない現実から逃れようとした。

だが、二人から、そして周囲から発せられる正体の分からない威圧感が、男の肉体を押さえつけていた。

何故、自分の魔法が効かないのか、意味が分からない。
何故、体が縛られているかのように動かないのか、理解が出来ない。

死の恐怖が、男の胸を渦巻く。
殺される。殺される！

逃げなければ、逃げなければ、殺される！

男は、懸命に意識を集中した。呼応するように、死霊達が動き出し、子ども達に牙を向ける。
「いいから死ねよ……！」
が。

瞬間、死霊は次々と、破裂した。
正確には、水溜まりに飛込んだような軽い水音をたてて、挽き肉と化した。そしてそのまま、肉と血は炎上した。

後には、灰も見えなかった。

「ひいやああああ……！」
無茶苦茶な力の差だった。

「……こんな話は聞いちゃいない……！……こんな話は……！！」

これが竜の血飲み子というもののなのか。これが竜の力というものの
なのか。
これが。

「こんなの、俺は聞いてないぞ……!!」

男は、炎系魔法を連続で放った。だがそれは、子ども達に全く当たらず、横にそれてゆく。

「聞いてない聞いてない聞いてない!!!」

詠唱もせず、魔法を放つ。その為に、内臓に魔法が直接影響し、更に魔法陣が全身を焼く。魔法負荷が男の肉体を体の内から蝕んでゆく。

男は口から血を吐き出した。だが、魔法の連発をやめなかったが。

「……ああ!？」

突然、魔法生成が出来なくなった。

「……何でだ?何でだ!」

男は辺りを見渡し、ハツとした。世界を埋めつくしている筈の、魔法の流れが、男から逃げるように消えていた。

「無駄だよ。世界は僕たちの味方だから……」

いつの間にか、男の眼前にルキがいた。言葉は、冷酷な響きに染まっていた。

「誰に命ぜられたの……」

「言っ!言っから殺さないでくれ!」

ルキが微笑む。男は、ほっと胸を撫で下ろし、言葉を紡いだ。

男は必死にまくしたてた。

「酒場で俺に薬を売ってくれたヤツだ!名前は知らない!知らないんだ、本当だ!老騎士のガアプてか言うジジイ殺して血飲み子を奪えと言われた!」

ルキが男に冷静に問う。

「…この計画は自分で図ったの？」

「違う！そいつが全部！俺が魂を操れるつつてたら計画を持ってきたんだ！金も！俺は本当はただの薬中の酒飲みなんだ！俺は悪くないんだ！あいつが全部悪いんだよ、信じてくれ！」

男は懸命に懇願した。

「…そう、じゃあ、その人の名前は？」

「…知らない！本当だ！信じてくれ！殺さないでくれ！俺は知らないんだ！」

「分かった…」

ルキがにっこりと微笑んだ。

男が泣きじゃくりながら、ルキを見上げた。肺をひきつらせて、ルキに感謝をのべる。

「…ありが…」

「お前が悪い」

男は青ざめ、それを見た。

ルキの頭上に、巨大な魔法陣が形成されていた。

ルキがそれに、手を触れた。

そして、男に焦点を合わせ…

「ぎゃあああああああ！！！！」

男の叫声が辺りに共鳴する――。

……。

……いつの間にか、世界は通常に戻っていた。既に、異世界はなかった。

先ほどまでの、ごく普通の共同墓地。

空は朝が近いのか、青みかかっている。その青い天を照らすかのように……中央にそびえる竜の巨像が、火柱と化していた。

「……いけない」

ルキは、信じられないといった表情を浮かべて、その感触を感じていた。

「……お前達は、手を汚してはいけない……」

ルキを、背後から抱き締める者がいた。その事実が、ルキの魔法射程をずらした。

「……お前達は、そんな事をしてはならない……」

すまない。

「そんな事をする為に、お前達は生かされているのではない」

すまない。

「そんな事をする為に、お前達は生きているんじゃないんだよ」

お前たちにそんな選択を与えて、なにより……。

お前たちを、守れなくて――…

「お母さん…？」

ルキは自分を止めた人物を見つめた。

それは、ガアプだった。

ガアプは、泣いていた。

それだけで、ルキの怒りをおさめるのには、それだけで、十分だった。

――あなた方を守り――

――愛して下さる御方です――

「…『じゅめんなち』」

ルキは瞬時に、姿を変えた。翼を失い、打ち落とされた鳥のように、ガアプの胸に飛び込んだ。
アーシェもまた、同じだった。

二人は、ガアプの温もりを感じながら、心臓の音を聞いた。ガアプは二人を、ただ抱き寄せた。

ただ強く、抱き締めた。

「…はあ、はあ」

黒衣の男は、命をとり止めた事に驚きながら荒い息を吐いた。そして、ゆっくりとよろめき立った。

「…クズが！クズが！！」

男は三人に罵声を浴びせながら、もつれる足を動かした。

「…クズが！クソ野郎どもが！死んじまえ、バカが！！ふははは、あは、あはは…」

と、男の朦朧とした頭が、何かにぶつかった。

「…馬鹿は貴方でしょう」

男は、ひっと息を飲み込んだ。眼前には、街道に追いやった筈のオルセが立っていた。

「…あ、ああ…」

オルセはたじろぐ男の肩を掴んだ。

「馬鹿はアンタじゃないかっ！！」

オルセが拳を挙げようとするのを、カッキュとスイクが寸前でと

める。

「この男は、我々にお任せ下さいませ。」

スイクがオルセをなだめすかすように言うと、直ぐ様カツキユが男を魔法で緊縛した。

「お前を杖にかける。覚悟するんだな」

杖——それは、聖園を舞台とした最高裁判の事だ。

男はそれを聞くと、うなだれた。

「…薬を使っているようですね。大分混乱しています」

セリスはカツキユの報告を聞き、ジジをみやった。

「いかほどに？」

ジジは、暫し考えた後に、オルセに問うた。

「…ルキ、アーシェ…彼等は竜の血飲み子じゃな。ディノもかのう。そうじゃな、金獅子・オルセ」

竜の血飲み子、という言葉に、スイクとカツキユ、セリスに動揺が走る。

オルセの顔が青ざめ、慎重に返す。

「はい。ですが、この事は公にはならさないで頂きたい…お願い致します」

「レマの命令で動いとったのじゃろう？」

ジジの言及に、オルセが押し黙る。そして、暫く思考を巡らせると、観念したように頷いた。

「…ふうむ」

数々の疑問が、ジジの中でぐちゃぐちゃと泡を立てて渦巻く。思考が、まとまらない。

…まずは皇帝であるレマに、この事を報告しなければ。早急に。

「聖園管理人セリス、そして聖園の守り人よ。この事は最重要秘密として処理する。今後、この事を口外する事を禁ずる。全ての処理・対処は、皇帝、および私の判断によるものとする」

「はっ！」

聖王の絶対命令に、三人は凜として答えた。

火をつけられた家畜のふんが、僅かに火をたたえて燃えながら、疲れたアーシエの足を癒す。

「私とルキは、魔法や力を使った事を殆んど覚えていません。ただ、無意識に使って…。」

アーシエは、うつ向きながら続ける。記憶を辿る。

「私とルキは、ビンセントジジ聖王の保護に置かれる事になりました。私は聖園に、ルキは騎士学校に入学しました…」

沈黙。

アーシエは、自身が出そうとしている次の言葉に、緊張していた。伝えるべきか、否か、…その答えは明らかなものだった。

「お父さんとお祖父ちゃんは…」

迷う、だが。

意を、決する。

「…この国から出ていき、今は行方が知れません」

それは、

それは、彼等の突然の決断だった。

理由は、アーシエもルキも、聖王も分らない。彼等は、誰にも言わずに、忽然と消えたのだ。

かわりに「国を出る事をお許しください」とだけ書かれた手紙があった。手紙以外は、なかった。それだけ、だった。

ガアプとオルセは、騎士として名を捨てていた。だから、聖園や騎士学校のある帝都にいる事を、自分達が許さなかったのかもしれない。

また、彼等は彼等の力が足りない事を、しっていた。アーシエとルキを自分達は守れない、だが聖王ならば、守れる。

そしてその聖王に、神竜の事を口にするのだけは避けたかったのかもしれない。それは国の根本的なものを揺るがすことになる。知られる前に、消え去る決意をしたのかも、しれない。

どちらにせよ、彼等に、既に母国の未練はなかったのだろう。

そして、消えた。

アーシエとルキにさえ何もいわず、何ひとつ伝えず、二人は消えてしまった。

さようなら、とさえも、口にせずに。

「…そうか、そんな事が…」

キリアは、かぼそい声でそう呟くと、その引き締まった遊牧民の――細く感じてしまう、だが変わらずに暖かい――腕で、アーシエをか抱いた。

「大変だったね」

アーシエは、顔を赤らめて、そして涙が落ちぬよう努力をしていた。長い年月が彼女を、キリアの知らぬ間に大人にしていたが、それは寂しい事ではなく、寧ろキリアにとって、なんとも感動的であった。

親として…キリアは、アーシエの全てを、受け入れようとしていた。

だが、次に告げられた言葉には、衝撃を隠せなかった。

「私、月に行きます」

耳を疑い、ゆっくりとアーシェと抱擁から体を離し、目を合わせ
る。

子どもの頃にはなかった、研ぎたての刃の切っ先のような強い輝
きが、その目にはあった。

「世界中を巡り、月に行く方法を探して、私は、月の都ルシファン
に行きます」

決意と、強い意思の光。

「私は、月の神殿に行き、必ず、聖なる祈り子から聖人になります」
アーシェは、わずかに震えていた。

「何を言っているんだい？聖人には、帝都の神殿で祈っても、なれ
るじゃないか」

「どうしても、月で祈りたいの。月でなければ、意味がないの」
即答だった。

確かに、月は特別な場所だ。

かつて存在したという、ドラグノアの対の大地、ドラグフレア。

ドラグフレアは、大戦により、破壊されたという。それ故に、大
地の殆んどはなくなった。

大戦で生き残った者達は、自身の愚かさを忘れない為に、自分達
の文明の全てを置いて、ドラグノアに降りた。

そして、見上げるだけとなったドラグフレアの欠片の大地を、月
の都ルシファンと呼んだ。

だが、だがそれは…昔話だ。ただの、伝説だ。

「…無理だよ、行ける筈が…」

うるたえるキリアに、それまで横で黙って聞いていたディノが口を挟んだ。

「無駄だよ、母さん。俺アーシェに超ムリって言ったけど、全っ然聞かないでやんの。超ガンコ」

ディノは肩をすくめると、アーシェを横目にみた。

やはり、アーシェの気持は少しも揺るがず、その目には凜とした力強さがある。闇夜を照らす、松明のような。

「月には全てがあります…そう、神竜がおっしゃっていました」

ディノが、へっ？と小さく驚きの声をあげた。そんな話は、初耳だった。

「私は、この世界を少しも知りません。あまりにも無知です」

よく通る、透明な声だ。だが、ガラスのような脆さは無い。

そしてそれに含まれる、眩いばかりの宝石のような、熱望、いのち。

「私は月へ行き…全てを知りたい」

その言葉に、突然ディノの中で何かが弾けた。

ディノは、自分の中の何かが、爆発するような不思議な感覚に襲われた。体が燃えるように、頭に一気に血が巡ってゆくかのように。

何だ？

この気持ち、何だ？

なんかスツゲー、ドキドキする。

似てる、あの時と似てる。

誰かと剣を交える時の、あの感覚。

武者震いだ…！

「…分かったよ」

キリアがゆつくりと傾いて、アーシエに微笑んだ。告白と決意に硬直しきっていたアーシエの頭を撫でて、呟いた。

「大きくなったね」

優しく、全てを受け入れてくれる…温もりのある、言葉。

アーシエはついに、せきを切って溢れ出した感情の赴くままに、泣き始めた。

巡り会えた驚きと嬉しさ。そして自身の無謀を、受けとめてくれたという感謝。それらが、吹き出す心の奔流となつて、次々と涙に変わってゆく。

アーシエは——唐突に過ぎ去り奪われていったあの日々と同じように——泣いた。

慟哭するアーシエを、キリアもまた涙を流しながら、その腕で包んだ。

一方、ディノは、湧き上がる見えない謎の衝動に、うち震えていた。

戸惑いの中で、ディノの中の何かが今、確かに目覚めようとしていた。

ドラグノア儀式

ドラグノア最大の平原、アベドルト平原の西部に、その集落はあった。

遊牧民風馬の即席の里。宿营地と言ってもよい。

東に位置する火竜山脈から吹き下ろす風により、乾燥したこの広大すぎる土地には、道しるべはおるか、樹々がおい茂る事さえない無限のごとく、わずかな草が生えるのみの枯れた大地が続く。

また平原には、古くから獣人魔人の魂がうつっている為に、普通、人は入ろうとはしない。

帝国でさえ、鎮魂が行える者以外の立ち入りを禁じている。

鎮魂歌ひとつも歌えぬ者が一歩足を踏み入れたら最後、魂にむさばられてしまう。無念の心に縛られて天に昇れず、ただただ這いずりまわる怨霊という魂に。

そんなおどろおどろしい大地とは裏腹に、上空に広がる夜空は完璧にまで美しい。

今宵も星は流転する。

月：ルシファンを天心に、僅かに明滅しながら大きな円を描く。光の尾を羽衣のようになびかせて、闇を駆け抜ける。

星は魂なのだと、エアドラドの民は言う。

それは生命が心臓の鼓動を止めた時に、生命から不思議な光が浮かび上がり、天へと絶えぬ火の粉のように昇ってゆくからだ。

魂。

それは人間の精神体であり記憶であり善意であり罪でもあるのだという。それは、実に様々な色をしていた。

：命という鎖をとかれ、肉体から離れ浮上する光。朝には、太陽という竜に照らされて見えないものの、曇りの日には雲母にかくされて見えないものの、何も無い夜には、だがくつきりと漆黒の空に存在を証明し、主張する。

魂、等しく、星。

星、流転、すなわち浄化。

再び大地に生まれゆく無垢な肉体と結合する為に、星は空を巡り浄化されるのだという。

孤独に、さえずるものもなく、道すらない虚空を、ただたださ迷い、大地のかつての自身を忘却するのだという。

まるで、行き先も帰る場所も無く、歩く旅人。

人が、人生とは旅そのものであると唱えるのは…必然なのかもしれない。

そしてそれは、標準点さえ臆気な、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚により確認される現実という幻想の中で、唯一の「リアル」なのかもしれない。

その一粒が、ふいに失速した。

そしてそのまま、流星群から外れてゆく。瞬く間に速度をあげて、地平へと消えてしまった。

あっけなく、何もなかったかのように。

だが、それにエアドラドの民は意味を感じるのだった。

今まさに、かの星の全てが浄化され、眠る母の子宮に還ったのだと…。

だがそれは所詮、空想である。宗教と呼ばれる、秩序の端の産物である。

人は創造する。世界の理さえも、脳内で描き続ける。

世界とは常に仮説の域を超えないものだ。

生きるとは正に、空想なのだ…。

感覚のままに、大地にも空にも、この瞬間にも、魂が這い、駆け巡り、産まれる。

人はまだ、この世界の真の意味を知らない。

「あつ、流れ星だ！」

風馬の里に住む少女…ユズは、門の両脇に立つ見張り台の上で、走り去る星を指差して声を張り上げた。

すぐ横には、聖なる者であるアーシェがたたずんでいた。

遊牧民と聖女。

その組み合わせは本来、実に奇妙なものだろう。だがしかし今は、姉妹のように自然でもあった。

二人は共に、同じものを見つめていたから…。

「赤ちゃんが産まれるのでしょうか。綺麗な桃色。もしかしたら…女の子かもしれませんね」

アーシエはユズに微笑むが、ユズはひとさし指を一本たてて、右へ左へゆらした。

「甘いアマゝい。お姉ちゃんユパのように甘いな。だってね、あたしが産まれた時は、ギンギラに燃え燃えの橙色の星が流れたの！だから皆てつきり男の子だと思ってたらしいよ！」

ふふふん、と鼻をならすユズは、やけに自信にたつぷりである。何故かは、分からない。そういう性格なのかもしれない。

だが、すぐにふてくされたような顔をして、「まあ、よく男の子に間違えられますケドー」とアーシエにぶーたれた。

「私もよく間違えられますよ」

くすくすと笑った後のアーシエの言葉に、ユズが「嘘！」と過剰反応をしめた。

「とつても、やんちゃでしたから。少し前からは、そんな事は少なくなりました」

アーシエの答えに、ユズが少し考える。

「ねっ、ねっ。それって、成人の式の辺り？やっぱり…成人の式の後だと、女らしくなる…？」

「帝都の成人の式は18からですから、風馬とは違うかもしれませんね。風馬は12で成人の式を行うのでしょうか？」

ユズがコクコクと頷く。

「そうなるとやはり違いがありますね。でも私、男女差がはっきりしてくるのは、やはりユズさんの年頃だとは思います」

途端に、ユズの表情が陰しくなった。

どうやら、ユズは女らしくなりたい、のではなく、女性という性に嫌悪を感じているようだ。

12…この年頃の少女とは、そういうものなのかもしれない。性差が肉体にも現れてくる年齢。

男性との力の差が歴然と見え始め、自身が非力な存在なのではないかと思ひ込む。

世間の目も、変化する。

何より、自身が自身の変化に何より気付かされる。

過去の自分が消滅してしまうかのような不安と、絶望。それが新たな自分の誕生であるとは、理解が出来ない、年齢。

「…お姉ちゃんとデイノ、暫くここにいるんだよね?」

「ええ、剣が出来るまで…キリコさんは三日かかるとおっしゃっていました」

ユズが、ゆっくりと立ち上がる。

「式は明後日なんだ」

ユズがうんとしなやかに背伸びをした。

「みんなに、見てほしいな」

ユズの表情にかげりを感じるのは、気のせいだろうか、闇のせいだろうか、（それとも……）

アーシェに成人の式はなかった。

それは聖なる者にそもそもそういった式が一切無く、かわりに聖なる力を強める為の式があった為だ。だが、成人への意識自体は帝都の者達とは然程かわらない。

共に、大人への変化を——まさに階段を上るように——理解して

いくからだ。

長いモラトリウムの中で、社会から協調性を学び、守るべき者が生まれ、大人への意識を強めていく。

そして、ふいに大人へと羽化した自分に気付く。

だが、風馬の子ども達のモラトリウムは非常に短い。医療も魔法学も、聖なる力の分析も大分すみ、人々の寿命が長くなると共にモラトリウムもまた長くなった今日を思えば、大変短いであろう。それは正に、階段を駆け上がるようだ。

「あたし、頑張るから。成人の式、頑張るから。…だから皆に、あたしが大人になる所をみてほしい…」

ユズが呟く。

遠くで、また星が地平へと駆け抜けた。

ユズは、女性への嫌悪と、大人へと成長せざるおえない焦燥と不安を、その小さな胸に抱いてるのかもしれない。なかった。

アーシェの心臓にもまた、正体の分からない感情の泥が伝染していた。

共感だろうか、同情だろうか。

分からない。分からないが…。

アーシェはその少女を見守りたいと思った。

大人が子どもを慈愛の目で見つめるのではなく、同じ変化に戸惑う友として。

ユズを見守りたいと、思った。

星は今宵も廻りゆく。

アベドルト平原の朝の空は、今日も青い。

「つたく、俺にだつて予定があるんだぞ！」

ぶつくさ言いながら、ディノは火を見つめていた。

魔法陣の中央に抱かれた火に、時々、魔法を封じた家畜のふんを投げ入れる。ふんを乾燥すると、燃料となる。

それに魔法を詰めると、火炎になるのだった。

ディノは文句を言いながら、炎をひたすらつくっていた。

「あんたねえ、実の姉が世界を旅する時に、なんも持たせない肉親がいるかい？」

同じく炎をつくっているキリアが、不満を漏らすディノに、叱咤した。

だが、ディノは平然と自分を指差す。

「……ここにいるけど」

「アーシェが姉だつて事さえ気付かないようなやつは論外だねっ」
キリアは、ふんつと鼻をならすと、家畜のふんを投げ入れた。

「つたく、一晩の内に姉妹のように仲良くなったアーシェとユズを少しは見習ったらどうだいっ？」

「しらねえよ。夜に散歩しに二人で出てった時に、アーシェの魂を鎮魂させて、かわりに家畜の魂でも入れてつれて帰ったとかしたんじゃないね？」

ディノの悪態に、キリアの目が冷たく光った。

「…あんた、本当に天邪鬼だね。いやだよ、本当の鬼の方がまだ可愛げがあるよ」

火がバチバチと燃え上がる。その周囲をキリアは、更に風の魔法陣で囲う。

「ま、こんな感じかね、キリコいいよ」

キリアの呼び声に、夫のキリコがのそのそ歩いてきた。その両腕には、ロツゾから貰った、あのダークベアの鉄の爪が抱かれている。『ったく、土産なんか渡すんじゃないかった…』

キリアとキリコはこれから、この鉄の爪で、護身用の小剣を一太刀、作る。育ての親として、アーシェに何か出来ないだろうかと思案していたキリアが、ディノからダークベアの鉄の爪を土産物として差し出された際に、思い付いた事だ。

ダークベアの鉄の爪は、昔から上質な武器の材料として高値で取引されている品物だ。希少価値が高く、本当に素晴らしい武器が産まれるので、一部の金持ちしか持てないほどだ。

これで護身用の小さな剣をつくらせてほしいと、キリアは懇願した。三日以内で必ず作る、と。

アーシェは、直ぐに懇願を承諾してしまった。

お陰さまで、ディノの予定が狂ってしまった。目的地ハシェイブの名物、ハシェイブ酒をがぶ飲みするという、実に下らない予定が。

「はあ」。三日もこんな何もない草っぱらのまんなかで何やれつつーんだよ…」

愚痴を溢すディノに、キリアが即答した。

「なにいつてんだよ、あんたには明日ある、ユズの成人の式の導き

役をやってもらうよ」

「は〜いって…ハア!？」

ディノはキリアの返答に思わず飛び上がった。

「ユズ、もう12なのかよ？」

「あんたの3つ年下だからね…。ってかあんた、妹の誕生日も忘れてたのかい。風馬に寄ったのは本当に近道と物狙いだったんだね…」

「ったり前じゃん!」

「情けな〜」

キリアは頭を抱えこんだ。キリコは静かに笑っている。

その動作に怒りを感じつつ、ディノは続けた。

「てか、どうして俺が導き役なわけ？成人の式の導き役は、最も縁が近いものって決まってんじゃないか。普通、親のキリコ父さんが、母さんの役だろ？」

ディノの言葉に、キリコが僅かに悲しそうな顔をした。

「俺はユズの父親じゃねえ。ユズの父親は、ガンツ兄者しかいねえ…。死んでからもう五年になるけれど、やっぱりユズの父親はガンツ兄者しかいねえよ」

ガンツとは、キリコの血が繋がった兄の事だ。

ユズは、キリコの姪に当たる。母親はユズを産んだ後、産後の日達が悪くて亡くなってしまった。つまりユズは、男手ひとつで大事に育てられた子どもなのだった。

ユズを天塩にかけて育てていたガンツであったが、鎮魂に失敗し、怨霊に食われてしまった。

その時、ユズはわずか六歳だった。

「…そか、なら兄妹のちぎりを交した俺の方が近いな」

ディノはキリコの胸の内を理解すると、何もなかったかのように、炎にふんを投げ入れた。

キリコはガンツを尊敬していた。

力が強く、鎮魂も巧く、なにより賢かった凛々しい兄を愛していた。だから、ユズの父になりきれないのである。

死んでも心の中で人は生き続けるという。それは揺るぎない事実で、慈悲深い意味でも、残酷な意味でも…確かに残された者達の中

に存在する。ディノは若かったから、ガンツがディノの中にあまり残っていない。

けれど、気持はよく分かった。

ぼつぼつと燃え盛る炎が、ディノの皮膚を、じりじりと熱していた。

その日の夜。

里を濃密な闇夜が覆っていた。そして、里の中央の大広場から、ついに成人の儀式は始まった。

獣の皮をよくなめし、きつく張り合わせた太鼓が並ぶ。太鼓の大きさは様々で、まるで満月が幾つも低空を浮かび上がっているようだ。

太鼓は、風馬の民に古から伝わる独特の方法で作られていた。ドラグノアの一般的な太鼓は、軽やかに高らかに咽喉を震わせるが、風馬の太鼓は違う。まるで何かを爆裂させるような、巨大な生き物

が大地を踏みしだき歩くような、重々しい音だ。

それらを、里の者たちが叩く。

太鼓の中央には、大きな炎が天へ天へと無数の手を伸ばしている。魔法と乾燥燃料で組まれた火は、焦げ臭い匂いを辺りに撒き散らしながら、更にその勢いを強めていく。

成人の式の、これは前夜祭。

今年、成人になる者は、ユズひとり。儀式の主役は、ユズただひとりだった。

燃え盛る火。

炎に照らされ、漆黒の闇からユズがゆっくり浮かび上がる。

全身を黒衣に包み、手に「刀」と呼ばれる古い形の剣を握り、表れたその姿は、当に闇から生まれでたかのようなだった。強烈な光に輪郭を奪われ、まるで両手に握る剣の切っ先のように、輝いている。大衆の瞳に囲まれ、緊張に神経をすり減らすユズの幼い横顔から、汗がひとすじ落ちる。

まばらな雨のような太鼓の打ちが、ユズの登場により、一気に熱を帯び始めた。加速し、纏り、膨張し、豪雨から滝へ、そして音の渦へと。

「風馬一族、羽化の形、はじめ！」

高まるボルテージは、その一声で破裂した。

「壱！！」

張りのある少女の声が、太鼓の音に押されて、一気に周囲を威圧する。

ユズは、電光石火の速さで太刀を振り下す。地面スレスレでぴたりと刃が停止する。

「式!!」

次はそれを斜め上にあげる。正確な角度で、そして位置で、刃がまた止まる。

「参!!」

くるりと反転し、再び剣が振り下ろされる。完璧な垂直。ユズはそのまま、膝をつく。ユズは目を閉じると、大きく息を吐き出した。

ユズを囲み、人々は息を吞んで彼女を見つめている。民衆に紛れて、デイノ達もまた、ユズを見つめていた。

「あれは羽化の形と呼ばれる舞だ。」

腕を組みながらキリコがぽつんと呟いた。

「羽化の…形^{かた}?」

すぐさまに疑問を發したのはアーシェだった。その反応に、キリコはユズを指差す。

「先ほどの剣舞を“形”と言う。風馬の古くからの剣術の基本動作だ。ユズが持っているのが“刀”。全ては古くから伝わるものだ。」
「そうそう、アレばっか毎日やらされてた。」

デイノが嫌そうな口調で吐き出すと、すかさずキリアが耳を引っ張った。

「剣の受け方や流し方、打ち方まで美しくまとめた世界で最も無駄が無い動きだよ。この基本動作が、風馬の民の戦闘能力を培ってきたんだ。“形”がなければ風馬とは認められない。」

「わくってるよ！だけどクソ毎日はさすがに飽きるって。」

「そうだな、お前はサボってばかりだった。お前の“羽化の舞”は我流すぎて、まるで喉を詰まらせた蛙のようだった、うむ。」

キリコの間髪入れぬ発言に、キリアが腹をかかえる。

「あははっ！そりゃあ良い例えだねえ！」

「…個性だよ。」

デイノはまるで苦虫を100回噛み砕いたような顔を見ると、ユズを見やった。

「でも、ホント…ユズは上手いな。」

デイノの発言とほぼ同時、太鼓の音色が再び熱を帯びだした。

太鼓の影から、今度は黒いベールに身を包んだ六人の女性が躍り出る。

うねうねと身体をくねらせるその様子は、毛虫のようで、そして木々の揺らめきのようで、おぞましい動き…非人間的な、どこかゾッとするものだった。

「あれは…ルナファラ？」

「ああ、旧王国最後の姫、ルナファラの幻影だ。よく知ってんな、アーシエ。」

「ええ、聖園の鎮魂の舞のひとつと全く同じ踊りです。…こんな繋がりがあるなんて。」

アーシエが思わず感嘆を唇からこぼす。

「そりゃあそうだ。聖園はアルタナ湖に沈んだ魂を、風馬はアルベルト平原に埋められた魂を慰め、鎮めている。平原の魂を鎮めてい

る最大の鍵は、残虐な旧王国の最後の国王の一人娘の肉体なんだからね。」

キリアの説明に、アーシエは僅かに首を傾けた。

「ルナ、ファラ……」

その目は、何故か悲哀を浮かべていた。

六人のルナファアラが蠢き、這いずり回る。

悪魔の化身、泥で出来た邪心、血と快楽に溺れた魔女。ルナファアラ達はユズを誘惑し、闇へと引きずり込むかのように踊り狂っている。

「六人なのは、それぞれ頭・右腕・左腕・胴体・右足・左足をあらわしているんだよ。さあ、風馬の長の子孫であるユズが、ルナファアラをの肉体を切り離してゆく。」

キリアの言葉どおりだった。ユズは立ち上がると、次々とルナファアラを切り崩してゆく。

罵声のような太鼓に蹴落とされるように、ルナファアラ達が地面に落ちる。

まるで花びらのように等間隔にルナファアラは地面に伏せていき、その中央にユズは降り立った。

火炎を背に、ユズが声を上げて刀を上空へと突き刺す。

「我が名はユズ！今、邪悪な肉体を斬り、大地を鎮魂す！」

まるで天を貫くように立つユズのか細い両足は、堂々と大人へと翼を広げるひとりの少女を、しっかりと支えていた。

早朝。

東をみるとわずかに、火竜山脈から太陽が登り始めた。

綾線から、光の帯が空へと、大地へと注がれる。洗われるように、闇から青へとその肌を表す世界が、再び「今日」に生まれ変わる。

まだ、朝は寒い。

「まさかアーシエがついてきちまうなんてなあ。」

デイノは、寝起きの頭をかきながら、シンガを走らせていた。背中には、アーシエ。

「ふふっ、すみません。」

アーシエの唇から白い息が漏れる。

アベドルト平原の朝は、比較的温暖なエアドラドにおいて、寒い事で有名だ。山脈から降りてくる風が、昼間に大地が蓄えた温もりを奪い去るのである。

今は、春と夏の間と、わりと暖かい季節だ。だから救われているが、これが冬だったら、まずアーシエは耐えられないのではないかと、デイノは思う。

乾燥し、張りつめた空気が満ち、草木もわずかしかな大地。ここで生きられる動物は、一握りしかないのだ。

と、背後から勢いのよいシンガの足音。

「デイノ！アーシエに変な事言わないでっ。あたしが呼んだんだから、アーシエは悪くないんだからっ。」

本日の主役、ユズである。

昨夜と同じく黒い衣服で全身を覆っている。成人の式の服装。まだまだ、成人の儀式はこれからだ。

「つたく。…ユズもアーシエも、二人とも“導いて”やるよ！」

ディノは叫ぶと、更にシンガを飛ばした。

目指すは、平原の中央にある「ルナファラ魔霊窟」――。

シンガが更にスピードをあげる。

烈風一列に駆け抜ける草原の冷たさに体温を奪われながら、ディノ達をのせてひた走る。

アーシエは、ディノの脇腹から腹へと手を伸ばしてがっちりと掴んでいた。体をつけて、振り落とされまいと更に力をこめる。

腕の表面から、太く血の流れる腹の暖かさを感じた。温い。

暫くすると、漸くシンガの足がおさまってきた。そうして、アーシエは細めていた瞼を軽く開けてみた。

冷たい外気のために涙を微かに貯めるアーシエの熱い眼球が、ふいに何かを捕える。目を凝らす。

それは…砂ぼこりと涙で揺らいで見えるそれは、墓石を彷彿させるような塊だった。

ただし、ドラグノアのような竜の形をした墓石ではない。楕円の丸、青虫のたまごに似ている。

「…ディノ、あれは？」
「そろそろ着くぞ！」

アーシエの声を押し押せる空気が遮り、ディノを叫ばせる。
ディノはシンガの首に抱きついた。

猛然と進むシンガが、ふと前足をあげた。
そのまま流れるような、長い跳躍。

太鼓が結末に力強く叩かれるそのように、シンガが大地を踏みしめる。振動に耐える。

「到・着！」

ディノは片腕を掲げると、すぐさまひよいとシンガを降りて、背伸びをした。

「うゝ体なまっちまうっ。」

目の前には、あの墓石のような石があった。
アーシエはゆっくりシンガから降りると、墓石をまじまじ見つめた。

高さはアーシエの腹部ほど。幅もそんなに広くはない。
そして微かに、緩やかな魔法の気流を感じる…。

ああ…それにこれは…聖なる、力？

「導き役が飛ばすなあ〜！」
ユズが興奮気味に飛込んできた。見ると、シンガもなんだか疲れ
てみえる。

「お、シンガがぐったりしてら。形は得意でもシンガは苦手なんだ

な。」

「ちがうつ。ディノが飛ばすからっ。」

プリプリと怒りながら、ユズもまたシンガを降りた。シンガにつけた荷物を下ろして、シンガを優しく撫であげながら、周囲を見渡す。

「…で、中央についたの？一休みするの？」

アーシェは、え、と小さく驚くと、石とユズを交互に見つめた。ユズは、本当に石が見えていないようだ。

「アーシェは、集中しねえでも『石』が見えるんだな。」

「…え、あ！もしかして、この石すべてが魔法なんですか？」
「おう。ルナファラの魂を留める石。全部魔法で出来てる。…というか、ルナファラ魔窟全体が魔法を帯てんだ。」

ディノはユズに見えるよう石を叩いた。漸く見えたのか、凝視していたユズが小さく声をあげる。

「あつ、ルナファラ魔窟、来たんだ！」

「ルナファラ…魔窟…」

遠い昔から何度か、アーシェはルナファラの物語を耳にしている。

聖なる者たちを育成する為に存在する、聖園。

その聖園では、ルナファラの物語は、旧王国時代を語る上でついはみ、鎮魂を学ぶ際にもついはむ。ルナファラ魔窟は、物語の最後を締め括る。

聖園の教師達が、教科書をめくり、生徒たちに音読みをさせる授業風景が、アーシェの頭にふいに浮かんだ。

春の日差しの中も、夏の暑さの中も、秋の乾いた音の中も、冬のわずかに湿ったガラス窓の中でも、繰り返された音律がふいに響いた。

魔女ルナファラは、風馬の長に肉体を五つに斬られた。

肉体はアルベルト平原を囲むように円に埋められ、円を鎮魂魔法陣として風馬の民が回る事となった。これが風馬の民の遊牧の始まりである。

そして、円の中央には、ルナファラの魂を封じる為に、

また、旧王国のかつての神である王族に、殺された人々の魂を慰める為に、魔窟が作られ、

魔女ルナファラは、千年の時を越えた今も…

「…魔窟でさ迷っている。」

「ユズ、来い。」

ディノがユズに手招きする。

ユズは、緊張で手足をぎくしゃくさせながら、石の前に立った。

「用意は、いいか？ちびんなよ。」

「う…うっさい…」

小声でユズは返すと、深呼吸をした。すぐさま真剣な熱が、ユズの眉目を整え、風馬の戦士の顔に変える。

「いいよ。」

ディノは確認のためアーシエもみやると、石に手をかざした。

「いいんだな。」

ユズも、アーシエもはつきりと頷く。

ディノはにんまり笑うと、石を両手で押さえるように、構えた。ディノの唇から、歌がこぼれてゆく。昨晚の『羽化の儀式』の歌と踊りと、同じリズムの力強い、律。

「我等、鎮魂の風馬の民である。暗闇の風馬の民よ、その瞳を開け、我等をしかと見よ…しかと聞き届けよ…」

石が七色の柔らかな光を全体に帯る。ゆっくりと魔法陣が石に浮かび上がる。

「我等、十六夜の意志を継ぐ者なり。」

瞬間、地響きと共に大地が突然——消えた。

「きゃああああっ！！！！」

唐突に、消え失せた大地。そのまま三人は落下してゆく。その様子をシンガが、ボ〜と見下ろしていた。

三人は、どんどん落下してゆく。

「こんなのきいてなああい！！」

「ちびんなよつつつたろ！！」

眼下には、巨大な岩の遺跡が広がっている。
ユズとアーシエは青ざめた。目を閉じて、体を丸める。

……ぶつかる……！

ドサ、ドサ、ドサ。

「いてええ！」

ディノが悲鳴をあげる。悲鳴でゆっくりとふたりは目を開けると、ディノが座布団と化していた。

どうやら、ディノ、ユズ、アーシエの順番に落ちたらしく、ディノが二人の下敷になったらしい。

「ごつめーん。」

「すみません。」

「うるせえ！マジいてえ！降りろ！」

陸にあがった魚のようにバタバタするディノを尻目に二人は立ち上がると、周囲を見渡した。

あるハズの空が、もう無かった。巨大な遺跡を囲むように、まるで鳥籠のように大地は空洞となっていた。ただ、魔法気流が摩擦するように周囲を流れており、暗くはない。

アーシエは、天井を見上げた。

一本の塔が立ち伸びて、先端が天井に埋まっている。

あの石は、遺跡の先端だったのだ。

遺跡は不思議な事に、神竜殿のものではなく、旧王国を彷彿とさせる形をしていた。竜ではなく、ヒュームを崇めていた頃の、作り方。

基本的な部分は現在と同じだが、竜のレリーフも竜の像もひとつもない。

また、旧王国時代、人は神を象ってはならなかった。偶像の崇拜を禁じていた。それは、神である王族の魂が偶像に分裂するのを防ぐためだったと言われる。

だから、美しいには美しいのだが、とても簡素な形をしている。石と石とを繋ぎ止め、正確な角度で組み込まれた、積み木のような姿。

「…ルナファラ魔窟が、旧王国時代に作られたものだったなんて…」
アーシェの感嘆に、ユズが明るく反応する。

「あ、アーシェしらなかったんだ。ルナファラ魔窟は元々、旧王国王族達の隠れ家みたいなものだったんだよ。」

「初めて来ただろ、お前は」

「うん、初めて。」

ユズはピースをすると、笑った。緊張で、うまく笑えていないが。

「築千年、サービスでルナファラ幽霊つきでございます。お客様どうですか？」

緊張と不安、そして期待の為に震えるユズをほぐすように、ディノは挑戦的な瞳で言う。

「問題なし！」

ユズは言い切ると、その細い足を前へと伸ばした。

ユズは口の開いた入り口からゆっくりと魔霊窟に入る。入った途端に、冷風が首元をかすめた。

平原は、火竜山脈から海へと向かう季節風の為に、からりとかわいていたが、地下はじつとりと湿り気を帯ているように感じる。そして、ひどく肌寒い。

魔霊窟は、光の魔法気流を全体に巡らせている為に、微かに光をともしていて、まるで冬そのものが降りてきたようだ。

静閑としている。

靴音ばかりが、やけに大きく響く。

沈黙を打ち破るような大きい動きで、ユズは両手で腕をこすりこすり、背後をみやった。

「さむい！」

「ははっ、もうリタイアかよ。」

そういうと、ディノは背負っていた皮袋を下ろした。

中から、するりと黒い衣を取り出す。衣には、火の魔法陣が銀の糸で編み込まれてた。

ディノは小さく魔法を呟くと、魔法陣は一瞬光り、すぐさま普通の銀の色をとり戻す。

「二人とも、これを着るんだ」

手渡された衣は、触れると、じんわりと暖かい。防寒の為の魔法のフードだ。頭まで被ると、すぐに全身が僅かに熱をおびた。

「さっきコレだしてくればよかったのに」

「いちいち魔法こめねえといけねえだろ。ほら、ぶつぶついつてないで」

アーシェがユズの肩をたたく。

「ふふ、頑張りましょう」

「…うん」

見据える魔霊窟の中は、光が僅かにともっているとは言え、やはり薄暗い。それは、魔霊窟の広大さの所為でもあった。

「廊下…だよな？」

奥まで、とても見えない、高い天井の続く廊下。見上げると、縦に巨人が二人、入ってしまったえそうだ。

独特の雰囲気、暗闇の中、三人は歩を進める。

長い回廊の果てには、再びぼっかりと開いた入り口が口を開けていた。

三人が、入り口の前にたつ。

と、瞬間、アーシェの中で、記憶の糸がきらりと光った。

シオンの都、アルタナ湖の中央にある島。

巨大な竜の城を囲み立つ、王支える三種の砦。

王の剣、金獅子城。

王の盾、法采城。

王の杖、…我等が、聖園。

アーシェの心は、聖園を走る。

その道は、女帝のいる竜の城の上階から、聖園へと延びる空中回廊。

光の注ぐ回廊を風のように駆け抜けて、端にたつ白い扉の前に立つ。

そして。

魔霊窟の廊下の入り口をぬけると、更に天井は高く、ドーム状に広がっていた。

「うつわあゝ…ひ、ひろい…」

ユズの唇から無意識に溢れた感嘆が、伽藍を木霊する。

隣に佇むアーシェもまた、思わず息を飲んだ。だが、それはユズとは違う意味合いのものであった。

「作りが、聖園と全く同じ…」

同じ時代に作られた？それにしても、あまりにもよく似ている、似すぎている。

アーシェは、すぐさま駆けだした。

「あ、アーシェー!?」

ディノが制す。

暗闇が深く、光は微か。床は見えにくい。

「気を付ける、そっちは…!」

ディノが叫ぶ。が、すでにアーシェは立ち止まっていた。いや、ほぼ同時だった。…そして、アーシェのその輝く瞳は、まっすぐ床へと延びていた。

アーシェの目にうつる、それは、階段。

聖園と、全くおなじ。

まるで、聖園を模して作られたかのように。
いや…もしかしたら、逆？

「アーシエ？」

ユズが不安げに見上げたアーシエの横顔には、真剣なおもざしがあつた。

「デイノ、この下には礼拝堂、そして更に下に、魔法陣がありませんか？…中央に、魔法を帯た石、または石像のある…」

「え！なんでしつてんの！？」

デイノは驚いた。まさに、アーシエが言った通りだった。

この下には多くの部屋があるが、その部屋を囲むように礼拝堂がある。更に下には、壮大な魔法陣が、広すぎるその床を覆い、中央に魔石を添えている。

アーシエは信じられないという表情で二人をみやると、こう言いきつた。

「ここは聖園と全く同じ形をしています。もしかしたら、風馬の成人の儀式は、聖園の祈り子の儀式と同じものかもしれません」

聖園の祈り子の儀式。聖なる力を持った者たちが最初に受ける、聖なる祈り子になるための儀式である。

多くの才能あるものは、聖園で基礎を学び、祈り子の儀式を経て、正式な聖園のものとなる。祈り子は、もつとも力が弱く、もつとも人数が多い。アーシエは、聖なる祈り子の称号をもっている。既に、儀式を終えていた。

「聖園と、この場所、どうしてこんなにも共通点があるのでしょうか…」

「…やっぱりアレじゃねえか、旧王国を倒したエアドラドの初代皇帝ヒルドに関係があるんじゃないの？」

アーシェの疑問に、ディノが適当に推測すると、それに倣いユズも考えを述べた。

「聖園もアルタナ湖の鎮魂をしてるんでしょ？もしかしたら大元が一緒なんじゃないかなあ？」

ユズの大元、という言葉に、アーシェは頭の中であの人を浮かべた。

イエズガルド様：今はジジ様が聖王の証として持っている魔聖石イエズガルドで眠っている。

かつてあの方は、初代皇帝とエルペソ様とオプカー様の四人で解放軍の中心人物として、獣魔人革命を起こし、その後の建国にも力を入れた。聖園を作ったのはそもそも、あの方だ。

あの方は風馬一族の遊牧にも、関係があつたのでしょうか…。

「十六夜とイエズガルドが同一人物とは考えられねえけど、なんか関係があつたんじゃね？」

「十六夜？」

「風馬を遊牧民族にした、遊牧後の初代風馬の長の名前だよ。俺さつき、“十六夜の意志をつぐもの”って呪文言つたろ。」

「もしかしたら、十六夜とイエズガルドは友達だったのかな？」

ユズはピョンピョンと跳ねると、階段を降り始める。階段は光が灯っていないというのに、その動きはやけに軽快でウサギのようだ。ウサギははきはきと、

「でも、何も残っていないから分かんないけど。意思をつぐっていても、風馬でいう、風馬やつとけ！みたいな？。」

途中で立ち止まり、振り向いた彼女の瞳は、まっすぐアーシェに注がれる。

「何も考えることなんてないよ。そんなこと考えても、大昔に終わった話じゃん。人間、今が一番大事！」

そのまま、謎のポーズを決める。どうやら、彼女はディノと同じ直球タイプのようだ。

なにはともあれ、ユズの言うとおり、今は今のことに専念すべきか。

今日のこの場所での目的は、魔霊窟の探索ではない。ユズの儀式を終えることだ。

「しっかりサポート頼むよ、諸君！」

「はい。」

「わくってるよ！だから導き役の前には立たないでくれよ。」

ディノが前に割り込んで、階段でユズを制す。ユズは謎のポーズのまま、

「りょーかい」

と言った瞬間、首を傾げた。

「うつん？」

その体制のまま、目をこするユズ。

「どうしました？」

ユズの怪訝そうな顔。その目線に倣ってアーシェは背後を見たが、勿論おかしいところはなにもない。

「……や、気のせいかな。あははは！いこいこ！」

ユズは景気よく腕を振り上げると、どんどんディノの背を押し始めた。

様々な疑問を振り払って、三人は進む。あっという間に、階段の深い暗闇に、三人は吸い込まれていった。

……だがこの時、実は彼らは考えるべきだった。

何故、聖園と風馬にこんなにも共通点があるのか。

何故、舞踏が何故おなじで、なぜ鎮魂のさだめを両者とも背負っているのか。

そしてユズが一瞬、見たものについて、考えるべきだったのだ。

考えさえすれば、あまり混乱をしなくとも良かったかもしれない。

三人が階段を下りていくのを、見つめる何かがいた。

その何かは、三人が地下深くへと足を進めたのを確認すると、ゆるらとつて行く。

真っ白な衣のような肢体を揺らめかせ、音も立てず、影すらもなく。

闇に染まりきった階段を下りると、そこには魔霊窟という名のとおりの神秘的な世界が広がっていた。

思わずアーシェは感嘆した。いつまでも美しい、懐かしいあの場所を、光で包んだような様相。息を呑むとは、このことであろう。「すっごいね…なんだか、月の光がいっぱい降り注いでいるみたいだ」

ユズは興奮ぎみに呟いた。ユズの小さな足から産まれる足音は、静かに、だが鮮烈に、ひとすじの矢のように高い天井へと向かい、鐘の音のように響く。

「なんて、魔法が満ちたところなんでしょうか。素晴らしく綺麗ですが…これでは、毒ですね。」

「毒？」

アーシェは頷くと、手をかざした。指先には、わずかに輝く帯を絡ませている。

「魔法は、大地を巡る偉大な力です。ですが、強大すぎる力の渦のなかでは、人の肉体はその組織を狂わせます。魔法中毒といって、肉体を少しずつ様々な病に冒されます。」

「ふうん、魔法はあんまり使うとか、ちゃんと勉強しなきゃ駄目って怒られるのってそういうこと？」

「知らなかったな…と、俺たち、やばいじゃん！」

ユズとディノは目を合わせると、顔を歪ませた。

「大丈夫ですよ。聖園魔法使いのような、上級魔法を日常的に使うような方しか発病しません。ただ、長居が危険であることは、間違いないありませんね。」

「はあ…アーシェの話をきいたら、なんだか段々具合が悪くなってきたよう。」

ユズが舌の上で苦いものでも転がしているような顔をして、溜め

息をつく。

「だなあ……なんだか、頭が痛くなってきたよ。」

相槌を打つと、ディノは周囲を見渡した。風邪だと医師に診断された途端に、より体調が悪くなることがあるが、それと全く同じ現象だろうか。二人の顔色は少々青ざめていた。

中央に懺悔室や書庫といった様々な部屋を置いて、円を描くようにつくられた特殊な作りの礼拝堂であるため、丁度おりてきた階段とは真逆の位置にある、目的地である地下へと下る階段はまだまだ見えない。

が、その遠さはしっていた。例え、通常どおり四角の形をした礼拝堂であったとしても、向こうに蟻の巣程度に見えるくらいに違いない。

それほどに、魔窟は広いのだ。その広さは、かつて自分が儀式を行った時にしっている。

段々、足も重く感じられてきて、降り切るように思わずディノは走りだした。

「あゝ、クソッ」

「ええゝ、走るの!？」

「危ないですよ、ディノ!」

「うるせゝ、ちゃっちゃと終らそうぜ!」

走り出すと、流石に景色も早く後ろへと向かって行く。……とは言っても、白い壁のみの簡素な廊下では、イマイチ進んでいるかどうか分かりにくい。

「勝負だあゝ」

「うおっ、やるか!？」

真っ先に走り出したディノに負けじと、ユズがスピードをあげて

ディノの横に並ぶ。

「ってか、導き役の前に行くなって言ってるんだろ！」

「導き役が儀式受けるやつを置いてくなくなって言ってるでしょ！」

負けず嫌いの両者はギャアギャアとお互いを罵りあいながら爆走する。

「ふふ、楽しそうですね」

極めてマイペースに、二人のあとをアーシェもついてゆく。

…そしてその後ろを…白い影がゆつくりと近付いていた。

淡く螢火のような輝きを抱いて広がる堂内に、軽く単調なリズムが響く。

疾走の爪先に、ようやく地下へと足をのばす階段が見え始めたころには、二人は激しくヒートアップしていた。

罵りあうのをやめ、顔を真っ赤に膨張させて、ひたすら無言でひた走っている。

「…っゴ、ゴール…!!」

「きゃあっ」

ディノが勝鬨をあげる瞬間、ユズが背後で音を立てた。

その音の大きさに、ゴールを忘れて後ろを振りかえると、ユズがすっころんで毛皮の絨毯のようにのびている。

「ば、バカやろっ、大丈夫か？」

なにかあったら、堂内ではしゃいだ自分の責任だ。

ディノは床におでこからぶつかったユズへと小走りに向かうと、その小さい身を抱きかかえた。

「いい年して転ぶなよ。大丈夫か…ん？」

みるみる内にユズの体が煙に包まれていく。

濃厚な煙がユズを包みこんだと思うと、次の瞬間にはただの木彫の人形に変貌していた。

「まさか！」

「はははははは！！」

背後からユズの高笑い。見ると、ユズは階段の入り口で謎のポーズをキメていた。

「しょりのポーズ、はっはっは！」

「き、汚ねえぞ！身代わりの術なんか使いやがって、ふざけんなっ
！」

「あつ、どっかから負け犬の遠吠えが聞こえるよ」

「チクショー！」

ディノは本気で悔しさに身をよじると、床をバシバシたたいた。

「ふはははは！あ、ところで、アーシェが見当たらないんだけど。」

「マジで!？」

確かに、気付くと、前にも後ろにもアーシエはいない。

「何処いったんだ、アイツ。勝負放棄か？」

「ディノが置いてったんじゃない。ってか、風馬の足に聖園育ちの人がついてこれるワケないじゃん。」

「そりゃそーか、じゃん。」

ディノは立ち上がると、トボトボと歩き出した。

「アーシェ、アーシェい。」

ディノの呼び声が木霊となつて響いてゆく。それは道の向こう向こうへと吸い込まれように、ゆっくりと消えていつてしまった。

「なんだよ、聞こえないのか？ 広いったって、俺たち以外にいないのに。」

「だいぶ離れちゃったからね、仕方ないよ。あーあー、ディノが大人気ないから… きゃあっ！」

ユズの調子の良い声色が一転するも、

「また転んだのか？ 氣い付けろよ、ったく。」

ディノは、ユズの声に振り向くことなく、どンドン道を戻ってゆく。

「助けて！ ディノ！」

ディノは悲鳴に近い叫びを、片手を振ってあしらうと、スタスタ進む。

「はいはいはい、後で…」

言葉を言い切る前か後か。

ふいに背後からまがまがしい気が突風のようにディノの背中を押した。

「…！？」

瞬時に体を反転させて壁につける。その横を、なぐように黒い何かがかすった。何かは直ぐに急旋回すると、ディノへとその鼻先をのばす。息を飲み、瞬時に抜刀をし、ディノはそれを弾いた。

刃と刃がぶつかる音と共に、それは壁に突き刺さる。

「…手裏剣？」

「ディノ、あぶないっ！」

ユズの声よりも早く、ディノは体を螺子って倒す。頭上を再び手

裏剣がかかる。

ひれふすように、手裏剣を投げた人物をディノは見上げた。否、それは人ではなかった。

黒い、ただ黒いだけの…何か。

ぐるぐると喉をならし、佇むその姿は、形容するならば黒すぎる暗雲だった。それが雷鳴のように喉笛を転がしているのだ。

生き物かどうかさえない、あやふやな何か。

その影からのびる黒く忌々しい触手が、ユズの腹部を包みこみ、空中に抱えていた。まるで、赤子でもあやすように。

「きゃああ！」

黒は、ユズを抱えたまま、音もたてずに階段へとぬるりと落ちてゆく。

「ユズッ！」

ディノは無我夢中で再び大地を蹴った。

ルナファラは、旧王国こと、ドラグノア王国の第二十一代国王を父に、第一王妃を母に、一人娘として産まれた。

国王には三人の妻がいたが、子どもはルナファラただ一人であった。

それ故に、ルナファラは、民に恐れられ、恐怖王とまで呼ばれていた王に、溺愛されて育ったという。

冷たく血の通っていないような政治を行う王さえも、愛を享受ほどこに、ルナファラは可愛らしい姫君であった。

愛の恩恵を注がれていたルナファラであったが、彼女は生まれつ

き不思議な力を持っていた。それは誰もが見たことも聞いたこともない、魔法とも違う力だったという。

どのような力であったか、それは誰も知るよしかなかった。

…王のあまりの愛により、城の深く深くに隠され、愛しく愛しく育てられていたために…。

やがて、旧王国にも滅亡の日がやってくる。獣魔人革命の火が城を焼き付くし、国王一族を飲み込んだのだ。

…そして、ルナファラは…。

転げ落ちるように階段を下りる、が、最後の一段を踏む瞬間、デイノは飛翔を余儀なくされた。

土煙をあげて階段が破壊される。

「つく！」

反転し、壁を蹴り上げて破壊から逃げたデイノを、土煙から飛び上がった何かが追いかける。触手、黒い触手だ。

デイノは触手を眼球に確認すると、剣をかまえ、そのまま触手に突きを叩き込んだ。

難なく触手が二つに寸断される。

だが、二分された触手は面積を増やし、再びデイノを襲うべくその身を伸ばす。

すれすれでデイノは大地に転がるように交わすと、二本の触手はひとつに混ざり、走り出したデイノをさらに追う。

「しつこいな、なんだってんだ!!」

剣が効かない。剣技を得意とするディノとは、まさに最悪の相性だ。

以前、剣が効かないアメーバ系の魔物と戦ったことがあったが、その時は魔法使いのサポートがあった。こういった敵には、魔法が最適なのだ。

炎系の魔法で一気に焼き尽くす、風系の魔法で形骸さえ残さず吹き飛ばす、水流系の魔法で流し去る・・・魔法は敵の体全体にダメージを与えることが出来る。

そうすることによって、敵が肉体を保つのを防ぐのだ。

だが、今は魔法使いがいない。

魔法を使えるユズは捕らえられ、アーシェとははぐれてしまったのだから。

かけっこなんかするんじゃないかなと思ったとしても、後悔先に立たず、もうすでに遅い。

「ああくそ、こういう奴はどうすんだっけ?!」

触手から全力で逃げながら、ディノは横目に本体をみやった。本体は悠然と触手を伸ばしている。まるで、ディノを遊ぶかのように「き、氣にくわねえ〜!」

本体は、もうひとつの触手でユズを抱えあげている。

ユズはじたばたと抵抗しているが、触手には通じておらず、人形のようにブラブラするだけだ。

「ああん、もう!こいつう、こいつう・・・っふう!」

触手の締め付ける力が強まったのか、ユズが苦しそうに顔を歪め

た。

「ユズ！」

「うあああ！」

ユズの顔が一気に赤く染まる。時間は無い。ディノはしゃにむに本体へと走り出した。

大地を蹴り、剣を掲げ一気に振り下ろす。ぶつん、と鈍い音をたてて触手が切れる。

ディノはユズが床に落下するのを寸で抱きかかえると、疾駆を再開する、だが。

「と、とれねえ！」

触手がユズに張り付いて取れない。それどころか、ぶよぶよと激しく動いてディノの動きを妨げる。背後には、触手が逃すまいと迫ってきているというのに、走る速度はどんどん下がってゆく。

「ちくしょうっ」

「ディノ、ディノっ」

「な、なんだよ！」

「水様性のアメーバみたいだから、これ、魔法が効くんだよね?!」

「ば、馬鹿やろ、いま魔法を使ってみろ、俺たちまでアブねえだろうがっ」

「違うよ、こう使うの！」

ユズが粘液の中で自身の服を必死にまさぐる。その手は、防寒用の魔法陣に触れる。

「火の魔法陣よ、その銀の鎖を打ち破り、縛られた力を解き放て――呪詛解放!!」

黒い防寒具に縫い付けられた銀の糸が、ブチブチと音をたてて切れる。それとともに、炎のような輝きが溢れた。

「あっつ、熱っ」

一気に熱を帯びた触手に、思わずディノは手を離れた。ユズが床に投げ出されるとともに、べろりと触手が剥がれ落ちる。

「火遁の術！」

受身を取り床に着地すると、ユズは炎の印である人差し指を一本立てて、唇から炎を巻き起こした。

炎は容赦なく触手を包む。白い湯気と腐った水が蒸発したような匂いが拡散し、充滿する。

煙が拡散し終わると、触手が転がっていた場所には黒い影のようなものだけが床を焦がしているのだけが視覚できた。

ユズの猛攻は止まらない。更に親指を立てて雷の印を作ると、迫りくる触手に向かって雷撃を放つ。

「雷遁の術！壱、弐、参！！」

雷撃が収束し、三つの魔法弾となって触手にぶちあたる。触手は次々と粉みじんにはじけ飛び、四散した。

「ふぁ・・・。」

「まいったか！」

印は風馬にだけ操れる簡易の魔法陣だ。

簡易の魔法陣だというのに、ユズの術は魔法として立派なものといえる。先ほどの、炎の呪詛を編んだ魔法防寒具の使い方といい、ユズには魔法の才があるようだ。

「俺、おまえを敵に回したくねえな。」

「えへへっ。折角の防寒具おしゃかにしちゃった。」
「まあいいよ、あいつを倒せば体を温まんだろ。」

二人は立ち上がると本体をみやった。先ほど、暗雲の塊のように見えていたソレは、その黒が僅かに薄らいでいる。触手を失ったためであろうか。

「こいつは、いったい何なんだ？俺が試練を受けたときはこんな奴いなかったぞ。」

ディノの記憶にある儀式は、こんな変な化け物は登場しなかった。ただ落下して、ただ歩いて、ただ形を踊って、それだけで終わった。こんなものは、儀式には一片も無い。

「ディノ、こいつ、もしかして亡霊なんじゃない？その、封印されているっていう・・・もしかして、なんかよく分かんないけど、封印解けちゃったとか・・・」

「まさかお前、あれが魔女ルナファラの亡霊だったか？」

と、二人の会話に反応したのか、化け物が声を出した。

とはいっても、どこが口なのかはまったく分からない、声かどうかもはつきりしないものだったが。眠る年寄りの声帯がぶるぶると小さく震えるような、声。

「・・・ルナ、ふ、る、ルナ、ふア・・・」

暗黒の雲がどんどん薄らいでゆく。

「るな、ルナるううう、なるな、ふあら、るな、る・・・」

まるで言葉とともに色彩を失ってゆくように、それはやがて灰色になり、信じられないことに乳白色に染まってゆく。

「ルナファラって単語が気になるのか？」

ディノの呟きを正しいものと暗示するかのように、化け物は『ルナファラ』という言葉をボロボロと吐き出してゆく。まるでそれは、嗚咽しているようにも聞こえた。

「あんだ・・・」

「ディノ、近づいちゃ、」

ディノは制止するユズを無視して、化け物につま先を向ける。そしてゆっくりと、歩を進め始めた。

「あんだ、ルナファラなのか？」

「ルナ、ルナばら、る、ル、るば、ルナ、ルナファラ・・・。」

「魔女、ルナファラの亡霊なのか？」

ディノの声が届いていないのだろうか、そればかりか、ディノが近づいてきていることにさえ反応せず、ただただ化け物は、うめき声をあげながら、その色を変えてゆく。

乳白色、薄い白、そして・・・透明に。

「なっ・・・」

ディノとユズは息を呑み、思わず後ずさった。透明の先にあったのは・・・無数の生首。

大量の大小の生首が、混ざり合い、蠢き、密集している。

みなみなうめき声をあげているが、うめき声は統一していない。それでこそ、老若男女とわず。

表情は苦悶。

全てが苦悶に埋め尽くされている。

そして全員が、打撲の青と擦り傷きり傷の赤に染まり、浅黒く、

青白く、汚濁した黄色に変わっている。

そのうめきは部屋を異常な世界へといざなう。
濃厚な苦悩が部屋中に充満する。

まるで世界中の人々のうめき声を閉じ込めてしまったかのように。
救済を求める声、痛みにあえぐ声、絶望になげく声、叫び、叫び、
叫び。

「う、うあ・・・なに、なんなの、これ・・・あ、頭が痛くなる・・・」

「ユズ・・・！」

あまりの異常音に、ユズが耳を押さえて膝を落とす。ディノはユズに寄り添うと、その耳を抱え込んだ。

うめきは尚も収まらない。まるで地獄を引きづりあげてしまったかのように、阿鼻叫喚が二人にのしかかる。ただの空気の波であるのに、それはあまりに重すぎた。

「く、あ・・・」

耳を押さえても手の甲をすり抜け、脳に激震を与える。

「るな、るナルアな、るなふあ、ルナフあら・・・、殺ず、死ぬ、」

止まらない。

「しね、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死死死死・・・しねしねしね死ぬ・・・！！」

音は収束し、大音響となって周囲を揺らす。

「ルナファアはころ、殺ずううううううう！！！！！！！！」

アーシエは、慎重に、だが早めに歩みを進めていた。

ディノたちがムキになって先を急いで走るものだから、すっかり取り残されてしまったアーシエは、自分の靴音をひとり聞いている。なんだか、寂しさがするりと心をさする。

ふと、廊下の末端にもうすぐ着くという頃だろうか、重い振動が体を揺らすのを、アーシエは感じた。どきりとして、更に足を早める。

ようやく、廊下が途切れた。距離も、聖園とさほど変わらない。ということやはり、作りはかなり似ていることになる。

アーシエは、そこにあるべき階段へと更に向かう。

「あら…？階段が崩れてしまってる…」

アーシエは、崩れて瓦礫の山になってしまった階段を見下ろした。地下へと続くはずのそれは、数段を残して、レンガの屍になってしまっている。みっちりとの隙間無く積もっており、とてもでは無いが、降りることは不可能に思えた。

よく見ると、階段は崩れたばかりのようで、わずかではあるが空気に土煙が混ざっていることが、においなどで分かった。

さきほどの振動は、この階段の崩壊が起こしたものなのだろうか。この先に、ディノたちがいるのだろうか。

「…でも、これでは進めないわ…」

迷いながらも、アーシエは数段しかない階段を降りてみた。瓦礫を丁寧にさすってみる。

「ディノ！ユズちゃんっ！そちらにいらっしやるんですか！？」

大声を出してみるが、反応は無い。もしかしたら、厚く埋まってしまったのかもしれない。

「どうしようか…」

魔法で破壊しようにも、どれくらいの規模のものを放てばいいの
か見当はつかない。なにより、万が一、この崩壊にディノたちが巻
き込まれており、瓦礫の中に埋まっているとしたら…無闇に魔法を
使用することは危険だ。

アーシエは考えを巡らせた。

アーシエの記憶と憶測が確かならば、この階段以外に地下へと向
かう道は無い。ここが本当に、竜の城を模した建物ならば、非常時
は、隣の棟へと移る橋、いわば空中回廊を使用する。

だが、竜の城とは違い、ここに隣接する棟はない。

しかし、それでは非常時に対応出来ない。万が一、棟の一部が崩
れた時は、人が閉じ込められてしまう。ここは深い地下だ。そんな
ことが起こったあとに、外から掘り進むなんてことをしていたら、
閉じ込められた人間は救出時には、酸欠で死んでしまっているだろ
う。

ここは地下を想定されて作られた棟。ならば設計上、必ず非常時
に使用するルートや、空気孔があるはずだ。

「とにかく、他の道を探すしか方法はないですね…」

アーシエは肩を落として呟いた。

その時だ。

アーシエの指先を、電流のようにまがまがしい邪気がひた走った。

「きゃっ…！」

思わず、あとずさる。

「これは…」

びりびりと指がしびれ、全身を寒気が襲う。身体中の毛が逆立ち、皮膚が泡立つようだ。この感覚には、身に覚えがあった。

「…怨霊。」

怨霊とは、肉を持たぬ死霊兵。憎悪や怨恨といった負の感情に縛られ、天に昇る術を失った悲しみの魂魄。生への願望と執着が、生きるものの魂を狂わせ、飲み込む。

アーシェの体に悪寒が走る。かつての記憶がさざなみのように甦る。あの日、遠いあの日、最初に暖かな日々を壊したものは死霊だった。恐怖で指先が震える。

「はっ…」

ずきんという刺すような痛みで、アーシェは我に返った。目をむけると、瓦礫からもうもうと吹き上がる邪気がアーシェの細い足首を締め付けている。

すぐさま杖を取り出し、アーシェは聖なる言葉を放った。

「肉体の保護よ、魂とその緒を深く結び、我を保て…魂の楔！」

邪気に掴まれたくるぶしに聖なる紋章が浮かび上がり、瞬時に邪気を追い払う。邪気は、あらゆる物質の形骸を歪ませて、蛇のようにするりと瓦礫の向こうへと消えてゆく。

「はあ、はあ…」

アーシェはゆっくりと呼吸を落ち着かせた。急激にあがった心拍数は、熱で心臓を握りこむ。気を取り直すと、直ぐに言い知れぬ不安がアーシェを襲った。

「ディノ！ユズちゃん！どこに行っただのですか！」

これほどまでに重い邪気にあの二人が襲われたら、ひとたまりもない。十分も経たずに、魂を貪欲な怨霊に食われてしまうだろう。いくら鎮魂の民と呼ばれる風馬一族であろうと、この歪んだ魂に対応できるとは思えない。聖園の指導と加護を受けたアーシェでさえ、これほどの怨霊を鎮魂する術を持っていない。

そう、この魂はあまりに歪んでいる。濃厚な怨念がいくつも重な

り合い、混ざり合い、一般的な怨霊のカテゴリーをはるかに超えている。この魂のひずみを消し去る方法は、一時的に封印をし、長い年月をかけて鎮魂する以外ない。何年も、何十年も、何百年も。気が遠くなるほどの、時間を――。

「まさか…この魂は。」

たったひとり、アーシエは覚えがあつた。

あの人物ならば、これほどの魂を核とするかもしれない、と。

かつてその人物は王家の娘であり、絶対無二の力を持つ魔女であり、革命の中、このアベドルトという地で首を落とされ、肉体を刻まれた。

伝説の悪魔。

「魔女、ルナファラ？」

風が吹いた。アーシエの首筋を、冷たいひとすじの風が吹いた。

澄んだ紅茶のような髪が揺れる。

背後に気配がある。

「…だ、れ？」

アーシエは、ゆっくりと振り向いた。

それは白い布地であつた。まっさらに白い布地が、空中に浮かんでいた。さらにさらりと、まるでやさしい夜風に踊るカーテンのように揺らぐ。高さはアーシエの胸元ほど。中には人間でも包んでいるのだろうか、奇妙な立体感がある。

アーシエに目視されると、それはゆっくりと動き出した。

布が擦れる音などない、それはすべるように廊下を渡ってゆく。

しばらく浮遊すると、廊下に並んだ扉のひとつが無音で口をひらいた。そしてその扉へと、吸い込まれるように向かう。

「ついていけばいいのね？」

アーシエは意を決した。なんの導きかは分らない。もしかしたら、悪霊たちの罠かもしれない。だが、ここにいっても時間の無駄だ。今はディノとユズの安否を信じて、自ら闇に飛び込まなければ、前

に進むことなど出来ない。

アーシェは再び走り出した。

ディノは、湿った暗がりにいる。

とても重い、暗がりだ。

暗黒の重圧は、体の自由を奪っている。眉ひとつ動かせず、だんだん感覚さえもなくなってゆく。

この暗闇の中、どこまでが自分で、どこからが光を失った闇の空間なのか。重力は感覚を侵略し、自分と闇の境をじわじわと消してゆく。

心臓の音だけが聞こえる。どくん、どくんと、温かい血潮を、心室が繊細に押している。

ふと、草の甘美な芳香を感じた。

それはすると鼻腔から入り込み、肺を満たす。体があるのだと気付くが、何故か自分も匂いの一部なのかと思ってしまう。空になって、空気になって、どこまでも伸びてゆく。

やがて、芳香の向こうに色彩を感じた。それは黒くかすみがかつていて、うまく眼球には捕らえられないものだった。

さわやかな萌黄色。草原だ。すぐにそこがアベドルト平原だとディノには分かった。高い高い上空から、鷹のように見下ろす、自分を育てた大地。

豊かな平原が続いている。

深い緑は、平原の外を表す。中央に向かうにしたがい、緑は黄色がかったものになってくる。

大地が乾き、人が住むには困難になってくる。選ばれし者しか住めぬ土地だが、なんて美しいのだろうか。

木々は無い。乾燥しているからだ。

川も無い。丁度、山脈の中腹であるからだ。

温暖ではない。吹き荒れる風は厳しく冷たいからだ。ただ、なだらかな平原を、薄い草が覆うように生えている。カラカラの土を僅かにむき出しながら、どこまでも広い。

しばらく浮遊していると、瞳に蟻の行列が映った。いや、この高さだ。蟻の行列のはずがない。ならば、なんだ？

ディノは下降した。少しずつ、定まってゆく視界。落下する心地よさ。だが、穏やかな気持ちは一気に吹き飛ばされた。

蟻の行列ではない、真っ裸の人間だ！

更なる下降。

蟻のような行列をなす人々に、ゆるりと近付く、接近する。

人々の表情まで近付くと、その異常さはより濃く感じられた。ディノはおぞけが走った。

老若男女、皆、裸で泥まみれだった。しかも、泥が汗で剥がれ落ちて、ようやく見える皮膚は、鞭や剣でいたぶられたのだらう、血まみれだ。

汚れきっている。泥と血、そしてムワリとした不潔な体臭が、鼻孔を突いた。

羅列する人々のすぐ側に、鞭を片手に振り回す男たちがいる。隊

列を数人で管理しているのだろうか。

男たちは人々とは対照的に、立派な防護服に身を包んでいる。

見たことのないタイプの服装ではあったが、それが軍服であると、デイノはすぐに分かった。

角張った美しい衣服を着て、鞭や剣を振り回すのは軍人しかいない。

…そして、この隊列は、罪人を軍人が歩かせているという生易しいものではないことも。

街ひとつを襲った敵軍が、人々を捕虜にして歩かせているのだろうか…裸で、裸足で、この過酷すぎる大地を。

だが、そんな面倒で役に立たなさそうなことを、この残虐な軍人たちが行っただろうか。

そもそも、この軍人たちが、強襲や戦争のたぐいを行ってきたようにはとても思えない。

列の中に、幼児を大事そうに抱えながらフラフラと歩く老人がいる。

ひとりの軍人が、その老人を、鞭でピシャリと打った。

老人は、幼児を抱き抱えたまま音もなく倒れると、その枯れ木のような体をピクリとも動かさなくなった――。

…死にやがった…

…死にやがった…

…こんなところで死ぬなんて、ふざけやがって…

瞬間、思念が走るようにディノに伝わった。

ディノは自身の心臓が熱く燃え上がるのを感じた。だが、その熱は一瞬で風化した。

この思念は、軍人のものではない。軍人はなんとも思っていない。

ディノは思念を辿った。老人を傍らに見る幼児に目がいった。異様に冷めた目をした幼児は、老人を見下している。

…私を置いて死にやがって…

そうして、すぐさま幼児は歩きだした。まるで何事もなかったかのように、鞭に打たれまいと、その小さな体を揺らして歩く。

ディノは啞然としていた。

あんな子どもが、人の命をゴミのように、死を当たり前に思うなんて、この隊列はなんなんだ。

いったい、なんなんだ。

隊列から、汚れた肉体の臭いと、あらゆる思念が噴出する。それらは天へと昇れず、大地へとへばりつく

目がくらむ。

そねみだ。

後悔だ。

憎悪だ。

妬みだ。

悲しみだ。

憎悪だ。

…狂いそうだ。

人々の暗雲のような感情が、血と泥で出来た彼等の足跡で、大地を塗る。ナメクジの歩みの後のように、湿って残る。舐めるように進む。

そうしてディノは、ふと気付いた。

ヒュームがない。

エアドラドの民の三割を占める、ディノやアーシェのようなヒュームがない。みな、獣人もしくは魔人だ。そこでようやく、ディノは思い立った。

ディノの思考が記憶と回る。クルクルと、歴史の断片を繰り出す。

「獣魔人は…人として扱われなかった…。」

「そんなもんじゃない。獣以下、石ころ以下だった…。」

誰かに、そう教わった気がする。誰だったろうか。風馬の長老だったか、キリアだったろうか。

そして、アベドルト平原に流れた長い時の中で、確か、こんなことがあった。

風馬の民が、この大地で遊牧と共に鎮魂を行うようになったきっかけである、悲劇。

獣魔人大量虐殺。

遙かの昔、エアドラドは今とは全く違う国質をもっていた。今では旧王国と呼ばれるその時代は、ヒュームを王、そして国民

としており、広大な国家力を保つため、旧王国は古くから獣魔人を奴隷として扱っていたのだ。

約千年前、旧王国最後の王・バルフレアは、国力の低下を大量にいる奴隷たち独特の文化の所為であるとし、無駄な奴隷を排除する「淘汰」を行った。淘汰という言葉はつまり、処刑を意味する。

これは当時、国家よりも資金を持ち始めた商人たちの力を減らすためだったとされる。商人たちの反感を最小に、彼等の財産を奪う。そのためだけに、奴隷たちの命は天秤にかけられた、と。

だが、真実は今では時と言う砂の渦に取り込まれ見ることは不可能だ。なににせよ、奴隷たちの大量処刑は、理不尽で傲慢な理由の下に始まった。

最初は奴隷の中にいた一部の文化人が処刑の対象となったが、日を追うごとに対象は増え、淘汰の主旨も変化していった。最後には、獣魔人であれば処刑の対象であるという、おぞましい形に。

処刑が虐殺へと変わり、政治は更なる恐怖を持って人々を襲った。国中で名ばかりの処刑が行われたが、特に処刑が行われた場所は次の通りだった。

皇都、シオン。

巨大湖、アルタナ。

火竜山脈。

そして…。

ディノは隊列を見つめた。

まさか、これは過去なのだろうか。

大昔、行われた狂気。この行進は死そのもので、向かう先は処刑

台なのだろうか。

意識が朦朧とした。記憶にある、アベドルト平原での虐殺の人数は十万とも二十万とも言われている。何人が死んだ、と歴史で学んだとしても、その命の数が膨大すぎて、残酷だと思えても、心は激しく痛まなかった。

だが、目の前にするこの景色は、まるで現実のようだ。

これは、あの生首たちの記憶なのだろうか。怨念が描く、かつて確かにあったのに、うずもれてしまった時代。

誰も思い起こすことのない情景の中で、彼等は今も苦しんでいる。誰かを呪い、大地にへばりついて死にながら生きる。

自分が描く悲しみの中で殺され、死に続けている。

なんて絶望的な死なのだろうか。

寒気がする。

どうすればいい？

ここから出るにはどうすればいい？

早く出なければ、この闇が深く心に侵食する。憎悪の深淵に落ちて、きつと出られなくなる。

ディノは焦った。心臓が危機をさっして早鐘のように打つ。だが、肉体という感覚がないディノには、なす術が無い。

このまま、引きづられるのだろうか、この世界に。不安が血管を走り、身体中をくらくらめをつむろうにも、それさえも許されず、画面は繊細に流れてゆく。

ふと、隊列の上空にいたディノの体が加速した。

加速度は一気に高まり、隊列はぐんぐんと後ろへとむかう。まるで、川をそって渡る鳥のように、隊列の先頭へと景色はひきよせられてゆく。

どこまでも続いていくかのように感じたその流れが、瞬間、速度をおとした。壁にぶつかってしまったかのように唐突に景色がとまり、デイノは混乱した。

見覚えがある景色だった。

空中に浮かぶデイノの足元に、穴があり、その穴の中に巨大な建物が立ち伸びている。建設されたばかりの白さが眩しかったが、デイノには、それがルナファラ魔霊窟であると、すぐに分かった。

隊列の先頭が穴の中へと、建物を囲む螺旋階段を使い、ゆつくりとおりてゆく。それは一見して、完璧な渦にも、美しく長い蛇にも見えた。

落下は続く。螺旋の中へと下降してゆく。風になった体は、建物を突き抜けていつしか部屋の中にいた。

気付けばデイノは立ち尽くしていた。

何処なのかも分からない、広すぎる部屋だ。部屋は、いくつもの丸太のような支柱に支えられて、天も壁も遠い。光源は床に散らばるように設置されたロウソクのみで、頼りなくともる。

泥のような闇の中、異臭がした…。

先程の、隊列の不潔な体臭だけではない、強烈な嫌悪感が込み上げてくる独特のにおい。デイノは悲しいまでに、そのおいに覚えがあった。

血のおいだ。

錆びた鉄と、腐った肉を合わせたようなツンとくる芳香は、その部屋に充満していた。

やがて、漆黒に濡れた目が、瞳孔を開いて闇に慣れる。わずかな光をとりこんで、闇に隠れる物質を捕える。

心は然程、動かされなかった。人が、当然のように死んでいる。山のように、人が。

乱雑に積み上げられた死体には首はなく、裸のその体は赤黒く染められて、闇との境いさえ失っている。黒と溶けこんで、草木が積み上げられているような気がした。

その姿が意味することを、デイノは感付いていた。この人たちは、『人柱』にされたのだ。

人柱は、能力のある術師や、地位が高い娘をひとり生き埋めにすることで成立するものだ。人柱により、大地の恩恵に対する感謝と畏怖を表現することで、天災からの守護を祈る。

それを、万の人の命とすりかえるなんて。

頭が痛い。

喉が異常に渴いた。

無念が、意識を失わせる。

呆然と、虚無が居座る。

息苦しい。
腹が空いた…。

「どこなのお…」

か細い声がして、ディノは振り返った。
小鳥のさえずりのような、可愛い声。鈴の鳴るような、幼く
愛しい声。ディノの聴き覚えがある声。

…ああ、あの子か。

「ないよお、どこにもないよお…」

部屋の片隅、更なる闇の向こうに、大量の首が山のように積み上
げられている。

ゴミでも投げたように放置されたそれらひとつひとつは、よどん
だ瞳をあけっぴろにしたまま、各方向を見つめていた。瞳孔は見開
き、ピクリとも動かない目は、死の色を横たえて、にぶく光ってい
る。

その首山の裾に、うごめく小さな人影があった。

「ないよ、ないよお…」

人影は小さな手を懸命に動かして、何かを探っているようだ。

ディノはゆっくり近付き、気付いた。

その人影には、首が無かった。丸くて大きな傷跡は、肉が剥き出
しになり、骨は砕かれて、脂肪は黒ずんでいた。

ディノは無感覚と無感情…ただ唯一の感覚…枯渇と空腹感の中、

それを当たり前のように受け入れた。あの子は老人が死んでから、自分の足でここまで歩き、ここで首をおとされたんだ、と。

「ないよう、わたしの首がないよう……」

形見でも無くしてしまったかのような、狂乱を交えた悲しみの声は、個体から木霊するようにも、方々から聞こえるようにも思えた。一步、さらに一步と近付く。

「どこにいったの……わたしのくび……これじゃない……」
一步、一步、

「あたしのくび……これじゃない……これでもないよ……」
……一步。

「あ、みつけたあ……」

次の瞬間、首を失った彼女は、目の前にいた。
幼いその血まみれの両手を、ディノに広げていた。

ディノはどんどん無気力になってゆく体を支えられず、膝をつく。
もう、動けなかった。

その言葉を聞いてはいけなと分かっているのに。

「やっと、やっと見付けた……」

手が、ディノの頬を掴む。

「……やっと見付けた……」

「……わたしの……く……」

『……——光の矢——!』

光の光線が膨張し、破裂する。

鮮明な輝きが熱く部屋を満たす。

ディノは光を見たかと思うと、跳ね飛ばされたかのように落下し、強かに背中を打ち付けた。

「ディノ！ユズちゃん！」

駆け寄る足音に、ディノは重たい頭をゆっくり持ち上げた。…ディノの視界が、ディノを包む世界が、再び鼓動を始める。

「おせえよ、アーシエ…」

肺にまだなんとも言えぬ奇妙な感覚が残っている。それを吐き出すように咳き込むと、ディノは頭をブルブルと振った。

「嫌な夢みた…」

傍らにユズがいるのを確認すると、命の恩人を見上げた。

「アーシエ、人生最悪の小旅行だったよ…」

「ディノったら…」

アーシエは小さく微笑むと、すぐさま真剣な顔で立ち上がった。

「…魂の楔！」

聖なる紋章の色彩が、アーシエの肉体から放たれ、ディノとユズに降り注ぐ。瞬時に、水に洗い流されるように不快感が消える。

「ん…あ…アーシエ？」

「大丈夫ですか、ユズちゃん」

朦朧としながらも、ユズが目を開く。

「アーシエ…あの子は？」

「え？ユズちゃん？」

開口一番の声に、アーシエは戸惑った。

「アーシエ、あの子は、どうなったの？」

ユズがすがりつく。だが、

「ユズ、その質問の答えは後からだ！」

ディノが、二人を掴んで一気に駆け出す。途端に、地面がひしゃげた。

《な…ぜ、逃げる…》

地響きのような声。否、怒りの合唱。

《…くびになりましたよう…、お前、死ね…死んでください…》
喘えぎがゆっくりと収束する。

《一緒に、なれ、…なろうよ！》

ディノは再び、声の主を見上げた。

無数の首が、黒煙を吐き出しながら、悶絶しながら、泣いている。おとも、おんなも、年寄りも、こどもめ無関係に、腐敗している。千年も前から、ずっと苦しんでいる。

だが、感情を押さえてディノは言った。

「悪いけど、あんたたちの仲間にはなれない。」

突如として、憤慨が嵐のごとく巻きおこった。轟音が、あたりにひしめく。

《…殺す…、殺してやる…！》

祭り太鼓のように、その言葉が弾け、ぶつかりあう。

《…殺す…、殺してやる…！》

《…殺す…、殺してやる…！》

《…殺す…、殺してやる…！》

《…殺す…、殺してやる…！》

「殺すなら、わたくしを殺しなさい。」

静謐。

唐突に、沈黙が飛散した。

「…だ、れ…？」

ユズが呟く。その呟きは、言葉を出したのがアーシェでもディノでもないことを指し示していた。

凜とした、気品ある麗しい声。

「殺すなら、わたくしを殺すのです。彼等は、旅人。彼等は、未来からの旅人。あなた方が呪う相手はわたくし…」

ディノたちは見た。その白は、ゆらりとはためき、風のように揺らいで浮いていた。

肌が白く、頬は桃のような、絵本に出てきそうな少女。

「我が名はルナファラ。」

…あなた方の殺意を、受け入れる者。」

「我が名はルナファラ。あなた方の殺意を受け入れる、同じ時代を生きたもの。第二十一代国王バルフレアを父に、第一王妃パンドラを母にもつ、エアドラドの名を引く最期の女。」

ディノは白い服を纏った少女の言葉に思わず耳を疑った。

怨念たちが人柱であるということは、彼らに取り込まれそうになった際に見た闇で知った。

だが、まさか魔女ルナファラが子供たちに聞かせる御伽噺のよう

に、魔霊窟をさまよっているだなんて。

「あなたが、ルナファラだったのですか。」

動揺はまた、アーシエも同じであった。自分をこの場所へと案内したのは彼女であつたからだ。

ルナファラだと思い込んでいた、この黒い者たちへと。

「導かれしもの、どうか私に力を……」

瞬間、ルナファラが消え、頭上に大きな穴があいた。

《おまえがルナファラ……貴女様が、殺した……》

生首たちが囁く。

《美しい首、気高き首、にくいにくいにくい……》

「私はここです。」

ルナファラの澄んだ声が響く。

声はディノたちの頭上、斜め上空にあつた。衣がはためき、それに包まれたルナファラは、ディノたちを真つ直ぐに見詰めていた。

「聖なる力をもつものよ、そしてユズとディノといいましたね。どうか私に力を貸してください。どうか、どうか……。」

くず折れた階段を確認すると、ディノは問い掛けた。

「あんたが、アーシエを導いたってか。」

小さな、頷き。

アーシエもまた、それに続いた。

「入り口が崩れ、地下へ行く階段が途切れていました。怨念を感じ、戸惑っていたところに、彼女がいました。彼女の誘いがなければ、わたしは……。」

「じゃあ、ワナだ。」

膝をまだガタガタと震わせながら、ユズが立ち上がる。その表情は疑心と憤懣にみちていた。

「そうやって、わたしたちを混乱させているんだ。あんなことをして、あんな時代をつくって、あんなものを築いて。そんなやつ信じられない。力を貸せ？冗談じゃない。そうやって体力を削るつもりなんだろ。アーシエもデイノも、だまされちゃだめ。あいつは――
――魔女だ！」

ユズの目が濡れている。冷め切った色で、震えるその理由は、間違いない怒りと戸惑いからくるものだ。

ルナファラの魂が形成する人間を模した霊体は、その顔を悲しみに歪めた。

「――そうかもしれません。ですが、私は……。」

爆裂音。

音と同時に、ルナファラの体を青白い炎が包む。間一髪のところを回避すると、ルナファラは降り立った。

ルナファラの体は薄く透き通っていた。遠くからみれば、布が浮かんでいるとしか見えないかもしれない。

だが、その布は確かにルナファラの衣服であり、彼女の体を防護している。服だけ、霊体ではないのかもしれない。

降り立つことで、彼女が小柄な少女であるということがよくわかった。

彼女が真にルナファラなのならば、今の彼女の姿は、死の直前の

ものである。だとすれば、ルナファラは本当に若くして亡くなったのだろ。・・・いや、鎮魂のための肉体として、殺されたのだろ。

その可憐な霊体は、怨念たちと堂々と対峙する。

《どうして、死んで下さらないのです？》

《なぜ、殺されないのだ？》

生首たちの目の色が、悲しみの色を湛える。表情が、歯がゆさで皺くちやになる。

《どうして死なないの！ぼくたちを殺したくせに！！》

生首たちの顔が、怒りと悲観にくれる。様様な顔が、バラバラと表情を変える。まるで、負の感情が泡をたてて生まれていくようだ。

《ここは寒い――》

叫び、尽きることのない悪い夢が、

《ここは冷たい――》

現実を汚染してゆく。

《ここは苦しくて堪らない――！！》

生首たちの唇がぶつんと切れ、中から大小、無数の触手が飛ばされる。

ルナファラをそれを翻し避ける。彼女が触手を避けるたびに、床には底のしれない穴があいてゆく。

「だめ！ディノ！！」

ユズの声に、ディノは己の動きを止めた。ディノの右手は、剣の柄を握り締めていた。

「ディノ、あいつは酷いやつなんだ、魔女なんだ！みんなを騙そうとしてるんだ！」

「ユズ、よく考えろ！それなら、あいつはアーシェをここに連れてきたりしない！」

ユズはディノの服にしがみつく。

「ちがうつ、畏なんだ。あいつはみんなを騙して首を落とすんだつ。ディノもみたでしょう？！あの人たちは人間なのに、あの人たちはオモチャじゃないのに！！」

「落ち着くんだ、落ち着くんだ、ユズ！」

「畏なんだ、畏なんだ、畏なんだああああ！！」

「ユズちゃんっ！」

パシン、と軽い音が響いた。

ユズの頬を、両手で押さえたアーシェが、そこにいた。

「アーシェ、どうして・・・？」

「ユズちゃん、大丈夫。大丈夫だよ、安心して？」

アーシェは、そのまま沈黙するユズの頭を抱きしめた。アーシェの胸元に下りる熱がある。温い涙が、アーシェの衣服に浸透し、拭われてゆく。

「あなたは、ここで待っていて。」

アーシエはもう一度ユズを力強く抱きしめると、ゆっくり立ち上がった。そして、杖を取り出すと、それを唇に当てる。

「・・・魔の流れよ。その偉大なる抱擁で彼の戦慄を妨げよ。聖なる壁よ、忘却の大地から降り立つ悲しみの夢から、どうか守りたまえ・・・。」

紫と黒の光が大地から噴出し、見る見るうちにユズの周囲に独特の陣を描いてゆく。それが、守護のための魔法陣と聖紋であることは、ユズにはすぐに分かった。

「あ、アーシエ?!」

「この陣から出なければ、大抵の魔力と念力から守られるわ。じっとしているのよ。」

「だめだよ、行かないで!」

離れようとするアーシエを、ユズの小さな手が掴む、懇願する。

その時、ユズの視界が僅かの影を持った。見上げると、それはデイノだった。

「デイノからも言っで、行っちゃだめだって、お願い!」

「ユズ・・・」

「お前、ちょっと黙ってる。」

低音。

デイノの重たい言葉が、ユズの体に押し掛かる。

予想もしていなかった兄の反応に、ユズは言葉を失いそうになっ

だが、それでも小さく声をあげた。

「でも、・・・畏かもしれないんだよ。」

「そんな時は、そんな時…」

——ぶっ倒すだけだ!」

ディノはそう言うと、一気に走り出した。そのまま素早く、ルナファラの後方へと回る。

「おい、どうすればいい?」

「あなたがたは・・・。」

ルナファラが嬉しそうに微笑む。

その横を、禍禍しい触手が弾いた。ディノは後退すると、それを切り裂いた。だが、触手は瞬時に親元へと帰ってしまう。まったく攻撃をうけていない。

アーシェはディノの後方にたつと、光の矢を放った。

だが、敵はひらりとそれをかわす。狙いを定めてからでないで打てないことが悟られたために、的中率はぐんと下がってしまったようだ。

「ディノ、怨霊は体を持ちません。ですから、剣といった刃物や打撃を与える武器は一切効きません。ですが、聖なる力を使えば、なんとか彼らに攻撃を与えることができます。彼らは複数の魂が混ざり合ったものです。聖なる力で魂を浄化していけば、彼らの力は必

然的に弱まります。」

「おいおい、俺の出番は無いってか!？」

頭を抱えるディノに、アーシエが問い掛ける。

「そのような意味ではないです。・・・その剣には、銀が含まれていますか？」

「ああ、純銀製だよ。」

その返答に、アーシエは足をとめた。まじまじと剣を見つめる。アーシエの顔に、仄かに笑みが表れた気がした。

「分かりました。それに聖なる力を注ぎます。」
「なっ、武器に魔法を注ぐなんて、火に油いれるもんだ、破裂するだろうが!」

ディノはアーシエに声をあげた。

物質に魔法を故意に流してはならない——それは常識だ。
物質は独自の魔法の流れを持っている。その流れに沿わないものを流すと、物質は魔法と魔法がぶつかり合い、摩擦し、膨大な熱量を出す。それは武器の粉碎を招くだけでなく、所持している者の危険を意味する。

「俺に死ねっていうのか？」

「大丈夫です。聖なる力は、魔法とは似て非なるもの。魔法とは異なり、全てに和合します。——剣を。」

「・・・分かったよ。だけど、その前に……」

ディノはアーシエの肩を掴んで引っ張った。アーシエの背後を、触手がさつとかすめる。

「力を注ぐ時間とやらをあいつらがくれるかが問題だな。」

ディノが苦虫を噛む表情で呟くと、上空から応答の声があった。

「時間が欲しいですね。」

ディノの前に立っていたルナファラが、大地を蹴り上げ飛翔する。ルナファラを殺そうと、怨念たちはルナファラへと容赦なく触手をはなつ。

それを、素早い動きで旋回して攻撃をかわしてゆく。

だが、先ほどより若干、動きは鈍く感じられた。

「急いでください。私に対応できなくなるのも、…時間の問題です。」

ルナファラの一声で、アーシェは再びディノと向き合った。

阿吽の呼吸で、ディノも剣をかざす。

銀独特の、白っぽい輝き。

ディノの背丈ほどの剣は、剣としては異常に長く、大きいものだ。シンプルなデザインで、大胆に加工されたそれは、ラムシエムでも群を抜く切れ味だ。

「母さんからもらった剣なんだよ。大事にしろって言われてるやつなんだからな、慎重に頼むぞ?」

「分かっています。」

ディノの剣に手を触れると、アーシェはゆっくりと息を吸い込んだ。深く、深く。そして更にゆっくりと、肺から空気を吐き出してゆく。

やがてアーシェの手のひらから、じんわりと光が溢れ出した。そのまま光は、まるで溶けてゆくように剣へとのびると、螺旋を描い

て刃に巻きついてゆく。

それを見やると、アーシェは手を下ろし、剣を撫でた。

「これで、怨念を裂くことができます。」

デイノはまじまじと剣を見つめた。

剣の周りを取り囲むように光が瞬いている。剣が発光しているようにも思えて、デイノも触れてみる。だが、熱も何も感じない。

「本当か？」

「ええ。ただし、怨念を裂くたびに浄化のため力は失われていきます。」

「何回も切れば、あいつらは昇天してくれるんだよね？」

「…分かりません。彼らの怨念がどれほどのものなのか、私には検討もつかないのです。」

「じゃ、じゃあ・・・!」

「時間はありません。とにかく、魂の浄化を施します。デイノ、出来る限り時間をかせいでください。」

「——分かった。了解だ!」

デイノは剣を握りなおすと、電光石火の速さで走り出した。空中を逃げ回るルナファラになんとか追いつく。

「そんな大人数でガキ一匹追い回すなんて、おまえら本当に趣味悪いな!」

デイノが強烈な風となつて怨念の塊に走り寄る。

そしてそれと同時に剣を横にのばした。寸前のところで無数の首のひとつがデイノの動きを目視、怨念は二分、回避。

<邪魔、邪魔をするなあ!!>

急激なターン。怨念が一気にディノへと標準を変える。

「そうこなくっちゃな！」

ディノは怨念たちの突進を垂直に飛んでかわすと、剣を振り下ろした。剣先は、防御の隙間さえ与えず、敵のど真ん中にぶちあたる。

<うつうつ!!>

怨念たちのうめき、悲鳴。

流血のかわりに、黒い霧が噴出する。まるで、古びた物質のように脆い感触。魂だけの存在であるために、するりと刃は通る。そのまま後退。

怨念の反撃。無数の触手がディノへとはじき出される、が、ディノを捕らえることはできない。

「なんだ、こんなものか、千年の呪いなんてものは！」

ディノの追撃。いともたやすく、怨念に命中し、霧が吹き荒れる！戦いの高揚。不確かな敵であったが、攻撃があたるとなっては、さほど恐怖はない。形勢は逆転したようだった。

ディノの更なる攻撃。大地を蹴り上げ、接近。剣を強く握り締め
――！

「気を抜いてはいけない！」

ルナファラの叫び。それと、ほぼ同時であった。

瞬間、ディノの動きが停止した。

いや、停止したのではない。動けないのだ。

ディノが振り下ろした剣は、確かに怨念を真正面に打ち据えていた。剣は半分まで深く突き刺さり、あたりには黒がぶちまけられていた、だが。

「なっ・・・！」

ディノは息をのんだ。

剣を抜くことができない。刃をすすめることさえ、かなわない。力を込めても、それは同じだった。まるで、岩にでも突き刺してしまったかのような。剣は、びくともしない。

次第に大きくなる焦り。その焦りと共に肥大化する、黒煙の向こうの殺意。殺意は、一気に膨張した。

ディノは即座に剣から手を離れた。だが、敵の動きが速すぎた。ディノの腹部に走る激痛。見ると、自身の剣柄が貫いている。次の瞬間、ディノは弾き飛ばされるように壁に背中を打ち付けた。膝から、落下。

「ディノー!!」

アーシエはディノへと走り寄ると、その肩を抱いた。ディノは荒く咳き込むと、

「一体、なにが起こった？」

黒煙の向こうから、怖気たつような声が聞こえる。無数の、殺意の声。無闇に命を奪われ、永遠のような時を悪夢と共に過ごした魂たちの声。

その声が、ゆっくりと収束してゆく。糸が編みこまれ、縄になってゆくように。そうして現れた声は、若々しい男のものであった。

「ルナファラ…。」

男の、つぶやき。晴れてゆく黒い霧の中から、やがてひとつの生首が見えた。否、それは生首では無かった。それは、首も体も正常にある、ひとりの男だった。

「ルナファラ…。」

男は、黒い服で首までを包んでいた。

そのために、まるで生首が浮かんでいるように見えたのだろう。手足まで、漆黒の衣装。

黒ではないものといったら、短く切られた白髪と、やけに眩い金色の瞳、腰や太ももに下げられたクナイの銀色のみ。

肌の色は極端に白い。衣服の上でも分かる筋肉の隆起、だが、締まりよく無駄が無い。一目で、戦闘を糧に生きていたろうことが分かる。そして、彼は。

「ヒューム？」

一人のヒュームの唐突な登場に、ユズは思わず立ち上がった。真正銘のヒュームだ。

何故。他の生首はどうなったのか。

それだけではない。もうひとつの衝撃が、ユズを、そしてルナファラ以外の二人を襲っていた。彼が纏う服、それは。

「十六夜。」

ルナファラが冷静な表情で、彼の名を呼んだ。
…風馬一族を作り出した、ひとりの男の名を。

「いざ、よいー？」

ユズは思わず呟いた。まったく想像していなかった人物が突然あらわれたための驚きが、彼女の顔を疑問に歪めている。それは、他のものも同様だった。

ただひとりを除いて。

「十六夜、ようやく出会えましたね。」

ルナファラが、青年へと、十六夜へと足を進める。

「頭が霞む、体が邪気そのものになってしまったようだ。」

青年は顔をあげた。その唇は笑みを象っていた。だというのに、瞳の色は黄色く淀んでいて、死人を髣髴させる。違う、本当に死人なのだ。彼が十六夜ならば、千年の時を肉体が耐えられるわけ無い。寿命というものは、とうに途切れているはずだ。

彼は、亡霊なのだ。

「ええ、あなたは邪気。邪悪に捻じ曲がった人間の心。」

ルナファラは真剣そのものの顔をしているが、声は高揚しているように思える。十六夜とは、親しい人物なのか。

「…かつて、風馬は隠密業をしていた。国王の下で、様々な隠密業を。…主に、暗殺を。」

ユズの誰に言うでもない、自分への呟き。

「ルナファラと、十六夜はおんなじ時代に生きてた。ふたりは、知り合いだったの？」

「あなたがたには、伝えるべきでしょう。」

ルナファラが振り返る。

「もう、千年も前のこと。人種間の・・・ヒュームと他種族の關係が嵐の後の川のように結合し、穏やかな流れへと變化した今なら言えること。」

少女の容貌、細く儚い靈体、今にも消え入りそうな存在。だが、その姿は、鷹揚として三人を見つめていた。

「歴史には、あつてはならないことがあつた……。」

「獣魔人への、残虐な行為のことか？」

デイノの問いかけに、ルナファラはゆっくりとかぶりを振る。

「そうではない、そうではないのです。国王の、獣魔人への行いは、過去の歴史が手繰りだした必然だった。家畜として獣魔人を扱ってきた人間の愚かな行為、そして家畜としての運命を受動的に受け入れてきた獣魔人の非力と悲しみが生み出した、歴史の流れの、あれは頂きだった。」

「頂き？」

「彼が、ヒルド現れたのは、歴史の必然でした。革命という火種は既に出ていた。何百年もの獣魔人の憤りは、ヒルドを生み出し、ヒルドは火の粉として燃え上がる必要があつたのです。」

ルナファラが目を閉じる。その瞼には千年の時間が流れているのだろうか。

「ヒルドは、突然あらわれたヒューム。自らを竜の血飲み子と語り、東の地からやってきました。人間は神ではない、竜こそが神なのだ

と言い、人々を諭しながら…やがて、多数の、獣魔人の人々を従えて。ですが、彼の反乱の火は簡単に崩されたのです。」

アーシェが唇を押さえた。

「そんなことは、伝承にはありません。」

「ええ、そうでしょう。彼は歴史において、失敗をしております。何故なら、彼の失敗を知る者は、全員殺されたのだから。」

ルナファラは、たんと続け。

「国王の城の前で、ヒルドが連れた人々は全員殺されました。堀へと…当時、湖を作ろうと城の周りを奴隷達が開拓していました。その奈落のような深い堀へと、突き落とされたのです。…だが、偶然にもヒルドは生き残りました。ヒルドだけが。」

「…どうして、ヒルドだけが生き残ったんだ？」

「簡単なことです。」

ルナファラが、ディノをじっと見つめる。彼女の視線は、ディノの深紅の瞳に注がれていた。ヒルドと同じ、竜の乳飲み子の瞳に。彼女はディノが竜の乳飲み子だとは知らないはずだ、なのに、その表情は懐かしい人にあうようなものに、どこか似ている。

「私が、ヒルドを生かしたのです。十六夜に命じて。」

三人は息を飲み込んだ。

信じられなかった。どうして、王国を滅ぼそうとやってきた男を、王国の實の王女が生かそうというのか。

「どうして、どうしてそんなことを…？」

アーシェのか細い問いかけ、返答は至極あっさりしたものだだった。

「私は…私を殺そうと思いました。私は、死にたかったのですよ。」

それは、衝撃だった。思わずディノは声を張り上げた。

「アンタ、自分が…自殺したかったから、革命を起こしたっていうのか…！」

ルナファアはその時、初めて微笑んだ。可憐な、純真無垢な微笑だった。

「王国の血は、近親結婚が多かった。このことにより、呪われた残酷な血は濃厚だったのかもしれないね。王国の一番の呪いは、私のような女が生まれたことでしょう。私は死にたかった。この、高貴と呼ばれるながらも、最も狂った血を破壊したかった…。」

ルナファアの瞳は冷静だ。

「力が、ありました。私には、不思議な力があつた。傷を癒す力で。…けれど、私は誰も救えはしない。この呪怨に塗れた肉体は、誰も救えはしない。そればかりか、私の周囲では血と涙がとめどなく流れました。暴力、虐殺、…妊婦が生きながら腹を裂かれて胎児を見せられる…そんな父上の“お戯れ”も何度も見ました。…傷を癒す力を持ちながら、誰の傷も癒せない。」

深い、深い憤りと悲しみ。…だが、彼女は陶醉しているようにも見えた。

「私は、なんの為に、この世に遣わされたのか。私は、なんの為に生きているのか。」

歴史の隠された事実は、三人を無言の人形に変えていた。何かを問おうとしても、何も言えなかった。口から出ようとすると、どうして、何故、それらの疑問が、彼女の前で意味をなさないことを三人は無意識に感じ取っていたのだろう。

「…最初にお話したように、革命の火種は既に出来上がっていたのです。ヒルドという炎を生かすだけ、後はそれだけだったのです。死ぬ準備は、とうに出来ていたのです。」

「じゃあ、アルタナ湖が出来たとき、…堀に水が流されて、何万人の人が溺れ死んだとき、洪水からヒルドが偶然いきのこったのも、あなたがやったことなのですか？」

「ええ、そうです。聖なる女性。正確には、十六夜が術を使いヒルドを生かしたのです。そして、十六夜は嘘をヒルドに伝えました。」

「――王国を怨んでいる。人が殺されるのはもう耐えられない。革命の手伝いをしてやる。――」

それは。

それは、ルナファラの気持ちだ。

十六夜は下僕として、ルナファラの気持ちを伝えたのか。

「ヒルドの革命は成功しました。十六夜の助言を聞き、西の盗賊“金の獅子”を剣に、南の魔性“サーカス”を杖に、北のイリバスト城砦を占領し、北の軍師“木馬”を救出することで、革命の火は国中に飛び火しました。城は崩れ、父上と母上、そして血族の多くが処刑されました。…私は、十六夜の提案により、アベドルト平原の魂を鎮める生贄として処刑されることになりました。」

ルナファラの十六夜を使った“自殺する”計画は、こうして成功したのだ。

すべてはルナファラの計算の通り、彼女は死に、王国は崩壊し、新しい姿へと蘇った。残虐で不平等で理不尽な国家から、理性的で平等で平和な国家へと。

そしてその、ルナファラの理想は、千年もの間も続いている。小さな内乱もいくつかあったが、それは世界的にみて稀なほど“豊かで幸福な”国の姿であろう。

「どうして、生贄になったの。」

ユズが疑問の声をあげた。全ての常識を覆されて、彼女は打ち震えていた。今にも涙を流してくず折れてしまいそうな彼女に、ルナファラが言う。

「わたしは、償いをしたかったです。そして、」

――人を、救いたかった――

なんて清らかで、なんて醜い欲望だろう。

慈悲の心を持ち、癒しの存在となるために、彼女は欲望を肥大化させ、見事に永遠に等しい形へと成したのだ。だが、それは

『・・・助けて。』

ディノは、再び十六夜を見つめた。

十六夜の蒼白の唇が、小さく動いている。ぼそぼそと、うめき声にも似た声が、雫のように滴る。

だが、それは十六夜の「青年の」声ではなかった。幼い、本当に

幼い、性別さえ分からぬほどの声。

『……たす、苦しい苦しい……いたいよう、いたいーいたいー……』

「どうして、」

「どうして、俺達を呼んだ。どうして、封印が崩壊してる？」

十六夜が頭を押さえ込む。ディノはそれでも、続けた。

「どうして、風馬の初代の長がここにいる？」

十六夜が頭を抑えながら蹲る。苦痛が、彼を襲っているようだ。

「彼は柱です。私が怨念を寄せる贅で、彼は怨念をひとつに纏めるための柱なのです。そして、封印がなんらかの原因で弱まり、柱はバランスを崩しました。邪念に、取り込まれてしまった。だが、私はバランスが壊れ、無闇に膨張しはじめた怨念を浄化する力がないのです。」

しばしの沈黙。

あの猪突猛進なディノでさえ、なにか考え込んでいる。

「……そうか……分かった！」

沈黙を切り裂くように、ディノは考え込んでいた表情を取り払った。

「それで、俺達を呼んだってわけだな？　つてか、なんだかハズレくじでも引いたみたいな感じだけど。」

ディノは適当に伸びをすると、剣を再び握り締めた。

「協力、してやるよ。」

「ディノ!？」

ユズが声をあげた。ディノはユズの方を向かずに、背中だけで答える。

「風馬の成人の儀式は、封印を整えるもの。だけど、封印が壊れるんじゃ、成人の儀式は出来ないだろ。…可愛い妹のためだ、協力してやるーじゃん!」

「ディノ・・・。」

ユズは、ディノの言葉に思わず赤面した。なんだか、気恥ずかしかった。

久しぶりに帰ってきた放蕩兄貴がこんなことを言うとは、想像していなかったのだ。恥ずかしい、そして何より嬉しかった。

確かに、このままでは風馬の顔に泥が塗られるだけでなく、周囲に怨念が撒き散らされる恐れがある。だから、協力する以外に道はない。それにしても、やはりというか・・・ユズを見捨てない情の深さに少し胸が熱くなる。

里では喧嘩ばかりだった。知能の低い喧嘩ばかりしていた。でも、それでも、兄弟という絆は深いものだったのだ。

まだ、ルナファラに不信感を持っていたユズであったが、それでも気持ちは爽やかなものへと変化していた。

が。

しかし。

「ちよつとまって。」

突然、疑うような表情になる、ユズ。

「なんだよ、ユズ。」

「あんさあ、わたしの前に成人の儀式をしたやつって、ディノだけだよな？」

「……………」

笑顔で停止するディノ。

「ディノ、もしかして羽化の踊り…間違えまくったんじゃない？」
「……………」

「だから、封印が、」

「だああああー！！！！」

ディノは、ユズの詰問を遮るように突然さげんだ。

「やる気出てきた！やる気出てきた！俺なにすればいいの！？」
「は、話をごまかすなあゝゝ！！」

「ええと、」

見かねたルナファラは、ひとつ咳払いをすると、三人を見渡した。

「聖なる女性に力を与えられましたよね？」

「ああ、これのことだろ？」

ディノは、仄かに輝く大剣を掲げあげた。銀色の鋭い輝きに添うように、聖なる光の瞬きがある。強い力を感じた。
「それで、」

「十六夜を食い止めてください。」

「へ？」

ディノのすつとんきょうな声とほぼ同時だった。

十六夜が突然、顔をあげたかと思うと、ディノへ接近。怖気はしる殺意を感じて、ディノは剣を振り下ろした。

ガキイイーン！！

剣と剣がぶつかり合う音。十六夜の腕には、細身の刀が握り締められていた。

目に、覇気が無い。だというのに、殺意だけ皮膚から、髪の毛から、溢れてくる。大勢の人間に囲まれて、処刑を待つ人間とは、こんな気持ちなのだろうか。無数の視線を感じる。これは間違いなく、怨念たちのもの。

ディノはいったん、間合いを取るべく後ろへと飛んだ。十六夜も同じく。等しい間合いが生まれる。

「あんたの中に、いったい何人の人間がいるんだろうな・・・」
十六夜が、無表情でディノを見つめている。さきほど垣間見えた彼の心は、怨念たちに奪われてしまったのだろう。

殺意だけが、部屋を満たす。

「まあいい、かかってこいよ！！」

ディノは、十六夜めがけて走り出した。

ディノと十六夜の攻防。

一気に十六夜に近付き、まず第一手として垂直に剣を振る。刃はいとも簡単に弾かれ、ディノは即座に後退した。鼻の先を銀の光が

かすめる。

二本の細身の剣。

刀と呼ばれる、クナイと同じく風馬一族独特の刃だ。遠く西の地から伝わる、よく風を斬り、軽いが丈夫な剣である。

スタンダードな形のものだが、邪気のためがまがましく感じた。

「イヤミだな」

太古から怨念をしずませてきた風馬の剣を、怨念に操られた風馬を作った男がふるう。

「こてんぱんにしたろーじゃんつ。」

十六夜の追撃。

それをデイノはかわし、剣を横になく。

十六夜、回避。二本の刀を交えて剣をとめ、反射のように刃を返す。デイノ、跳んでかわす。

両者一步もひかず、戦いは尚すすむ。

はぜる刀と刀の音を背にして、ルナファラはアーシェにとつた。

「聖なる女、あなたは私に協力してくれるだろうか。このような、私欲にまみれた私に。」

「わたしは…」

アーシェは一息おいて、

「わたしは私欲とも偽善だとも思いません。あなたが人を救いたいという気持は、徳を渴望したものかもしれませんが、あなたは自分を犠牲にしている。」

その答えに、ルナファラは頭をふった。それは否定とも、拒絶とも捕えられた。

「あなたはそう思うのか」

「ええ、にくまれ続けることは悲しいことです。それでも尚、背負う。現に多くの魂が救われている。救われていないのは、あなただけ。自分の責任だと、自分さえも呪うのは、偽善だと私は思いません。」

ルナファラは、思ってもみなかったアーシエの発言に、目を伏せた。長い睫に隠れた瞳は、幼い子どものものだ。

「利害は一致しています。ディノは契約のため、ユズちゃんは儀式のため、そして私は旅を続けるために。」

アーシエは腰を下ろしてルナファラを見つめた。

「頑張りましょう。」

「ええ。」

儀式の前夜で見た舞と音楽は、聖園の鎮魂術と同じものであった。その意味は、きつと。

「ルナファラ、あなたのかわりに。」

アーシエは目を閉じた。

魔法気流が喉をならしてアーシエの世界を包みこむ。

魔法は、巨大な蛇のように床だけではなく壁も天井もなめらかに這っている。

それらに、五感と、そして第六感が次第に委ねられてゆく。意識

が、ゆっくり溶けこむ。肉体の感覚が失われてゆく。記憶だけのいきものになる。

なんという激しい魔法の乱気流。

アーシェは自分の意識が紙くずとなつて闇の中でもてあそばれるのを感じた。

まるで頭をかきまぜられているみたいだ。びりびりと、意識を引き裂かれる。

アーシェは必死に自身を想像し、或いは思いだし続けた。

毛の色、肌の色、瞳の色、血の色。

自分を保つために、摩擦される自分をたぐりよせる。分裂する自分を掻き集める。

様々な記憶の嵐だ。

ありとあらゆる歴史、何千何百という人生が肉体を失つてもなお喚き、抵抗している。

雷雨のような怒り、にくしみ。残酷な最期がそえぎとなつて瀑布となる。無数の悲しみがアーシェの記憶となつて体を強かに叩き続ける。

アーシェは感情の深淵へと落ちてゆく。アーシェのものではない人生が、記憶が、アーシェのものとして次々と想起される。

あの日、アーシェは、年老いた母をくちべらしとして山に捨てた。

次の日、親友を裏切り兵士に密告し、銀貨をもらった。

昨日は、地主の畑から野菜を盗んだために、病気の子を馬に牽かれた。

そして、手を縄で繋がれ鞭でたたかれながら、草原を歩いた。真つ青な蒼い空は昼間は燃えるように暑く、闇は悪魔のように冷たくさめた。

あの日、あの時、その日、その時、それまで、それから…。

違う。

それは私の記憶ではない。

私は、私のなまえは…

「アーシェ」

振り替えると、

そこには、母がいた。

母は、優しい姿をしていた。

鱗と長い爪を光らせ、腹部に触れると温かい。私は抱きついて母の肌に頬をつけた。

「アーシェ」

母は、産まれたばかりの鳥の柔らかさを持つ翼で、私を抱き締めると、歌を歌う。母の歌を聞くと、誰もが悲しみから救われる気がする。

「アーシェ、」

おやすみなさい、
おねむりなさい、と。

「生きることは死ぬことと似ている」

「どんな英雄もつちくれとなり、空しさはふと顔を出すでしょう。
なぜ生きるのか、なぜ死ぬのか、それさえも生き物たちは分からないでしょう」

「ですがそれでも、生き物たちは生き続けようとしています。魂だけとなつて、それでも生き物は繋ごうとするのです。死に続けても、生き続ける。生きること、全てがあるからです。」

おやすみなさい、
おねむりなさい。

「生きなさい、全てをみるために。」

「生きなさい、全てを感じるために。」

たとえ、世界が
悲しみばかりにみえても。

少しずつ、視界が白く染まってゆくのをアーシエは感じた。ミルクのように甘い眠りが、アーシエをゆっくりと包んでゆくのだ。
アーシエは繭のように、丸まる。丸くなり、丸くなり、指を失った。

次は足を失い、やがてアーシエは腕をうしなった。

なんという、優しい落下だろう。

落ちてゆく、落ちてゆく、落ちて…

「スピカ」

アーシェは、糸がはりつめてしまったかのように止まった。

「スピカ…」

アーシェは気付いてゆく。この白い世界は、眠りの世界ではないことに。

アーシェはだんだんと気付いていった。

自分が、光のなかにいることに。

目を開くと、アーシェは朝のこもれ日のなかにいた。

見渡すと、懐かしい感覚が胸をくすぐった。自分がいる場所に、アーシェは覚えがあった。

空中庭園。

聖園の最上階にある、無数の花がゆれる園だ。円を描くように育てられた極彩色からは、心休まる麗しい芳香が揺れている。

アーシェは花の香りを吸おうと、無心の中で体を前に傾けた。

瞬間、グラリ、と体が大きく倒れそうになり、のけぞった。
なんとか、安定する。

なにごとかと自分をよく見ると、まだ繭のまま手足がない自分がいた。

そうだ、私には手足がないのだった。

「スピカ、」

自身の名前を呼ばれて、反射的に目の前にたたずむ人物の名を呼んだ。

「ルナファラ。」

ルナファラは、小さなその手で黄色い花をつまむと、花びんをぶつと千切って私の頭の上に置いた。

「あなたの綺麗な水色の髪には、色鮮やかな花がとても似合うわね。この庭はこれからあなたのものよ。良い庭師を雇って、けしてからしてはいけないのよ。きつと花の香りに誘われて、素敵な男性たちにモテモテよ。」

ルナファラが私の髪をなでる。私には、それがとてもこちよかった。

「この庭はあなたのものよ。それに、手足のない醜い怪物に寄り添う男性なんかいないわよ。」

「スピカ、あなたは自分を知らないだけよ。あなたほど美しくて可愛らしい女性は世界中を探したってどこにもいないのよ。それにもう、あなたたちが怪物と呼ばれる時代も終るのだから。」

「私はずっとルナファラの側にいるよ？」

私は、まっすぐにルナファラを見つめた。ルナファラは、私をずっとみている。穏やかな瞳で。

「同じ力をもったあなたは、私の最高の友達よ。だけれど、新しい時代に、私は必要がないのよ。ヒュームの王の血は、必要がないものなのよ。ヒルドが王になるとき、私が生きていては彼は王にならないのよ。」

私に優しく言ってもだめなのよ。私は必死に、ルナファラに訴えた。

「そんなことないわ、きつと兄さん達がなんとかしてくれるっ。右の兄さんも、左の兄さんも愉快な兄さんなのよ。なにより、賢いのきつとヒルドにだって、」

「ヒルドは私を許さないわ」

私は、涙がこみあげるのを感じた。

「あなたは頑固で我儘だわ」

「そう、あなたとそっくりね」

ルナファラは私をぎゅっと抱き締めた。

たぶん、抱き締められるのはこれが最後だ。私に抱き返す腕があればいいのにと悔しくなるのも、きつと、本当に、最期だ。

「聖園の物語を覚えている？」

「ええ、覚えてるわ。」

「悪い魔女が死んで、生き物たちは歓喜の声をあげ、竜が空を飛ぶの。そのとき、乙女は聖なる世界の管理人になるのよ。」

ルナファラが、約束、と呟く。私は懇願した。最初で最期の奴隷からお願いだった。

「歌って、ルナファラ。あの歌を歌って。ルナファラが作った、世

界が微笑む歌を歌って。」

ルナファラは私から手を話すと、立ち上がって歩き出した。歌を、謡ながら。

新しい時代の、母の歌を。

「これ……」

ユズはその音楽を耳にして、目を見開いた。耳に覚えがあった。幼い日から、産まれる前から何度も何度も聞いていたあの歌。

驚いて見渡すと、歌っているのはアーシェだと分かった。黙祷でもしているかのように暗くうつ向いて、だが軽やかに歌を歌っている。正確にいうと、それは歌ではなく、不思議な音律の流れ。人から人へと伝わるには困難なおと。

間違いではないかと思い、耳をすました。だが、間違いではない。風馬ではないものが、あの歌を歌っている。

「羽化の儀式の曲だよ、アーシェ。」

ユズの胸元に、熱い鼓動が宿っていく。頭より体が、体よりも魂がその音を知っていた。聖なる力が魔法を媒体としてゆっくり大地を流転するのが、心臓で理解できる。

「ルナファラは、私は……」

ユズは考えあぐねていた。迷って迷って決めかねる答えを、大人たちは守るべき者を背に簡単にきめてしまう。

それは正しいの？間違いの？それとも、正しいも間違いも当てはまらない何かがあるの？

アーシェの歌声を源に、魔法陣に光がとり始めた。蛍のような光は、規則もなく炎のように力をだす。その光に、誘われるように、それぞれと動くモノがあった。

怨念だ。

怨念が壁や魔法陣から、生えてきていた。それらはまるでいもむしのようにうねり、部屋の表面を舐めるように這う。

なんとということだ。魔霊窟全体、そして草原の彼方から誘われた怨念が、この部屋に終結している。彼等はもちろん、アーシェを endpoint としていた。

彼等が来るのを予測していたのだろう、ルナファラが再び飛ぶ。体を大の字に伸ばし、髪の先にまで念を送る。

『怨念たちよ、私はここだ』

怨念たちはルナファラの存在に気付き波打つと、ひとつの意思を束を形作る。ルナファラは、自らを餌としたのだ。

束は巨大な蛇となってルナファラに襲いかかる。その光景は、荒れ狂う海を必死で逃げる小舟に似ていた。今にも、吞まれてしまいそう。

意を決して、ユズは結界を飛び出した。

パリパリと結界が破れてユズに絡み付く、それを手で払いながらルナファラへと疾駆する。

「かとの術っ」

ユズは指先で簡易な魔法陣の印を組んで空中へと向けた。途端に、印の中から拳ほどの火の玉が生まれ、大蛇へと飛込んでゆく。

ぼんっ、と大蛇の一部が小さく爆発し、散る。だが、大蛇を目の前にして、ユズの幼い術はさほど効かない。

「怨念って、本当に厄介！」

ユズは二本のこぶりな刀を取り出すと、構えた。

「危ない、逃げるのですっ。あなたには倒せません！」

「いやだ！」

気持ちが駆け出し、もう止まらない。なにが正しい、なにが間違いだと考えるよりも、自分の体と気持ちの方が、もう強かった。

「逃げないよっ、来い！」

大蛇が、とぐろを巻いてルナファラからユズへと方向を転換、飛ぶ。

ユズは息を整えると、その時を待った。大蛇の動きと、あの曲だけに集中して。

「いいい…きつつっ！！」

猛烈な風の摩擦音。

耳を引き裂くような音のなか、ユズは目をひらいて己のやいばを見た。

やいばが、怨念を確かに捕えている。思ったとおり――。

「弐！！」

ユズは剣を斜め上になぎく。怨念の鼻先を、ユズの刀が確実にそぎ落とす。デイノの剣とまったく同じ効力をもって、ユズの剣が踊り上がる！

ユズは、剣舞いをしていた。

その舞いは、風馬に、そして聖園に、音楽と共に引き継がれた古い舞。

「あれは、羽化の舞…、そうか。羽化の舞をもって、部屋に散らばる聖紋の力を呼び寄せたのですか。」

ルナファラは息を飲んだ。

羽化の舞で封印をしていたことを知り、逆に羽化の舞で聖なる力を引き出せると推測して、大蛇を誘ったユズの賢さと度胸に、ルナファラは驚いた。

だが、舞という制限された動きの中で戦うのには無理がある。その内、制限された動きに敵も気付くだろう。あくまで、時間かせぎだ。

「うあつ！」

デイノの声。

デイノの剣が、十六夜の刀に弾かれた。

隙をねらって、十六夜の突きが繰り出される。デイノは体をのけぞり二対の突きをなんとかかわすが、脇腹を浅く切られる。

後退。

遠くまで飛ばされた剣をとりに行きたいが、それを十六夜が許さない。

デイノは十六夜の刀を体だけでかわしてゆく。二本の流れは素早

く、かわすと次々に皮膚を切られた。
血がにじみ、瞳に入る。

「ちっ、」

息が次第にあがってゆく。剣がないことで一気に増大した運動量が、容赦なく体力を削ぎおとしてゆくのがディノには分かった。せめて、剣をとれば――。

その時、ディノは転がった剣に近づく人影を目にした。

ルナファラだ。

ルナファラは、剣を手にすると、ディノへとすぐさま向かう。

「来るなっ！」

気付くと、ルナファラの目の前に十六夜がいた。十六夜のなんの感情もみられなかった瞳が、ルナファラを目の前にしてその色を変える。

「し、ネ……」

十六夜の刀が、大きく掲げられ、そしてルナファラの頭へと一気に落下する。

ルナファラは、目を閉じた。死を、そして全ての破壊が瞼に映った。

…だが、ルナファラの予測と違い、最期の時は訪れなかった。

かわりに、光が。
光が訪れていた。

「古の浄化、刹那は積雪となって石と還る。血脈は踊り出て蜂起する、誘う争いを」

「尊父と母堂は血を混ぜて我等をつくりて轍をなすだろう」

アーシェが、歌っている。

「呪いは呪いのまま、十六の夜に掲げよう。朔の年がまた始まる」

「空を欲するなら、さあここにおいて」

あの、歌を。

アーシェはそれまで閉じていた瞳を、かっと見開いた。

「天・逝・儀・廻……!!」

白。

そして全ての色。

アーシェの歌が発動した瞬間、極彩色が周囲からほとばしった。聖なる力と魔法が大気となり颶風となって、生き物のように魔法陣を駆ける。湧き水のように光が伝い、溢れる。疾風は雪崩のように部屋を飲み込んでゆく……!

「わっ!」

巨大な流れはあっという間にユズ、ルナファラ、ディノ、そして

怨念たちを抱擁する。身構える隙さえあたえず、全てが白と変わる。
…全てが。

やがて、人々の歡喜が聞こえた。

肉体に植え付けられた苦痛により魂に生まれた歪みをほぐされた
人の喜びの声が。

記憶と哀れみの浄化による解放はしここの喜びを与えて、彼等を
安らぎへと誘う。

忘却の旅路へと。

…痛くない、

…苦しくない…

千年もの長きをかせられた重圧が、砂のように崩れてゆく。
今まさに、怨念もまた、光に変わる…。

そこには、静謐があつた。

体と世界の境界線を失った、穏やかな静けさに抱かれているのを、
感じた。

まるで海におちてゆくようだった。
息苦しさのない、大海。

…。

誰かが、自分の名を呼んでいる。

…い…。

顔をあげて見ると、水面とも雲海とも見える光の戯れがある。
とはいっても、それが上なのか下なのか、真実は定かではなかったが。

芯から暖まれる熱が、頬を撫でる。

…い、ぞ…

光は、誰でもない、自分の名前を叫んでいる。名を呼ぶ声の主は姿なくともすぐ分かる。

―ルナフアラ。

俺は、自分の名前を呼ぶ、あの人に答える。

ああ、あなたは微笑んでいるのか？

…これより十六夜…

ようやく、姿が見えようとしていた。乳白色の霞のなか、ゆつくりと近付いてくるあなたを感じた。

俺はずっと、狂っていたような気がする。あなたとの誓いを、忘れてしまっていたような、あなたを悲しませていたような、そんな気が。

―ルナフアラ―

あなたを抱き締めるために、もう一度この腕をひろげよう。
もう一度あなたに出会おう。

もう一度。

―もう、大丈夫だよ―

「くあ、」

どれほど、光のなかで呆然と立ち尽くしていたのだろうか。ディノはまばたきをして、ゆっくりと光の荒波で奪われた景色を取り戻していった。そうしてようやく、自分がどこに立っていたのかに気付くと、ディノの意識が鮮明となり、なにが起こったのかを理解する。

周囲から、邪悪な念が跡形なく取り払われていた。

「アーシエ、ユズ！」

ディノは、寄り添うように倒れているアーシエとユズに近寄ると、その体を揺さぶった。

「ん……」

刺激で、アーシエとユズが覚醒する。すぐさまアーシエは上体を起こすと、陣は、と呟いた。

「成功したみてーだ。」

ディノの歯を出した笑みを見ると、アーシエは力を失って再び横になる。

「大丈夫？」

ユズがアーシエの体をさすると、

「ええ、それより……」

アーシエは、そのかそけき人を見やった。二人も倣う。

視線の先には、あの二人が寄り添うように佇んでいた。

「ありがとう、聖なる女性……いいえ、アーシエ。そしてユズ、デイン。」

ルナファラが真摯さの光る瞳で穏やかに見つめ返す。その細い肩に、十六夜の手があつた。

十六夜が口をひらく。先ほどの声とはちがう、少しかすれた男性の、ひとつだけの声をもつて。

「少年、怪我はないか？」

「ないよ。死ぬかと思ったけどな。」

デインがおチャラけて両手をあげると、十六夜が小さく噴き出した。

「君は愉快的な男だな。そうか、それなら良かった。……君は、強いな。」

「あんたもな！」

デインの心には、大きな満足感があつた。強い者と……しかも本来なら剣をあわせることなど不可能な存在と剣を交えられた喜びが、彼の中で大きく弾けていた。

それは十六夜も同じことだろうか？何故なら、二人とも同じような表情をしている。遊びに疲れて倒れこんだ子供のような表情だ。

「……いつか君は私を超えるだろう。そして風馬の務めを越えて、君の力は世界に必要なとなる。」

「寝めすぎだぜ……」

「そのうち、分かる。」

「……どういう、こと？」

十六夜の言葉に、ユズが問いかける。十六夜はその問いに答えず、かわりにルナファラを見やった。促されるように、ルナファラが頷く。

「世界の魔法気流に異変が生じています。平原の封印を壊すほどの強い異変が。」

ルナファラの言葉は、予想外のものだった。

「なんだ、俺のせいじゃなかったのかあ。」

ホッとするデイノに向けられるユズの冷たい目。それをごまかすように、デイノは瞬時に真剣な顔を繕った。

「なんでだ？」

「理由はわかりません。ですが、封印にこれほどの影響を与える魔法気流の変化は、長い人の世において一度もありません。今は枯れ果てた大地となった隣国バーミアでの魔法戦を彷彿させる乱気流です。」

隣国、バーミア王国。

貿易により栄え、広大な国土と強大な力を持って世界に名を轟かせていた国である。あの長いゼルダ街道の製作も、バーミアの力によるものだ。ドラグノアはバーミアと共に栄えたと言っても過言ではない。

だが、遠い日に起こった激しい内乱において、かの国は草木の生えぬ灰色の大地と化した。すべては、莫大な国財を魔法につぎ込ん

だためであつた。魔法の激しい気流の乱れに、大地が崩壊したのだ。内乱は大地の崩壊と共にその炎を弱め、万を超す難民を生み、国を巻き込んで消滅した。

かつて栄華を極めたバーミアの王国は、いまは熱砂の吹き荒れる遺灰の大地だ。

「世界は、やはり灰の大地のようになるのでしょうか。」

アーシェが暗い表情で呟く。

ディノは戸惑った。

やはり、とは、どういうことなのか。アーシェはまだなにかを隠しているのか？

「分かりません。それを知るために、あなたは月へと赴くのでしょうか？」

どうしてそれを、というアーシェの言葉を、ルナファラは腕で遮って

「あなたが教えてくれたのですよ。強い決意が、私には聞こえます。」

ルナファラは深く礼をした。

「同じ力を持ち、スピカとイエズガルドの教えを受け継ぐひと、私はあなたの旅の行く末を聖なる園と共に見届けましょう。」

アーシェもまた、同じように礼を返す。…失われた記憶の世界でかいま見た、ルナファラの生き方に敬意を表して。

と。

突然、十六夜が腕をかざして思わぬことを口にした。

「…では、踊ってくれないか。」 かざす彼の片手は、ユズに向か

っている。

「へ?!」

ユズは驚いて飛び上がった。

「こらこら、成人の儀がまだ終わっていないだろう?」

「「「あ」」」

ユズ、ディノ、アーシェの三人がまったく同時に声をあげる。三人とも、すっかり忘れていたのだ…。

「封印はもう大丈夫。千年の時の緩みも強く結ばれた。心行くまで踊りなさい。」

「…はい!」

ユズは十六夜の言葉に強く答えると、剣をかざした。

その瞳に、もう迷いはない。前夜祭、星の流れる空の下で抱いた不安も焦燥もそこには塵ひとつなかった。

大人ではない、女性でもない。それらを超越した、高みがあった。

…人間に、成る…

成人となったユズの舞が始まる。

凜と張りのある声が、まんをじして封印の上で弾けとぶ。

「…壺!」

草原は哭く。

緑と土の屑の間をぬぐい、時が流砂のように流れる。時と時は時よりその頬を抱き、その肩を噛み砕き、舐め、せつなげに哭く。

栄光と秩序、汚穢と悲壮の上に構築される新たな歴史を思つて、ただひたすらに哭く。

昨日、今日、まだ見ぬ明日へと。

ビュー、ビュー…。

それは生ける者への、逝ける者への、餞のようだ。

ビュー、ビュー…。

草原は、哭く。

侵食をもつて優しく大地を弔い、雨嵐をもつて優しく大地を産み落とす世界の中心に。

まだ見ぬ明日は極東からやってくる。まだ見ぬ明日は極西からやってくる。ひそめあい、ざわめきあい、人の世を跳躍する。

山よ、谷よ、海よと。

ビュー、ビュー…。

人はそれを、風と呼んだ。

「十六夜は、ルナファラのことが、好きだったのかな？」

獣の背に乗って、風の民が呟く。

「さあな、しらねえよ……」

誰かがそれに答えるも、声を風がまきとって、天へ天へと昇らせる。天にはもう、濃紺がそのマントを広げ始めていた。

何もかもを見知った時間たちは、何もかもを語らずに天空の藍に溶けこんでゆく。

そしてやがて、全てが黒をおびた。時は結合し、その身を明日に委ねてゆく。ふつつつと、静かに明日が構築される。

――私はあなたを殺し続ける――

――私はあなたを愛し続ける――

ルナファラ享年12歳。

草原だけが哭き、歴史だけ横たわっている。

風馬の里。

明るい食卓の光の下で、キリアが大声を張り上げた。

「なんだって！？そんなことがあったのかいつ。」

キリアはユズの話に驚いて、スープを溢した。スープがみんなの顔にかかる。

「おや、ごめんよ。それにしてもびっくりだ。あの場所にそんな秘密があつたとはね。」

「初耳……」

キリアの寡黙な夫、キリコがボソリと呟く。

「そんな中で式を無事にやりおえるなんて、さっすがユズだ。素晴らしい！」

「えへへ」

口の中にスープを入れながらユズは満円の笑みを浮かべた。

「まあ、話は所々秘密にしないとイケないね。魔法気流の変化があるってのは巧くみんなに伝えなきゃイケないとは思っけれど」

「なんでだ？」

「デイノ、よく考えな。ルナファラの封印は怨念のためのものだ。そのルナファラが聖なる力をもっていて、自ら人柱になったなんて伝承が伝わったら、今までルナファラや十六夜の願いが水の泡になっちゃうんだよ。」

水の、泡。

怨念はルナファラを恨み、そのお陰で怨念はそれほど人に影響を

与えない。だが、ルナファラがひとたび聖人として扱われたら、怨念たちは散々になる。

「ディノって馬鹿なんだー」

「うっせ、ユズのくせに」

「あーら、落ち着きのない大人だわー、本当のこといっただけなのに」

ユズの方が言葉では一枚上である。

「でも、成人の儀式が無事に終って良かった」

アーシェの言うとおりだった。あのような状況で大した怪我もなくすんだことは、奇跡に近い。なんせ千年の時をおいても尚、力を示す印と念を相手にしたのだから。

「なあ、アーシェ」

「はい」

「月に、本当に行くんだよね？」 ディノの唐突な問掛けに、アーシェはしばし沈黙してから深くうなづいた。

「はい」

「そっか」

ディノの頭の中には、あの言葉が何度も巡っていた。

―世界はやはり、灰の大地のようになるのですか―

―分かりません。それを知るためにあなたは月に赴くのでしょうか―

最初、アーシェと出会った時は、ただの家出少女だと思った。無謀なことを言い、現実と夢を混同した愚者だと思った。

「まあ、頑張ればいいさ。あんたが死のうが行きようが、俺には関係ないからな。」

そう、ディノは吐き捨てた。

「……だけど今は、ただの夢追い人には思えない。彼女の中にある誓いと決意、そしてそれをたぎらせる大きな勇氣に触れたからだ。」

「月に行けば、すべてが分かるのか？」

「ええ、伝承によるとそういわれています。月には、全ての歴史、全人類の記憶があると。」

エターナルレコード、と、クリアが呟いた。

「聞いたことがあるよ。ルナファラによると、ただの話ではないようだね。」

再びアーシエは頭を傾ける。

「月に、行く……」

あ、あの感覚だ。そう、ディノは思った。

武者震いだ。

武者震い。

ディノの中で、マグマのように熱い血が流れ、心臓でドクドクと
うなっている。

剣と剣を交えるときに感じる緊張感に似た感覚が電気のようにピ
リピリと声をあげている。

信じがたい感覚を、ディノは全否定した。愚かなんだ、それは馬
鹿げてるんだ、と。

それほどに、強者が簡単に死んでゆく世界を見てきた。憧れてい
たラムシエムの傭兵や戦士たちが、つぎ会ったときは屍であったり、
片足を失ってただのゴロツキになりはてしまった現実を。

だけでもう、馬鹿気てると言えなかった。

そして心臓は、激しく高鳴っていた。

ディノはもう、気付いている。この感覚の正体を。

…退屈な日々嫌気がさして、里を出たあの朝に抱いていた感覚。
無我夢中で未来へ駆け出した、あの感覚。

目覚めろよ、と

自分が叫んでいる。

ドラゲノア旅立ち

風がひた走っている。

炎の竜が住まうという高い山脈から真っ直ぐに吹き降ろす疾風は、茂みを小さく引きちぎり香りを巻き上げて大地を駆ける。軽やかなそれは、幼い子どものようにでも、気高い青年のようにでもある。赤子の皮膚のように穏やかに繋がりにゆく世界を、冷たい手で触れる母のようでもある。

風はやがて草原を抜け、川を横切った。人の住処の近い僅かに汚れた大河を渡ると、疾風は強風へと姿を変えていた。そして力強さを得た風は、水田の上空を飛び、大きな畠を越えて、人の街に滑り込む。

ビュウ！

風が勢いよく窓を叩いた。

木杵が軋んで、泥棒でも訪問してきたような音を立てる。その音に、小首を掲げて反応する男がいた。

「風が、強いな…。」

18、19の若々しい青年だった。青年は書斎らしき部屋にて卓上に広げられた地図を折ると、窓の外を再び見やった。

彼の黒髪が隙間風に揺れ、長い髪から瞳が覗く。深淵を思わせる深いブルーの瞳。

その瞳の色のためだろうか？外見から判断できる年齢には相応しくない独特の空気を、青年は所有していた。

五十を…いや、百を越した者のような落ち着きが彼にはあった。まるで、『竜』のような…。

「ルキサまあ〜！」

一人の騎士が青年の部屋に飛び込んできた。

「どうした？」

飛び込んできた騎士は激しく息をしながら、青年・ルキ・に敬礼をした。青年より一回り年上のようなのだが、その姿勢には青年に対する敬意が溢れている。

「は！せ、聖なる祈り子アーシェ様の情報が入りました。予想通りです！」

「どの予想だ？」

「あ、はい、アルベルト平原ルートです！シンガに乗っている模様。引き続き鳥人族部隊が追跡。昼にはこちらを通ると思われます。」

「そうか。では、聖園に連絡を。配置はAで頼む。すぐに用意を。」
ルキはテキパキと騎士に指示を出すと、壁掛けにかけていた黒いマントを羽織った。

「ルキ様は？」

「私は……」

ルキは、卓上を見下ろした。地図のほかに、紙切れが一枚ある。その紙切れには、ある人物が魔法転写により明確に映っていた。

「……ディノ、か。運命とはかのように数奇なものか。」

青年は紙切れを摘むと、扉を勢いよく開けた。

草原。

風馬の里からはだいぶ離れた位置に、1頭の駆けるシンガがいた。

「だあかあら、なんだってそんなところに寄らなきゃあ行けないんだよ！三日も予定より遅れてるんだぞ！？」

ディノはシンガを猛スピードで走らせながら、背中を必死に掴む

アーシエに悪態をついた。

「でも、ルナファラ魔霊窟での封印に加えて、旅に必ず役立つものが手に入ったのですから、無駄な三日ではなかったでしょう?」
そういつて、アーシエは腰に下げた短剣を見下ろした。

清純な銀色の輝き。キリアがアーシエのためにとダークベアの爪で作ってくれた極上の剣である。

風馬の刻印が刻んであり、聖なる力をより帯びやすくなっている。風馬は基本的以外の者のためには剣を作らない。それは炎の魔法を使った独特の技術を外に漏らさないためだ。この剣は風馬に許された証でもあるのだ。

必ず無事に旅を終えるんだよ、とキリアに剣を握らされたとき、その思いに答えようと剣に誓った。その熱い気持ちで、剣を見るたびにこみ上げてくる。

「まったく、折角のダークベアの爪がお袋の味に早変わりってか、もつたいねーもつたいねー。」

「デイノ!」

「おこんなよ、そんなこと言うて寄りませんわよオネーサマ。」

デイノの返答に、アーシエの顔がパツと明るくなる。

「寄ってくれるのですか?」

「心優しいデイノちゃんは子守の才能に満ち溢れていたのであった。」

「ひょうきんというより馬鹿にしているのが丸分かりのデイノの態度に全く動じず、そればかりかアーシエは、突然デイノに抱きついた。」

「ディノ、感謝します！」

「わ、わああつ、あぶ、あぶねええ！！」

アーシエの激突にちかい抱擁にバランスを崩して落っこちそうになりながらも、一行は進む。

行く先はハシェイブ！…ではなく。

かつてアーシエとディノが住んでいた思い出の土地、ならず者の街『エドガー』へと。

エドガーはアドベルト平原の西に位置する。方角的には火竜山脈に最も遠い。

様々な人種が共存するドラグノアにある意味ふさわしい、身分も職種も何も関係がない、金と知識と力だけがものをいう町だ。

乱雑で、粗野で、だが賢しい。そんな人々が住んでいる。

だがそれも、昔のことだった。

「昔とは全っ然違うぜ、アーシエ」

ディノは人混みをかき分けながら言った。ディノの言葉に、困惑に顔を染めたアーシエが傾く。

街は、姿を変えていた。

布と岩に木を組み合わせただけの汚い下級社会の町並みは、煉瓦の美しさが輝く上等なものに。

石があべこべに並べられただけだった道路は、しっかりと整備整頓され、馬車が悠々と走れるほどに平に、広くなっている。

そしてなによりの変化は、歩く人々の服装だった。

人々は昔、必死に働いて流した汗により薄茶に染まった服をきていたのに、今は小綺麗な身なりで、過去の生活は跡形もなく消し去られているようだった。

「話には聞いてましたが、本当だったのですね」

アーシェは美しい町並みに喪失感を覚えた。

どこもかしこも芸術的な建物、そしてそれらに挟まるように息をするひと、ひと、人ばかり。

かつて歩き、かつて走った、小さい子どもには世界のすべてだった思い出の場所は、何処にもない。あるのは、記憶にはない、整えられた見知らぬ土地だ。

「騎士の駐屯地ってのは、こんなものだよ」

そう、ならず者がかつて集ったこの場所は、アーシェたちが去ってから半年後、その乱れを国に危険視され、人民保護の名の下に騎士団が置かれるようになった。

違法な店は摘発され、荒くれ者は捕まり、不衛生な建物は撤去された。鎮圧され、洗浄されて、街と人々は姿を変えなければならなくなっただ。

街の全てのスタイルが、根本から変えられてしまった。

以前のように、賭博に負けて昼から酒にあけくれる男たちが倒れていることはなく、娼婦たちが堂々と路地で体をくねらせることなく、商人や農民が路上でモノを羅列させて売ることもない。

それは風俗の死、歴史の死。

結果は、流麗とした都市、人。
けれど。

「すこし、寂しいですね」
まるで心にぽっかりと穴が空いてしまったよう、アーシエは呟いた。

「これでは、デイノもこの街のことを思い出せませんね」

なんだ、俺に過去を思い出してほしくて此处に寄ったのかよ。

アーシエの言葉に、デイノは思った。

迷惑な話だ。幼少の頃の思い出を想起させてなんになるのだろう。
俺に郷愁に浸ってほしいのかよ。

「なあ、街は変わっちゃったんだ。あんたの頭のなかにある街は、
もうどこにもないんだよ。」

アーシエがだんまりと頭をさげる。言わずとも。彼女にはショックだったのに違いない。

もしかしたら、話に聞いていた街の姿を、信じたくなかったのか
もしれない。自分の基盤を失うようで、怖かったのかもしれない。
遊牧民出のデイノでも、その気持は多少なりとも分かる。

…少し、いじめすぎたか。

「なあ、アー…」

「そのあんたたち！」

突然、デイノは立ち止まった。肩を捕まれたのだ。

見ると、覚えのない年老いた顔。赤に白の刺繍が入った綺麗な服
を着た老婦人だった。

彼女はひどく驚いた、だが嬉しそうな表情で、
「もしかして、……ちゃんと……シェち……じゃな……かい？」

人の波が激しい。

場所を変えようと老婦人に促されて、ディノたちは道の横にそれた。そして道の脇の、ある店に入る。

パン屋だった。

思わずよだれが出てしまいそうな色に焼けたパンの、こつばしい匂いが鼻に入る。

そのまま奥の部屋へと通される。どうやら、客間らしい。

「ちよいお待ちよ」

そう言つて老婦人は部屋を出る。ディノはすぐさま、アーシェに耳打ちをした。

「あのばあさん、一体なんなんだ？」

アーシェはディノの言葉にクツク、と笑つと

「今に分かりますよ」

と返した。

どういうことだろう。気さくさからか、ばあさんにホイホイついてきてしまったけれど、なんだか怪しい。

ディノがもんもんと猜疑心を高めていると、食欲をそそる芳香を籠に詰め込んで、老婦人が部屋に入ってきた。

籠の中には、きらきらと輝いたパン。すべて貨物種族ヒルポプスの形をしている。この形はイコール、中に甘い餡が詰まっていることを表す。

「うつまそう……！」

思わずディノは感嘆の声をあげた。

「ディノちゃんは昔から変わらんね」

その言葉に、ディノはクエスチョンマークを頭に浮かべた。
なぜ、このばあさんは俺の好物をしっているのだろう。

「パン屋のおば様、お久しぶりです」

—どうやら、知り合いらしい—

アーシェが会釈をすると、感極まったように老婦人は両手を頬にあてた。

そして、

「ああ、ほんとう久しぶりだねえ！

アーシェちゃんとっても美人になって、
本当おどろいちゃったよ！

すごい美人さんが歩いてるからすぐ気が付いたよ。

アーシェちゃんはエドガーで一番可愛かったものねえ！

ディノちゃんは男前になって、ばあは本当に嬉しくて、
ああもう、昔はこんなに小さかったのに！

すごく小さくてもう、

野犬に食われそうになるわ、

狂った売女に拐われそうになるわ、

その度に包丁もって追い掛けたもんだよ！

オルセさんが泣いてよく止めたもんだ、懐かしいね、

今度は包丁もって追い掛ける方かい？

たくましくなつたもんだ！」

老婦人は唾を吐きながら、きちんとした身なりなのに語るにつれて言葉遣いがどんどん汚くなりながら、早口で巻くしたてると、荒い呼吸で椅子に座った。

「ガサツでごめんね、まあ、あたしみたいな古い人間はさ、メツキみたいなもんだからさ。」

けらけらと笑うと、ゼーハーと呼吸をする。やはり肺に空気が足りなかったようだ。

「…懐かしいねえ…」

老婦人はうつとりと呟くと、今度は静かに、たんたんと語り始めた。

老婦人は、エドガーで昔からパン屋を営んでいた。そしてそのパンは、アーシエの育ての親…ガアプ、オルセ、キルアが作ったオリザ（穀物）を使って作っていた。ガアプたちは少ないものの、良いオリザを作っては、色々なところで売って生計をたてていたのだ。

老婦人とガアプたちは仲がよく、子どもがいらない老婦人にとっては、アーシエたちは本当の子どものように可愛かった。

それは街のひとたちにとっても同じで、子どもが少なく、世を捨て家族を捨てた孤独者の多いこの街では、アーシエたちは宝物と同じだった。

パン屋は、汚くて貧しいかったけれど、幸せだった。

だけどある日、死霊が街を襲った。その事件から騎士たちや聖なる者たちが増え、街は少しずつ、けれど劇的に変わった。

生活がよくなった。けれど何故だか寂しかった。

それは多分、あの荒れた街が大好きだったから。あの退んだ人々が大好きだったから。

乱暴で、惨めな街だったけど、誰もを受け入れる暖かさがあったのだと、老婦人は語った。

「ふふふ、最近じゃあ、昔の楽しかった日々ばかり思い出すんだよ。」

そう言われても、ディノにはピンとこない。

横に座るアーシェは老婦人の言葉に耳を傾け、しきりにうなづいている。二人についていけなくて、仕方なくヒルポスパンを黙って頼張る。

自分は知らないのに、他人は自分のことを知っているというのは、なんだか奇妙な感覚だ。しかも覚えのない幼年期で、ことのほか奇妙に思う。

「覚えて、ねーなあ」

ぽつんと呟いたディノに、

「あんたはよく、アーシェちゃんとルキちゃんについていったんだよ。おぼつかない足でね、泣き喚きながら追い掛けてったんだよ。あーちゃ、るきちゃ、って呼んでね」

手を広げ、バタバタさせる。顔はいかにも泣いています、といった顔。

老婦人の適切であろう描写に、ディノは不機嫌になった。

―覚えてないっつーの！

「しっかし驚いたもんだね、アーシェちゃん、その格好…」

老婦人はじろりとアーシェを見ると、

「聖なる者かい。やつぱりただ者じゃないと思ってたよ、おしとやかだし、気品があつたしね。さっすが、我れ等がゴミ溜めの姫様だね…おっと！」

口を押さえこんだ。

ゴミ溜めの姫様…街の人間にこう呼ばれていたのか。なんていうネーミングセンスだ。

「くはは、ゴミ溜めかよ！」

「デイノちゃんはゴミ溜めの怪獣だよ」

思わず、閉口。

「でも今じゃ、ゴミ溜めの、なんて言えないね。聖なる園のお姫様、そしてゴミ溜めの騎士様は、金の獅子…」

「ルキを、知っているんですか？」

「あつたりまえさね。ルキちゃんの出た騎士大会を見たけどね、すごいもんだつたよ。ドーン、バーンツ、女たちがキャアアア…つてね」

老婦人は両手を振ると、再びうつとりとした表情に収まった。その目元には、涙。

「みんな、立派になって…。これで、亡くなったガアプさんたちも安心だねえ。」

…え？

「二人で、お墓を拝みに来たんだろ、きっと喜ぶよ」

…—どういう、ことだ。

ディノはアーシェに視線を合わせた。

ガアプって人は、旅に出たんじゃないのか。
たちって、どういうことだよ。

けれど疑問の答えは得られない。目を、そらされた。

アーシェはディノの視線から逃げるように後頭部を見せると、そのままだ黙ってうつ向いてしまった。

アーシェは、沈黙したまま歩き続ける。

「どこ、いくんだよ…」

ディノの質問にも答えず、たんたんと進む。いつの間にか街から街外れの山へと、その足は向かっていた。

「墓に、いくのか？」

道の左右に、人の背丈ほどの白い竜の像がならべられている。この像の意味くらい、ディノは分かっていた。

これは、死者の道。

共同墓地へと続く道だ。

共同墓地はとても広く、大きかった。

中央に佇む竜の像を見上げると、真っ青な空の背景だけが横たわっている。

太陽に照らされ、きらきらと光っているが、苔むし、輝が入っていることからかなり古いものだろう。

墓地とあの街の規模にしては小さいといえる像。きっと、街が変化するずっと以前からあり、あの街に流れる時を見下ろしてたにちがいない。

アーシエは、下を見ながら歩き出した。

名前を探しているのだ。共同墓地のある一点には、埋葬された死者の名が刻まれている。

ガアプ

オルセ

キリア

「キリア！？なんで母さんの名前がここにあるんだ…！」
ディノは驚嘆した。

キリアは生きている。風馬の里で、今も生きていると言うのに、なぜ名前が掘られているのか。

「ここである日、三人は死霊に殺されたことになっているんです。」
「なんでっ、なんでなんだ！」

「…竜の血飲み子の存在を知ってしまったから、…神竜の死を知って、しまったから。」

…竜。

話には聞いていたが、冗談のような気がしていた。信じてはいなかった。それよりも。

「神、竜…」

呟いて、自分がより混乱するのを感じた。ディノはそう、他人事のように感じていたから。

おとぎ話だ、妄想だ。

ちがうのか？

人の死を偽造するなんて、ふつうのことではない。ふつうの人間には出来ない。

まさか、国が？

なんのため？

…噓、だろう？

アーシェが再び歩き出した。ディノはフラフラとした足で、その後についてゆく。

街を下りて、横断する。アーシェは、まるで住みなれた街のように歩く。道の流れは昔と一緒になのだろう。その足取りに迷いはない。人混みを抜けて、再び山を登り始める。

長時間の歩みなのに、不思議と汗が流れない。頭が真っ白だからだろうか。歩みもなんだか空気をかいているように感じた。いまいち感覚の掴めない歩行だったが、どうやら目的地につけたらしい。

そこは、民家だった。

石がくちて、所々くずれている。

作った者が専門の知識を何ひとつもたず建てたのだろうか、それとも雨嵐が激しく打ち付けたのだろうか。

はたまた、近代的なデザインではあるが実は何百年も前にたてられたものなのだろうか。

…まるで、魔物にでも襲われたように荒れている。

「ここに私たち、住んでたのですよ、ディノ。」
漸く開かれたアーシェの唇。

「家？ここが？随分とボロボロなんだな」

外にいるのに、居間の全容が分かるのは、大きくそげおちた壁のためであった。

壁と共に崩れたのか玄関が見当たらない。ディノは遠慮がちに穴から家の中へと足を踏み入れる。

生い茂る草に食われた家具が、この家に人が住んでいたことを肯定する。床がギシギシと腐った音をたて、カビの臭いがディノの鼻孔にふわりと入り込む。

「ここに、住んでた？」

家の中を歩く。傾いた壁、屋根に開いた穴から落ちる光、乱雑に詰まれたガラクタ。

そのひとつを、ディノは手にした。苔の生えた木彫りの熊。

「ここに……」

ディノ、と呼び止められ振り替えると、そこにはアーシエの柔らかな瞳があった。

アーシエ、俺やつば覚えてない……そう、言おうとした時だった。

ふと、不思議な感覚が、心臓を押した。

なんとも言えない奇妙な感覚が心臓から肺へとわたり、身体中の血管をめぐる。冷たさと温かさを混ぜあわせた、まるで春のような心地よさがディノの皮膚をなでさすった。

それが既視感だと知るのに、時間はかからなかった。

「あの日、俺は部屋からでた」

「ディノ？」

「だって、二人はずっと窓の外をみてて、俺、」
だから、

「廊下を、かあさんに抱かれながら移動した」

心配そうに見守るアーシエを無視して、ディノは歩いた。

「居間で、酒飲んてた」

居間には、ボロボロにくちた椅子と机、そして埃のかぶった酒瓶が転がり落ちていた。

それに目を落しながら

「酒くさいから、俺は母さんの方が好きだった。母さんは酒が飲めないひとだった、だから、」

あの日も顔をそむけて、

「デイノ」

「それが最後なんてしらなかった、わかんねーよ、だって酒くさくって、いつもどーりで、あの頃は誰かが急にいなくなるなんて分かんなかった」

「思い出したの？」

「友達に、会いにいくんだって、母さんは言ったんだ。だからみんなすぐに来ると思ったのに、だれも来なかった、さびしくて泣いても、誰もこなかった」

「デイノ？思い出したのね？」

「しらなかったんだ！」

デイノの一喝に、アーシェは体をびくりとさせた。かまわず、デイノはアーシェの肩を掴んだ。

「あの人たち、どうなった？」

「え？」

「父さんと、じいちゃんはどうなったんだって言ってたんだよー！」

硬直。

予想に反した反応だったのか、アーシエはそのまま、困ったように顔を螺子曲げた。

「なんなんだよ、あの墓。アーシエ、アンタは何を内緒にしてるんだよ、一体なにをしたいんだよ！」

ディノの罵倒に、アーシエは思わず視線を落とす。

…怒り狂うディノに萎縮しているのではない、彼女があることを言うのに戸惑っていることは、歴然だった。

アーシエは何故か、震えている…。

「アー、」

突然なアーシエの異変に、ディノが彼女の名をよぼうとしたときだった。

「父さんは」

アーシエの声が、ディノを遮る。

「父さんが旅に出たのは、本当なの。」

かすれがかった、耳をそばだてないと聞こえない、そんな声。

ディノは黙って彼女の言葉を待つ。ゆっくりと、だが確実に、アーシエは続けた。

「父さんは、私たちの秘密を守るために、都から姿を消したの。それは聖王と父さんの決断で、知ったのも父さんがいなくなっただけだったの。私たちは、ただの身よりのない子どもとして、聖園に受け入れられた。」

「じゃあ、あの墓は偽物なんだな？二人は、生きてるんだな？」

ディノの質問に、アーシエは首を振った。：左右に。

「違うの、それは違うの」

「なにが？」

アーシエは涙を目に浮かべ、そのまま手で顔をおおった。
そして、

「おじ、おじいちゃんは、わた、わたしたちを…」

：かばって、死んだの。

どういう、ことだよ。

「母さんに、嘘をついたのか？」

アーシエは黙っている。

「なんで嘘なんかついたんだよ。」

アーシエは尚も黙っている。ついにディノは声を荒げた。

「なんでそんなつまんねー嘘なんかつくんだよ！」

「だって!!」

アーシエの顔が、ディノの眼前にある。

アーシエは、泣いていた。

目に涙をためて、でも必死にこらえて、だけれど涙は流れて。

流れて。

「そんな悲しいこと、言えるわけじゃない……！」

…ああ。

その時、ディノはようやく思い出した。

—そうだ、この人は—

馬鹿みたいに優しく、
馬鹿みたいに強がって、
馬鹿みたいに他人を思い遣って、

…—こういう、人だった。

懐かしい感覚が、ディノの頬を熱くさせる。目に、喉に、耳の下に、不思議な痺れが走る。

ディノはようやく、思い出した。

「ごめん、アーシェ」

俺は成長していない。

あの頃のように、この人を簡単に困らせる、迷惑かけて、怒らせ、

泣かせて。

変なやつらに飴でつられて、
肉食マギフロッグの池に自ら飛込んで、
トイレに連れて行ってせがんで、

その背中に馬鹿みたいについてって、

そのくせ、世界は自分が主体だったんだ。怪獣の、まんま…。

「ごめん、アーシエ」

アーシエが首を左右に振る。

「いえ、いわなかった私が悪いのです。言葉にすることに恐怖した、
私が。」

違う。

母さんはあの時アーシエの嘘に気付いていたはずだ。だから何も
言わず、抱き締めたんだ。

ディノは…自分の愚かさに立ち尽くした。俺は、馬鹿だ。

「アーシエ。」

ディノに呼ばれて、アーシエは顔をあげた。おかしいことに、ア
ーシエの顔は困惑色に染まっていた。

「え？」

それは、ディノも同じだった。

沈黙の中、声を出したのはディノ。

だが、ディノの呼び掛けと全く同時に、違う声が響いたのだ。

アーシェの名を知り、親しく呼ぶもう一人の人間の声が。

「久しぶりだな。」

騎士。

一人の若い騎士が、いつの間にか部屋に佇んでいた。

深い青の制服に、黒っぽい紅のマントを着込み、胸に公章が輝く。宝石と金であしらわれたその公章は、獅子を象っている。

肌が白く、整ったその顔には、服と同じように青い瞳。黒髪の間でその瞳は、冷めた眼光を放っている。

アーシェには、それが何者なのか一瞬で分かった。都で一年共に過ごしたのち、離れてしまった兄弟。もう何年も会っていない、容姿もすっかり大人びた、…だが変わらない雰囲気、面影。

「ルキ。」

アーシェは彼の名を呼んだ。

「背が伸びたな…」

「当たり前じゃない。何年ぶりかしら？」

「随分だ。」

本当に久しぶりなのだろう、二人の会話はどこかぎこちなく感じた。

だが、すぐにそのぎこちなさは消えた。分からない空気感と、昔の懐かしい面影が循環し、二人を和ませる。

「ディノ、だね」

予想だにしなかった人物の登場で悲しみも自責も吹っ飛び、ただただポケーっと口を開けていたディノに向けられた声。ディノは思わず、はい？、と聞き返した。

「相変わらず、人の話を聞いていないな」

呆れる様な、小馬鹿にする様な表情。

「そうだ、こいつは。」

「…ルキは意地が悪い。」

「驚いたな、俺を覚えているのか。」

「意地が悪かったってことは覚えてるぜ。」

「良い記憶力だ。」

ルキは笑うと、デイノの頭をぐしゃぐしゃと回した。

「何すんだよ！」

「俺は意地が悪いんだろう？」

そう言っ て静かにルキは笑った。笑うというか、ニヤリと口を曲げた。

「やっぱ意地が悪い！」

「本題に入ろうか」

ルキはそう言っ と、突然アーシエに礼をした。騎士独特の、伸びた背筋を腰から曲げる礼。

「ルキ？」

戸惑う、アーシエ。かまわず、ルキは続ける。儀礼的な態度で。

「聖なる祈り子、アーシエ・ジジ。私は王属専属騎士団金獅子団員、国家騎士第七隊隊長ルキ・ノエル。」

「あなたを連れ戻しに来ました。」

「え？」

ルキは礼から体勢を戻す。そして困惑しきつたアーシエとデイノ

を交互に見やると、

「久方ぶりだが、時間は無い。準備をしてくれないか」

「どうして？私は祈りのために旅をして…」

「祈りは、誰でも出来る」

アーシェの言葉を遮るようにつむぐ。有無を言わせぬ、冷淡な瞳。アーシェは突然の出来事に戸惑いながらも、毅然とした態度でかえす。

「聖園からの許しは下っています。これは私の試練です。ルキには、関係ありません。」

「家族を、危険な旅に出したくはないんだ。俺も、聖園からの許可はとっている。」

ルキの背に騎士が控えているのが見えた。しらずしらずの内に、彼の隊の騎士たちに家を囲まれているようだ。

ルキは、本気だ。

「ちょっと待てよ、俺の仕事はアーシェをハシェイブに連れていくことなんだぞ？」

ルキの突然な行動に、ディノが体を乗り出す。

「ディノ、君の契約はここで終了しよう。」

「なんだって？」

「契約を破棄した代償は俺が払う」

ルキは腰から下げていた革袋をディノに握らせた。

ずしりとした感触に、それが大量の金貨であることはすぐに分かった。キャンセル料としては、あまりに破格であるということも。

「礼を言う。今まで、ありがとう。」

事務的な、言葉。

こんな契約破棄の仕方は初めてだった。
ディノはただただ啞然として、ルキを見上げる。ルキはディノとは視線をあわせず、再びアーシエに見直った。

「さあ、帰ろう」

伸ばされた手。

アーシエは後じさる。

「聖園も、聖王も君をとめたいと思っているんだ。君の選んだ試練は、今だかつて誰も乗り越えた者はいない。君の選択は、若気の至り。」

「そんなこと、ないわ」

「君は殺されにいくようなものだ。旅はもう十分だろう？さあ、帰るんだ。」

追うルキの手。

アーシエは後じさるのをやめると、前進した。

「私は、帰りません。」

「死ぬかもしれないんだぞ」

「結構です」

強い意思を抱いた瞳が、ルキに真っ直ぐ注がれる。

「私は、この旅を続けます。ここまで来る途中、様々なことがありました。私は、この旅の意味をより深く心に刻みました。戻りません、私は進む。」

鉄のように硬く、鋼のように鋭い誓いは、都からの旅を越えて、より強固なものへと変わっていた。

アーシエの意思は、もう誰にもとめられないのだ。

共に旅をして、ディノはアーシエの気持がどんどん強くなっていく様を、見てきた。その姿勢が、安易な考えから産まれてきたものではないと、ディノは分かっている。

「アーシエに何を言っても、無駄だぞ」

「その…ようだな」

ルキは小さく呟くと、こうべを垂れた。

止めることが出来ずショックだろう、そう思いよく見ると、…ルキの口許は緩んでいた。

予想外の微笑。その原因は、すぐに判明した。

「思ったとおり、アーシエは相変わらず頑固者だな。まったく、残念だ…。」

ルキは最初から分かっていたのだ。アーシエが自分を拒むということ。自分を拒み、旅を続けると断言することを。

「ルキ、ごめんなさい…」

「いや…良いんだ、アーシエらしいよ。だから、俺が来たんだ」

ルキは笑って、アーシエの肩を叩いた。真意の分からない言動に、えっ、とアーシエは首をかしげる。

「俺も、行くよ」

アーシエは、ルキの言葉に目を丸くさせる。

「どういうこと、ですか？」

「そのままの意味だ。君が試練に出ると聖王に聞いた時、君の護衛を申し出たんだ。だから、許しをもらったと、言つたろう。」

許可とは、そういうことだったのか。心強い兄弟の申し出に震えるように呟く。

「ルキ、それは本当？」

「なんだ帰りたいのか？」

アーシエは喜びに真つ赤にさせた顔を左右に振つた。

「ありがとう…」

ディノは頬を紅潮させるアーシエをじつと見つめた。

ルキがどれ程の実力を持つかは分からないが、かたい絆をもつ者が側にいて共に歩んでくれるということは、アーシエにとって有難く、なによりも嬉しい支えとなるに違いない。ディノにとってもそれは、喜ばしいことだった。

けれど。

嬉しさと同時に、ディノにはなんとも言えない冷めた感情が生まれ始めていた。真つ白な布に落ちゆく滴が染みをつくるように、ゆっくりと広がる重たい感情。

空虚だ。

何故か、空虚だった。

面倒な旅も終つて、大金だつて手に入れた。キャンセルされたとは言え、比較的大きな仕事を遂げたのだから、ランクだつてあげてもらえるかもしれない。

なのに。

どうしてだか分からない。今までにない感覚だった。体にぽっかりと大きな穴でも空いてしまったんだろうか…。

デイノ、と呼ばれ顔をあげると、アーシエが心配そうに顔をのぞいている。

「…なんだよ、見んな…」

なぜだかアーシエと瞳をあわせることが憚られ、思わず顔をそらす。

「デイノ…」

「よかったな、騎士と同行してもらえて、」

「ねえ、デイノ、聞いて」

アーシエの両手で、顔を真正面に動かされる。バチツと、目が合ってしまう。もう動かせなかった。

「…デイノと都で会えて、母さんが元気って分かって、いろんな人に会えて、ユズちゃんっていう、可愛い妹がいるって知って、」

「ルナファラさんのことや…十六夜さんのこと、辛いこともあったけど、」

「楽しかった」

アーシエの言葉がゆっくりと耳に入るのが分かるのに、頭や気持はぐちゃぐちゃで、ひどく遠くから聞こえる。

もう旅はおしまいと、言われてるのは分かる。

「おじいちゃんのこととか、内緒にしてごめんね。そのくせ連れ回して、ごめん。…ありがとう」

言葉が雪のように積もって、どんどん体が冷えてゆく。思考がだんだん白を帯びてゆく。

声がひたすらに遠い…。

けれど。

その言葉だけ、はつきりと聞こえた。

「ディノも来ませんか？」

無音の世界に、ひとつの音がポロンと弾けたようだった。

ディノはハツと我に帰り、聞きなおす。

「なに？」

「契約を延長する形で…来てくれませんか？三人がここで会えたことが私には、なんだか必然だったような気がするんです。おかしいことを言うなって、ディノは思いかもしれないけれど。」

「一緒に、旅をしませんか」

ディノは驚いて声をあげることが出来なかった。アーシェの提案に驚いたのではなく、自分の感情に驚いたのだ。

嬉しさという、意外な感情に。

繰り返されるありきたりな日々から逃れるように里という暖かい籠から出て、だけど彼に与えられたのは刺激的な生活ではなく、冷淡で残忍な現実だった。

夢を見れば盲ろうくし、自信をもって飛び出せば屍になる、世界の現実だった。

勝手に死ねばいい。

月に行くという無謀な考えを信じるアーシェに、最初そう思った。馬鹿だと心でさげすんだ。

なのにどうして、喜んでいるのだろう。ドキドキと鼓動を高め、頬は紅潮し、唇は気を抜けばゆるんでしまいそうだ。

それだけじゃない。

むしろ自分は、この言葉を待っていたようが気がした。ずっとずっと、アーシエの言葉を待っていたような気がした。

エドガーに着く前から、里に着く前から、街道を渡る前から…違う、そんなものではない。

…もう、何年も前から。

「あ、アーシエ、俺…」

掌が汗ばむ、体が硬直する。酷く頭が白く、世界でひとりにでもなってしまったように自分の体しか感じられない。ただ目の前に決断だけがあつて、それが自分を見下ろしている。

デイノは大きく息を吸う。呼吸の間、まるで仕方ないと誤魔化すように軽く決断へと踏み出すにはどうしたらいい、なんていうつまらない体裁が頭に浮かんだ。息をとめた。

そして、デイノは、ゆっくりと口を開く。

「駄目だ」

ズキン、とデイノの全身を冷たい刃が走る。突然、凍てつく海に投げ出された感覚。

中身の無い人形となって、デイノはソイツを見上げた。
「駄目だ、彼は連れていけない」

デイノの返答をさえぎるように声を出したのはルキだった。ルキは平然とデイノを見下ろす。青い瞳は氷のようにぞっとするイメージをもつて、デイノの前をさえぎる。

「どうして、どうしてそんなことをいうの、ルキ？」

アーシェが問いつめるようにルキの肩に手を置く。ルキは動じず、更に冷たく重い言葉を吐いた。

「足手まといだ」

はつきりとルキは言い放った。きっぱりとした明瞭な断言の声は、三人だけでなく、周囲を囲むルキの配下たちにも聞こえたに違いない。

失礼極まりないルキの態度に、アーシェが顔を高潮させてルキに向かう。

「デイノは足手まといにはなりません。ここに来るまでに、何度も私を助けてくれました。私はデイノがいなければ・・・」

「本当にそうか？」

ルキがアーシェに問いかける。

「聖園で優秀だった、魔法力にも長ける君が助けられた？本当に？」
問い詰めるルキから逃げるように視線を下に流す。

「ええ・・・。助けられました」

嘘だ。ゼルダ街道でも、里でも、最後に助けられたのは。

（俺のほうだ、アーシェ・・・）

デイノは身震いした。

ルキがアーシェをじつと見据える。数秒見た後、ルキは小さく冷笑を浮かべた。

「相変わらず嘘が苦手なようだな。俺と話すときは目を見ることだ」
通用しない。アーシェは目を赤くさせて更に俯いた。その様子に悪びれることなく、ルキはため息をひとつつく。そしてアーシェの手をとると、外へ出るよう促した。デイノに背中を見せて。

「まったく、最低ランクの傭兵もどきに命を救われたなど、聖園の名折れだ」

デイノは一瞬、耳を疑った。それはアーシェも同じことだったようだ。

もう数年も会ってはいないとはいえ、デイノは兄弟だ。ルキの言葉は、あまりにもデイノの気持ちを無視し、辱めている。

「ルキ！」

アーシェがルキを叱責しようとその腕を掴もうとしたときだった。「ふざけんな！」

デイノが猛然とルキに掴み掛かった。

だが瞬時にルキの身体が後退し、デイノはそのまま勢いよく床にぶつかる。

辺りにかび臭い粉塵が巻き起こり、周囲が茶色に染まる。だが、荒々しい剣幕のデイノはすぐに立ち上がると、床を蹴り上げた。

「やめて！」

アーシェの悲鳴のような声。声はすぐに巻き上がった塵で遮られた。次の瞬間、定かではない視界の中、どすと重たい音が響いた。ゆっくりと塵が風に流される。静けさと共に状況が理解を伴って朽ちた部屋を見下ろす。

先ほどの音を立てたのはデイノであった。そして、ルキの配下の者達だった。白い鎧で身を包んだ騎士たちが、青ざめた表情でデイノの身体を床に押さえ込んでいる。騎士たちの手には剣があり、その刃先はデイノの急所をいつでも突き刺せるように向けられていた。「デイノを離して！」

アーシェの訴えを無視し、刃は更にデイノへと近づく。ルキの命令ひとつでデイノは血まみれの死体と変わるのは必死だろう。

それでもデイノはルキを睨み付けた。拘束された自身の身体を怒りでぶるぶると震わせて。

・・・血のように赤いデイノの瞳は興奮でめらめらと燃えて光る。それとは正反対に、ルキの表情は平静そのものだ。だが、二人が獣のように牙を向け合っていることは誰にも分かった。空気はふとし

た瞬間に爆発してしまいそうなくらいに緊張している。

「俺は、足手まといなんかじゃない……」

ぎらぎらと殺意を放つ深紅の虹彩。しつとりと濡れるそれは、抱かれる感情に反して寶石のように美しい。

「お前に何が分かる……」

声色にさえ憎悪が渦巻く。赤く染まった幼い頬を一滴が伝う。それが床に小さな染みを作るのを見届けてから、赤い獣を平然と見下ろしていた青い獣は踵を返した。

「ならば、証明してみせろ」

背中が、離してやれ、と呟く。騎士たちはディノに警戒しながらも、従順にその刃の楔を離していく。

刃の全てが鞘に収められたのを確認すると、ディノは身体をあげた。アーシエは見計らって膝をつく、ディノについた埃を払う。だが、その手はすぐにとめられた。ディノが手首を掴んだのだ。

立ちあがる、ディノ。

これから始まることを予感して、アーシエはディノを見つめたまま首を左右に振った。それが見えていないかのように、ディノはおぼつかない足で歩き出す。

「せつかく出会えたのに、喧嘩しないで！」

庭へと歩き出したディノの背中にアーシエが叫ぶ。アーシエの必死の制止だ。ディノは立ち止まり、だがこう返した。

「これは喧嘩じゃない……決闘だ！」

ディノは走り出す。

すぐにルキの背中に追いつくと、右肩からのびる柄をにぎり、剣を振り上げた。

ディノの背と殆ど等しい剣が太陽の輝きを反射する。そして刃は

ルキの首筋めがけて振り下ろされた。

ガキイイーン！

鋼と鋼が互いの喉に噛み付く音。

横なぎに放たれるルキの剣は細い光を発してディノの身体へと飛ばされる。間一髪を飛翔してかわす。ディノはルキの頭上を高く跳び越すと、手入れが忘れ去られた庭に着地する。

「手を出すな！」

ディノの剣戟に驚いて飛び出した騎士たちにルキが言い放つ。

「お前達、見ておけ！これが戦いというものだ！」

ルキは騎士の証である細身の剣を握りこむとディノの喉下めがけて撓らせる。ディノは首をそらすと、それをかわした。

更なる剣の追隨。ディノは戦士の勘で後退する。瞬間、ディノがいた場所に生えていた雑草が姿を消した。

千切れた草が舞う。どこか懐かしい芳香が二人の間を駆け抜ける。

ルキの乱れ突き。細身で軽い剣を生かしたその突きに、ディノはひたすら後退を迫られる。

エリート中のエリート、最年少の金の獅子、その肩書きは嘘ではないのだと、ディノは痛感した。隙が全くない。それどころか、力の格差がうすうす分かる。まるで糸くり人形にでもなってしまったようだ。

こんなやつは初めてだ、とディノは戦慄を覚えた。ディノは今まで様々な者と剣を交えてきた。獣だけではなく、人間、そして亡霊までも。

だが、こんな風に操られていることを感じさせる敵はいなかった。ディノはまさに死神に囲まれ、踊らされているのだ。死はすぐ横

にあり、ディノの心臓をぐりぐりと握り締めている。

「どうした？威勢が良いのは口だけか！」

容赦なく放たれる雷撃のような剣先。ディノは弾く事も出来ずに間合いを離す。詰められては離し、詰められてはまた離す。

「ゆくぞ！」

その一言にぞつとして、ディノは大きく大地を蹴った。

瞬間、どすんと背中を打ち付ける。予想外の衝撃に、ディノはハッとした。この家を囲むように植えられた木のひとつに背中を打ったのである。

気づかないうちに、ここまで追い詰められていたとは。なんてことはない、ルキはディノの動きだけではなく感情をも手の内にしていたのである。

「どうやら、決着はついたようだな、足手まとい」

侮蔑の言葉とは違い、ルキの表情は真剣そのものだ。この男は言葉を武器と共に使ってはいるが、感情においては平常そのものなのである。ディノは奥歯を噛んで俯いた。

「金を握って都へ帰るがいい。雇われ戦士などやめて、畑でも耕すんだな」

ルキの毒に、ディノはまったく反応しない。戦意を喪失したのだろう。緊張を軽く緩ませて、ルキはディノに向けた剣を下ろそうと……した。

「バカいうんじゃないよ」

ディノがようやく、顔をあげる。その瞳に、炎は燃えたままだった。

「俺みたいなピチピチな十四歳はな、戦士でもやってねーと退屈で……死んじゃうんだよッ！」

ディノの大剣がルキの下顎を割るために振り上げられる。なんなくルキはそれをかわした。勢いづいた刃は止まらない。ディノは頭

上で刃の円を描いた。

「どこを狙っている？俺はここだ」

「う・る・せ・え」

ディノは次の瞬間、驚いたことに前ではなく後ろに動いた。当たり前のように、背中を樹皮で強く打ち付ける。ディノの奇怪な行動に眉間に皺を寄せるルキ。だが、行動の答えはすぐに判明した。

ディノが伐ったのであろう。大木が無数の葉とともにルキめがけて落ちてきた。

「くっ！」

想定範囲になかった攻撃に視界を妨げられ、ルキは横に逃げる。大木の下敷きになるのをまぬがれたものの、強くしなった枝に肩を打ちつける。利き腕に響く激痛。思わず細めた瞳に、休ませることなくディノの姿が映る。

「うおお！」

ルキの額めがけて振り下ろされる剣。だが、これもルキは剣で流した。枝に逃れられないと瞬時に判断し、いつの間にか剣を持ち替えていたのだ。剣と剣がすれ違う。ディノは右へ、ルキは左へ。獣達は大きく間をとりあう。

はあはあ、と熱い息が肺に押し上げられて激しく吐き出される。ようやく取れた間を確認したと同時に、どっと体から汗が噴出したのが分かる。ディノはだらだらと流れる汗をふき取ることもせず、じつとルキを見据えた。・・・ルキは、殆ど汗をかいていなかった。

あの、「言葉」が響く。

――アシデマトイ――

泣いてしまいたかった。心底おそろしかった。

ディノはこれまで、生と死が激しくぶつかり合う戦いを幾度も経

験してきた。幼い頃はキリアにみっちり剣技を叩き込まれた。雇われるようになってからは大人たち相手に異種格闘をしてきた。だから僅かに自信があったのだ。いくら四歳の差があるとはいえ、もう何十年と戦争をしていない国に使えるお坊ちゃま騎士に負けるはずがないと思っていた。

それがなんだ。この力の差は。

いったいなんだ。俺は。

俺は……。

「もう遊びはお終いだ」

ルキが急に構えを変えた。利き手だけで剣を握り相手へと向ける、伝統的な騎士の構えではない。両手で剣を握り、斜めに構えるという、見たことのない構えだ。そして何故か、ルキは黙祷するように深く瞼を閉じた。

馬鹿にしているのか？ 急所がから空きだ。

ルキの奇妙な構えに、だがディノは動くことができなかった。この男が、わざわざやられるようなことをするはずがない。

不思議なことに、周囲にいる騎士たちが後退している。その顔に浮かんでいるのは怯えだった。

ディノは考え、防御を選んだ。

「良い心がけだ……」

そう、ルキが呟いた。と同時に、剣が鈍く輝きだす。色は夕日のような赤。いや、炎。

どこか、見覚えのある光景だ。そう思ったとき、ディノに浮かんだのはふざけた考えだった。

嘘だろう？ それは不可能だ。

……それは、多くの者が挑戦し、だが実現せずに爆死してきたこと。鋼の流れに逆らわない聖なる力ならまだしも、その力が剣に宿るわけがない。

魔法を剣に宿らせるなんて

「あああつ」

ディノは自分の考えを否定するように走り出した。無表情に徹していたルキが、僅かに眉をよせる。

「バカ野郎・・・!」

瞬間、ルキの周りから光が四散し、ディノの身体が、いや周囲が真っ赤に染まった。

火達磨になったのだと、すぐに理解するが、なす術がない。炎は大きな舌となり、ディノの身体を蝕み、食らう。炎がぶくぶくと膨張し、火柱を形成する。

そして今度は恐ろしい速さで収束すると、ディノとルキの間で小さなひとつの点となり、再び轟音を響かせて爆裂した。

身体を動かすことができない。全身は熱さも痛みも超えて感覚がない。息すら、できない。瞬きさえもできない――。

ディノは、すべてが真っ白になった中、自分が倒れたことを意識の奥底で感じた。誰かの声が遠くからしたが、誰のものなのか予想がつかなかった。どんどん遠ざかる意識。どんどん失われる感覚。

ディノは、意識を失った。

霧雨が朝とともに髪の毛を撫でていた。朝もやに囲まれていて、視界がひどく悪かった。

ディノはひとり、展望台の上に、いた。

ここがどこなのか、ディノは勿論わかっていた。里の入り口にあ

る、監視用の展望台だ。頭上では襲撃用の鐘がぶら下がっていて、もう何十年も鳴らしたことがないのだ。

今日がいつたい何日なのか、今日なにがあるのかも、ディノは知っている。今日はみんながいなくなった日だ。

展望台の格子の間から見下ろす景色には、人はひとりも映らない。そればかりか、影さえもない。静寂が厳かに寝息をたてるばかりだ。ディノは不思議と寂しさを感じていなかった。なぜなら、自分がこうなることを知っていたからだ。もうずっと前から知っている。ディノはいつも置いてけぼりをくらうのだ。

ディノは沈黙の中、胸に抱きしめていた木彫りの熊を撫でた。紅葉の手が少しざらついた樹の肌をなめる。無感情でなでさすっていると、ちくんと痛みが走った。みると、棘が刺さっている。しばらくそれを見つめてから、ディノは展望台から降りることにした。

展望台の脇にある縄に繋がられたザルにゆっくりと入る。するとザルは地面から大きな石を持ち上げる代わりに、ゆっくりとディノの身体を大地へと下ろしていった。

地面に降下してから、ディノはザルから降りる。ザルは今度はものすごい速さで持ち上げられ、かわりに石が落ちてきた。石は大体あかんぼうくらいの大きさをしている。幼いディノより、ちよっと軽いくらいだ。

幼い？あれ？

そう思い、手のひらを見つめる。なんて小さい手だろう。歩き出すと、足元がふらつく。頭が重いのだ。

そつだ、僕はこんなに小さい。

自分の幼さに驚きながら、ディノは歩いた。誰もいない里の間を、とぼとぼとひたすら進む。本当に生きるものはディノしかない。おぼつかない足取りで、向かう先は勿論、家だ。この間ひっこした、新しい家。

そういえば家に来る前、キリアはこういつていた。「新しいお友達に会いに行くんだよ」

だけど、その言葉は間違いだった。ディノはわくわくして里に着いたが、ディノと友達になつてくれるものなど誰一人いなかった。そればかりか、同年代のこどもさえいないのだ。

友達はいない。そして今は、キリアもない。

ディノの周りには、誰一人、いない。

ディノは立ち止まった。そして周囲を見渡した。

テントのような変な建物で作られた閑散とした里は、死んだように息をひそめる。

「誰も、いないの？」

か細い声が静けさを押しやる。

「僕はここにいるよ、本当にだれもないの？」

今度は叫ぶように周囲に呼びかけた。それでも返ってくる声はない。ディノを、ただ沈黙だけが見つめている。

「どうして、」

ディノがぐしゃりと顔をまげる。喉の奥が痺れるように熱くなつて、うまく呼吸ができない。

「どうして、」

吐き出す息はひどく熱っぽい。指先は寒くないのにぶるぶる震えている。

「どうして、」

首の後ろが、ひどく痛む。

たまらない。

「さびしいわけがないじゃないか！」

ディノは嵐のように絶叫した。だが木霊するのは自分の声だけ。叫

んでも返るのは自分だけ。

ついにディノは疲れきって、大地に膝をついた。まだ柔らかな肉にはガサガサに乾いた大地は優しくはないが、かまわずディノは横たわった。もう、なにかもがどうでもよく感じられた。叫んでも、叫んでも、ディノは置いていかれる。待ってと懇願しても、連れてつてと駄々をこねても、おいてかれる。

ひとりならば、死んでいることと同じじゃないか。

ディノは目を瞑った。とめどめなく涙が溢れてきた。悲しみなのか、怒りなのか分からない。

眠ってしまいたい。なかったように眠って、忘れてしまいたい。生きている、ことを……。

「おい、何してんだよ」

突然の声。目を開いて、ディノは飛び上がった。

「いつまでも寝てんじゃねーよ」

声の主。それはルキだった。四歳歳の違う自分の兄。ルキは呆れたような顔でディノを見下ろしている。同じ子供なのに、ルキは変に迫力がある。ディノは思わず、へたりこみそうになった。

「大丈夫？泣いてるの？」

ルキと打って変わって迫力のマイナス点な声。アーシエだ。ルキの背に隠れるようにして、少し背の高いアーシエが微笑んでいる。

「泣き虫は駄目よ、あんまり泣いていると病気になってしまうんだから」

そう言うと、アーシエはディノに手をのばした。意味が分からず頭を傾けると、アーシエがのばした手でディノの手を握り締めた。

「一緒に、いこう？」

意外な言葉に驚いて、アーシエを見上げる。

「置いていくんじゃないの？」

「なんだ、置いてって欲しいのか」

ディノの質問に、ルキが笑って言う。ディノはぶんぶんと勢よく頭を左右に振った。あっそ、と言ってルキは歩き出した。アーシエもそれについて行く。勿論、ディノも続いた。二人にくらべ、なんて拙い足取りだろう。ふらふらになりながら、それでもディノは必死に続く。どこまでも、どこまでも。

いつの間にか霧雨はやんで、朝もやの向こうに青空が見えていた。

ディノはゆつくりと目を開けた。頭が少し重たく、喉が渴いている。どうやら、眠って夢を見ていたらしい。どのような夢だったかはもう忘れていたが。

身体を僅かに動かすと、きしんだ音が身体を包む布団の向こうから聞こえた。どうやら、木のベットに横になっているようだ。身体は頭と違って不思議と軽やかだった。顔を少しそらすと、窓が目に入った。ガラスの向こうに映る景色は、エドガーとも違う見知らぬ土地だった。エドガーに比べて建物が低く古く、田舎町であることは予測できる。

「起きたか」

ディノの目覚めに気づいて声をかけたのは、ルキだった。いつもどおりの無表情だ。だがどこか、その感情の見えない顔に親しみを覚えた。怒りも憎しみも、不思議と消えている。

「ここは、どこだ？」

「ハシエイブだ」

「ハシエイブ？なんで？アーシエは？」

質問攻めに面倒そうな顔を見ると、ルキはディノのすぐ横を指し示した。促されるように見やると、アーシエがベットの脇に上体をあずけるようにして眠っている。すやすやと眠り、ときおり微妙に笑みを浮かべる。なんだか気持ちの悪い寝顔だ。

「さっさと準備をしろ、それが起きたら出発だ」

「へ？」

ルキの言葉の意図が分からず、ディノは凝視を返した。ルキはディノとアーシエを交互に何度も見てからため息をつくと、

「足手まといじゃないんだろう？」

とだけ呟き、きびすを返した。

寢室を出て行くルキの背中を目だけで追ってから、扉が閉まるのを確認し、ディノは再び横になった。呆然としながら、ルキとの会話を思い出す。

ハシエイブ・・・アーシエが起きたら・・・出発・・・マジかよ？

こみ上げる嬉しさ。まるで湧き水のように体中を満たしてゆく。我慢できなくなつて、ディノは街中に聞こえるような大きな大声とともにガッツポーズをした

「おっしやああ~~~~!!」

アーシエが、小さく痙攣した。

ディノの勢いにアーシエはびくんと起きると、目をパチクリ瞬いた。

「……おはよう、ディノ」

ほんわりと微笑む笑顔は、とても喜びに溢れたものだ。決闘により意識を失っていた間、彼女はずっと心配していたのだらう。

アーシエは水を、と呟くと、床に置いてあった水瓶からコップに水を掬いとり、ディノに手渡した。

眠りすぎた手が、軋みながらもディノの口に水を運ぶ。

ディノは水を一口含んで、ようやく喉が渴いていることに気付いた。コップの水を飲み干すと、今度は水瓶を持ち、それを豪快に喉に流し込む。

口から溢れた水で毛布をびしゃびしゃにした頃、ようやく喉の乾きは収まった。

ディノの様子に笑みをこぼしながら、アーシェが問掛ける。

「痛いところはありませんか」

「ん、ヘーキ。飲みすぎで苦しいくれえだな」

ディノはたぶたぶとうねる腹を叩いて明るい声を返した。声の反面、感情はほの暗いものだった。それは、落とされた視線が標している。

濡れた水瓶の底に映る己の顔。幾度も目にした、変わらぬ眉ね、瞳、頬、唇。都を旅だった頃と何一つ変わりはない。

けれど、

「アーシェ」

「なんですか？」

「俺も、行きたい」

ディノの唐突な言葉に、アーシェは目を丸くさせた。驚きに象られた網膜には、対照的に、ディノの飄飄とした表情が転写される。待ち望んでいた言葉だったのでアーシェはすぐに答えた。

「ディノ、勿論ですよ、三人で旅を」

「違うんだ」

弾くような言葉。意外な返しに、アーシェは真意が分からず眉間に皺をよせる。

「ディノ？」

「そういうことじゃ、ないんだ」

呟き、顔をあげるディノ。その表情は緊張が抜けただけで、凧いたものではなかった。

燃える双鉾は静かに燈を光らせる。どこか苦悩しているようにも思える。

ディノの目は懇願を呈していた。そう、彼はすがっていた。

「アーシェ、俺はさ、」

吐き捨てるような口火。だが、口調は穏やかに。

「なんだかよく分からないんだよな、いつも」

「え？」

「俺は、月に行くっていうアーシェの目標を、馬鹿馬鹿しいと思ってたんだ。叶うはず無い、死んでしまうのがオチだって。アーシェにもそんなこと言ったよな。」

「けど、それはさげすんでたわけじゃないんだ。たぶん、そうだな、……アーシェのことが羨ましかったんだ」

口にして、頷く。

「うん、羨ましかった。俺は何かに、無謀なことなのに、挑戦するっていう気持ちをもてるアーシェが羨ましかったんだ」

だって俺は、と呟いて、ディノは黙り込んだ。だが、意を決したように。

「ここではない何処かに行くんだって気持ちで里を出たんだ。なんか、なんだろう……里は俺の本当の居場所じゃない気がした。どこか足りないような、自分の力を出しきれない、そんな気がした。だから、やるんだってはりきって、出たんだ」

なのに、

「やりたいことをやるんだ、楽しいことをしてやるんだって、そう
思っ出てきたのに。なのに俺は結局、おんなじだった。里と同じ。
安全な場所において安全な仕事を選んで愚痴ばかりを溢して、だから
当たり前前に、足りなくて」

だから、

「バカにしてたんだ。夢を語って夢に向かうやつらを、バカにして、
自分の気持ちを押し潰してた。それで、死んだら安心するんだ、俺
は正しいって、俺は間違ってないんだって。……俺は心の底ですつ
と、アーシェの旅が失敗することを望んでたんだ」

核心。

熱意に感化されながらも、その熱に飛込むことが出来ず、それば
かりか醜い嫉妬を抱え、それを隠すようになりその善意で塗りた
くった心。歪みきってしまった、羨望。

自分を否定するのが恐ろしくて塞いでいた本心が、堰をきり溢れ
る。罪悪感を伴って、それはディノの首を僅かに絞める。

ふと、ディノの耳元に、鈴のようなアーシェの呼び声が鳴った。
声に促されるようにディノは続ける。

「それだけじゃない。俺は、ルキが言ったとおり、足手まといなん
だ。ここに来るまで、何度もアーシェに助けられた。もし、一緒に
旅へ出たら、きっと迷惑がかかる」

震える声。気を緩めたら、涙が流れてしまいそうだ。

「俺は、足手まといなんだ」

暗い心の奥底から、冷たい視線がディノを見つめている。その主を、ディノはしっている。

過去の自分。先ほどまで自分だと思っていた、殻。寂しい音をたてながら、じっと見据える。戻ってこいと、脅えている。

ディノはその殻を一蹴するように、強く言い放った。

「だけど俺、行きたいんだ」

強く、強く。

「もう自分に、嘘は吐きたくないんだ。俺は弱いけど、俺は卑怯だけど、行きたいんだ」

ディノはアーシェに体を向けると、そのまま頭を下げた。布団に頭がつくほど、深く下げた。

そして、震える声色で、懇願した。

「俺をどうか、連れてって下さい」

薄い涙と熱い喉でかすれた、ディノの訴えを、アーシェは無言のまま見つめる。

暫くの沈黙。酷く静かな、部屋の空気。

アーシェはひたすら沈黙を続けている。言葉でも失ってしまったかのように。仕方がない、見損なったと思われるでも仕方がないほどに、酷いことを言ってしまったのだから。

絶望が、侮蔑するかのようにこみあげる。

「お願いだ……」

今にも消え入りそうな声色。ディノは祈るようにきつく目を閉じている。この願いを、掴むために痛みを伴うほどに願う。

そんなディノの肩に、ふいに温もりが染み込んだ。ディノは、恐る恐る顔をあげた。

アーシエが、微笑んでいる。

「ねえ、ディノ。私も、同じなの」

「え？」

呟きに似たアーシエの言葉に、ディノは驚いて問掛けた。同じとは、どういうことか。

アーシエは言葉を探しながら、ゆっくりとディノの手を握り締める。

「私も弱い、私も、すごく怖い、本当は、ずっと……」

逃げて、しまいたかった。

その言葉に、ディノは酷く困惑しながらアーシエを見つめた。鋼のような決意を持つアーシエの、意外な感情。

いいや、確かにそこにはあった。光をたたえて揺れる瞳の奥底に。今まさに、ようやく、ディノは少しの脅えを感じとっていた。

「だけど、ディノに会って、頑張らなきゃいけないと思ったの。仕事でも、私のために色々なことを教えてくれて、剣を振ってくれた。だから不安でも、怖くても、前に進もうと思った。引きかえしじゃないかと思った」

いつから、すくみあがっていたのだろう。どうして、気付かなかったのだろう。

「私は、デイノがいたから、旅を続けることができた。そしてこれから、本当の意味で旅が始まる。けれど、私は止まらない。だけど、やっぱり怖いんだ」

アーシェの決意は、けして強いものではない。けして、己だけの感情から生まれるものではなかったのだ。

「アーシェ……」

二人は、傷付きやすい、痛いほどの思いを互いに抱き、ずっと隠していた。同じ、という言葉は、あまりにも正しい。一人は諦めで、一人は決意で、熱を隠していたにすぎなかったのだ。

「私は、自分の弱さを受けとめるために、そして旅を続けるために、デイノと一緒に行きたいの」

最初から二人は、互いに反応しあい、変化していた。出会ったときから二人は、共に道を歩んでいたのだ。そう、ずっと。

「一緒に、旅をしませんか？」

ハシェイブの最西に、失われた国境はある。“失われた”と添えられた理由は、そこが既に国境の意味を無くした場所であることを

さす。

東を見ると、竜を神と崇める国エアドラド。西を見ると、草ひとつない不毛な砂漠、灰の大地。

かつて大きな国があった西の大地に、生きる人はいない。世界に穴を空けたようにぽっかりと、人が分布していない場所。

灰の大地より西に行けば、人はいるだろう。東に行けば、人はいるだろう。南に行けば、人はいるだろう。そして北には海がある。灰の大地に、人はいない。

それ故に、ハシェイブのこの場所は失われた国境と呼ばれていた。そして今、デイノたちは失われた国境に立っていた。

「ルキ様、気を付けて下さいね。くれぐれ無理は、なさらないように。我々はルキ様の帰りをずっと待ち続けますから」

ルキの部下のひとりが、感極まってルキの手を握り締める。苦笑するルキ。

とは言っても、気持ちが穏やかなのはルキだけだ。ルキを囲む騎士達はみな、目に涙を浮かべている。

彼等はよほど、ルキの指導力に惚れているのだろう。あるいは信頼し、尊敬しているのだろう。

それが自身にはもったいないように思え、ルキは照れるように答えた。

「ああ、また共に剣を振ろう」

熱く握手を交すと、ルキの手はほどかれた。ゆっくりと踵を返し、味わうように一歩を踏みしめる。後ろ髪をひかれるように、ゆっくりと。

——ルキが次を守るべき者達のところへと。

「女々しい部下がいると大変だなあ」

ディノは、待ちすぎて固くなった筋肉を伸ばすように立ち上がると、溜め息をついた。その動作に、ルキはニヤリと口を歪める。

「お前も、似たようなものだろう」

「はあ!？」

「決闘は、駄目ですよ」

すかさず、二人の間に飛込むアーシエ。焦りの中、不安そうに止めるアーシエに、ルキは微笑みながらかえした。

「決闘ではなくて、躰だ」

「はあ!？」

「駄目ですってば!」

オドオドとするアーシエ、早くも闘志を燃やすディノを交互にみると、ルキは面白そうに目を笑わせた。

「冗談だ。早く進まなければ、砂漠の真ん中で枯れることになるぞ」
器用に話を折られたディノは「はい、はい」と適当に答えて、砂漠へと足を進める。

「ふふ、頑張りましょう!」

三人は深く深く、前方に広がる世界を見据えた。

上空には青い空が丸く浮かび、風化し割れた大地には砂が舞っている。境がぼやけ、空と池が霧のように溶けこむ。照り付ける日差しは、痛いくらい強い。

ディノは背伸びをしながら、その情景の遥か向こうを仰ぐ。世界にぶつかると、全身を伸ばしながら呟く。

「そんじゃ、」

足を前へと、背後にある光に押し出されるように、前へと。

願いを託されているのも自分で、背中を押されているのも自分だ。

優しい暗闇から目覚めて、自分が自分の前をゆく。足を進める。
今、ただ、ひたすらに。

「……行こう！」

ドラグノア旅立ち（後書き）

ドラグノアは、携帯小説というものを知って初めて書いたものです。全文、携帯電話で書きました。

そのおかげで、ある方に「内容は全然だけど、この量を携帯電話で書いたことはすごい」と言ってもらいました（笑）。

アンラ・マンユ・ジルワ（ファンタジー）

黄昏時、ふたつの太陽が西の山稜に千切れていく。煌煌と世を照らす残り火は荒野を金色に染め上げていた。

ふいに、金が灰にくすんだ。雲の間から鯨のような影が光を遮ったのだった。

飛空艇だ。飛行魔法によって紫色の膜に装われたその巨躯の脇腹には、ある紋章が輝いている。槍を啜えた銀色の鷹。アルネス帝国守護団所有の飛空艇である証が、ぎろりと大地を睨み付ける。

飛空艇の向かう先、もう暗く沈み始めた東の大地は幾分か瞬いていた。星の絨毯のようなそれは、ムエタと呼ばれる商業都市であった。

ムエタは炎の神に守護を置く。それ故に無数の松明が街に焚かれ、絶え間なく火の爆ぜる音色が踊る。齢十九の若き帝国兵士ミスラは、耳に心地よい火の旋律が酒場の喧騒に消えてしまつのを寂しく思いながら、干し肉を千切り、水で流し込んでいた。

酒場は戦友たちに占領され、右も左も騒がしい。久しぶりの地上に、皆が興奮しているのだ。本来なら、下っ端のミスラは彼らに混ざって上の者のご機嫌とりをしなければならない。

しかしどうにも、今晚は気が乗らなかった。もともとの気性の所為ではない。今回の任務が特別なものだからだ。

「ミスラ、杯を間違えているぞ」

そう言いながらミスラの横にどすんと腰を下ろしたのは、同期に入団した青年兵士ユーリであつた。麻で織つた赤い帯を頭に巻き、革の胸当てを締め、腰には丸みのある半月の剣を下げる。ミスラと同じ様相だ。

唯一違つとすれば、ミスラはまだ成人ではないために帯が青いこと、そして肌の色が。ミスラの肌は、彼ほど黒くはない。

ユーリはミスラの杯を然り気無く自分の杯とすり替えた。杯には白濁色の酒が揺らめいている。ミスラはため息と共に杯の縁を撫でた。

「気分が乗らないんだ」

吐息に不安の混じるミスラに、ユーリは薄く口角をあげる。

「怯えているのか？」

「ちがう。ただ、女を斬るのは忍びないんだ」

「……女、女ねえ。まさか経験がないのか？」

「下らない」

品のない言葉にミスラは眉間を寄せた。

「ははッ、あいかわらず冗談が通じねえな。けどよオ……」

肩を竦め、

「女は女でもアンラだ。自分の子供でさえ悪魔ダエーワに売る奴を女なんて言うのかね」

「虫酸が走るよ」

「違いねえ」

二人の杯が進む。しばしの沈黙の後、ユーリは顎をしゃくつた。
「ほら、女っていうのはああいうの言うんだよ」

酒場の中央には石で組まれた小高い舞台があつた。厚く閉ざされ

た幕の向こうから太鼓と笛の音が響き始め、喧騒が少しずつ落ちて着いてゆく。舞が始まるのだ。

素早い融いたちのように幕が開く。裾から舞台へ飛び出した踊り娘は、異国から来た旅芸人のようだった。帝国の人間は肌が浅黒い。しかし娘は白かった。そして、若々しく熟れた肉体を僅かな帯で隠しているだけだった。

酒場の空気が先ほどまでの喧騒とは違う熱気に包まれる。ぬめった、ミスラの苦手とする夜の臭い。

酒場の客の過剰とも思える反応には故がある。帝国の女たちは肌を晒したりしないのだ。

帝国の女は神物であり、肌を露出することは神の怒りを買うことに繋がる。そのため年頃になると、顔まで布で隠す。酒場の娘でさえ、顔以外は布で自身の身体を覆う。

踊り娘の汗ばんだ肢体が艶めかしく揺れるたび、ミスラは胸が詰まった。目のやり場に困り、呼吸さえ忘れてしまいそうになる。

戸惑うミスラの脇腹をユーリが小突いた。見やると、図体の大きな男が踊り娘に言い寄っている。

「隊長だ。相変わらず夜の方も指揮が激しいようで……」

隊長マーフは帝国守護団の四番隊を指揮しており、下にミスラを含めて百人の兵士を持つ地位の高い人物だ。しかし娘は手練なのか、マーフの太い腕を擦り抜け鼻でくすりと笑った。

——弛ゆるんでる。

苛立ちが急に吹き出て、ミスラは俯いた。任務を思い出して心臓が重く湿る。

逆賊アンラがムエタで大帝の暗殺を目論んでいるという情報が入

り、団は派遣された。

アンラは恐ろしい存在だ。強大な魔法によって悪行を繰り返す。アンラによって滅ぼされた村は三つ、殺された戦士は百を超える。それほどまでの殺戮に手を染めて尚、捕まらない。噂によると、男も慄くほど大柄だという。

それだけではない。ミスラが真に恐れているのはその強固な肉体の中にある冷徹な心だ。アンラが魔法を得たのは、自分の腹に宿る子供を悪魔に捧げたからである。

悪魔のすむ死の国と生き物が触れることが出来るのは出産と死だけだ。魔法を使う方法は二種類あり、ひとつは死の国に最も近い物質である化石を使う。化石は貴重で、多くのものは目にすることも出来ずに死ぬ。

アンラはもうひとつの方法、まさに人徳に反した禁忌を犯している。肉体の形成途中である胎児は死の国と繋がっている。肉体のない悪魔に肉体を与え、受肉させることで悪魔を使役できるのである。胎児は無論、死ぬ。

魔法を得るために実の子供を殺す。血も涙もない、正に死神のような女。それが怒りの霊^{アンラ}なのだ。

考えに耽っていると、ユーリの声が意識を叩いた。

「お、おい、ミスラ」

ハッと顔をあげる。瞬間、鼻腔に甘い芳香が広がった。思わず目を丸めて鼻の先に認めたのは、あの踊り娘だった。ミスラを挑発するように、その豊満な胸を揺らしている。

——ああ、この娘は手練ではなく無知なのだ。そう悟って顔をそらすと、マーフと視線が交わった。マーフはあ

からさまにミスラを睨み付けていた。嫌な汗が背中を伝い、席を外そうと立ち上がったとき、不意に後頭部をガツンとした激痛がえぐった。

そのままミスラは、暗闇に落ちていった。

鈍い痛みでゆっくりと我に返った。緩慢に目蓋を開いてみると、見知らぬ天井が広がっていた。全身がずきずきと疼く。その痛みを伴う火照りに、記憶が背をもたげる。

女に挑発され、女に振られた上司の腹いせとして殴られ、外に放り出された……はずだったが。目を瞬くと、あるのは夜空ではなく天井だ。一体何故だろうか。

「気が付いたか」

凜とした声。呼ばれて見やると少年が立っていた。染めてもない麻の帯で頭を巻き、余った生地を長外套のように垂らしている。済んだ黒い瞳は、驚くほど大きい。

手には香炉を持っている。そういえば甘い匂いがする。

「あんた守護団の戦士だろう。今晚は休むといい。まだ痛むんだろう」

「君は」

「通りすがりの旅芸人だよ。剣舞を踊ってる」

部屋が薄暗いため最初は気付かなかったが、少年の肌の色は白かった。

「すまないな」

「良いんだ。同族は家族だ」

その言葉に、なぜミスラは酒屋で踊り娘に挑発されたのか理解した。あれは挑発ではなく、ミスラの肌を見て好感をもち行った挨拶

のようなものだったのだろう。

ミスラの母は異国の人間だ。上司から過剰な嫉妬を買ったのも薄い肌の色のせいかもしれない。

そう思うと、母への怒りを感じた。乳飲み子だったミスラを置いて出て行った、顔も覚えていない母。彼女のせいで孤児院に投げ込まれた。肌の色で差別を受ける、貧しく厳しい幼少時代、這い上がるために血の滲む努力し続けた日々。それらを思い出し、ミスラはほぞを噛んだ。嫌悪が沸き立った。

おぞましい、女……。

涙が溢れそうになって、ミスラは誤魔化すように頭を掻いた。痛みのためだろうか、気弱になっている。

目を瞑りながら溜息をついていると、額に冷たい湿りが沁みた。

少年が濡れた布をミスラの額に置いたのだった。

「良いのか？ 水は高いだろうに」

少年は微笑むと、何も言わず椅子に座った。

途端に、ミスラは戸惑ってしまった。彼の優しさに心が震える。安らかな、穏やかな、木漏れ日のような感覚が身体に溢れる。それはミスラにとって初めての感覚だった。形容しがたいほど心地がいい癒される、とでもいうのだろうか。

温かい……。

少年はというと、じっとミスラに視線を注いでいた。何かを愛でるようだった。

気恥ずかしくなって、「君は」言葉が漏れる。

「君は、随分落ち着いているね。何だか俺より年上みたいだ……」
「もしかしたら、そうかもしれないね」

夜は更けていく。その晩ミスラは、よく眠った。

ムエタは伝統的な帝国建築でできている。帝国のすぐ東に広がる大砂丘ザミヤート。そこからくる砂風に耐えるため頑丈な石と丸太で組まれた街並みは、昼ともなると熱を含み、まるで小さな太陽のようになる。夜は夜とて松明が燃え続ける。昼も夜も熱の灯る街なのだ。

街が瞬くさまは、街から幾分離れた飛空艇の停車地帯から眺める。ミスラは汗を拳で拭きながら飛空艇の警備にあたっていた。

早朝に少年と別れ宿に戻り、すぐさま振り分けられた仕事についた。団の殆どは街の見回り、調査に出ている。本格的にアンラ狩りが始まったのだ。

アンラは捕まるだろうか。魔法とはどのようなものだろう。悪魔を使役し、人の身体をぼろきれのようにしてしまうという噂を聞いたことがある。アンラは本当にムエタにいるとして、団は無事でいられるのだろうか。

思えば、どこから情報はきたのだろうか。もし自分がアンラだとして、情報が流れるようなことをするだろうか。そもそもどうしてムエタなのか。その目的は？

暑さのせいだろうか。妙に思考を貪ってしまう。

あの少年は、元気だろうか……。

少年の小動物のような顔を浮かべた、刹那。

硬質な突風が頬を掠った。頬が熱を持ち、何かと触れてみる。掌にこびりついたものは、血だった。

ミスラは瞬時に屈んだ。風を切る音、続いて矢の突き刺さる音が頭上を駆けていった。

「ぎゃああああっ！」

悲鳴が四方からあがり、あたりに血の粉塵が飛び散る。更に身を縮めると、重たい振動が後方に響き、間一髪で岩のようなものを避けたことを知る。振り向きざまに薄目を開けると、赤黒いものが広がっていた。

手を伸ばす。生臭い、ぬくい、どろりとした、鉄の匂い。鼻腔に認めた瞬間、吐き気が込み上げる――、それが血だまりだと理解する。

視線をずらし、血だまりの源まで視線を走らせた。あつたのは、無数の矢が突き刺さり、苦悶の表情を浮かべた指揮官だった。

「なっ……」

鼓動が警鐘のように打ち始める。雨の如く矢が放たれる中、ミスラは地に臥せながら前に進んだ。辺りは蜂の巣を突いたようだった。それもそのはず、非常事態だというのは指揮するものがないのだ。「て、敵襲……?」

何処からの攻撃か。矢は立っている者達、逃げ出す者達を次々と屠っていく。ミスラは懸命に這い、岩陰に隠れた。

身を縮めていると、漸く攻撃はやんだ。敵襲、アンラという言葉が脳味噌に木霊する。狙いは何だ。まさか、まさか。

「飛空艇?」

確信を持つて呟くと、遠くから足音が聞こえた。その数は予想外なことに、複数だった。

「早くしろ、隊が戻ってくるぞ」

男の声だ。ミスラではない。そっと、気付かれないように岩陰から覗いてみる。アンラではなく、それは集団のようだった。屈強な身体をした男が一人、十人程度の男たちに命令を下している。表情

と物腰から、只者ではないことは瞬時に分かった。矢を使い切ったのか弓を捨て、剣を握り締めている。

「……盗賊か」

男たちは素早い動作で生き残った戦士に切りかかり、容赦なく息の根を止めていく。虫の息といった者にまで刃を振る姿に、背中を氷が伝う。

外の警備で生き残った者はミスラひとりのようだった。飛空艇の中にいるのは、少しの見張りくらいのもの。戦力の集中する街までは距離がある。

つまりそういうことだったのかと、彼らの計画を悟ったミスラは絶望した。

アンラの情報を流し飛空艇を呼び出し、手薄になったところで奪うつもりだったのだろう。飛空艇に積まれた化石は魔法を帯びた高価なものだ。盗賊ならば喉から手が出るほど欲しいものだろう。飛空艇を盗むつもりか化石を盗むつもりか……、なんにせよ死体しか残らないのだから、アンラの殺戮のひとつとなり、彼らは追われな

い。まんまと帝国守護団は踊らされたのだ。

ミスラは深く呼吸を吐き出すと、腹を括った。

狼煙をあげる。

一刻も早くこの事態を伝えるのだ。盗賊たちの素早さを思えば狼煙をあげても間に合わないだろう。だが一人生き残ったミスラにできることはそれくらいしかない。いや、狼煙さえあげられるかどうか……。

狼煙台は外にあったが、非常用に置かれた松明は無残にも踏み消されている。火を熾さなければならぬ。しかし少しでも近づいた

ら、火をつける前に殺されるかもしれない。多勢に無勢だ。しかもミスラには実戦経験が少ない。

どうするべきか思案して、地面に突き刺さった矢のひとつに、閃いた。

すぐさまミスラは敵に気付かれないよう弓兵の死体の傍まで這うと、その懐を探った。ミスラの子感はずた。手に目的のものを握ると、ミスラは岩陰に戻った。

矢尻に布を巻きつける。剣に塗るための油を懐から出し、染み込ませた。

地面に置いたのは短弓、矢、そして油に火打石。弓兵が火矢を放つための道具である。

矢尻に布を巻きつけると丹念に油を染み込ませ、火を着けた。短弓はあまり扱ったことがないが、狼煙台まで走って火をつけるよりは確実だ。失敗したら、そこで走り出せばいい。

ミスラは岩陰から身を乗り出すと短弓をめいっぱい引いた。盗賊がミスラに気付き、凄まじい形相で向かってくる。構わずミスラは懇親の力を込め――、火が疾駆する！

祈りは通じた。

矢は一度空のほうへと高く上がると、吸い込まれるように狼煙台へと墜ちた。みるみるうちに大きな炎がはためく。もうもうと白煙が空へと昇る。

と同時に、ミスラは短弓をもう一度引いた。矢は剣に弾かれ、空へと円を描く。

すぐさまミスラは短弓を投げ捨て剣を鞘から抜いた。飛空艇の方へと大地を蹴る。脱兎の勢いで。背中を壁につける。

盗賊の一人が切りかかる。素早い一振り、右によける。敵の剣が飛空艇の壁に噛み付く。動きが僅かに鈍ったのを見計らい、ミスラは敵の腕に剣を振り下ろした。確かな感触に、血飛沫。敵は呻き、咄嗟に身を反らしたがミスラは逃さなかった。横に振りなおし、喉笛に刃を叩きつける。

血を浴びながらミスラは剣を引き抜き、再び構えなおした。ミスラの反撃に、盗賊たちが警戒する。距離を置いて、取り囲む。

万事休す。もう手がない。

敵も分かってか、じりじりと詰め寄ってくる。ミスラは死を覚悟した。

そのときだった。猛然と風が吹き荒れた。砂塵が舞い、反射的に目を瞑り、開く。

あの少年が屹立していた。まるでずっとその場所にいたかのように。

摩訶不思議な出来事に、盗賊たちがたじろぐ。少年を知るミスラでさえ動揺していた。いるはずのない人物がさも当然にいるのだから。

「お前たちか……。私の名を汚すのは」

澄んだ声だった。濁りがなかった。昨晚の声と違う。

混乱するミスラに少年は「狼煙をありがとっ、また会ったね」と言った。今度は声変わりを控えた少年の声だった。

まるで彼の中にもうひとり、女性がいるような感覚に、身の毛がよだつ。

——そんな。大男のような女だと。

少年の身体が紫色の光を帯びる。どこか遠くから、獣の息遣いが聞こえる。閃光が周囲に飛散し、少年の四肢が伸びていく。丸みを

帯び、黒髪がするすると生えていく。輪郭が変貌する。

気付けば周囲は、薄暗く淀んでいた。そして目の前にいるのは、少年ではなく十七、八の女だった。

長い髪の毛は獅子のような金色、肌は白と黒の斑で、美しい手足には蛇が巻きついたような痣が浮かび、胴へと結ばれる。下腹部は紫の光を抱いたように輝き、炎のような文様を刻んでいた。

「あ……、アンラ……」

盗賊の一人が青ざめて呟く、あの名を。

「呼ばれる筋合いは無い！」

たった一言が轟音のように響く。圧倒的な存在感が、絶対的な力の差を予感させる。皆が皆、足が地に着いてしまったように動かなかった。滝のような汗を流しながら、アンラの一挙一動に怯えている。

その様にアンラは……、ミスラにはなぜかアンラが寂しそうに見えた。

「だが良いだろう。お前たちには感謝しなければならいからな」
一体何処からか。獣の唸り声が、吐息が、耳元まで近づく。すぐ傍に、巨大な獣がいる。視覚には感じられないが、その他の感覚が危険を叫んでいる。

「無駄な殺しをしないですむのだから」

アンラはミスラに背中を晒すと、右手を掲げた。

「喰らいなさい！ 魂さえ残らぬほどに……」

盗賊たちの背後の空が甲高い悲鳴をあげながら割れる。ぱっくりと暗闇が現れ、中から獣の生暖かい、雄雄しい匂いが漏れる。

断続的に赤ん坊のような泣き声が響き――、ぬっと出てきたのは巨大な手だった。紫色の肌に黒く鋭い爪をしたその手はあまりにも大きく、たったひと掻きで盗賊たちを握りこむと、躊躇無く潰した。

断末魔が木霊し、あつという間に立ち消える。滂沱と血が滴り、腸が指と指の間からミミズのように飛び出す。

手は完全に盗賊たちを包み込むと、肉団子のように掌で転がし、闇の中へと戻っていく。

あまりのことにミスラはその場に倒れこんだ。血の小川が闇からこぼれ、ミスラの足を汚す。ぐちゃぐちゃという咀嚼音、そして時折、喜ぶような唸りが聞こえた。

やがて闇は糸で繕うように閉じていった。すると空へと戻り……、再び眩いばかりの太陽の光が周囲を照らした。そしてアンラもまた、少年へと姿を変えていた。

アンラが振り返る。そこに在るのは、昨晚と同じく穏やかで大きな瞳だった。しかし今は、凍てつくような恐怖を与える、恐ろしいものにしかミスラには感じられない。なにもかも信じられない。

これが魔法、これが悪魔、そしてアンラ……。

がちがちと歯を鳴らす。心臓がばくばくと激しく打ちつけ、今にも破裂しそうだ。殺戮を目の前にしてミスラは震える唇を魚のように動かした。

呆然としながら、真っ白な頭で出てきた声は、蚊の音のようだった。

「……俺も……、殺すのか」

それを耳にしてアンラは眉をあげた。まるで意外とでもいうように。

彼女はそつと眉根を顰めると、少しずつ後じさった。長外套が絹のようにはためき、揺れる。

そしてアンラは、少年は、

「同族は、家族だ」

小さく微笑んだ。

「それに君は、私の子供と同じくらいだな……」

ミスラの胸は唐突に裂かれた。なんともいえない切ない感覚が心臓を襲い、悲しみが溢れてきた。

これは同情だろうか。ミスラは啞然としながら打ち震え、そしてあの晩を思い出していた。あれは、あの初めての感覚は……。

風が額を撫でる。熱風ではなく、木漏れ日のような瑞々しくやおやかな風が。ミスラの涙を少しだけ拭って、アンラの姿はもうどこにもなかった。

胸がすくような蒼穹が何処までも続いている。地平の先は赤ん坊の腹のようになだらかだ。

槍を啜えた銀色の鷹、アルネス帝国守護団の飛行艇は永劫にも広がる空を飛んでいた。窓からひとり、空を見るのは一人の青年。先日ようやく成人となって赤い帯を頭に巻くことを許されたミスラだった。

数ヶ月前、帝国守護団飛空艇を襲った事件は、結局アンラのものでされた。一人生き残ったミスラに説明できる言葉などなく、しかし甚大な被害から、なによりアンラが来たことは真であったから、否定できなかったのだ。

今でもふいに、ミスラの胸を締め付ける。アンラは名前を汚されることを好まないはずだ。あの笑顔は、悲しんでいるだろうか。

「ミスラ隊長！」

呼ばれて、ミスラは窓から視線を外した。ユーリが畏まって、膝

を折っている。

「まもなく帝都に到着します」
「分かった」

あれからミスラは、アンラの殺戮から唯一生き残ったことと飛空艇を守った功績により、若き隊長として就任した。これからは兵士として、真の意味でアンラを追う側となったのだ。

いつかアンラにまた会える日が来るだろうか、と思う。恐ろしい力を持ち、同時に穏やかな日差しのようなアンラ。彼女に再びめぐり合う日が――。

ミスラはそつと自身の額に手の甲を押し付けると、赤い長外套を纏い、歩き出した。

アンラ・マンユ・ジルワ（ファンタジー）（後書き）

ファンタジー企画に投稿した作品です。企画では主催だったので、超多忙すぎて「落とすかな」と思いながら書きました。しかも前日の夜に。

ファンタジーなのにプロットもなしに書き始め、後半は書いた記憶がありません。ともあれ、間に合って良かった。

ファンタジーのご先祖様は神話だ、という考えが自分の中にありまして、世界観はペルシャ神話を下敷きにしました。アンラはアーリマンのことです。善なる神ながら悪の汚名を着せられてしまった神様なんですけど、そんなわけでアンラは噂に似つかわしくない性格にしました。そのくせ続編はありません……。

ファンタジー短編となるとどうしても起承転結の「起」で終わりがちになってしまうので、次にファンタジー短編を書くときはちゃんと終わらせたいなあと思った次第です。

紺色の朝に(???)

渋谷での話だ。

早朝、小雨で少し濡れた渋谷駅は生ゴミのような臭いが漂っていた。店はほとんど閉まっており、昼間と比べると驚くほど人が少なかった。

私は渋谷の国学院大学に用事があり、しかしながら早く来すぎてしまったため、駅周辺をふらふらしていた。

青ざめた夜と朝の中間、夏場だったので空気が生温く過ごしやすい。けれど見るものはなかった。ひとつふたつ、朝御飯や弁当を売る店が開いているだけだった。

「ん？」

ふいに、駅の隅で壁に頭だけもたれるようにして倒れている人を見かけた。近寄ってみると、大学生風の男の子だった。

ぐったりと脱力していて顔色が悪く、深く目を閉じている。刺激に対しほとんど反応がない。状況から推測するに、アルコールを飲みすぎてしまい歩けず、横になっているのだろう。

「おはようございます、大丈夫ですか」

手を握り声を掛けながら、更に様子をみる。唇は乾いていないし、低体温に陥っていないし、脈も正常だ。

大丈夫だろうと思いつつも心配になり、三十メートルほど離れた場所にある交番へと向かった。交番の前には三人の警察官が立ち、時おり人に道を教えている。

警察官にあと少しというところで、なんでこんなにも近い場所に人が倒れているのに保護しないのだろうという疑問が沸いた。

もしかしたら、青年のような状態の人は日常茶飯事なのかもしれない。警察官は既に声をかけていて、大丈夫と判断したのかもしれない。しかしながら、ちょうど死角となっていて交番からは青年が確認できない。

どうしたものかと迷って私は、警察官の前を通りすぎ、さもそちらに用があったかのように脇にある地図を見つめ、再び青年の方へと歩き出した。

私が警察官に声をかけることは、警察官にも青年にも迷惑となりそう。かといって青年が起きるまで様子を見るわけにもいかない。私はどうしても行かなければならない用事があった。

困ったものだと少し嘆きつつ歩いていると、青年のそばに新たな人物が立っていた。汚れきつてよれよれになった服を着込んだホームレスの中年男性が、白髪の間違った髭をもぞもぞとしながら、傘を使つて青年のだらんと脱力した足を動かしていた。

私が見ているのに気づくと、男性は

「変なことはなにもしてないよ」と、一歩下がった。そんなことは一目瞭然だ。「足が出ていると誰かが踏むでしょ、危ないからね、こうして」

焦りに焦っている口ぶりに

「あつ、大丈夫です。わかります」とこちらも思わず焦ってしまう。

「お友だちには何もしてないからね、盗んでもいない」

「いえ、知り合いではないんです。少し心配になりました」

私の言葉を聞いて、男性ははにかんだような笑みをこぼした。「そうなの。じゃあ大丈夫だよ。俺が様子をたまに見るからね」

口調からか街と時間の性質を思つてか、男性は私を見送るように片手をあげた。

「すみません、よろしく願ひします」

男性の好意に甘えることにして、私はその場を立ち去ることにした。少し離れてから振り向くと、男性もまた傘を片手にどこかへと足を向けていた。

国学院大学での用事を済ませて渋谷に着いたのは午後の五時を回つたところだった。既に青年の姿はいない。目覚めて家にも帰つたのだらう。あの男性もいない。ホームレスは朝の仕事を終えると大概、地下や公園に涼みに行くものだ。

ふいに、男性の行動を思い出した。あの言葉、あの警戒心は、何らかの経験によるものだ。あんなにも素直に動揺する人は、トラブルを予期した上で道具を使つたりはしない。以前、善意を勘ぐられたことがあるのだらう。ホームレスなら、尚のこと。

私も無意識に危険な行動をとっていたのだらうかと苦笑する。と同時に、簡単に疑われてしまう世の中に少し悲しくなった。

青ざめた湿つばい早朝、今でもたまに思う。

あの青年は酒を飲みすぎないようになっただらうか。

あの男性はお元気だらうかと。

紺色の朝に(???)(後書き)

実験だったりします。

KillTime（ホラー）

事故を見ると人は興奮するものだ。めったに見れない光景、ただならぬ雰囲気には人は酔い、魅了される。

それが他人事ならば。

工藤はその日、大学の帰りに人だかりの前を通りがかった。

人々が口々に何かを叫び、あるいは囁いている。雑然とた空気に何事だろうと駆けつけてみると、電柱にバイクがぶつかり大破し、その横には血まみれの男性が横たわっていた。

工藤とどこか背格好が似ている。もしかしたら同じ大学生、少なくとも同年代だろう。

男性は全身に擦り傷がみられ、顔を覆うフルヘルメットからは血が滴っている。思わず生唾を飲み込んだ。

男性の横にはヘルメットをつけた女性が膝をつき、わあわあと泣き叫んでいる。目を外すと道路の脇にバイクがもう一台、ツーリングでもしていたのだろうか。

ムクムクと工藤の心臓を熱いものが沸き、さか撫でる。見たこともない光景に全身が棒になる。工藤が感じているのは恐怖でも憐れみでもなく、鼓動を確かに早める好奇だった。

カシャリ。

と、耳元で硬質な音が瞬いた。次に感嘆がこぼれる。

「すげー……」

周囲を見渡すと、何人かが携帯電話を手にし、カメラ機能で写真を撮っている。それを互いに見せあつては、きゃあきゃあと騒ぐ女子供までいる。

それを目にした瞬間、工藤は急いで携帯電話を握りしめ、取り乱

す男女に傾けた。

カシャリ。

ぶれてしまった、もう一度。

カシャリ。

カシャリカシャリカシャリ。

「とつ、取らないでよ！ 誰か、誰でもいいから救急車を呼んでよお！」

悲痛な叫び。画面の中で、男性の痛々しい姿を隠すように女性が庇う。

しかし興味の対象となってしまった今、それは無駄な抵抗であった。不謹慎という言葉は、人々の好奇心と群衆心理を前にして脆くも消え去っていた。まるでそんな言葉は最初からこの世になかったのだというように、彼らは見世物と化していた。

四方八方、シャッター音が男性の姿を克明に捕らえ納めてゆく。野次馬が視線を注ぐ先は、無機質な機械と画面上の男女。彼らにとつてけて同等の位置に立つ存在ではない。

悲しみと怒りに狼狽する女性と、絶え間なく血を流し続ける男性ではなく、ただの刺激的な絵なのだ。

人が増えてきた。写真が取りづらくなり、致し方なく工藤は携帯電話をポケットにしまった。その場を立ち去る。女性の怒声が虚しく響くなか、工藤は友人に画像を添付したメールを回し始めた。

「昨日のメールすごかっただろ」

翌日。大学での講義の最中にも、工藤が出す話題は事故の話であった。

「グロすぎだし。ってかあんな送ってくんやよ」

友人が笑う。工藤もまた笑う。

「マジすごかったし」

状況を思い出しながら大袈裟に表情を変える。世の中の多くの人がそうであるように、工藤の話し方はどのような内容でもよく似ていた。しかし今日は更に大胆に、身ぶり手振りを加える。

「そんでさ、ツーリングしてた女がさあ……」

異変は唐突にやってきた。

工藤が更に詳細を舌で繰ろうとしたとき、背中を妙な感覚が舐めていった。脊柱を下から上に、おたまじゃくしが泳いでいくような気色の悪さがあつた。

思わず、振り向く。

「どした？」

工藤はこの感覚をどこかで知っていた。なんだろうと脳内をまさぐり、すぐに思い至る。

「見られ……」

「え？」

背中を搔きながら、

「や、なんか見られてる感じがして……」

「こわっ。お前、写メなんか取ったから、祟られたんじゃないのっ」
おちゃらけて友人が指をさす。

「変なこというなよっ」

友人の動作にふつと気持ち在和らいだ。工藤は友人と同じように顔をニヤニヤと歪めると、携帯電話に机においた目を落とした。

が、また妙な感覚が走った。再び振り向くも、やはり工藤を見る者はいない。

「……あんだよ」 気のせいなのか。声を出してしまえば非現実な感覚は簡単にまどろみ、消え失せた。しかし講義が終わるまで、工藤は後ろをけして見なかった。

講義を終えてから一人、トイレに駆け込む。急いだためだろう、ひとけはなかった。

工藤はひとつだけ深い呼吸をすると、携帯電話をポケットから取り出した。二つ折りをパカッと開き、昨日の画像を確認する。

彼がとった写真は三枚。一枚目は男性の血まみれの姿が、二枚目は女性の泣きすぎる姿が、三枚目は男女の姿をまとめて撮っている。しかし三枚目はばやけて、あまり様子が解らない。

興奮しながら撮った写真だが、時間をおいて見ると友人がいうようにあまりにもグロテスクだった。冷静になってみると、何故こんなものを保存しているのか、自分のことなのによく分からなくなり、気味が悪くなる。熱に浮かされたときかいいようがない。

消そう。

そう思い立ち、工藤は削除するべくボタンを押した、……が。

「なんだよ、コレ」

いくらボタンを押しても、不思議なことに画像は消えなかった。動作をやり直し、再びボタンを押す。しかし。

「なんだよ、コレエ！」

削除を実行しているはずなのに、さも当然のように画面を占領する画像。

苛立ち、工藤が叩くようにボタンを押すと、ようやく変化は起きた。

削除……ではない。

「え？」

あまりのことに工藤は震えた。全身から汗が吹き出て、氷のように固まった。あり得ない、何故ならば。

見る見るうちに、画面が赤く染まってゆく――。

カシャリ。

工藤はまたあの異様な感覚に振り向いた。硬質な音がどこからともなく響く。

カシャリ。

ふいにトイレの電灯が力を弱め、瞬いた。薄暗い中、目にしたのは更に信じられない光景だった。

血まみれのフルヘルメットが、出入り口の真ん中に浮かんでいる。

強烈な悪寒がせりあがる。断続的なシャッター音は次第に感覚を狭め、大きくなっていった。

確実に、ゆっくりと、近づく。

耳元で鋏を閉じられるような、生理的な嫌悪を生む音。次第に膨らみ、容赦なく鼓膜をつんざく。

血が滴っていた。気づけば水溜まりとなっていた。フルヘルメットの黒いシールドの中に何かがあった。強烈な、鋭すぎる光が見ている。

「うああああああッ!!」

絶叫し、工藤はトイレの窓を開けて携帯電話を放り出した。

五階。カシャン、と地面で粉々に砕ける音が響く。

そして工藤は踞った。無意識に祈っていた。色々なものにすがっていた。絶叫しながら。激しく喘ぎながら。

やがて、肩を叩かれた。

「うわぁ！ 脅かすなよ！」

飛び上がって見やると、友人が体を反らし目を丸めていた。「なにわめいてんの？ いやホントいつちゃったわけ？」

じとつとした訝しい瞳に、工藤は

「虫」と腰をあげる。

「マジでかい虫いた」

「ゴキ？」

「そうゴキ、イニシャルG」

「峠攻める系？」

友人が僅かに口許を緩めたところで、工藤はその肩を叩いた。…
…何も無い。誰もいない。

これはヤベエ、お被いつてやつなのか？

工藤は自身の大きすぎる心音を危機ながら、友人の背中を押した。奇妙な出来事は続くかと思われた。しかし喜ばしいことに、工藤の不安は杞憂となった。携帯電話が破損して以来、異様なフルヘルメットが現れることはなくなった。

フルヘルメットを納めた画像が携帯電話とともに壊れたためだろうか。理由は定かではないが、少なくとも工藤は携帯電話の破損を理由に納得し、悩むことも悩まされることはなかった。

そればかりか彼にとってこの出来事は、自分の良い話の種となった。

携帯電話で事故現場を撮ったらとり憑かれたという話は、語れば語るほど彼の優越感を刺激し、体験の恐怖を薄れさせてくれる。

他人の関心の的となることは、彼にとって最大の関心であり幸福なのだ。

「でさ、携帯新しくしたワケよ」

学生食堂でカレーライスを掻き込みながら、話を終える。さりげなく卓上に置いた新品の携帯電話を指差した。

「てか超すごい、いいなあ。あたしもそいうのしてみたいかも」

「えー。私はヤダあ。でもフォーンシリーズ買えちゃうなら考えるー」

一緒に食事をしていた二人の女生徒のうち一人が、黄色い声をあげながら携帯電話に手を伸ばした。

「触ってもいいですかあ」

「いいよいいよ」 気前よく工藤が了承すると早速、女生徒は携帯電話を開く。

「これカメラの機能、デジカメ並みなんですよね。試していいですかあ」

「いいよ」

早速、女生徒は工藤に携帯電話を向けた。

「はい、とりまーす」

カシャリ。

シャッターがおりる。もう過ぎ去ったこととはいえ、少し寒気を覚えた。まだ心のどこかで恐怖心は燦っているのだ。

「いいの撮れたかなあ」と、女生徒が画像を確認する。とたんにその表情が……曇った。

「あの」

携帯電話を工藤に差し出し、青ざめながら唇をわななかせる。

「せつ、先輩の横に、血まみれのヘルメットが……！」

——カシャリ。

「きゃはははははッ！」

女性特有の、甲高い声が弾けた。何事かと工藤は目をしばたく。

「ベストショットじゃん。先輩かわいい〜、本当に怖がつてる！」
女生徒二人はご満悦に視線をあわせると、再び腹を抱えた。手には携帯電話。工藤を窺うわけでもなく、中に納めたのであろう怯える男を確認する。

しばらく啞然としていた工藤であつたが、数秒の後ようやく何が起こつたのか理解した。

「ふざけんなよ……」

「え？」

自分でも驚くほど声は低く小さく、こもつた。きょとんと反応を返され、我に戻る。

「やつ、ふざけすぎっしょ〜」

「ごめんなさ〜い」

可愛く手を合わせられたものの、内心は苛々していた。早々に誤魔化して立ち去りたい気分となつて、まだ半分近く残るカレーライスの脇にスプーンを置く。

「じゃ、俺はこれで……」

立ち上がろうとしたとき、携帯電話が歌い始めた。最近落としたばかりの曲だ。

「先輩、電話」

渡されて携帯電話に目を落とすと、電話番号が表示されていた。名前でも団体名でもない、つまり携帯電話に未登録の者からの電話である。

「誰だろ」

携帯電話を投げ捨てたとき、登録していたすべてのデータを失ってしまった。友達の協力でデータを登録し直したものの、中学時代の同級生のデータなどは殆ど入っていない。

「はい、工藤です」

工藤はなんの躊躇もなく、携帯電話を耳に当てた。

「……………」

ブチリ、と無言のまま切れた。

「なんだ？」

とるのが遅かったろうかと思っていると、再び電話が歌った。

「工藤ですけど」

今度もまた無言電話だ。微かに人の吐息のような音が聞こえ、すぐに切れる。二度、続いた。

「なんなんだよ……………」

あまりの無言電話の数に苛立っていると、また。

「はい！ 工藤ですけど！」

声が荒くなった。気にせず話を進める。

「どちらさんすか！」

「工藤……………」

ボソリとくぐもった男性の声。ようやく、電話の向こうの相手を掴む。

「いやだから、何の用だよ」

「あなたは人間のクズですね」

「は？」

たった一言を告げて電話は一方的にまた切れた。何が起こったのか理解できずしばらく頭が働かなかったが、

「ふざけんなよ…………ッ」

カツと頭に血がのぼり、工藤は着信履歴を開いた。こちらから電話をかけてやる、そう考えて開いた。

が、工藤は言葉を失った。

着信履歴はすべて、別の電話番号が並んでいた。

「え……」

つまりこれは複数。別の人物がそれぞれ電話をかけてきたのか、電話を大量に所持しながら工藤に電話をかけてきたのかは分からない。しかしさすがに異常だと、工藤はようやく気づいた。

また電話が工藤を呼ぶ。

「先輩どうしたんですかあ」

「やあ、ちよつとね……」

薄気味悪さを感じて、工藤は電話を切るとすぐさまサイレンとモードに設定した。

電話は絶えず。無音のまま光輝き、着信を知らせる。それは午後
の講義でも止むことはなかった。もう電話に出るつもりはなかった
が、自分に何が起きているか解らないうすら寒さが背筋を撫です
る。

講義を終え、急いで帰路についた。なるべく人の多い道を選び、
商店街を通る。

黄昏時特有の、橙色の光を浴びながら、
工藤の頭にはあのことが膨らんでいた。

——画像。

この異常を呼んでいるのは画像しかない。それしか工藤には考え
られなかった。

『お前は人間のクズだ』

重低音のくぐもった男の声が耳に貼りついて離れない。それはト
イレで見た血まみれのフルヘルメットと重なり、何度も何度も蘇り、

責める。

「俺がなにをしたっていうんだよ……」

ただ写真を撮っただけだ。そもそも写真を撮ったのは自分だけではないはずだ。なぜ自分なのか。

「もう画像もってねえのに、なんでだよ……」

工藤は怯えきっていた。早く家に、家にと足が進む。

——瞬間。

「ひいっ」

十字路の真ん中に足を踏み入れたとき、あの感覚がまた走った。すばやく背後を向く、が。無論そこにあるのはただの商店街。

「ううっ!？」

まただ。今度は脇から。しかしやはりそこにも、買い物客しかない。だが妙な視線の感覚は、尚も工藤を突き刺していた。背後からだけではなく、四方八方から——。

たまらなくなり、工藤は脱兎の如く走り出した。帰宅しても独り暮らし、誰もいない。一人にはなりたくない、一人になったら何をされるか。

工藤は絶え間なくランプを点灯させる携帯電話を取り出すと、電話がかかってくる間を見計らい、友人に片っ端から電話をかけ始めた。

出る、出る、出る。

しかし祈りは通じず、電話には出てくれない。

頼む、頼む、頼む——。

「もしもしッ、比留川か!？」

やっと電話が通じ、工藤は懇願するように声をあげた。

「助けてくれ! 誰かに見られてるみたいで、気持ちが悪」

「あの……」

すがった果てに返ってきたのは、まったく聞き覚えのない声だった。

工藤は自身の過ちに気づいた。かけたのではない。間違っ、出でしまったのだ。

全身が震える。脂汗が滲む。工藤は携帯電話を耳につけたまま体を固めた。

そして……。

カチャリ。

パチン。

ドサ。

工藤は一人、自身の部屋にいた。玄関の電気だけをつけると、よろよろと歩き出す。

まず最初にしたのは、パソコンの電源を入れることだった。

軽やかな音を奏でながらパソコンが立ち上がる。デスクトップの光が青ざめた工藤の顔を照らす。

電話から聞こえてきたのは、実に柔和な男声だった。予想外なほど優しい声に驚いていると、『あなた大変なことになっていますが、知っていらっしゃいますか』と男声は切り出した。

キーボードを叩き、工藤はネット上のあるページを開いた。そこにはいくつかの動画と、画像がおりてある。

動画のひとつを工藤は開く。

流れてゆくのは覚えのある光景。

『今すぐネットを観覧して下さい』

工藤はスクロールした。そこには目を疑うような文章が踊っている。

それを見、工藤は膝をついた。

3番：工藤光

電話番号：080-xxxx-xxxx

住所：……

こいつは被害者を助けることなく携帯で撮り続けていた現場で笑いながら

『あなた、晒されてますよ』

その場に崩れる。予期していなかった事態に、工藤はうずくまり震えるしかない。彼にできることは少なく、彼は非力である。

敵はあまりにも多い。工藤の住む街にも潜むほどに。そしてなにより強大だ。

「俺は……俺は……」

工藤は喘ぐ。ネット上にぶちまけられた自身の姿はあまりにも滑稽だ。デスクトップの向こうにいる人物たちにとっての、格好の餌食。

あの事故現場で自分がそうであったように、彼らは狂喜し、画面の中に工藤という映像を納め、その群衆心理を高め続けるだろう。人は簡単に人を侮蔑し、傍観者にも断罪者にもなれる。逃げられはしないのだ、彼らが忘れるまで。彼らに些細な用事ができるまで。

全ては、真に愉快な他人事である。

KillTime（ホラー）（後書き）

お布団に包まりながらユルユルと書きました。意識しないで書いたためか、大好きな幽霊ネタと以前から書きたかったネットネタが融合して、久しぶりに文章を書く楽しさを感じた作品です。

プラネタリウム（文学）

夜のこと。父の十三回忌に、僕はその箱を見つけた。それは押し入れの奥深くにあり、埃を被っていた。

なぜ真新しい高校の制服を汚してまでその箱に手を伸ばしたのか分からない。だけどそれは、物と物の間、僅かな隙間から光り輝いて見えた。

古く錆び付いた、ブリキの箱だ。

少し脂っこく、埃がしっこく張り付くことから、年季が入っているとわかる。煎餅か何かでも入っていたのであろうその箱には、小さな穴が無数に点在していた。

虫などを空き箱で飼うときにこんなことをする。なんとも懐かしさを感じながら僕は、その箱を開けてみることにした。

予想はしていたが、中には何も入っていなかった。その代わりとってはなんだが、底の方になにかこびりついていた。

「なんだろ」

爪の先で削ってみると、簡単に剥がれる。何度か削ってみて、ピンときた。蠟だ。

蓋の裏側を観察すると合点、少し黒ずんでいる。蠟燭を入れて蓋をして、その動作があっているならばこれは。

僕は急いで仏壇から蠟燭とマッチを持ってくると、箱の中に日をつけた蠟燭をたてた。

「やっぱり……」

感嘆する。これはお手製の、プラネタリウムだ。

天井に微かに浮かぶ星くず。それらの名前など僕は知らないが、正確な配置だということは解る。ああ、あれは知っている。北斗七星だ。変だな、星が六つしかない。

田舎で見る夜空よりも星が多い。もしかしたら、人の目には見ることでできない遠い星も刻まれているのだろうか。

僕はその美しさと、丁寧に穿つために使われただろう膨大な時間を思い、再びため息を漏らした。どれほどの情熱をもって、これは作られたのだろう。

「おや……」

背後で床が軋む音と声がして、僕は振り向いた。そこにいたのは祖父だった。

「正一の部屋で何をしてるかと思いきや、随分と懐かしいな」

いまだ海に出る、精悍な漁師の顔。黒々とした皮膚に刻まれた深いシワが、ずっと和らいでいる。

いつも険しい顔をしている祖父の、珍しい笑顔がそこにあった。

「これ何か知ってるの？」

「それは俺のだ。昔作ったやつだが」

驚いた。祖父は星に興味を持っていたのか。

「おじいちゃん、星好きなの？」

僕の一言に祖父は、ゆっくりと腰を下ろした。そして照れ臭そうに、

「これでも昔は、天文学者になりたかったんだよ」

はにかむ祖父に、僕は不思議な感じがした。

今でこそワカメの養殖をしているが、昔は荒れ狂う海に果敢にも出、大漁旗をあげて帰ってくる豪気ところがあったという。そんな祖父と天文学者という言葉は、僕にはまったく結び付かなかった。

そればかりか、祖父という人間がかつて何かになりたいといった夢を持っていたことに実感が湧かなかった。

祖父は祖父であり、祖父は漁師だ。そういう風に完成されたモノなのだ。そう思っていた。けれどそれが、けしてそうとは限らないということに、妙な感覚を覚える。

なんだか、砂糖で作られたサンタクロースが、ホットミルクを不意にかけられて溶かされてしまったような。不思議な感じ。

「なんで天文学者にならなかったの？」

「家は漁師だ、俺は長男だしな」

「お父さんも長男だったでしょ」

問いかけると祖父はそのまま、静かに唇を塞いでしまった。目を細め、僕を見つめながら、ただどこか遠くを見ている。

祖父を困らせてしまつたろうかと、僕は不安になった。もやもやとする気持ちをなだめたくて、「おじいちゃんこれ、星が足りないよ」と口を開く。

「途中でやめちまつたから」

「ふうん」

また沈黙が降りてきた。

世の中には居心地の良い沈黙と居心地の悪い沈黙がある。これはなんだろう。ちょうど、真ん中だ。

僕はブリキの箱を撫でた。蠟燭のせいでまるで猫のように温かい。きらきら光って、まるで生きている宝箱なそれは、ひどく眩しい。

「お前は親父似かしんねえな」

「えっ？」

不意に祖父が口を開いたもんだから、僕は思わず聞き返した。

「ひいおじいちゃん？」

「正一だよ」

正式名称、木村正一。まがおうことなく僕の父だ。多分。あまり記憶がない。僕が二歳のときに会社帰り事故で死んだ。

「正一がどうしたの」

「あいつも俺の部屋に勝手に入ってよ。そいつで遊んでたもんだから、やったんだ。大学生くらいの時の話だよ」

「ふうん」

父もかつて、押し入れの奥にこれを発掘し、仏壇に走ったのだから。

蝋燭に火をつけて、名前の知らない星くずを見上げて、北斗七星の数を数えたのだろうか。祖父が作りかけた、プラネタリウムを。

「途中だから、北斗六星なんだね」

僕はなんだかおかしくなった。

「六？」

突然、祖父が大きな声を出した。そして天井を見上げ、唇を小さく動かす。

ひとつ、ふたつ、みつつ……。

「こりゃあ驚いた、星が増えてるじゃねえか」

言われて、僕も顔をあげる。そこにあるのは満天の星。人の目には見えない小さな星までも輝く、世界でひとつだけの夜空だ。

「おじいちゃんの作りかけ、お父さんが手を加えていたってこと？」

「ああ……」

祖父は呟くと、ただただ星の足りない夜空を見上げた。喉元が少し震えていた。再びやってきた沈黙のなか、僕は視線を落としてプラネタリウムにまた指を伸ばした。とてもとても、熱くなっていて、今度は触れることが出来なかった。

「おじいちゃん、僕これ貰っていいかな。僕も星を作りたいよ」

祖父は何も言わなかった。だけど答えはなんとなく解った。いつも感じてる、居心地の良い沈黙が教えてくれる。

「僕が完成させるよ」

祖父が作りかけたプラネタリウム、父が作りかけたプラネタリウム、僕のプラネタリウム。

ブリキでできた古い箱はキラキラと、蝋燭が溶けてしまっただけと輝いていた。

プラネタリウム（文学）（後書き）

K i i i T i m eを書いた後、まだ書き足りないなという気持ちがあり、書きました。ホラーを書いた反動でしょうか、珍しくホノボノとなりました。

蠟燭の炎を人の命に喩えてみたかったのですが、うまく文章に表せなかったのが心残りです。

相変わらず誤字脱字に気付けません……。

ちんちくりん(ぼのぼの)

「問いいち、子どもと羊と紙束を舟にのせて川をわたります」

受験生にとって、夏は重要な季節だ。

「子どもと羊を同時に舟にのせると沈みます」

夏を制すものは受験を制すという言葉はあまりにも有名だが、ごく一般的高校三年生である僕も、その言葉に従い、机に向かっている。

「対岸に子どもと紙束を同時に置くとイタズラされます。舟の上だとイタズラしません」

勤勉に問題集を開き、扇風機を二台機の周りに配置して勉学に励む。

「羊と紙束を同時に置くとたべられます。舟の上でも食べてしまします、ひでーはなしだ」

暑くて堪らないが、大学に入るためだ。大学に入って、医者になつて、それから、それから……。

「さて、いちばん少ない手数で舟をうごかして下さい。よし、いいだろう、わが力を知るがよい」

虚数はかけて実数になるが単体だと虚数であり現実の数字ではなく、つまり、ああ、汗で問題集が……。

「うーん、うーん、ああだめだ、羊が食べちゃう。こっちもだめ、子どもを食べちゃう」

愛は、じゃなかった。は二乗して一つになり、子どもが生まれ、家庭の責任を感じ、やがて夫婦中は冷え、それからそれから……、ん？

「あれ、羊は子どもを食べちゃう？ 羊が子どもを？ 子どもが羊、ひつじこども……こもどひつじ……こもどらこんつー！」「うるさいっ！」

堪りかねて、俺は声をあらげた。

蝉が遠くで鳴いている。

強烈な太陽光が容赦なく入り込む部屋、中央にある小さなテーブル。

そこでドリルを広げながら、「いらいらしちゃ、やーよー」と、ポニーテールをふわふわさせながら幼女が失笑した。

「誰のせいで苛々してると思うんだよ」

「……地球温暖化によるヒートあいらんど現象？」
首を傾げる幼女こと、姪。

「違う、お前のせいだっ。地球のせいにするなっ」

「何をいう。勉強しろとカヨワイれでーにドリルを押し付けておきながら」

「お前が勉強してみたいって駄々をこねるからだろっ」
「はー？」

姪こと生意気な六歳児は、ふてぶてしく聞き返すと、
「言ってないよ」

「言った。確実に言った。そして駄々をこねた」

「いつのはなし」

「ついさっき言った」

「ついさっきって、何時？ 何時何分何秒、地球が何回まわったときですかー？」

懐かしい無理難題。しかし予測の範囲内だ。

「三時、三十二分四十秒頃」

「地球が何回まわったときですか？」

「そんなのどうでもいいだろ」 さすがにそこまでは答えられないものだ。

六歳児こと瀬川陽菜子はフヒヒヒヒと悦に浸ると、

「イクナイ！ 地球は大事だよ、にーちゃんみたいなごうまんな人間がいるから、地球は泣いているよ！」

名探偵よろしく人を指でさすもんじゃない。

「はいはい」

もう面倒になって、僕は背を見せつけ机に座り直した。子守りなご真剣にするもんじゃない。

「あーあ、ちゃんとやったらアイス食わしてやろうと思ったのになあ」

途端に、だだだだだだと背後から足音。

「ほんとほんとー！？」

ぷにぷにの頬を赤らめ、興奮しきった様子で瀬川陽菜子こと幼女は腕を掴んできた。鼻息がかかる。やれやれ。

「俺が嘘ついたこと、あるか？」

ぱああ、と幼女で六歳児で生意気な瀬川陽菜子は、興奮を昇華させたように目を細めた。

天を仰ぐ。

「いま、地球がちょっと微笑んだよ……」

「はいはい」

いそいそと戻っていく。

さあて、どうしたものか。相手は小学生のドリル、こちらは高校生

のドリル。どちらが早く終わるかなんて目に見えている。

僕は眉を下げつつ、シャープペンを握り直した。

ちんちくりん(ぼのぼの)(後書き)

力をまったく入れず。

掛け合いだけのものはとても久しぶりに書きました。

うみのひと（不思議系）

大学にカーター宛で手紙が届いたのは、彼がまだ海洋生物学者という肩書きに慣れていない二十代後半の頃だった。ごく一般的な茶封筒にボールペンで書かれた英語は、実に軽やかで女性的なものであった。住所はカーターが住んでいる州からかなり距離があり、送り主にはリアとある。

何事だろうとカーターが開くと、そこにはいくつかの新聞記事の切れ端と一枚の写真が入っていた。

「なんとということだ……」

カーターは一瞬にして目を奪われ、言葉を失った。記事は少し前に世間を賑わせ、瞬く間にゴシップとして一蹴されたシーヒューマンのものだった。

シーヒューマンとは、北極海の付近に生息しているという噂の、未だ捕獲されていない生命体である。真っ白い肌をしており、体長は数十メートルといわれている。この生命体に関しては幾つかの目撃例や写真があった。しかしながらその生存が噂の域を越えないのには大きな理由があった。

シーヒューマンは五本の指を持っているのである。そればかりか、上半身は殆ど人間のような形をしていた。具体的に言い表すならば、赤ん坊に魚の尾をつけたような不気味な姿だ。

冷静な者ならば誰もが解ることであるが、海の生物が水掻きのない五本の指を持つことなど有り得ない。そのことからシーヒューマンはネッシーのように何者かの悪戯ではないかとされ、もちろん学会でも取りざたされていない。彼も信じてはいない。しかしながら彼は、手紙に釘付けとなった。

さて、彼の名誉のために語ると、新聞記事の内容に反応したのではなかった。彼が真に目を奪われたのは記事に同封された一枚の写真である。そこにはくつきりとシーヒューマンが写っていた。ゴシ

ツプ記事を彩る、おぼろ気な姿ではない。毛のない白い頭部、凹凸の少ない顔、大きく開いた二つの黒い目、鼻の穴、歯の生えていない口。曖昧な写真ばかりであったために今まで確認されていなかったエラが首にあり、驚くことに水掻きのようなものが少しばかりあるように見える。

シーヒューマンは布のようなものに包まれながら、じつとカーターを仰視している。全くもって現実的に、シーヒューマンはその存在を主張していた。

カーターはすぐさまリアという女性にコンタクトを取った。海洋生物学者としての疑問は多く残っていたものの興味が勝ったのである。

出会ってみると、リアはまだ二十代の若い女性であった。黒髪が似合う清楚な彼女は、カーターにひとつの交換条件を差し出した。

「北極海へつれて行って欲しい」というのが彼女の願いだった。

「かわりにシーヒューマンの情報を差し上げます」

カーターは騙されているのではないかと悩んだが、最終的には同意した。所々の費用はリアが負担すると付け加え、現に彼女は大金を差し出してきたのである。そして何より、彼女の態度に心が動かされた。真剣な懇願がにじみ出た、鬼気せまる様子であった。

こうしてカーターは大学で北極海に生存する生物の調査を名目にチームを編成し、リアと共に北極海へと向かった。

シーヒューマンの目撃例が最も多い目的地が近づくほどに、カーターは興奮を覚えた。あの嘘のような噂が真実だと確認されれば、カーターは一躍時の人となる。海洋生物学者としての地位は不動のものとなるかもしれない。胸が踊るのも無理はなく、饒舌になる。

その一方でリアは寡黙になっていた。まるで殉教者のように眉をひそめ暗い表情のまま、黒々と広がる無限の海の間を眺めている。「どうしてそんなに暗そうなんだい？」と、カーターはリアに尋ねたことがあった。しかしリアは曖昧にはぐらかしてしまうのだった。

たまりかねて度々、チームのメンバーにリアの相談を傾けたものである。

「彼女を元氣付けるにはどうしたら良いかな？」

「弱気だな。ミステリアスなのが良いんじゃないのか？」

「どうだろうね。彼女は笑顔の方が似合うと、僕は思っけれど」

カーターが肩を竦めると、

「海の上じゃあロクなプレゼントもできやしないだろ。デパートは24時間閉まっているしな。まあ、夜に頑張って満足させてやるしかないんじゃないか」

下品なアドバイスにカーターは呆れた。どうやらチームはリアをカーターの恋人かなにかと誤っていたらしい。思えば喧嘩したのかと肘でつつかれることもしばしばあった。

「残念だな。僕には無理そうだよ。彼女は魅力的で、勉強ばかりしてきた僕はきつと対応しないからね」

どうやら満更でもない様子のカーターは、チームの仲間たちに冷やかされる度なんとも残念そうにため息を吐くのだった。

海の上で幾つの朝と夜とを数えただろうか。障害のない夜空が溢れんばかりの星屑をたたえる中、カーター達の船は目的地に錨を下ろした。

「ここが目撃情報を総合的に評価して、最もシーヒューマンが現れると計算した座標だよ」

カーターの言葉に、リアは懸命に海を見渡した。普段は神秘的な横顔が、また恐ろしいまでに真摯なものへと変わっている。

カーターの、シーヒューマンを見つけるといふ思いが情熱ならば、リアの思いはどこか別種のもののように思えた。情熱を遙かに越えた、死に物狂いの形相は狂気じみており、カーターは初めてただならぬ恐ろしさを感じた。

彼は目的地についたならばすぐにでも写真について聞こうと決めていた。しかし、リアの異常さに質問をする気は削がれて、立ち尽くすしかなかった。

いたい、彼女の何がそうさせるのか。そうカーターが考えあぐねていると、リアが歌を歌い始めた。

刺すような北極海の寒さの中、甲板の上で歌を歌うのは気が狂ったとは思えない行為だった。とてもではないが夜など、五分も外にはいられない。

しかし彼女は震えながら、声をかすれさせながらも歌い続けた。最初は蒼白になっていたカーターであったが、歌のテンポにやがて体が解れてきた。

懐かしさのあるそれは、古くからある子守唄である。童話をベースにした愉快的な歌詞が、海辺に木霊する。さざ波の音に揉まれながらも、海へと染み渡っていく。

カーターは恐怖心を拭い、リアの行動を見守ることにした。そうすればやがて謎も解るだろうと心を落ち着けることにした。

それからというもののリアは毎朝毎晩、歌を歌い続けた。チームが海に潜り調査を行う中、一人たんと歌い続けた。よく喉を壊さないものだ。いや、もしかしたら既に、壊れていたのかもしれない。彼女は歌を歌い続けたが、それにもやがて終わりが近づいてきた。調査の期限が迫ってきたのである。そしてついに、最後の夜が訪れた。

その夜もリアは歌い、カーターはリアのそばで彼女の様子を伺っていた。目映い夜空の下、リアの白い息が薄い線を描いている。さざ波が子守唄と重なる。

カーターは暖房器具に体を擦り付けながら黒い地平線を見やった。やがて朝が来るだろう、そうしたらリアを説得し、故郷に戻るのだ。写真がなんであったのか、カーターにはもうどうでも良くなっていた。ただ漠然に、やはりシーヒューマンなど噂だったのだという達観が首をもたげている。

カーターがもう中に戻ろうかと思案していると、地平線を何かが横切った。

「ん……？」

リアの歌がとたんに大きくなる。それと共に、波の音も共鳴した。目を擦り、カーターは立ち上がった。何かが地平線に横切ったのではなかった。波のような白いものが、膨らんでゆく。

リアは聞き取りにくいほどの高音を海へと貫いていた。次第に白いものが近づいてくる。カーターは甲板に足がくつついてしまったかのように身動きをとれず、ついにそれを見上げた。

黒々とした、カーターの胴体ほどはありそうな巨大な目がふたつ浮かんでいた。真っ白な頭部は丸く、船より幅がある。白い皮膚には青い血脈が細かく走っている。鼻穴と口からは生臭い冷気が吹き付けてくる。

あまりにも巨大すぎる白い姿。紛れもなくそこにいるのは、シーヒューマンであった。

想像を絶する。

鯨でもない、ヒトでもない、未知の生命体である。データのとおり、この世の規格を、道理を超越している。カーターは恐怖のあまり気絶することも出来ず、その場にへたりこんだ。生暖かい突風のような息が生物特有の生臭さを含みながら絡み付いてくる。舌が縮みあがり、心臓が齒軋りをし、気を抜けば簡単に胃から絶望がせり上がってくると思われた。

しかしながらリアはというと、心はどこへいつてしまったのか、怯えることなく立ち、堂々とシーヒューマンと対峙していた。気づけば歌はやんでおり、静寂だけが横たわっている。

サタンの再来。地獄を描いた絵のような船上で、天国に佇むようにリアは落ち着いていた。彼女に声をかけようとして、カーターは息を飲み込んだ。海の音、風の音に揉まれて、気づくのが遅くなった。リアは微かに何かを呟いている。

繊細な声がたわみ掠れて、集中しなければ聞き取ることはできない。しかしながら確かにリアはこのように呟いていた。

ごめんなさい、許して……、と。

次の瞬間、カーターは悲鳴をあげた。リアが海へと飛び込んだの

である。シーヒューマンもまた不気味なほど大きく割れた赤い口を晒しながら、海原へと倒れ込んだ。白い鯨が尾を翻し獲物を狙うように、沈み込む。反動は膨らみ巨大な波となり、船が激しく揺すられた。間一髪、あわやというところでカーターは甲板に繋がった浮き輪に手をかけ、死に物狂いでしたがみついた。

そして絶叫した。海に沈んでしまった人の名を。

波に翻弄される甲板、首に脈を浮かせるカーターの嘆きが響く。しかしながらその呼び声に意味はなかった。波が落ち着きチームが慌てて外に飛び出した時、そこには青ざめたカーターが一人、咽び泣いているだけであつた。厳格に凍てついた北極海は押し黙り、彼に背を向けていたのである。

カーターは大学に戻ってからというものの、塞ぎ込む日々を過ごしていた。時おり見せる儀礼的な笑顔はまるで死人のようで、元々細かい食は更に細くなった。しかしながらカーターという男は、悲しみの底で喪に服しながら、学者である。地道にもシーヒューマンとリアの関係について調べ、カーター自身が必要とする解決点を見いだしたのだ。

結果からいうと、その解決点は脆弱であり解決というにあまりにも曖昧であつた。しかしながら彼はそこで留まり、ひとつの終止符としたのだ。

ある夏のことである。古くからある海沿いの町に小さな病院があり、そこでリアは一度入院をしていた。路上で倒れており、運ばれたのだと言う。まだハイスクールの学生で未熟であつたが、入院したのは婦人科であつた。驚くことに彼女には出産の形跡があつた。

自力で子を産み、路上で倒れたのではないかと医師は推測し、警察に通報した。しかしながら肝心の胎児は見つからなかった。殺人の容疑もかけられたが、証拠は不十分だったようである。死体が見つからなければ、彼女が口をつぐんでしまつては。ハイスクールの女学生への追求には限界があつた。

リアの過去を知った時、カーターは衝撃を受けながらも至極落ち

着いていた。傷つきながらもどこかで納得する自分に気づいたのである。

幼稚な恋の結末であつたのかもしれない。あるいは、一方的な脅威にねじ伏せられた結果かもしれない。真実を知る術はリアが海に消えた今、同じように沈んでしまったのだ。誰の手にも届かない北極海の闇に。

ただひとつ確信をもって言えることといえば、あの写真でシーヒューマンを包んでいたものがアフガンであろうことだ――。

カーターは黄昏の海を眺めると時折、黙祷するように目を閉ざした。

瞼は光を通して橙色の無地となる。

三百六十度、血の色が透ける生命の根源たる世界だ。温く、まどろんでいる。そうしていると、心からふいに情景が湧いてくる。そこはリアがいる海だ。リアは歌い、躍り、泳ぐ。幸せそうに肢体を揺らめかせ微笑んでいる。頬は林檎、唇は薔薇である。その傍らに、白い影がゆったりと寄り添う。触れ、離れ、また触れ、甘えるように。

やがてリアはカーターに目もくれず、大きく水を蹴った。すると潜り、どこまでも掻いてゆく。水面からどんどん離れて、海の底と溶け込んでゆく。何処へ行くものか解らないが、彼女の心は穏やかであろうとカーターは思う。

そして歌を聞く。澱のない子守唄を。異形の情景を、橙色の世界を、北極海の闇を、美しく滑るそれは、カーターの体と心を貫いて、どこまでもどこまでも落ちてゆくのだ。

うみのひと（不思議系）（後書き）

UMAモノが書きたくて。

あの世の話（ショートショート）

目覚めると彼は、目映い光のなかにいた。塩で出来たように白い大地がどこまでも果てなく伸びて、薄く霞んでいる。

彼の前には巨大な門が天高く立ち、傍らには一人の老人が佇んでいた。老人は白髪だらけで、しわくちゃで、男なのか女のか解らない。ラムネの中のビー玉のような目を彼に傾けながら老人は、ニコリと目を細めた。

幻想的な景色、得体の知れない老人に、彼は自分がどこにいるのか悟った。きっと、死んでしまったのだらう。ここは死者の世界だ。門前に立つの以前のことかふいに彼の脳裏を走った。

振り返れば振り返るほど、何かあったといえばあったし、何も無いといえない、そんな人生であったように思う。

世の中に名を残すことなく、特に証を残すことなく死んだ。未練があったような、なかったような。

百年たてば存在事態が不特定多数に含まれるような生き方。要は、極めて普通の人生だ。

唯一、少しズレていたのは、自殺したことくらいだろうか。最期ばかり少し個性的であった。それでも、毎日何十人出る個性ではあるが。

そこまで振り返って、彼は頭を抱え込んだ。自分はなんて愚かなことをしたのかと、彼は重たくのし掛かる感覚に膝を落とした。まさか、あの世が本当にあるなんて。

途端に彼はメソメソと泣き始めた。後悔しても遅いと地に伏せる。すると老人は、首を傾げた。そして、「どうして泣いているのか」と彼に問いかけた。

「後悔してるんです」

彼は語り始めた。

あの世というものがあるのだと知っていたら、自分は間違いなく自殺をしなかつたろう。自殺をすれば天国に行けずに地獄へ落ちると言われている。

つまりもう、天国へは行けないのだ。これから自分を待つのは、苦行の世界『地獄』である。

痛くて苦しいなんて……、これからのことを考える彼。傍らの老人に彼は、地獄へ落とすのでしょうか！ と叫んだ。

すると老人は奇妙な態度を返した。腹を抱えるようにして、笑ったのだ。

そんなに私の不幸が楽しみですか、恨めしそうに彼が言う。あなたは悪魔ですね……、と。

しかし老人は、彼の恨み言にこう答えた。

何言ってるのか。今までいたところが、地獄だろうに。

あの世の話（ショートショート）（後書き）

全くネタがないのに捻り出したから、訳がわからなくなってしまいました……。

それではみなさん、お達者で（すこし不思議）

あなたが生まれてきたとき、

あなたは泣いて、あなたのまわりのひとたちは笑っていた。

だから死ぬときは

あなたのまわりのひとたちは泣いていて、あなたは笑っている。
そんな人生を送りなさい。

—— ネイティブアメリカンのことわざ。

「父さん、赤ん坊になってくれませんか」

西村育は意を決し、咽喉から搾り出すように呟いた。風がざわめき、桜の花びらを掬い取る。一枚が、育の父の盃にひらりはんなりと、浮かんだ。

「いいですよ」

温厚な父が美しい皺をより一層深める。その時不思議と、花見の喧騒が聞こえなかった。消え入るような小さな答えが分かってしまったのは、そのせいだ。

……三月のことだった。

「どうしましたか」

ハッとして現実を引き寄せられて、育は頬杖を反射的にやめた。目の前に、幼い顔に似合わない賢明さを醸す微笑がある。

小動物のようなくりくりした瞳。純真無垢な童顔、けれど無邪気ではない空気。

朝食を終えた食卓の上で、それはとても眩しく見えた。なんだか神々しくて、余計気恥ずかしさが込み上げる。

誤魔化してもきつと、見透かされてしまうだろうなあ。

「うん、とね。三月に三人で花見に行つたでしょ。それを思い出して。なんでかな」

「ふうむ。解りました、これのせいでしょう」

父は掌いっぱいテレメラテーゼを育に見せると、そのひとつを指先に抓み、額の上にかざした。

ひらり、はんなり。テレメラテーゼは薄いピンクの光を翻しながら彼の柔らかな手で空中に踊る。

「桜の花びらの色です。大きさも形も、ちよつと似てますね」

そしてひょいと、小さな唇で食む。

「味はとても苦いですが」

その動作がどうにも可愛らしくて、育は思わず唇を手で押さえた。

「育、笑わないで下さい」

父の抗議。照れくさそうに頭を掻く仕種も可愛らしい。

「だって父さん、すごく、可笑しい」

「こら、父親をからかうんじゃないやありません」

殴るように父が手を上げたので、育はゆっくりと頭を下げた。こうしなければ、背の低い彼には届かないからだ。拳骨とはとてもいえない優しい振動が後頭部に囁く。

懐かしいような、切ないような気持ちがジンと心臓に滲む。

でも少しだけ、育は後悔した。卓上のテレメラテーゼを入れた瓶が目に入ってしまったから。

テレメラテーゼは、この国、日本で開発された。最近になりようやく認可された薬物だ。とは言っても、開発されたのは二十年前

で、そういう意味では古い薬になる。

認可が遅れたのはその独特な効能のせいだった。

若返る。

この奇異極まりない薬は元々、人の寿命を延ばすために生まれた。簡単に説明するならば、浦島太郎の宝箱の真逆のもの、といった所だろうか。

人間の細胞の中にあり寿命の長さを司るテロメア。その物質に影響を与え、そのようになってしまう。

だが、その驚きの力は、近年まで使われることがなかった。ある、奇妙な後遺症のせいで。

若返る、ゆえに赤ん坊になってしまう。テロメアターゼにはそんな奇異極まりない特徴があった。

このことは同時に、服用者にとって望ましい生活が出来なくなる、こと、全てを忘れてしまうことを意味する。その決定的ともいえる後遺症のせいで、近年まで封印されてきた。そう、近年まで。

「ずいぶんと縮んでしまいましたね」

洗面台より小さくなってしまった体を台に乗つけて、背伸びしながら歯を磨く、父。

「そうだね。そろそろ新しい服が必要かなあ」

服用前は育よりも背の高い人だった。だから昔着ていた服をお下がりならぬお上がりさせている。最近では、それも間に合わなくなってきたような気がする。

「詰めれば大丈夫です。せっかく私の介護を楽にするために薬を服用しているのに、そんな風に散財してしまつては意味がないでしょう」

「そついうの、散財つて言わないと思うけど」

「いいえ、薬代だけで結構かかるんですから。医療保険も降りないし」

父はぴょんと台から飛び降りると、いっちにと体を動かした。

「うん、今日も健康のようです」

にんまりとポーズを取ると、今度はステップを踏んだ。

薬のせいで若返り、身軽になった体が嬉しいらしく、父はこの踊りのような踊らされているようなステップをよく踏むようになった。まるで絵本から出てきた小人のように軽快な動きは、育をいつもウキウキさせる。

調子に乗って二人で踊ってみる、……と。

「何やってんの？」

父が石像になった。それもそのはず、彼の背後に育の夫、晴樹が立っていたからだ。耳まで一気に赤く染めると、父はまるでバランスを崩して転びましたという風に膝をつき、立ち上がる。

「うーん、朝はやはり血圧が……」

家族とはいえず前までは他人だった晴樹の前となると、彼は常に厳格でありたいらしい。妙なぶつぶつと独り言を呟きながら素早く晴樹の脇をすり抜けると、廊下へ出た瞬間に走り出してしまった。父の奇怪な行動に

「おいおい、あれはなんだ？」と指をさす晴樹。

「さあ。暑くなったからでしょ」

育は肩をすくめてみせると、夏の光溢れる廊下へと足を向けた。

週に三回必ずやってくる日。今日は父の診察の日だ。

財布から診察券を出して受付に出すと診察番号の書かれたカードを渡される。父にそれを握らせて、二人で時を待つ。

病院の待合室には、父と同じくテロメラテーゼを服用しているお年寄り、いや子供の姿が、ぽつぽつと見受けられた。挨拶を交わすわけでもないが、何故か親しさを覚えてしまう。

テロメラテーゼの服用者は一目で判別できる。彼は相応にして白髪交じりだ。

そして痩せている人の中には皺も残っている者もいる。父もその例外ではなく、幼くも整った顔に綺麗な白髪がかかっていた。ヘルマンヘッセの作品集を抱えた手の甲には、小さな皺もある。

と、父の本がパタンと閉じられた。診察番号を呼ばれたらしい。

「育、今日について来て下さいよ」

「はいはい」

育はよいしょと腰をあげると、父の手を握った。リノリウム張りの廊下の、一番奥の診察室に向かう。中には、父の担当医である若い医者が座っていた。

なんとなく彼にはいつも冷たい印象を受ける。無愛想なわけではなく、寧ろ優しいくらいなのだが、私は苦手だった。

「お元気そうですね、西村さん」

そんな医師らしい定型句から父の診察は始まった。「今日は保護者の方も一緒にですね」

保護者という言葉にピンと来ないまま、頷く。これから始まるだろう話に緊張しきっている育の背中を、無意識なのか父が撫でる。

医師の柔和な微笑み、糸のように細い目から育へと滑り込む、何か。私は姿勢を正した。

「西村、えー、お父上の西村真さんのことですが。経過は極めて順調です。懸念されていた発作もないようですし、このまま最終段階

に入るでしょう」 最終段階、つまり乳児期のことだ。

「最初のご説明のとおり、食事は離乳食に入ってください。ベビーベツトはご用意されていますよね」

「はい」

育の堅い返事に頭を傾けると、医師は続けた。

「離乳食がしばらく続いた後に歯が全て抜けます。気をつけてください。全て抜け終わったら、すぐに乳児期に入ります。哺乳瓶と赤ん坊用のミルク、おしめも必要になります。場合によっては、現段階でもおしめをしてもいいでしょう」

「それは」

育は息を呑んだ。考えていなかったわけじゃない。ちゃんと説明されていたが、いざ医者に言われると、ドキリとする。

気持ちを整えて、答えた。

「待ちます。父の尊厳を大切にしたいので」

「分かりました。ただ、お父上はこれから御自分の意思のままに動くことが困難になるでしょう。それは貴方にとっても、辛い意味を指します。それは近い未来に来る。二週間か、三週間か……」

深刻さを帯びた医者の方振り。思ったより乳児期が来るのは早いらしい。

個人によって早まるということは通院する前から知っていたが、ふいに息苦しさを覚えてしまう。

「……そしてこれは、全ての方に聞いていることですが」

育の考えを見透かそうとするように、医者が更に育を観察する。瞬時に、繰り出そうとされている質問を理解した。

「虐待はしません。絶対に」

そう育がきつぱりと放つと、医者は細めていた目をパツチリと丸

め、次の瞬間、綿菓子頬をふんわりと緩めた。

「うん、さすが西村さんのお子さんですね。ご自分で勉強されてる。実に素晴らしいです」

冗談なのか本音なのか、子どもっぽく語尾を延ばすと、医者はカルテを看護師に回した。

「ええ。自慢の子ですから」

誇らしげに父が同調したので、育は気恥ずかしくてチョット居た堪れなくなった。

病院の帰り道、父の機嫌は上機嫌そのものだった。普段は理性を極力保とうとするタイプの父は時折、子が困惑するくらい茶目っ気を出す。

ホップ、ステップ。

「父さん転ぶよ」

「大丈夫」

はあ、呆れる。

「何がそんなに嬉しいの」

「育が褒められたろ」

「ああ、そうなの」

育の気分を知ってか知らずか、父は育の顔をのぞき込み、

「そうだ服を買いにいこう！」と幼児独特の甲高い声で叫んだ。「服？ 買うの？ 今朝は買わないっていったじゃないの」

「いいんだ、幸せだから」

意味が分かりません。

こう言い出したら父は止まらない。丁寧な言葉遣いからよく優しく鷹揚に見られがちだが、実は頑固なのだ。自我の育った大学生相手に教鞭を振るっていたことが彼の性格をそのようにしたのだろうか。まあ、育も父に服を買ってやりたいと感じていたし、丁度いい

といえば丁度いいのだけれど。駅前にある伊勢丹へと足を踏み入れた。伊勢丹なら子供服も大量に売ってる。

二人してエスカレーターに乗る。

が、父はあるうことか子供服のある四階ではなくどんどん上を目指して行くではないか。

「ちよつ、ちよつと父さん!？」

「ほらほらどうしたんですか、五階ですよ?」

意外な言葉に思わず驚く。

「お父さん、子供服じゃなくて私の服買うつもりだったの?」

五階にまで登り、父の肩をひよいと掴む。父はというと、一体なにを言ってるのかしらこの人、という目で私を見上げている。

「父さん。私、子供服を買うんだと思ってた」

「何を言ってるのですか。私の服については今朝、詰めればいいと言ったでしょうに」

父は呆れたように溜息をつくと再び歩きだそうとしたので、育は手に力を入れた。父の提案には賛同しかねる。

「そういう意味なら、帰ろう」

父のものでない服を買うには行かない。服ならばたくさんある。昔から使っているとはいえ、不便はないのだから。

だが父は納得いかない様子だ。

「どうしてですか」

「必要ないからだよ」

「必要ですよ。育も晴樹君も去年と服が変わっていないし……」

「いいから帰るよ」

父の肩から手を離し、さっさと育は逆側にある下りエスカレータ

ーに向かった。

だがそれを父は許さない。父は育の後ろ袖にしがみつくと全体重を乗せ始めた。重くて歩きにくいつたらない。振り解こうと父の首根っこを掴んだ。父はそれでも抵抗する。頑固者の父はスッポンよりしつこいのだ。

……スッポンよりしつこい時の父には、いつも理由がある。

「私の介護でお金がかかったことは謝りますから」

父のその一言で育の力は緩まざる終えなかった。

「父さん、そんなこと思ってたの」

父を行動させた理由に啞然とするしかない。そして同時に苛立ちを覚えた。

確かに父の医療費や介護にお金がかかっていたのは事実だ。デイサービスの利用や介護グッズの使用で我が家の財政が逼迫したのは紛れもない事実だ。それだけでなく認知症の進行で精神的にも追いつめられてきた。

だけど、それは過去の話だ。だから育は父にテロメアテーゼの服用を願い出たのだし、父もそれで納得したはずだ。

それなのに

「どうしてそんなこと言うの」。

「どうしてって……だから育は反対してるんでしょ？」

「違うよ。父さん分かってない、変じゃん。服を詰めればいいとか言ってた癖に。紳士服なんて、晴樹もあれ以上のびたり縮んだりする予定はないよ」

「使えるものは使えるんです。古くなったものは買い換えないと」

「父さんのそれだって皆から貰ったお古だよ。ほらっ帰るよ」

育は父を強く引っ張った。だが父は抵抗し、さっと逃げる。そして育を睨みつけると一喝した。

「父さんの話をしてるんじゃない！」

甲高い怒声が売場に響きわたる。何人もの視線が一気に降り注ぐ。……前まではこんな、大勢の前でカナキリ声をあげる人ではなかったのに。

「こつちだつてそうだよ。もういいよ。勝手にして」

父にそう吐き捨てるのと早々と下りエスカレーターに乗り込んだ。自分の行為に反省してついて来るかと思った父は育の後を追うことはなかった。二人は別々に帰宅した。

テロメアテーゼの服用条件のひとつに年齢は八十以上、という項がある。いくら若返つても八十年の経験が記憶として残っているのだ。

年をとれば丸くなるというが、それは違う。ただ、人生への未練も活力も弱くなり、気持ちを押し込めてしまっただけだ。若返り、体が動くようになれば八十年以上育てた自我が主張する。周囲の誰もが、己より若く青いのだ。……ああけれど、もしかしたら薬物投与の不安が無意識に働いているのかもしれない。

それにしても正直、啞然とし、苛立ち、衝撃を受けていた。

父が五十近くになってようやく出来た子供であることもあり、育は溺愛されて育った。逆算すれば孫でもおかしくなくらい父と年の離れた育は、声をあらげられたことなど今までなかった。母が死んだときでさえ、父は静かにすべてを受け入れていた。感情をぶつけられた事などなかったのだ、一度も……。

育の中には、穏やかな父の姿しかなかったのに。

「おい、どうなってんだ？」

会社から帰るなり、晴樹は呆然と口を開いた。それもそうだ。二人が珍しく喧嘩しているのだから。

育は怒りに仏頂面になりながらソファアの上で丸まりテレビを鑑

賞していた。父はというと、同じく居間で、とは言ってもソファの反対側にクッションを敷き、育の顔を目に入れないように新聞を読んでいる。いつもは二人で仲良く食事を作っている時間帯だ。

「珍しい。たまにはつてやつか？　でも少し迷惑かな」

晴樹はあくまで中立の立場という風な口振りでネクタイを緩めると、熊のような体をノソノソと動かして家庭用電話の前に座った。丁度、居間とキッチンの間にある。

「さて、出前でも取りますか。さて、何が食べたい？」　二人は寡黙に徹した。ここで機嫌を直して

「ピザが食べたあい！」

なんて言ったら負けである。

晴樹はキョロキョロと私たちを伺うと、じゃあ適当に決めるよ、と呟いた。

「もしもし……あゝ、西村のマスオです。そうそう久々にやつてみたい。うんうん、まあ、特上一人前と並二人前お願いします並びとつサビ抜きで」

「「寿司イ——ッ!?」」　不覚にも父と台詞が被ってしまう。いやいや。「ちょっと待ってよ、寿司って！」

「良いじゃん。パチンコで当ててきたんだよ。まあ喧嘩中のおこちやま達には関係ないっしょ。お前等は並で十分だ」

「ややや、晴樹君、それはいけないよ。並なんていう質の悪い生物は年寄りの体には悪すぎるよ。せめて上でないと」

「ずるっ！　父さんずるっ！　若返って胃は成長期の子供のくせにっ」

父に噛みついた。父も負けずに、自分がいかに繊細か語り始める。私も自分にどれほど特上寿司が必要なのか反論し始める。

「……仲が良いよなあ」

晴樹はそう言って、笑った。

今でもたまに思う。

仲がいいというか、物事を有耶無耶にしてもいいから傍にいたいだけだと思う。不満を隠して一緒にいようとするのを、本当に仲がいいと言えるのかは分らない。二人は親子だし、縁が切れないから、いつまでも喧嘩を続けるわけにはいかない。

そういう意味では、自由がないと、思う。

……晴樹が寿司を選んだのは、父の症状を予測してのことだった。翌日、いつも朝の早い父が自分から起きてこなかった。階段をさがり父の寝室を覗くと、嘔吐していた。急いで春樹を叩き起こし、老人科救急のある病院へと駆け込む。臓器が、幼児のそれになっていた。

「若返りが急速に進んでいます。まもなく、自分の力で胃にたまった空気を抜くこともできなくなります。げっぷの促しかたは分かりますか」

申告を受け入れられずに呆然としながら、父を背負い、帰路へついた。渴いた葉が足に絡み付く。季節はもう、秋に変わろうとしている。あの決意の春から時間は確実に過ぎていたのだ。

人間は衝撃を受けると重力を失う。些細な人生において、幾度かこうして地面を亡くして、何もわからなくなる。もし背中に父を背負っていなければ、きっとふわふわと浮いてしまう。何処ぞへと。それは何処なのだろう。ふいに左腕に重みを感じた。

「俺が変わろうか？」

晴樹がこちらを見ている。変わる？ 何を？ この熱を？ 重みを？

父の命を？

「いやだ……」

晴樹の姿が滲む。歪む。

「いやだいやだいやだ……」

い や だ い や だ い や だ い や だ い や だ い や だ い や
だ い や だ い や だ。

ねじ曲がる。

い

痛みが背中に入った。首を後ろに向けると、父のもみじの手が映った。少しずつ朱色から白へと変色する。力が込められる。

この拳を一度見たことがある。母が死んだとき、父の拳はこんな色だった。

「服を買いましょう。いくの服を」

伊勢丹の五階にあがる。きらびやかな入り口を過ぎ、人々の笑顔の隙間を抜ける。エスカレーターへと慎重に乗り、浮上する。二階、三階、四階、そして五階。そこは紳士服売り場だ。

「いく。まっすぐに行って、突き当たりを右です」

父の言われるままに、育は進んだ。父が私に服を買うのだと、だ
だをこねた理由を知るために。その決意を思い知るために。

「この服を、私が死んだら着てください」

今でも父の、柔らかい愛が聞こえる。

四月、町に桜が降る。ボンヤリと、昨年のことを思い出していた。テロメアテーゼを認知症の父に服用したこと。

小さかった父が少しずつ若返り、育より大きくなり、そしてまた小さくなっていったこと。

それを受け入れてくれたこと。そして残してくれたもの。
裂かれたように、血が噴き出るように、痛み続ける日々を。
許されようとは思わない。育は、――私は、父を殺したのだ。

「育」

呼ばれて振り返ると、晴樹が廊下から顔をのぞかせていた。

「いま、大丈夫？」

「ん」

「俺じゃ無理だ」

その言葉に、背筋が伸びる。白いベランダを背にして、部屋へと足を向けた。

「ごはんは？ おしめとか」「ダメ。そういうのじゃない。ただただ機嫌が悪い」

「まだお父さんって、認識がないんだろっね」

泣き声が響いている。

「はいはい、育お父さんが来ましたよ」

急いで、部屋の奥におかれたベビーベットの上部を突っ込む。中では艶やかな茶髪はボサボサに、大きい瞳が目腫らし、小さな手足をばたたと広げていた。“彼”をだき抱えると、高く掲げる。

途端に彼は笑みとなる。艶やかな肌を、紅色の頬を、無邪気に輝かせて。

テロメアテーゼが認可された背景は三つある。

寿命や認知症という、人間が逃れられない病に打ち勝てるということ。

超少子高齢化社会を迎えた日本において、海外の力を借りず破綻しかけた経済を立て直すための特効薬であること。

何らかの理由で出産が望めない夫婦、及び同性カップルの、“血

の繋がった家族を生み出す”最後の希望であること――。

父の逆成長がとまり、父の自我と記憶が全て消え去った冬、育は愛する息子を手に入れた。

育は子供が欲しいという欲望に負けたことを、一生許せないだろう。自分の息子と引き換えに、父を殺したことは紛れもない事実なのだから。

泣き止んだ息子を再びベビーベットへ預けると、育は晴樹に向き直った。晴れやかな日の桜を背に、白い服を纏う彼は眩しい、笑顔までも。彼から育は、同じように感じられるだろうか。父が二人に残した、純白のウェディングスーツ。

「やっぱり、血の繋がった親子だな」

真っ白な服に雨が降る。それなのに世界は明るく、残酷な希望に、こんなにも満ちる。

「そうだよ。私たちは、紛れもなく親子だ」

それではみなさん、お達者で（すこし不思議）（後書き）

約半年振りに書いた作品です。もし若返りの薬が現代にあったら、少子化対策になるかなという思いつきから色々想像しました。ジャンルとしては文学でもなくエスエフでもない、少し不思議。少し不思議ジャンル、いつも書いている気がするなあ。

愛を誓って（ラブコメ）

バレンタインデーのお返しは三倍返しからスタートと世間は言う。詰まるところ、世の女性達は至極真つ当に何の疑問を持たずそのように思っている。世間の半分は女なのだから、それは所謂常識なのだろう。

だから、ゴディバのチョコ三粒を恋人のバレンタインデープレゼントとした僕の彼女が、ホワイトデーのお返しスゴく期待してるつと目をギラギラさせながら微笑んだのに罪はないし、男として既に四半世紀近く生きた僕が無意識の無心に応えようとするのは可笑しな話ではない。

そんな経緯で、僕は初めてリングというものを、買った。

ロマンスの押し売りを望む女性達の焦がれ焦がれて懂れての必須アイテムだ。可能であればまだ薬指につけて欲しくないそれを、普通に渡すのは味気がないような気がして、僕は耳クソしか詰まっていないと彼女に定評の頭を酷使し、リングをケーキの中に隠すこととした。駅ビルのケーキ屋で購入したワンホールだ。リングを差し出しながらコレ入れて下さいと呟いたときの、レジの娘のドン引きした顔を僕は忘れないだろう。無茶振りにもほどがあつたが、お客様はモンスターということで、かくして目の前のケーキにはリングが仕込まれている。

「あれっこれどうしたの？」

トイレからリビングへと戻ってきた彼女が、食卓に現れた白い二ユーヒーローに目を点とさせた。

「ケーキ」

「や、だから、どうしたの？」

「どうでも良いじゃない、と思いつつ、」

「たまにはケーキ食べたいと思って」

包丁を手にして、僕はケーキを切り分けた。リングの位置は把握

している。生クリームの外壁、デコレートが若干異なる部分だ。そこから埋め込んだのだ。必ず彼女がリングを口にするよう正確に切ると、皿によそう。

「はい、どうぞ」

「チョコケーキがよかった」

「そういうと思ってコレにした」

ぶうと唇を尖らせながら、彼女はケーキにフォークを差し込む。

先端を切り分けて、まずは一口。

「うん……」

彼女は静かに頷くと、再びフォークを伸ばす。二口、三口と切り分けていき、食が進むにつれ、フォークがケーキの中に収められた銀の輪に近づき、やがてその硬さに驚くだろう。

四口、五口、何口、……と。

「あれ？」

「ん？」

気づけば、彼女の皿が何故だか綺麗になっていた。理解が出来ず、一瞬我を忘れる。

「どうしたの？」

「いや……、おわかりする？」

「するー」

僕は予想外の事態にやや冷静さを失いながらも、ケーキに再び刃を入れた。もしかしたら、リングを潜ませた位置がずれていたのかもしれない。リングの位置を予測して、僕は彼女の皿に切り分けたケーキを乗せた。彼女は変わらず黙々と、フォークでケーキを串刺しにすると、一口二口、何でかな、ぺろりとたいあげやがりましたよ何でかな、本当に何でかな。

「どうしたの？ 何だか顔色悪いよ？」

「別に……」

平静を装いながら、震える手で僕は、やや半月様のケーキと対峙する。ここにあるのは既にケーキではなく、自分に恐怖を与える白

い悪魔と化していた。しばし狼狽したが、すぐに良いアイデアが浮かんだ。

こうなりや彼女が口にしなくとも良いのだ、僕が口にし、さりげなくケーキからリングを救助し、ケーキを食べ終わって落ち着いてから、いかにもこれが前から考えていたベストのタイミングですよとでもいうかの如く、彼女の手をとって、リングを指にはめてあげて逆転、サクセスフォーリンラブ。

「よし、それでいく」

「なにが？」

「いや、ケーキ切り分ける形的な……」

曖昧な笑みを作りつつ、僕もケーキを味わい始めた。目の前が白くなり動悸が激しく変な汗をかいている時のケーキは味がしないのだと初めて知りつつ、がつつく。一切れ、また一切れと。

「『ごちそうさまでした』」

あつという間に完食して、僕と彼女はお互いに手を合わせて見つめあった。

「やっぱり顔色悪いよ」

彼女が不審そうに小首を傾げる。そりゃあそうだ。僕の心拍は今、生まれたてのネズミより早い。

あまりに過酷な現実には打ちのめされながら、僕は起こっている事態を脳内で整理した。

ケーキには確かにリングがあった。彼女が食べたなら気づく予定だった。だが彼女は気づかなかった。仕方なく僕も食べた。よく噛んで食べた。リング逃すまいと食べた。しかし無かった。

認めたくない。

認めたくないが認めざるえないだろう。考えるに、考えるうちに、解決策が唯一あるとすればそれは。

「ねえ早紀ちゃん」

「何？」

「スカトロって興味ある？」

「死ね」

彼女は瞬時に的確な選択を持って言葉を発した。ケーキを食べた直後の恋人同士の会話ではないという叱責と、スカトロという性癖をカミングアウトするかもしれない彼氏に対する侮蔑と、どちらに転んでもかまわないだろう最善の戒めの言葉をもってして僕に釘を刺した。電光石火の速さだ、さすがだよ、華麗だ、惚れ惚れする。

さてどうしたものか。

「うつ、……うつ！」

考えあぐねていると突然、彼女が椅子から転げ落ちた。

「さささ早紀ちゃん！？」

床に倒れ込んだ彼女に、慌てて近づく。彼女は、胃の辺りを両手で擦りつつ、丸まっていた。その顔は、先ほどにはなかった苦悶の色に染まり、歪んでいる。

「お腹……痛いっ！」

まさか、と全身が凍りつく。僕が隠したリング、それを完全に飲み込んでいて、それが腹の中で悪さをしているのか。なんてこった、なんてこったい！

「ごめん早紀ちゃん！」

僕は苦しむ彼女にすがりつき、床に頭を擦り付けた。

「僕早紀ちゃんを驚かせたくてリング、ホワイトデーのお返し！じゃない、バレンタインデーのお返しっ、ケーキに忍び込ませたからソレ食べちゃったんだよ！ごめんごめん、本当にごめんっ！」

彼女は目を大きく開けると、ううとより脱力する。

「お詫びして……、この罪百倍にして返して……」

痛みに喘ぎながら彼女が訴える。

「分かった、きっと償う！許して！マジごめんなさいっ」

彼女は僕の謝罪に、虚ろな表情で頷いた。痛みが極限に達しているのか、朦朧としている。このままでは危ない。落ち着け、落ち着くんだ。

高速回転で考えて、僕はパツと閃いた。

「救急車！」

「待つて……ッ」

飛び上がろうとして裾を捕まれ床に体をぶつける。見やると、彼女が瞳を潤ませていた。

「キスして……」

こんな時に何をいつてるんだ、とはとてもじゃないが言えなかった。痛みに呻きながら望んでいる、彼女の願いをはね除けることなど出来るはずもない。

僕は目を閉じた。そして、慣れ親しんだ彼女の唇に、僕の唇を静かに重ねた。

——ゴリッ。

明らかに予想されたものとは異なる硬さに、僕はパツと離れた。そして啞然とした。

彼女がニヤリと笑う。艶やかな上唇と下唇に挟まれて、銀の光がキラリと輝く。待ち望んだ銀色の瞬き。

あまりのことに、僕はその場にしなだれた。空気が抜けた風船のように、一瞬でクタクタになる。

そんな僕を彼女覗き込むと、唇からリングを取り出した。

「噛んだとき、痛かった。お返し」

こつんとリングで僕のおでこを弾くと、彼女は僕のお腹に頭をのせて、リングを指にはめた。さっきまで悪魔だったのに、今度は猫のように甘えて。

「ありがとう、大好き」

天へとかざされたリングは、ライトに照らされより美しさを増す。

ああ、なんというか、

「……うん。僕も」

そんな風に、眩くしかないくらいに。

愛を誓って（ラブコメ）（後書き）

バカップル話書くの大好きです。

マイジnkxsに囚われて（輕め文学）

世の中にはジnkxsがある。四つ葉のクローバーを見つけると幸せになれるとか、黒猫が横切ると縁起が悪いとか。こんなにも文明が発達した現代においても信じる人は多く、その中に僕も含まれるとはいっても、僕の場合は、一般的なジnkxsを信じているわけではない。

マイジnkxs。

つまり、僕だけのジnkxsがあるのだ。雲ひとつない晴れは良いことがある、そんなマイジnkxsが。

だけど、良いものばかりではない。悪いジnkxsもあって、むしろそっちの方がはるかに多いのだ。こんな感じに。

「残念！ 今日いちばん運勢が悪いのは双子座。ささいな失敗を繰り返し、大きな不運に。ラッキーアイテムは飴玉！」

占いを見終わり、ようやくリモコンはテレビの電源を消してくれた。

全くの失態だ。適当に朝のニュースを観ようとしただけだったのに、占いの十二位を観てしまった。

マイジnkxsそのいち、テレビの星座占いを最後まで観ると運気が悪い。

しかもよりによって、自分の星座が十二位だなんて。

僕は嘆息しながら玄関に向かった。早く家を出よう。早めに家を出ると良いことがあるはずだ。慌てて革靴に足をつ込んだ。……

あ、左足から。

マイジnkxsそのに、無意識に左足から靴を履いたら縁起が悪い。

悪いマイジnkxs二連発。僕は朝から嫌な予感を引きずりつつ、出勤することとなった。

「それが不調の原因？」

「はい。ミスばかりで、先輩には本当、すいません」

会社の食堂で、昼御飯をついばみながら頭を下げる。

「それは良いけど。ミスは誰にでもあるから。にしても、マイジンクスねえ」

先輩はラーメンを一口すすると、箸を置いた。

「変なところだわるよな」

「すんません」

「気持ちの問題ってあるから。じゃさ、良いジンクスやつたら？」

先輩が手を叩く。しかし僕は首を横に振った。

「そういうのダメなんです。意識して良いジンクスやろうとしても無駄なんです。ってか、自分で意識してどうにも出来ないから、ジンクスなんです」

そう答えると、先輩は急に無表情となり、再びラーメンをすすり始めた。

しまった。ネガティブなことを言い過ぎた。というか、仕事ができない言い訳をまるで自分のせいだと思っていないような言動をしてしまった。

僕はすぐさま、誤魔化すように、

「や、結局は僕がダメなだけなんですけど！」

すみません、と再び頭を下げる。すると先輩は、

「……なんかなあ、悪いことを望んでるみたいだよな、それ」

それだけ言っで、今度はスープを飲み始めた。

夕焼けに沈み始めたプラットホーム。僕は帰宅ラッシュの人混みの中で、今日を振り返っていた。

失敗ばかり続き、最悪な気分だ。先輩の僕に対する好感度も、確実に減った気がする。

——悪いことを望んでるみたいだ。

先輩の言葉を反芻する。なんというか、そうではないはずなのに、そんな気がする。言い得て妙、というか。幸せになりたいはずなのに、自分で作った下らないジंकスに振り回されているのは本当で、外からみれば、不幸を望んでやっているようにしか思えないだろう。だからといって、マイジंकスは消えない。悪いジंकスは確かに存在し、悪いことは起きる。仕方ないじゃないか。それがマイジंकスなんだから。

せめて、明日は良いことが起きますように……僕がそんな風に祈っていた時だ。

突然、米袋でも落ちたような鈍い音が響き、周囲がにわかになぜめき始めた。目を向けて、僕は思わず息を飲んだ。なんとレールの上に女性が横たわっている。

「電車がくるぞ！」

誰かが声をあげる。そりゃそうだ、ここは大都会東京なわけで、五分おきには電車が通るわけで。非常ベルを、——でも間に合わなかったら!?

アドレナリンが急激に駆け巡って、気づくと、ホームから飛び降りていた。自分の体じゃないみたいにフワフワする。悪いジंकスが重なり重なって、もうやけくそだった。

やけくそな人は他にもいたようだ。僕と同じように飛び込んだ男性と中年の女性、三人で女性に近づく。女性はビクビクと痙攣していた。てんかんだろうか。怖かったが無我夢中に掴んで、ホームへと抱えた。

こういう時の連帯感って凄い。女性は人々によってあっという間に引きずられ、僕もまた、身体中捕まれて、引っ張られぶちつけて、ホームへと転がった。

皮靴を何かが弾く。片方だけ、皮靴が飛んでいく。

間一髪とはこのことか、僕の足元に電車の壁が見えた。ガチャピンの緑色。

「……助かった」

山手線の電車に足の裏をつけながら、僕は全身の力を抜いた。

病院の待合室で僕は呆然と椅子に座っていた。まだ膝が笑っている。そりゃあそうだ、生まれて初めて死にかけたのだ。終わってみて、自分がどんなことをしたのかを痛感する。もし遅ければ、明日のニュースを飾ったに違いない。

全身をぶつけたが、骨折はしてないし、怪我らしい怪我もない。運が良い。

「……家を早めに出たのが良かったのかな」

九死に一生を得、燃え尽きていると、慌ただしい足音が聞こえた。お待たせしました」

やってきたのは、あの女性の旦那さんだった。小脇に幼稚園くらいの娘さんを連れている。

「奥さん大丈夫ですか」

「お陰さまで。本当にありがとうございました！」

旦那さんが深々と頭を下げる。気恥ずかしさを感じていると、娘さんがじつとこちらを見つめ、何かを差し出した。

受け取ると、それは小さな飴玉だった。

「ママを助けてくれてありがとうございましたっ」

「これっ」

旦那さんが叱ろうとするところを、

「いーんです、飴好きですから。ありがとうございます」

飴玉の包みをすぐさま開き、口に入れる。ふんわりとしたミルク味が瞬く間に広がった。しっかりと味わう。

そういえば、今日のラッキーアイテムは……。

「マイジンクス、最近どーよ」

「先輩の助言施行中です」

そう答えると、先輩はパチクリと目をしばたいた。どうやら覚えていないらしい。

首をかしげる先輩に、

「これどーぞ」

「なにこれ。飴玉？」

ますます首を傾げるので、僕は笑った。

「良いことあるかもしれませんよ。……マイジンクスです」

本日は晴天、運が良い。

靴を履いたのは右足から、縁起が良い。

ミルク味の飴玉を舐める。

——とりあえず、死なないで済むらしい。

マイジnkクスに囚われて（輕め文学）（後書き）

マイジnkクスありますか？ 自分があります、苛々するほど。
自分でも暗示にかかりやすい性格だと思います。

l i v e d + d e v i l (ホラー)

刑事は仕事に忙殺されていた。数カ月前から起こり始めた連続殺人事件のせいである。

実に不可解かつ奇妙な事件で、人々の間では既に迷宮入りを噂されているほどだ。

その理由のひとつとして、被害者の年齢性別はてんでバラバラだった。また、被害者の身近な人物にはみなアリバイがあった。

時には屋外、時には密室であることもあり、自殺ではないかと深く警察を悩ませもした。

そんな摩訶不思議な事件を連続殺人だと警察が断定できたのは、夜に起こること、水に浸かっていること、という共通点によるものだった。

そこまでならば、他人には理解できない共通点作りに固執する、快樂殺人者が犯人なのだろう。

しかし妙な話はまだ続く。

——いくら解剖をしても、死んだ理由が分からない。

溺死ではあったが、溺死ではなかった。というのも、肺に水がない。体に傷がない、痣がない。加えて、薬物反応もない。

つまり、被害者は突然に死んだのである。

「こんなに無言な死体はありません」

初老の検死官は口髭を掻きながら呟いた。

「死体は語る、と言いますね。春日さんでもわかりませんか」

若い刑事の問いかけに、春日は首を横に振った。

「牧野君、僕にもわかることとわからないことがある。……寡黙な遺体がいわんとすることは予測できますが」

白いタイルに覆われ、鉄で出来た棚に囲まれた簡素な解剖室に、二人の声はよく響いた。ため息までも。

「つまり、なんの前ぶれなく意識がなくなり、なんの前ぶれなく呼吸がとまり、最後には心臓が止まる。そんな死に方をしたのではないでしょうか。事件の遺体は瑞々しく、美しい。まるで生きているかのようです」

「……わかりました」

牧野という若い刑事は眉根を曲げながら遺体に近づくと、丁寧に遺体を包むシートを取り外した。そして、遺体の首を指差した。

「ではこれは？」

一見して指先にあるそれはホクロだった。しかしホクロではないそれは、よく見なければ見落としてしまうほど小さな、穴だった。首筋に千枚通しでも使ったようにポツリと開いている。

「これは語りませんか？」

牧野の問いかけに、またしても春日は良い反応をしない。

「それはただの穴ですよ。ただの深い穴だ。細く切り出せば、骨の近くまで続いている穴」

「語りませんか？」

「牧野君。残念だが僕には、それは共通点にしか思えない。僕の知識と今までの経験とを総合して考えるに、それは共通点です」

口髭に人差し指を触れながら、

「死に関与しているかもしれないが、死因に結びつけられなければ、“共通点”はただの“共通点”であり、それ以上もそれ以下もない

んですよ」

——お手上げた。

春日はそういうと、牧野に老いた背中を見せた。牧野はやり場のない怒りを、無言で拳にこめ、壁に向けた。

翌朝、牧野は新たな事件現場にいた。

独り暮らしの若い女子大生がバスタブに浸かっている。その姿は胎児のようだ。第一発見者は付き合っていた大学生で、彼は今、署で事情聴取を受けている。しかし、

「彼は犯人じゃないだろうな」

きつとアリバイが見つかる。そして残されるのは悲しみと憤りだけだ。未解決によって着地点を失った心は、一生さ迷うだろう。そんな人間がもう、十人を超える。

「くそつ、何かないのか？」

牧野は両手を合わせてから、バスタブに右手を突っ込んだ。遺体を少し傾けると、やはりあの穴。

——ズキリ。

瞬間、昨日怒りに任せた拳が痛んだ。怒りはまだ収まっていなかった。

「牧野さん」

検察官にタオルを渡され、しぶしぶと右手を出して水を拭き取る。「ありがとう。今度は部屋をみてみよう」

まだ見ぬ共通点はあるだろうか。死に直結し、奇妙で不可解な迷宮を包む霧が晴れるような共通点が。そして迷宮に隠れる怪物と会えるだろうか。会ったらまず、こう言いたい。

「悪魔め……」

しかしその日も、迷宮は迷宮のままであった。

牧野の日々は事件一色であつた。休みはない。昼も夜もない。不眠不休で足を動かす。

しかし、そんな牧野をあざけるかのように事件は続いた。

「牧野君、このままでは君も遺体になつてしまふよ」

倦怠感を覚えながら検死室に行くと、春日は一通の封筒を手渡ししてきた。

「これはなんです」

「君の診療情報提供書だよ。僕が所属する東帝医大病院の、内科宛てに書いている。コネだからすぐに診察してもらえる」

牧野は突き返そうとして、やめた。春日の背後にある鏡に、自分が写つたからだ。その顔は、見事に真つ赤だつた。

仕方なく、牧野は病院へ足を踏み入れた。春日には恩がある。本来の医師という勤めがあるのに、頼み込んで検死をしてもらつてゐるのだ。海外の様々な場所で救命医を体験した春日は、様々な遺体に出会つてゐる。彼の豊富な知識と経験から受けた恩恵は計り知れない。

それはさておき、素直に感謝すべきだろう。牧野の体温はなんと四十度にまで達していた。

どおりで体調がすぐれないはずだと、診察を待ちながらひとりごちていると、ふいに目がとまつた。廊下を、車椅子が過ぎていく。

車椅子に乗っているのは五十代ほどの中年の女性だった。それを押すのは娘だろうか。青い制服が目立つ少女だ。

二人を目にしたとき、牧野は何故か嫌な印象を受けた。確かに車椅子の女性は人形のように虚な表情である。しかし、清潔そうな格好をしているし、娘に愛される姿は微笑ましいもののはずだ。一体どうして。

牧野の目が鋭くなる。原因を確かめるべく、親子を一枚の絵に見

立て、鑑定のように隅から隅まで目を凝らす。ひとつひとつ、違和感の糸を、丁寧丁寧に、手繰り寄せる。

——そして、牧野は立ち上がった。車椅子の女性の首元に、それを認めたからである。

「……生きた人間にも穴があった、ですか？」

「はい」

大学病院の一室。春日にあてがわれた部屋に牧野はいた。

「これを見てください」

牧野は机の上に写真を並べた。

病衣をまとった男女。みな、虚な表情で椅子やベッドに体を預けている。その首元には、例の穴があった。

「ある日突然、意識を失うんだそうです。この病院では三人見つかりました。いずれも、意識を失ってから一週間も経っていません」
写真の一枚、車椅子に乗った女性に牧野が指を置く。

「どの方もレントゲンやCT、MRIで異常を認めないそうです。採血で炎症反応はあるものの、詳しい原因がわからない。自分で呼吸はできるのに意識はない。しかし夜になると、夢遊病のようにさ迷うので拘束をしているとのこと。そして、」

牧野の言葉に熱がこもる。

「真水を好むんだそうです」

しんと静まる部屋。沈黙が二人の間に暫し流れ、次いで喉が鳴る音が響いた。

「……なんと。牧野君、これをよく見つけたね。まさに盲点だ。“生者”に“死者”の共通点があるだなんて」

感嘆の表情の春日。対し、牧野は熱く燃えながら……、同時に冷

めていた。彼の心は複雑に波打っていた。

というのも、この事実が本当ならば、事件はまさに牧野にとって迷宮入りとなる。これは病なのだ。牧野には防ぐことができない。犯人を捕まえることができない。犯人は人間ではないのだから。

——悪魔。

病という悪魔に、刑事は必要ない。

希望と絶望、歓喜と悲壮、興奮と消沈。ここからは、牧野の事件ではない。

春日にことを伝え終わると、牧野は自分の体からするすると力が抜けるのを感じた。

熱い。まるで燃えるように熱い。なのに、汗は氷のようだ。

筋肉も骨も血も重たい。すべてが重い。

牧野は倒れこむと同時に、意識を失った。

——次に牧野が目を覚めたのは、白い天井のある光景だった。

訳がわからなかった。先程まで春日の部屋にいたはずなのに。そう考えて、そういえば倒れてしまったような気がした。だとしたら、ここは病院だろうか。

思い、牧野は起き上がろうとした。しかし、体が鉛のようで動かない。辛うじて体が揺らせるくらいのものだ。

「先生、起きました！」

聞き覚えのない女性の声に続き、渋味のある声が耳に滑り込む。

「牧野君、遅かったですね」

春日の言葉になんのことも尋ねようとして、激しい喉の痛みに襲われた。ようよう出た声は呻きだ。

「無理しないでください。何日寝ていたと思うんですか。今あなたは病人なんですよ」

そう言いながら、春日が真横に立つ。そして、

「共通点、結び付きましたよ」

透明な瓶を牧野の目の前で揺らした。

瓶の中は水で充たされていた。そして中に、細い絹糸のようなものが漂っていた。

「寄生虫です。あなたの体から出てきました」

あまりの衝撃に、牧野は咳き込んだ。悪魔の正体がただの病でなく、寄生虫だということは解った。しかし、それが自分の中から出てきたとは。

「順を追って説明しましょう。この寄生虫は、水辺で産卵する種類なんです。汚染された水の中に卵があり、それを飲んだ虫や獣に寄生します」

春日はコップで水を飲むような仕草をすると、

「寄生虫の卵は体内で孵化し、消化液にも負けず、腸壁から侵入しようとします。やがて体を巡り、ある場所に寄生します」

頭を指先で叩いた。

「脳です。虫や獣の脳に寄生し、意識を奪い、交尾をする。すべての準備が整うと、夜に水辺へと誘い、産卵のために水の中へ飛び込む——脳幹の呼吸中枢を突き破って」

春日は再び瓶を揺らした。

「溺死であり溺死じゃない、不可解で奇妙な共通点だけの、連続殺人事件の完成というわけです」

すべてのピースが繋がる。謎という霧が晴れ、迷宮の姿が現れる。その重々しい扉の先にいた化け物の正体を認識する。

バスタブの中。水にくるまるように沈む女子大生。まるで生きているような遺体。犯人は現場にいたのだ。水の中で泳ぎ、漂っていた。

牧野が素手をつ込み、水に新鮮な血の臭いが流れたとき、奴は傷のある牧野の右手に近寄った。新たな獲物に狂喜しながら。

牧野は青ざめ、思わず嘔吐した。

胃に吐くものなどなかったが、拒絶反応は収まらなかった。めまい、吐き気、鳥肌。総毛立つ。絶対的に受け入れがたい現実である。うち震えていると、春日が背中をさすった。

「……大丈夫です。君は運が良い。腸内洗浄と内視鏡、あらゆる投薬。脳に行く前に攻撃できた。証拠に、いま君は君である。僕がいつていること、分かりますか？」

春日の論理的で優しい低音が心に響いて、少しずつ恐怖に安堵が勝っていく。

数分後、震えがようやく収まり、牧野は声を絞り出した。

「いま、病院にいる人は……」

「みな、脳を操られているので治療困難です。脳幹は脳外科にとって神々の領域ですよ。あなたは運がよかったです。私と事件を追い、私に情報を与えたからこそ、素早い予測と治療ができた」

「そう……ですか。なら……事件は、」
これで解決した。

あとは、汚染された水を人々がどのように口にし、あるいは触れたのかの調査をする。報道規制をかけながら、少しずつ原因を探り、汚染をたちきる。水が原因であるのに被害が少ないということは、消毒された水道にはいないということ。また、湯にはいない。人々

がたくさん使用する水を使った施設、例えばプールなどは一時的に閉鎖するとして……。

牧野の出番は少ないだろう。これは牧野の担当ではない。殺人事件ではないのだから。

「事件はまだ解決していません。点と点が結ばただけですよ」
弾かれたように牧野は春日を見やった。

「ギニア虫、針金虫、エメラルドゴキブリバチ。その他、寄生虫には様々な種類がありますが、今回の寄生虫はそのどれもに当てはまり、どれもに当てはまらないのですよ」

春日は牧野の手に、寄生虫が入った瓶を渡した。

「こんな虫は、日本にいないそうです。そればかりか、世界にも…… DNA を分析するかぎり、明らかに、誰かが人工的に作ったとは思えない配列をしていると」
そして力強く、瓶を握り込ませる。

「これは歴史上類をみない無差別快樂連続殺人事件。共通点がようやく死因に結び付いたところ。事件はまだ解決していません。……僕は“お手上げ”を引き下げますが、あなたはどうしますか？」

春日の目が輝いている。髭のある口許は真一文字に引き締まる。そして、初老の検死官の目に写る自分と対峙した。その顔はやつれている――、だが。

拳の中。瓶に漂う悪魔が、おぞましい笑い声をあげているように思う。いや、確かに聞こえる。

「なにいつてるんですか。これは、俺の事件ですよ」

牧野は静かに目蓋を閉じると、瓶を強く握った。悪魔の腕に、錠

をかけるために。

l i v e d + d e v i l (ホラー) (後書き)

これ短編むけじゃないよなって言われて、そういやそうだと思った作品。

でも中編書くのってしんどいです。

撲殺思春期（ラブコメ）（前書き）

ベタ恋2010春参加作品

撲殺思春期（ラブコメ）

信じられないことを耳にした。するとどうだろう、自然と悲鳴つていうモノは出るらしく。廊下のご真ん中？ 気にしない。気にしてなどいられるか。

「撲殺女王？ あの噂の撲殺女王が雛一に入学してるの！？」

僕の悲痛な問いに、クラスメイトであり高校に入って初めての友達である藤堂司は、静かに頷いた。

「おう。俺、女王とは同じ中学だったんだよ。川名、絶対近づくなよ、血祭りにさせられるから」

物騒な言葉に漏れる溜め息。

撲殺女王とは近寄る者を全員叩きのめし病院送りにするという、噂の人物だ。性格は残酷無慈悲で恐ろしく喧嘩が強く、どんな屈強な男でも拳ひとつで搦じ伏せるといふ。

自分より強い人間しか相手にしない、しかし自分より強い者などいない、孤独の一匹狼。

よりによって何故僕の憧れの高校に撲殺女王もいるのか。

「試験官脅いたらしい」

「なんだよソレ」

憤怒か悲壮か、うち震えていると、藤堂が突然口を閉ざした。みるみるうちに青ざめてゆく。

事態にピンときて、僕は何気ない風を装い窓へと視線を外す。桜吹雪の眩しさと、真横を誰かが通りすぎた気配を感じ、暫くすると、

「大丈夫。聞こえてなかったみたいだ」

藤堂が緊張を解いたのを合図に、視線を戻した。

「あれだよ、あれ。撲殺女王こと初音ひなた」

恐る恐る彼の肩越しに撲殺女王を窺う。

「びびるよ。顔は綺麗だしスタイルも良いけど、下手なヤンキーよりタチが悪いよ。喧嘩じゃ負け知らず、親がヤクザって噂」

そこまで聞いて僕は絶句し、暫しの沈黙を置いてから、

「ちよつ、ちよつと待って、本当に!？」

「本当だよ。今に見てろよ、撲殺女王知らない奴らがアレに近づいて病院送りだから」

その言葉に重力を失う。体の空気が抜けたかのようにフワフワして、そのくせ背骨は氷のように冷たくなって。

だって彼女は、撲殺女王は。

――僕の初恋だ。

サクラ咲く四月。僕は初めて学ランというものに袖を通し、高校生となった。鏡の前に立ち、ずつと懂れていた姿と出会う。

無事に合格し通学を許された雛巻第一高等学校は、県内随一の進学校だ。歴史上の人物を数多く輩出している由緒正しい学舎で、古いながらも自由な校風を持ち絶大な人気を誇っている。

さほど良くもない頭をフルに使い、寝る間も惜しんで勉強した。その努力の証を今、僕は纏っている。こんな幸せなことがあるだろうか。

毎日通えば高度な授業を受けられ、スムーズに有名大学へ行ける。勉強で悩むことはないだろう。

悩むとしたら人間関係。友達とか先輩とか、

「……恋、とかな」

ぼそりと呟き、途端に恥ずかしくなる。勉学の桜が咲いて、調子づいているのかもしれない。

でももしもこの学校で恋をしたら、それは僕にとって初めての恋となるだろう。

今まで勇気が出なくて片想いで終わるのが落ちだったけれど、それは後悔にしかならなかった。辛い受験を乗り越えて雛一に入ったら、後悔のない人生を歩みたい、そう考えていた。

僕はきつと、この学舎で初恋をする。

鏡の中で赤面する自分から目を逸らし、僕はむず痒い気持ちのままトイレから出た。

入学式を終え、あとは帰るだけだ。僕は鞆を片手に校舎を出て、校門を抜けた。

体が透けるような蒼には雲ひとつない。舞い散る桜と眼下の街並みを鮮やかに映し出す。

雖一は小高い丘の上にあり、下るまでの道のりには百以上の桜がある。まだ蕾が多いとはいえ、まさに春といった圧巻の光景だ。

心を奪われながら歩いていると、僕と同じように桜を見入る一人の女子学生が目止まった。長く美しい黒髪が清い風に煽られ、彼女の横顔が目に入り、僕は光が弾けるのを感じた。

蒼穹に艶やかなまで色濃い黒髪は光を反射し、真新しいセーラー服に包まれた肌は、健康的な色合いながら純白の雪のようだった。睫毛は長く瞳は不思議な引力を持った黒い惑星のようで、なんとうか、なんていうか、なんで瑞々しい。人間を野菜や果実のごとく爽やかに感じるなんて。

桜吹雪を背景に、とんでもなくとてつもなく美しいものが存在している。

ドスンと、胸に矢の刺さる音を聞く。僕はあまりのことに目眩を覚えた。体を支えるのがやつとの僕に気づくはずもなく、彼女は桜を愛でるように目を細めながら去っていった。

なんだあれなんだあれなんだあれ。なんだこれなんだこれなんだこれ。

希望に充ちた入学式の帰路。清楚で可憐な姿によって、刹那のうちに爆発した心臓。これって恋ですか、間違いなく恋ですね。ああ初恋ってやつですね。

僕に春がきた。芸術的に麗しい春が。純愛ってやつが。今日だってそんなわけで、ちよつと浮足立っていたのに。

ああ、なんてこつたい。僕が恋に落ちたのは、なんてこつたい。

噂の、撲殺女王だったのだ――。

僕を悲しんでか、はたまた憐れいでか、週末は雨となった。各教科で出された課題は山ほどあるが全くやる気がない。もし僕が同学年に撲殺女王がいると知らなかったら、もし彼女が撲殺女王だと知らなかったら、きっと輝ける未来に気持ちは燃えて、課題なんてとつくに終わっていることだろう。最悪だ。

「……コンビ二でも行くか」

気持ちを切り替えるべく、僕は机から離れることにした。黒のジャンパーを羽織り、傘をさしながら家を出る。空は墨汁を垂らしたようで重く、絶え間無い雨を降らせていた。いやほんと、お前僕が住宅街を五分も歩けばコンビ二はすぐそこだ。水溜まりを避けるようにして、なるべく濡れないように歩いていると、傘が落ちているのが目に止まった。いや、よく見ると人がうずくまっているのだ。灰色のスエットとダウンジャケットを着ている。

気分でも悪くしたのだろうか、心配しながらうかがうと、傘をさす人物の足元に段ボールがあると気付いた。なんと中に動くものがある。子犬だ。生まれたばかりなのだろう、小さくて黒い子犬は鳴きながら震えている。

人物は突然上着を脱ぐと、子犬を抱き上げ躊躇うことなく上着で包んだ。

「温かい？」

可愛らしい声に女の子なのだと分かる。しっかりと抱き締めると、彼女は顔をあげた。ぱっちり目が合う。

彼女は途端に耳まで赤くすると、すぐさま踵を返した。水を含んだ空気が柔らかに跳ねて、彼女の姿に靄をかける。可憐な彼女が溶けていくように走っていくのを、僕は見送った。

子犬を抱いた、撲殺女王を――。

撲殺女王の噂を聞いたことのないものなど、この街にいない。
小学校高学年で武道の極意を身に付け、鉄より重い拳を振るい、屈強な不良や武闘家たちを次々と病院送りにしてきたストリートファイターの申し子。筋骨隆々の北斗真拳的月の輪熊みたいなのを想像してきた、けれど。

彼女が撲殺女王だという。桜吹雪に思いをはせる美しい彼女が、雨の日に自分の上着で捨て犬を助けあげる彼女が。

信じられない思いで、僕は昼休みの図書室にいた。彼女はというと、雑種犬の飼い方という本を熱心に読んでいる。遠目で追う限り、初音さんは人畜無害な美少女以外の何者でもない。いつも一人である様子だけでも。

その寂しげにも感じられる横顔は、まるで名カメラマンの遺作のようだ。心臓に、喉元に、兎が跳ねる。体の内側で春の風にざわめく草原が広がる。

噂は一人歩きしたものじゃないのか？ 噂のせいでいつも一人なんじゃないか？

自分より強い人間しか相手にしない孤独の一匹狼なんて言われていちゃ、友達ができるはずもない。男友達どころか、女友達もできないだろう。

一人ぼっちで、初音さんは何を思っただろう？

話してみたい、彼女と。

僕は笑う膝を叱咤し、勇気を出して初音さんの近くに寄った。

「あのー……」

あのって何だ、あのって。緊張しまくりの自分に突っ込みつつ混乱しつつ、僕は対峙する。彼女と。

初音さんはずっと僕に視線を向けて、可愛いなあヨイ、僕をじっと見つめる。そして漆黒の瞳で僕を捕えて、ついでに首根っこも捕えて。って、え？

「え、え、え？」

景色がぐるりと回って天井を認める、ずるずる引きずられるのが分かる。図書室を出て、廊下を出て、ぐるんとまた景色が巡り彼女の可愛い、怒りに燃えた顔が飛び込む。

え、怒り？

「入学式、おととい、昨日、そして今日」

凜とした姿に合う理想的な声だ。

「どうして付け回すんですか」

若干低い気がするけど。

心臓がドクドクと跳ねて内臓にぶつかる。体中を心が抉っていくようだ。どうしてこうなった、どうしてこうなった、状況を整理させてくださいお願いします神様。疑問がフル回転。そうだ、誤解だ、誤解されてる気がするよ！

「ちがうんです、ぼくわぁッ！」

弁解の言葉が完成する前に、初音さんの姿が消えた。いや、身を低く落としたのだ。そして繰り出されるは鮮やかな、そう鮮やかすぎる鉄拳。腹鉄拳、いや腹パンチ、なんってっただけ、そうだ、そうだ。

「……ボディーブロー」

それだけ声になって、僕は意識を手放した。

『撲殺女王、高校入学一週間たらずして同級生を病院送り！』

目覚めると、僕は伝説のひとつの材料と化していた。正確にいうと病院送りではなく保健室送りではあったけれど、そんなことは人々の好奇心には無関係だったようだ。

ああでも、伝説の影で一人の男子高校生の恋が終わったことは、関係者以外知らない。関係者以外というのは、担任とか校長とか関係者ということだ。

僕は初音さんを庇い、ストーカー説を受け入れることにした。

春は変態の季節、犯罪者は春の風物詩。

被害者となった男子高校生も問題ありまくりとなると、学校で働く人々というのは空気を読んでくれるようで、「ああ、そうなの。親御さんにはうまく言っておくからね」という話になり、彼女も担当から軽い指導を受けるだけで済んだようだった。

なんとか家族までは食い止めてみせた、人生初の親孝行らしい親孝行。そして人生初の女性を守った経験。守られた方は僕を警戒し続けるわけで。悲劇というのは、こういうのをいうんだろう、いや。「喜劇かな」

散り始めた桜並木を仰ぐ。薄紅色よりも今は緑が多い。幻想的な色合いは崩れて、黒い枝が繊細に伸びている。夕暮れ時と相まって、酷く哀れに思える。花の命とは、なんと短いことだろう。

部活を終えて帰る学生たち。僕は帰宅部だが、この時間に帰る。なんてことはない、撲殺女王の黒い惑星に映らないためだ。初音さんも帰宅部で、同学年の僕たちは帰宅時に遭遇する確率が高い。だからこそこっそりと時間をずらして帰る。我ながら涙ぐましい努力だ。

恋などしなければ良かった。勇気など出さなければ良かった。噂でドン引きすれば良かった。……声をかけずにはいられなかった。

こんなにも考えて悩んでしまう僕は、まだ初音さんが好きなのだろうか。ストーカーと思いこまれ腹にボディブローを受けてもお、彼女が好きなのだろうか。

眼前が揺れた。ツンと鼻が痛んだ。情けない、なんでか分からないけど情けない。

溢れてこぼれそうになる感情を袖で拭う。まるで風でも吹いて砂でも入ったように。そうやって誤魔化していると、なんとか耐えられそうな気がして。懸命に誤魔化していると、幻覚まで現れた。

灰色のスウェットに大きめの紫のパーカー。少年のような格好をした初音さん。今日は傘をささずに、代わりに子犬をつれて。ゆっ

くりと僕の方へ向ってくる。そして、訝しげな表情になって……。

「って、あれ」

リアルじゃね？

初音さんは立ち止り、じっと僕を見つめた。僕はというと、ようやくそれが幻覚でないことを知って、途端に膝が笑いだすのを感じた。なんてこった、トラウマってやつか。PTSDってやつか。

涙ぐましい努力は彼女を不快にさせない意味だけでなく自らを恐怖から守るためのものらしいと痛感しながら、僕は蛇に睨まれた蛙となった。石像でもいいですよ。

硬直している僕に気付いて、彼女が立ち止るのをやめる。ゆつくりと、歩みを再開し始めた。

近づく、彼女。一步、また一步と、接近する。

彼女。

「この間はごめんなさい」

耳元が熱っぽくざわめいた。

「私の勘違いで。本当にごめんなさい」

一瞬、自分の声かと思う。あまりにも震えていたので。泣き出した僕が呟いたのかと。

違う。

真っ白になった頭が思い込みを否定して、真実を理解して、冷静になって命令する。命令のまま振りかえると、既にそこには初音さんはいなかった。走って行ったのだ。僕に告げて去って行ったのだ。何を？ 謝罪を。

図書室での初音さんが心に浮かび上がった。寂寞の思いを抱え込んだような横顔。か細い指は慈しむように本を抱いていた。本を読んで子犬の飼い方を学ぼうとする勤勉さに、揺れた。僕はたまらなくなつた。

あの時の衝動は、そこに彼女の感情を汲んだから。

直感に狂いはなかったのだ。彼女は乱暴者だけれど、腕っ節が強いけれど、不器用で、優しいのだ。

心が千切れそうになる。涙は誤魔化せなくなる。

桜の花びらは散って尚、降り積もって残り、薄紅色から瘡蓋色に沈んでいく。それが痛々しくて、苦しくて、いつそのこと窒息してしまえば良いのに。

初音さんに近づきたいだけなのに。

殺戮的な思春期だ。僕の体はとくに白旗を振っているのに、その旗は血で汚れているらしく、心が諦めてくれない。戦況は不利なまま静かに続いている。

今も尚。

僕は憔悴しながら校庭を見詰めていた。三階窓際の席は燦々と春の麗らかな太陽光が当たる。加えて数学教師のお経に酷似した数式説明とくれば、一般的には寝入るのが筋というものだろう。教室を見渡せば、坊主のような数学教師の有難い念仏に殆どみんな死体か死骸のように臥せている。机大好き。進学校とか関係なく春眠暁を覚えません。起きているのはそう、酔狂なまでに勤勉な学生が、または初恋十字軍な僕だけなわけで。

盲目的な想いに穿たれながら、僕は校庭で走る初音さんに囚われている。紺色のジャージ姿でも輝きを失わない彼女。僕数学彼女体育、らんたららん。

じゃないよ、これじゃあストーリーカーだ。エンディングから始まった事後性ストーリーカーだ。終わった恋を、ずるりずるりと引きずって初音さんが借りた『雑種犬の飼い方』まで現在読書中だ。我ながら自分気持ち悪い気持ち悪いと思いつつ、全二〇〇ページ中既に一五〇ページを読んで現在大型犬の章に到達している。

時間が解決すると誰かが言った。失恋と検索したら『失恋 立ち直る 方法』って候補に挙がった。みんな苦しんでいるんだろう。

—— KOしたはずなのに試合は続行中で、痛みはどんどん膨らん

でいつて。

初音さんは相変わらず一瞬一瞬がたまらなく綺麗で、一人ぼっちだ。隣はガラ空きなのに、誰も座ろうとしない。目線を追って、透明な僕が傍に座る。彼女は気付かない。気付くはずがない。

——処方箋はなく、僕はこのまま拗らせてしまいそうで仕方がない。

何千回か分らない溜め息を燻らせていると、校門で誰かが立ち止った。黒いジャンパーを着ている男。僕が持っているやつと同じだ。人と服が被るのって気分悪いよね、そんなことを思っていると、その男は校門を閉ざす鉄扉に手をかけた。そして何を血迷ったのか、よっこらせいとよじ登り始める。

春は変態のシーズンとはいえ、さすがに度肝を抜かれる。凝視していると、謎の男は門を越えて校庭に侵入した。これはもしかして、もしかするとやばいんじゃないか？

侵入者に気付いて、体育教師が近寄る。すると男は何かを取り出した。春の光に銀色のきらめきが反射する。をいをいをい。

「先生、頭おかしい人がいるんですけど！」

「え、私ですか？」

「お前じゃねーよ、お前の禿げ上がった坊主頭のことじゃねーよ！校庭に包丁持った人がいるんだって！」

僕の絶叫にゾンビ以心伝心、眠っていた学生たちが起きあがり、ワアワアと窓際に集まり始めた。窓際の席の僕は一気に押しつぶされる。小学生のころ校庭に犬が侵入したときのことがフラッシュバックしたけれど、事は犬どころの騒ぎではない。包丁を持った男が、よりによって彼女へと向かっていく。いくら撲殺女王だって、包丁を持った男にかなうはずがない。

僕はガラスに押し付けられた体に力を込めると、人垣に体当たりをかました。運が良いことに、ふっとんだのは謝りやすい藤堂だった。

「いつてえ！」

「ごめん、ちよつと行ってくる！」

猛ダツシュで僕は廊下へ出て、階段へと、階段を駆け下りて玄関へと、全速力で校庭へと。僕は駆けた。初音さんの元へと、包丁を持った男の元へと、アドレナリンが恐怖をかつさらう。笑う膝を奮い立たせる。

「す、すいませえええん！！」

初音さんと、男の間に割り込んだ。息があがる、汗とか吹き出してくる。耐えきれず咳き込みながらも、僕は両手を広げた。

「おま、おまえなんだよおっ」

男が声を荒げた。僕と似た黒のパーカーどころか同じメーカーじゃないだろうか。そしてわお、包丁。

包丁が目立っているが、男のスペックは僕と似たような感じに思えた。歳とれば僕はこんな風貌になるんだろうと思う。三十代だろうか。三十代で包丁もって高校に乗り込むなんて末期だが、気も弱そうだし、会話は可能だろうか。

「僕はこここの高校の生徒です。あなたはどなたですか」

「俺、俺は……」

男が僕の発言にしどろもどろになっているところに、今度は彼女が割って入った。

「だめ。川名君には関係がない人だから」

彼女の手が肩に触れている。じんと熱くて、蕩けそうになる。こんなに近いのはボーディーブロー以来だ。ってか僕の名前なんて知ってるの。いや、それどころじゃない。

「ひなたさん、そいつなんですか」

「川名君は以前ご迷惑をかけてしまった方です。あなたにも私にも関係のない方です」

「僕より強いですかね。ひなたさんより強いですかね。僕は強いです、だから僕と」

「あなたは入学式から私を付け回していますね」

一瞬、ときりとする。デジャブにうろたえるも、冷静に考えて僕

ではない。というと、初音さんは僕以外にも付け回されていたのか。いや、そもそも僕は“付け回して”いたのか？ 彼女が勘違いしてボディーブローされるくらい。いや、違う。

『入学式、おととい、昨日、そして今日。どうして付け回すんですか』

ふと彼女の事件前の発言を思い出す。疑問混乱フル回転の元凶の言葉。

『入学式、“おととい”、昨日、そして今日』

おとといって何だよ、僕はあのときまでに彼女には通算三回しか会ってないじゃないか。あれは勘違いだったのだ、“本当”に。濡れ衣だったのだ。だからこそ彼女は、

『私の勘違いで。本当にごめんなさい』

謝ったのだ。

「なんだよ」

初音さんのボディーブローの真実に至って、涙で彼女の後姿が歪んだ。苦しかったのは僕だけでなく、彼女もまた同じだったのだ。

初音さんの小さな耳が、白いうなじが、細い肩が、震えている。

「なんだよ、お前のせいだよ」

頭が白んだ。怒りが喉元までせり上がり、僕は絶叫した。

「ストーカーお前じゃなかよ！」

初音さんの腕を掴み、強引に引く。予想外だったのだろう、彼女は僕に引つ張られ後じさった。そのままの勢いで、僕は前に出た。

「来いよ！ 僕は彼女の……その、お前の恋のライバルだああ！」

叫びながらぶつかっていく。僕の勢いに男が一步引き、包丁を握るその腕を一気に伸ばす。

僕は見た。男の握る包丁が僕の腹に深々と刺さるのを。黒い学ラシに刃が沈んでいくのを。燃えるように、腹が熱くなる。

そして僕は見た。前のめりになりながら、地面に転がりながら僕は見た。初音さんのボディーブローを。どんな者もたちまちに平伏す痛恨の一撃を。会心の打撃を。撲殺女王の渾身の鉄拳を。

ああ、ああいう風に、僕も意識を失ったんだ。

「川名君！」

仰向けの僕を初音さんが覗き込む。間近で悟る、やっぱり初音ひなたは可愛いんだ。そしてたぶん泣かせるのは二回目なんだ。だからこそ、僕は。

「あらよつと」

すぐに立ち上がった。

予想外だったのだろう。目を丸めて、

「え？ え？」

首を傾げる初音さんに、僕は腹部に突き刺さった包丁を抜いて、地面に落した。もうひとつ、学ランから取り出した。包丁の跡が痛々しい、『雑種犬の飼い方』を。

「また初音さんにボディーブローくらうかとも思って、仕込んでおいたんだけど」

と言いつつ、本当はこんな作戦だったわけだけど。

変に掴みかかるよりは、包丁にぶつかった方が安全だ。人は人を刺す時、しっかりと両手に握り脇をしめ、お腹に刃をたてる。素人であればあるほど、心臓のあたりから腹部までを狙う。一対一で対峙すれば尚更、自然とそういった体勢になる。なら、考える暇も与えずにぶつかってしまえばいい。

「だから大丈夫。びつくりさせてすみません」

そこまで言っていると、僕は笑った。

「……私の方が、ごめんなさい。巻き込んでしまつて」

俯く初音さんの涙は止まらなかった。ぽろぽろと溢れ、真珠のようにならきら光っていた。

「巻き込まれたんじゃないよ。僕が巻き込まれに来たんだから」

「え？」

顔をあげる。視線が合つて、心臓が喉まで跳ねる。ぴよんぴよんと、兎のように。冬眠を終えて、目覚めた春に浮かれる兎のように。後悔はしないと決めた。辛い受験を乗り越えて雛一に入ったら、

後悔のない人生を歩みたい、そう考えていた。

僕はきつと、この学舎で初恋をする。

「入学式から気になってました。友達からで良いんで、……お願いします！」

言い切つて、僕は初音さんに右手を差し出した。血液が沸騰して、指が震える。

「あ、もちろんストーカーとかではなく！ 健全に！ 嫌だったら良いんですけどね！」

僕の言葉に、

「嫌じゃないです」

初音さんは首を左右に振った。

「だけど、私、撲殺女王なんて言われてるんです。喧嘩、強いです。小学校から負けたことないんです。格闘技とか習ってるんです、うちが道場で、よくストリートファイトとかも知らない人に申し込まれるし、友達いないし、根が暗いし……」

ヤクザじゃないのか。じゃなくて。

美少女とは思えない発言をかます初音さんに、今度は僕が首を左右に振った。

「じゃあ、僕はこの高校で初めての友達になります！ なんでもいいです、初音さんならなんでも。じゃない、初音さんは初音さんだから！ つまり、その、……傍にいさせてください」

言った。出し切った。もう無理、もう無理だ。

恥ずかしくて苦しくて切なくて居たたまれなくて、僕は顔を隠した。そうしてくると不思議なもので、ここは校庭で、オーディエンスはいっぱいで、横には人が倒れていて、そんなことが頭に浮かび、どうしようもなくなった。泣きたくなった。というか、泣いていた。号泣していた。揺れ動くよ思春期ですもん！

「君たち、大丈夫か！？」

ようやく割り込む気になったのか、傍観していた体育教師が動いた。騒動のあいだ静かだったことに、周りが騒ぎ始めて気付く。泣

きながら頷きまくっていると、顔を隠していた右手に温もりが響いた。

瞼を開ける。そこには、僕の右手に自身の左手を重ねる初音さんがいた。

「はい。大丈夫です。川名君も。友達の、川名君も」

初音さんの横顔がある。目は赤くて、頬も赤くて、涙でぐしょぐしよだけど。今は寂しそうにはなくて、何故だか微笑んでいて、ものすごい引力を持っていて。ありえないくらいの殺傷能力を持っていて。

ああ、やっぱり彼女は――。

「あの変態、病院送りだったらしいよ」

「へえ」

目をパチクリさせる僕に藤堂は鼻で笑うと、

「わざとらしい。興味ないって感じだな」

「実際興味ないからね」

変態侵入事件は彼女の伝説のひとつに加えられた。撲殺女王の名は全国に広がる勢いだ。けれどそれすらも、僕には関係がない。何故なら僕は、

「有頂天だね。それって惚気？」

「さあね」

下らない話を交わしていると、教室がざわめいた。誰が来たのかピンときて、心臓が跳ねる。

「顔真っ赤」

「うるさい」

藤堂の嫌味に応戦しつつ、僕は廊下へと足を伸ばした。その姿を認めて、途端に光が弾けた。とんでもなくとてつもなく美しい存在が佇んでいる。

――僕の初恋が笑ってる。

撲殺思春期（ラブコメ）（後書き）

自分では珍しいくらいキャラ重視。ベタなキャラっていうのは普段書いているつもりでも意識すると難しいものです。何故かお気に入り登録がダントツトップなこの作品。みんなベタが本当に好きなんだなあと味をしめた感があります。

ワールドエンド（シュールSF）

とうに非常食も水も底についていた。空腹と口渇は限界を振り切り、体躯が思うように動かないという錆びた感覚だけがあった。

今、仲間たちの亡骸の傍らで独り、男は意識を手放そうとしている。

何故こんなことになってしまったのだろう。矮小な男の頭では、その理由は判らなかった。ただ唐突に、生まれ親しみ永遠に続くかと思われた世界は終わりを告げたのだ。

そして彼もまた、唯一生き残った者として、最後を迎えようとしている。

ふいに昔のことを思い出した。

彼の家族は多かった。仲間たちも多かった。皆で世話しなく働き、助け合い生きた。時には強靱な巨人たちと身一つで戦い、逃げては子孫を育んだ。厳しい世界ではあったがささやかな生活を愛し懸命に生きた。

そしてある日、不条理に終わりはやってきた。強靱な巨人たちをやつと撃退し、勝利にわきたつたあの日。世界は燃えた。

火の玉が降り注ぎ、大地は揺れ、水が噴き出した。

安全な地下へと避難し、やがて来る平穏を待ったが、それは来なかった。地球は生命には過酷な場所へと変貌してしまったのだ。順応や進化というものは世代を重ねて少しずつ行われるものだ。生きる術など、どこにあるう。彼は死ぬのだ。

だが死を目前として彼の心は、混沌になく静寂にあった。ようやく皆と同じになれる。一緒になれる。そう思えば死に恐怖の色は一片もなく、寧ろ幸福にすら感じられるのだった。

薄らぐ脳が柔らかな喜びを感受する中で、男はゆっくりと体躯を動かした。

せめて最期に、地上へ。

死んだ者たちが求めてやまなかった地上への歩み。渴望が瘦せた魂に僅かな力を与える。地上へのなだらかな道を行き、湿った暗がりを背にし、男はついに天を仰いだ。

埃っぽ空気。赤く膿んだような大地。暗雲に塞がれた空。居るだけで痺れる。危険信号を放ち、拒絶する。が、逃げはしない。

地上で死ぬのだ。男は最期の力を振り絞り、触覚を揺らした。

——最後の生命体『昆虫綱ゴキブリ目ワモンゴキブリ』として。

黒々とした殻に包まれた筋肉は麻痺しつつある。地球で最も強いとされた生命力は消えつつある。

かつて彼の最強の敵だった巨人。奴等は巨大な物質で彼を原始的に潰そうとしたり、時には甘美な芳香を放つ穴ぐら——ただし入った者は二度と出てこなかった——という罠や毒ガスを出す塔を置くといった卑怯な攻撃もあった。

今はあの宿敵はいない。新たな敵は、母なる地球。

なんと残酷な世界か。なんと無慈悲な世界か。こんな世界は、終わってしまう方が正しい。

男は力を抜いた。少しずつ近づいてくる死という安寧、死という楽園。その時を全身で受け入れるために。

いま、肉と殻の呪縛がほどけ、天の国へと、ゆっくり浮上する――。

瞬間、男は驚愕した。

気付くと透明な壁に四方を囲まれていた。そして清浄な空気の中に浮かびながら、見下ろしていたのだ。かつての宿敵を。

男は怯えた。まさか巨人たちが戻ってくるとは。殺される。天寿を全うすることなく殺されてしまうのだ。

瞬く間に絶望に侵食された彼であったが、不思議なことに巨人たちはいつまでたっても襲ってこなかった。そればかりか、彼を慎重に扱う。以前ならば悲鳴をあげて彼を殺しかかったであろう巨人たちは、宝物のように彼を両手で包み、運んだ。大事に動かし、そっと大きな箱へと移す。

彼はすつと床に降ろされた。すくんでいた彼であつたが、降ろされた場所で周囲を見渡すと、緊張をみるみるうちに弛ませた。そこに懐かしい顔を見つけたからだつた。僅かだが、生き残っていたのは自分だけではなかつたのだ。

途端に、本当の喜びが溢れ出る。生への歡喜が蘇る。

生きてやろう、きつと生きてやろう。熱く心を燃やして。きつと再び、繁栄してみせると誓つて。

男はひとまず床に転がつた食料を口にすると、仲間の一人にまたがつた。

ワールドエンド（シュールSF）（後書き）

人間だれでもやること同じ！

ゴキブリだけどやること一緒！

そんな気持ちで。よっこらせっ、ふふ。

おしまいのむこうがわ（文学）

彼女は狭い暗闇の中にいた。出産を間近にする胎児のように丸まっ
つていて、自分の心音だけが聞こえた。異常空間に閉じ込められ
てどれほどの時間が経ったのか、太陽も月もない日々は狂気をとう
に越えていて、彼女の心を闇と同化させていた。

心音だけを聞いていた。自分が生きているのだという証だけを感じ
ていた。そして臭いと熱と。辛うじて、自分は自分なのだという
均衡だけがあった。

心音を何万回も聞いた果て。彼女は激しい光に燃やされた。目蓋
を懸命に閉じながら、何者かの気配に触れる。

「おめでとう。おめでとう」

鼓膜が裂けるかと思ひ、両耳を塞ぐ。少しずつ五感が慣れてきて、
彼女はいま自分が感じているものがけして強くないことに気づいた。
強烈な光ではない、穏やかな木漏れ日。轟音などではない、柔らか
な囁き。

「おめでとう。おめでとう」

白衣の男たちが口々に彼女を祝う。拍手をし、愛でる。

「おめでとう。君は宇宙へ行けるんだ」

彼女に家はない。自我が芽生えたその日、彼女は親兄弟と金持ち
達が捨てた残飯を漁っていた。それが普通だと思っていたし、そう
して生きていくのだらうと思っていた。

いつものように路上で眠っていると、彼女は突然に腕を掴まれた。
見やると、複数の男達だった。何かと抵抗を試みたが、痩せ細
った幼い彼女には逃れる力はなく、車に押し込められた。

殺される。彼女は男達の家連れられて、うち震えた。彼らは彼

女に不思議なことをした。温かい水で彼女の汚れた体をごしごしと洗ったのだ。後にそれはシャワーというものと知ったが、知らぬうちは恐怖でしかない。恐るべき時間が終わり、彼女はタオルで全身を拭かれた。これはなんとも言えぬ心地よさで、ふいに寝てしまった。

起きると、彼女は部屋にいた。家の中にいた。

驚いて周囲を見やる。と、何者かと目が合う。後じさる。

よくよく見ると、鏡であった。青い瞳に、整った顔たち。彼女は初めて自分の姿と対峙した。

彼女はその場で一回転した。ふわふわと心臓が飛び去ってしまい、そんな不思議な感覚。うっとりしていると、

「やあ」

背後に白い服を着た男がいた。逃げ出そうと反射的に、足をあげる。が、止めた。えもいわれぬ芳香を認めたためだ。

男は大皿を抱えていた。そこから実に旨そうな匂いがする。大皿には、今までに見たことのない分厚い肉が乗っていた。

てらてらと輝く肉汁に、胃がグツと震えるような匂い。急激に唾液が出て、口がずきずきと痛む。

「お食べなさい」

皿が置かれる。男が距離を置く。

彼女はいぶかしんだが、食欲には勝てなかった。男が一定の距離、離れた瞬間、肉に飛びかかった。

漁ってきた残飯にはない熱さ。吹き出す肉汁。噛めば噛むほど極上の味わいが口いっぱいに広がる。

「君は世界で一番、運が良い。これから君は変わる。素晴らしい夢が待っているよ」

肉を食みながら上目でうかがうと、男は笑っていた。

「君は宇宙に行くんだ」

両の手を広げて、白衣の男は鳥に似ていた。

男の言う通り、彼女の生活は一変した。常に清潔であるようにされ、定期的に食事を与えられた。食事は主にゼリーだったが、不満はなかった。飢えと寒さに耐えながら、あるとも分らない残飯を町中歩き回って探す労力に比べれば、どれほど楽だろう。

突然に与えられた新しい日々。それは幸福といって差し支えないものだ。彼女の中にあつた男達への恐怖や警戒を次第に奪う程度に、或いは家族を思い抱く心配や寂しさをいつの間にか忘れてしまふ程度に。

さて、新しい生活の最大の変化は、指導を与えられたことだった。教育とはいえない、命令を遂行するだけの内容。例えば、音が鳴ったら必ずある場所に移動しなければならぬとか、やめろといわれるまで立ち続けなければならぬとか、極めて単純な内容をひたすら繰り返すのだった。時には箱に入れられて、ぐるぐると回されることもあつた。

上手くいかなければ鞭で叩かれたが、上手くいけば褒美として肉を与えられた。それほど難しい指示ではなく、その意味や意図は分からないまま、彼女は男達の命令に従い、鞭で叩かれることもやがてなくなった。

一切の苦痛も感じず、一切の暴力も感じなくなったある日。白衣の男が優しく彼女を撫でた。男の表情は指導とは違う優しい色をしていた。

「君は素晴らしい。予想以上に良い子だ」

男はぎゅっと彼女を抱き締めた。よくあることで、もう抵抗はない。穏やかな毎日、男と彼女に、安堵と信頼が生んでいた。

「……最後の試練だ」

男が呟いた。

次に男が抱き締めてくれたのは、絶望的に長い暗闇の果てだった。

「おめでとう、お疲れさま」

久しぶりの肉に頬を弛めていると、白衣の男が部屋にやってきた。嬉しくて食べるのをやめて、男に飛び付く。男はぎゅっと彼女を抱き締めると、そのまま抱え上げた。

「君に見せたいものがあるんだ」

初めて家を出た。夜だった。夏草の青臭い匂いと、ざわざわと揺れる音。家は草原の真ん中にあつたのか。

肌寒くて、男の胸に顔を押し付ける。

「ごらん」

男が指をさした。虚空に。夜空に。満天の星に。

深い紺に金粉を撒き散らしたようだった。月が年老いた賢者の瞳で二人を見下ろしていた。触れてしまえそうなくらいに近い、けれど無教養な彼女でも星達が果てしなく遠いことは知っていた。

「宇宙だよ」

望んでも届きはしない隣人。地球上のありとあらゆる生命体が、どんなに苦しい日々を送ろうとも変わらず、そこにある完璧なる傍観者。

「君は明日、宇宙へ行く。大気圏を越えて……地球で初めて軌道に乗る。そして……」

翌朝、彼女は宇宙服と呼ばれる服を着せられた。分厚い服が全身を窮屈にさせるが、平気だった。何度も指導で宇宙服は着ていた。

白衣の男の前で一回転すると、笑ってくれた。

「さあ、行こう」

促されて小さなゲージに入る。布をかけられる。浮かび上がる感覚、運ばれているのだ。

あの日町から連れ出されたように、新しい日々が待っているのだ。

宇宙という、新しい家で。

布がはずされ、ゲージから出る。見知らぬ天井と、壁と、床。誰もいなかった。自分だけがいた。

何が起こるのだろう。先の分からない不安が胸を突く。心臓が喉までせり上がる。

そうして時を待っていると、音が鳴った。何度も聞いたことがある音だった。既に習慣と化していた、彼女は床に視線を走らせる――、あった。

ある印の上に彼女は素早く座った。暫くすると音がやみ、やがて遠くから鉄と鉄がぶつかり合う重音が響いてきた。

ふいに内臓が下へと引つ張られた。この感覚も、慣れたものだった。

白衣の男の顔が浮かぶ。全てはこの日のためだったのだ。彼女は集中し、次々襲いかかる異常な感覚に耐えた。全身を押し潰され極限が近づいてきた瞬間、それまでが嘘のように軽くなり、ふっと力が抜けた。

ついにはふわりと、身体が浮かんた。

一時間か、一日か、数週間か。時間など無意味な世界に独り、彼女はいた。

チューブから食事を得る。狭い部屋に唯一ついた小窓から外をうかがう。窓は漆黒で何も分からない。

ただ、自分の肉体だけがある。漆黒の窓は明るい室内との光の差によって、彼女の姿を映し出していた。

海のような瞳、大地のような毛色、ふさふさの尻尾――。

何度も体験した虚無空間で、彼女は様々なことを思い出していた。どんなに太陽が出ていても寒かった町で、家族と寄せあつて生きていた。石を投げられたこともあった。

ある日、男達に連れ去られた。待っていたのは温かい食事と不可

思議な指導だった。

慣れてくると、ある白衣の男にも信頼するようになった。家族と同じくらい心地よい安心感を彼はくれた。そして宇宙を共に見た。「君はソ連の、いや人類の希望を抱いて飛び立つ。僕は君のようなワンちゃんに出会えて幸せだ」

—— 思えば、彼が初めての“ご主人様”というものだったのかもしれない。

今までの日々は現実だったのだろうか、それとも夢だったのだろうか。

孤独な空間は現実と夢の境界線を容易に奪って彼女の存在を揺るがす。それすらも彼女は受け入れていた。

生を振り返れば、山も谷もない一つの線のように、あるいは点のように、瞬間のようだった。この時この時でしかなく、後は簡単に古びて朽ちてしまう。

そんな自己崩壊すらも揺り籠となるように、教わった。全ては宇宙に行くために、そして、いるために。

「君が明日いるのは宇宙。大気圏を越えて……地球で初めて軌道に乗る」

白衣の男は呟いた。宇宙の最果てで、掠れそうな声で。

「そして……生きては戻れない」

宇宙船は大気圏再突入が出来る設計ではないと、彼は泣いた。静かな嗚咽を聞きながら、彼女は彼の頬に流れる雫を舐めた。塩辛い、地球の味だった。

そういえば、ご主人様の名前を知らないままだったと彼女は気づいた。あんなに愛を傾け囁いてくれたのに。

他の男達は彼女をライカと呼んだ。しかし白衣の男は彼女を違う名前で呼んだ。親しげに、特別に。

「クドリヤフカ、君は星になるんだ」

おしまいのむこうがわ（文学）（後書き）

クドリヤフカがマイナーすぎてエロゲの二次創作と思われた感慨深い作品です。

R o g l i e (5分大祭・前祭・文学)

ロロは窓際で仲間達に混ざりながら、幸福を感じていた。日向は暑すぎず寒すぎず絶妙な温度。そして仲間の犬達。様々な犬種の艶やかな毛に覆われた柔らかな肉体を重ね合い、ひとつの塊のように丸まっている彼等は安らぎをくれる。それは極上の休息だった。

ふいに、眠りを貪る仲間達の中のいくつかが耳を立てた。微妙な動きに揺らされ首をもたげると、部屋の唯一の扉が開くところだった。

「ごはんの時間よ」

途端に、地面がぼぐれて転がった。我先にと仲間達が扉へと向かう。見やると、歯応えのある粒状の餌が盛りに盛られたアルミの皿を手にした人間が、床に皿を置くところだった。食欲に駆られるままにロロを含む皆、集まった。三十を超える数の大小の犬、集まるより群がるという方が正しいか。

仲間の中で最も体格の良いロロは、前進した。

「お前は、こつち」

肉塊が床を震わせた。ロロは一気にむしゃぶりつくと噛み千切り喉に押し込み、咀嚼する。ある程度を胃に収めてから顔を上げると、人間と目があつた。

亡骸と酷似している。

外に出たことはないが、窓から人間を見下ろしたことが何度かある。彼らはロロに微笑みかけ、手を振る。

しかし餌を持つてくる人間は驚くほど無表情で、もしかしたら死んでも人間は動けるのかもしれないとロロは思う。

ただ、この人間は時折息を吹き返すような素振りも見せる。甲高い音が部屋に響き渡った。人間がびくりと瘦軀を硬直させた。暫くすると今度は扉を叩く乱暴な音が弾けた。

人間は何かを諦めたように眉を上げ舌打ちをすると、ゆるゆると

部屋を去る。

やがて、いがみ合う声が遠くから漏れてきた。

「いい加減にしてくれませんか。ここ住宅街なんですよ。何匹飼ってるんですか。煩いって何度も言ってますよね」

「……人の自由です。犬は勝手に増えるし」

「静かに出来ないなら、減らして下さいよ！ 去勢するなり誰かに譲るなりすれば良いじゃないですか！」

激しい怒声に仲間達がざわめく。苦情が来るのはそれほど多くない出来事だが、今日は一段と大声量で、人数も多いようだった。

「何度も話し合ってこれじゃ解決しないでしょ。ちよっと中見せてもらいますからね！」

複数の足音が荒々しく侵入する。三十を越える仲間達が一齐に吠え出す。口口も喉を鳴らす。

扉が大きく開いた。三人の大柄な人間達。彼等は部屋全体を見渡してから、ある一点に釘づけになった。

視線の先は、口口。

彼等は息を飲むと、悲鳴を上げた。

それが合図となった。仲間達が緊張を爆発させ、散り散りになる。部屋を走り回る者、人間達に飛び付く者、そして逃げ出す者。口口は阿鼻叫喚の中、廊下へと足を伸ばした。無我夢中だった。

気づけば口口は――、生まれて初めて外に飛び出したのである。

世界は驚くほど広々としていた。部屋の中がどれほど窮屈なものだったのか痛感しながら、口口は疾駆した。部屋では三步床を蹴れば壁だった。しかし、ここにはない。

筋肉が撓り、血が巡り、歓喜が猛る。果てのない景色に口口は感動すら覚えていた。ついには足を止め、己を力の限り主張した。肺から声門へ、声門から無限へ。

それは蒼窮に届く見事な遠吠えだった。

「いたぞ！」

口口の全身を何かが包んだ。網だ。網を投げられたのだった。何事かと立ち尽くしていると、わらわらと人間達が溢れ、口口を囲んだ。

「落ち着くんだ……」

状況を理解し、歯を鳴らし唸る。水を翔ばすように身震いし、網を跳ねさせ僅な隙間を作ると、口口は身を進めて抜け出した。そして一人に噛みついた。人々が後じさるのを見逃す口口ではなかった。猛然と跳躍し、その場を背にした。

どれほど時間が経ったのか。口口はさ迷っていた。人間に接触しないよう注意を払い続ける。部屋とは違い硬いアスファルトは、四肢を傷だらけにする。体躯は絶望と疲労に軋み、今にも倒れてしまいそうだ。

何とか水の気配を探して、口口は遊具のない古びた公園の水飲み場にいた。水溜まりがあり、そこで渴きを潤す。

ふいに、水溜まりに映る自分と目が合った。仲間達より一回りも大きな体、喧嘩では負けたことがない。だが。

後悔が滲む。我を忘れて走ったために部屋に戻る道が思い出せない。

未来には何が、人間に捕まったらどうなるのか。分からないが、良いことにはならないのは確かに思えた。彼等は口口を捕まえようとしていたのだから。

仲間が餌をくれる人間に噛みつき、棒で殴られたことが何度かあったのを思い出す。幾度も殴られ、あらゆるところから血を出し、皆そのまま動かなくなった。人間に反抗するとそうなるのだ。口口は先程、人間に歯を立てた。つまり、それは。

考えに深く嵌まりすぎた。

失態だった。慌ただしい音を耳が捉え、上体を浮かすと、人間が既に間近にいた。手には黒々とした棒。

それをロロに目掛けて、

「撃つんだ！」

網が放たれ、全身に絡み付く。バランスを崩し、頭を強かに打ち付ける。眼前が虚ろになり、やがてロロはその場で意識を失った。

体に心が帰ってゆく。

ロロはゆっくりと自我の糸を掴み、自分の肉の感覚を握り、目を開けた。

ロロは死んでいなかった。そればかりか、縛られていなければ檻にも入れられていなかった。白く清潔な部屋のベッドに、ロロは寝ていた。胸にモニターライン、腕に針がついており、点滴が落とされていた。

「お、起きた起きた」

呼び掛けられ、ロロは首を横にした。傍らの椅子に腰かける人間の男に、胸がじわじわと熱くなる。「……せんせえ」

「まだ起きるな。熱下がってないんだから」

林檎の皮を剥きながら、男が笑う。その穏やかな空気に気持ちが緩み、ロロも微笑んだ。

「夢に皆が出てきたよ。ママも出てきたよ。知らない人を噛んだ。久しぶりに四つん這いで走って疲れたよ」

「そうかあ……、もうだいぶなるのになあ」

犬屋敷と母のネグレクトから保護されてから数年が経つ。熱を出すと未だに鮮明に思い出す、狼のような昔の自分。

男が差し出す兎型の林檎を受け取り、ロロはそれを唇につけた。

「皆、ママ、元気かな……？」

懐かしさで気道に熱が詰まる。ロロはそれを崩すかのように、久

しぶりに喉を開いた。

口口の遠吠えは白い部屋を満たして溢れて、彼方へと消えていった。

R o g l i e (5分大祭・前祭・文学) (後書き)

獣という意味の言葉とモーグリ症候群を引っ掛けた造語をタイトルに。

物語の伏線と言つか、ヒントのつもりが訳の分からないことになってますね。

このタイプの落ちは二度目です。反省。

再会（5分、前祭、文学）

佳苗は、生まれて初めて髪を染めた。他人になっちゃったように、妙に胸がざわめく。

組別でなく、学年をまとめたの初めての同窓会だからとはいえ、気合いを入れすぎたのかもしれない。皆の視線が集中するなか挨拶を終えて残ったのは、後悔だった。

「それでは乾杯といきましょう。乾杯！」

落ち着いていた会場が一気に賑やかになる。立食パーティというものもあり、皆がテーブルを離れて集まり出した。

いや、他人になったのは自分だけではないのかもしれない。佳苗はかつて小学六年生だったはずの皆を見た。すっかり大人に、社会人になっちゃっている。

後悔が火種になったのか、急に体が冷えた。群れに加わるか考えあぐねていると、

「もしかして佳苗ちゃん？」

声をかけられた。

そこにいたのは見知らぬ女性だった。黒い着物に、長髪を後ろに纏めている。その顔に覚えはなかった。

「えっと……」

「分からないんですよ。ふふ、百合よ。瀬戸百合！」

「……百合ちゃん！？」

それは懐かしく、そして一番求めていた名であった。小学一年から五年まで一緒にいた大親友である。

「そりゃあ分からないでしょうね。だって私達……おばあちゃんだものね」

——そう、あれから六十年が経つのだ。

「お孫さんいるの？」

百合に尋ねられ、佳苗は頷いた。

「三歳の男の子と二歳の女の子なの」

「うちはもう小学生よ」

そう言いながら頬に手を置く年老いた女性の顔に、佳苗は百合の面影を見つけた。

大人っぽい泣きぼくろ。右目尻にあるほくろは、百合のチャームポイントだった。

「本当に懐かしいわ!」

百合が興奮ぎみに声をあげる。佳苗は目をしばたいた。

「百合ちゃん変わったね」

今度は百合が目をしばたく番だった。

「そう?」

「なんだか明るくなったわ。物静かで、よく本を読んでいたでしょう」

ふつと頭に浮かぶ。図書館の窓際。可愛らしいお下げ髪。紺色のワンピースに華奢な体。文庫本を捲る、白く細い指先。光に包まれた百合はきれいで。

「お嬢様って呼ばれてた」

百合は覚えていないのか、みるみるうちに赤くなった。慌てて、
「だったかしら」

「そう、覚えてない?」

佳苗はまじまじと百合を見た。そういえば百合は恰幅が良くなった。声もどちらかといえば低く荒れている。静かな性格が、明るくハキハキとしたものになったのかもしれない。

「そういえば」

百合はポンと手を叩いた。

「よく、本をとりあげられてたわ」

「男子ね」

図書館での続きが飛び込んでくる。

百合の手から、ぱつと文庫本を取り上げる坊主頭。

「きゃあっ」

悲鳴をあげる百合。机に片足をかける男子。

「何読んでんだよ」

「こらっ。百合ちゃんに何するの。返しなさいよ!」

噛みつく佳苗に、男子は尻を向けると、

「うるせえよ、ばーか」

「なにを〜! 百合ちゃん待つてて、すぐ奪い返すから」

佳苗は百合に片手を振ると廊下へと逃げ出す男子を追った。走って走って。

「待つて〜つて!」

小さい頃の自分を思い出して腕を振る。

百合が大好きだった。ずっと一緒だと思った。

「……私達は、六十と一年ぶりね」

百合は小学六年生にあがると、親の都合で東北から九州へと転校してしまい、ずっと会えなかった。

「ええ。だから、佳苗ちゃんと会えると今日はりきつて来たの。何年も同窓会に出れないでいると、会いにくくなって……。でも、今日は特別な学年で集まる会だから。今日を逃すと二度と会えないと思うて」

それは佳苗も同じだった。百合が来ない同窓会が寂しく思え来にくくなり、やがて子供が出来て忙しくなり――、全く来なくなった。今日の会の参加者が多いのは組ではなく学年の同窓会であるということ以上、六十年ぶりの会であるということが大きい。かつての学友に、もう二度と会えないかもしれないという気持ち、佳苗を、百合を、全国に散らばる皆を動かしたのだ。

「私ね、佳苗ちゃんに言いたいことが三つあって来たの」

百合が急に、真剣な表情になる。目に涙が溢れて、やがて一筋の滴となって。

「私は幸せです。私は元気です。私の短い人生で一番の友達は……佳苗ちゃんでした。ありがとう」

百合は深々と頭を下げた。

「やだ百合ちゃん！」

佳苗は百合の肩に手を置いて、百合の背を伸ばさせた。佳苗は胸が熱くなる。ずっと会いたいという気持ちは一緒だったのだ。

「まだ会は始まったばかりでしょ。百合ちゃんことお話して？ 私も話したいことがあるのよ。孝吉だって会場にいるかも。咲子ちゃんや真紀子ちゃんも。ね？」

そう言つて、佳苗は鞆を取り出した。話したいことが山ほどある。六十年の人生がある。

髪を染めても、背が伸びても、皺が出来ても、声が枯れても、孫が出来ても。いくら時を刻もうとも自分達は変わらない。

佳苗は百合の涙を丁寧に拭き取った。手をとって、視線を重ねた。話したいことを話すために、佳苗は口を開く。

驚愕して。

「——あなた、誰なの？」

そこにあつたはずの百合の泣きぼくろが、消え去っていた。

白い廊下を渡る。

佳苗は鮮やかな花々を抱えて、その扉をノックした。

「どうぞ」

返ってきた声に扉を開けると、白いベッドの傍らに恰幅の良い男性がいた。それは同窓会であつた偽物の百合だった。

「先日はどうも。よくお越し下さいました」

百合の夫。偽物の正体。

本物の百合は、本当に懐かしい彼女はベッドの上にいた。

「ごめんね、佳苗ちゃん」

百合の顔色は悪く、頬は痩け、鼻には酸素チューブがついている。首にまで点滴が刺さっている。

「こんな姿見られなくなつたの。だから俊明さんに頼み込んで……馬鹿ね」

「良いのよ。事情は全部聞いたんだから」

彼女は病魔に犯されていた。アルバムを手に人生を振り返り、佳苗に会わなかったことを後悔する百合の下に、会の案内が届いたのは、正に奇跡のようだった。夫は医師の承諾を得て参加しようと説得したが、百合は躊躇った。

「私もね、鏡を見て他人のようだと思ったの。だから百合ちゃんの気持ち分かるわ。でも……佳苗は佳苗。百合ちゃんは、百合ちゃんなの」

佳苗は花束を俊明に渡すと、百合の手を握った。

「旦那さんに預けた伝言の返事」

佳苗は百合に微笑んだ。

「どんなに年老いても、どんなに変わっても、私達は友達よ。人生で一番の、親友なのよ」

再会（5分、前祭、文学）（後書き）

自分の職業柄、いろんな人に会います。中には男だと思いきや女とか、女と思いきや男とか。あるラインを越えてしまうと、歳をとればとるほど、性差ってよく分からなくなるんだな、ということを知り、書きました。

なががらいろのピエタ（5分大祭、ファンタジー）

密やかな音の戯れ。酒場の喧騒に組み敷かれた微音を、ティはふいに掬いとった。

耳をすますと、胸がさんざめいた。堪らなくなり、ティは酒場を背にした。

軋む階段を上がる。月光がたゆたう夜陰の果てで、音は生まれていた。

廊下の奥に佇む女。首から下を両手の指まで隠す黒衣に、胸元まで波打つ金髪、憂う翠玉の瞳。窓枠が作る十字の影を負う姿は、まるで聖職者だった。

が、唇は切れ頬が腫れている。

一見して穢れのなさそうな彼女は。

「サラ、酷い客だったの？」

サラと呼ばれた娼婦は、口を紡いだまま微笑み、掲げた右手を滑らかに動かした。

その指先に小瓶が揺れている。中には真砂と白い枝。擦れて軽やかに響く。先程、耳朶に触れた音色。

ティは知っていた。それは、サラが憂愁に閉ざされた時に作る、渴いた契りだと。

「父さんに言うね。今日の客を二度と付けないように」

ティは踵を返すと、酒臭い夜の騒音へとひた走った。

サラを知らない男などこの街にいない。

無教養ゆえ軽薄なともがらの女達と比べ、彼女は異質だった。

人は己が持たぬものに惹かれる。首から下を黒の服で隠し、常に静々とした彼女は、見る者に聖女のような印象を与える。無骨で騒

がしい街の男達が彼女を無視することなど、出来るはずもなかった。男達は高い金を積んで、サラを抱きたがった。サラの服を剥いて股を開き乱暴に貫く。それが良いんだと、興した。

自分もいつかあなるのだろうか。

ティは考えた。酒場と娼館を経営する商人の子と、娼婦という関係ではある。

だがティは、肉欲に燃えるには幼すぎた。

サラをどうにかしたいという考えはないものの、ティは彼女が大好きだった。

サラは木漏れ日のような安らぎをくれる。肯定も否定もせず、そっと傍にいてくれる。

たまに微笑む時があり、そんな時は嬉しくて、ティは飛び上がった。

皆が知るところのサラであつたが、彼女の宿望を知るのはティだけだった。

暴力を振るわれた時など、必ずサラはそれを揺らした。小さな小瓶の中で、砂漠に立つ標ように半ば埋もれていた。

それは、人間の骨だった。

「誓いな」

小瓶を握らせてくれたことがある。ティの誕生日のこと。サラの唇が緩み、故郷の話が零れた。

——仲の良い幼馴染みがいた。

いつも優しく守ってくれた。同じ農民の出で、お互いの両親が友だった。言葉にしくとも許嫁ということは周知で、将来は結ばれ子を作り、穏やかに老いるだろうと思っていた。

そして思いは二人の夢だった。

しかしある夏、豪雨が続いた。ついには代々育てた故郷の畑が流

された。川が溢れ家畜は溺れ、家が消えた。

恐ろしい貧困に窮した人々は、娘達を売るという苦渋飲んだ。サラもまた、例外ではなかった。

売られると決まった前夜。何者かが窓を叩いた。眠れぬ夜を過ごしていたサラは、外を窺い驚いた。

幼馴染みだった。

目が闇に慣れてくると、彼が左腕をグルグルと布で絞めていることに気づいた。赤い雫が滴っていた。左手の五本ある内の一本、薬指が無かった。

痛みに眉を歪ませながらも彼は笑顔を繕い、あるものを差し出した。

それは骨だった。何の骨かはすぐに分かった。

「必ず迎えに行くから、僕を忘れないで」

——サラは、約束を、待っている。

ティは知っている。サラは未来を奏でているのだ。闇に心が囚われかけたとき、まるで闇を払うように小瓶を振る。

音を聞く度、ティは騒がしい小鳥を胸に抱えた。その理由までは、幼いティに解せぬ虚ろだった。

その夜は、怒号で目覚めた。ベッドから飛び上がり、日がまだ昇っていないと知る。

何事かと寝室を出て酒場に入ると、主人であるティの父が巨漢に掴まれぐったりとしていた。

絶句して床を蹴る。人垣をすり抜け、ティは叫んだ。

「離せ！」

「おう、坊主。親父さんは分からず屋だな。サラに会わせてくれな
いんだ」

事を理解し、戦慄した。自分のせいだという後悔がティを殴る。

男と対峙しながら視線を走らせると、用心棒が床に転がっていた。疎む体を叱り、ティは床に落ちた酒瓶を拾いあげ、握った。

「ほお！」

下品に哄笑する男。

慄然し、ただただ震えるティ。その肩を、そつと誰かが撫でた。見上げると、サラだった。

サラはティを後方へ柔らかに押すと、仮面のような表情で歩を進めた。

まるで踊りにでも誘うような所作でサラの手が弧を描く。手袋に包まれた指が凶漢に絡まる。

男は主人を離すと、サラの腰に手を回した。誇ったように引き寄せると、男はサラの首筋を猥らに舐めあげる。

ティは我を忘れた。勃然と込み上がった感情が怒りだと気づく間もなく、酒瓶を握る腕が意思を越えて跳ねあがった。

男の大腿を打つ。男が顔を顰め、ふらつく。

「餓鬼い！」

男はティから酒瓶を取り上げ、円卓にぶつけて割った。そして鋭い刃となった酒瓶を向けると、無垢な首筋に容赦なく振り下ろした。眼前が赤く染まる。悲鳴、叫喚が爆ぜる。

ティは床に倒れて血を浴びた。しかしティに、痛みはなかった。

「大丈夫……」

ぬるりとした感触に震える。甘い芳香が錆びついていく。覆いかぶさる柔らかい体がどんどん重くなる。その意味に、ティは喘いだ。

「サラ？ サラ？」

次の瞬間ティは、獣のように慟哭した。

海鳥が鳴く。海が見える丘で、小さな墓を前にする。

ティと主人が刻んだ墓碑銘と名。それを隠す枯草を払い、瑞々し

い花束を添えたティの手は、大きかった。

もうあの夜から十年もの時が流れていた。

サラはティを庇い死んだ。その事実には叫ばずにいられるのは、サラのお陰だった。

——あの人が出来たら、これを。

形見である小瓶を、ティは首に下げていた。指先で揺らすと、愛らしい音が生まれ、心を締め付ける。約束は受け繋がれ、今はティのものだ。

サラは語り尽くされた愛の先に息をするのをやめた。しかし彼女は、眠りながら待っている。永遠の夢の中で、しおれることのない楽園のイブとなり、待っている。

ティは、サラの墓の傍で海を眺めた。

確かに自分は、悲劇を受け止めている。

しかし。

ティは思う。約束が果たされる日が来るとして、素直に小瓶を渡すことが出来るだろうか、と。

いや、そもそも。

瞼の裏でサラが微笑し、首を振った気がした。その左手に、薬指だけが、見当たらなかった。

なきがらいろのピエタ（5分大祭、ファンタジー）（後書き）

五分企画用に。前祭りで散々やってしまったので、本番では落ちがふたつの解釈になるものを書きました。純愛落ちか、妄想落ちか。読む人の性格で変わる作品が書きたくて。

なんかの神さま（コメディ）

水曜洋画劇場は夜中の九時から絶賛放映中だけれども大体放送されるのは洋画でなく邦画で、つまるところ僕は居間でだらりだらりと映画『半落ち』を観ていた。

男二人でテレビを観てた。家族じゃなかったらやらないよね、隣は父さんです。

さて中盤に差し掛かり、HPがゼロに近い寺尾聰の背中を指すつてあげたくなつたところで、

「明後日ついに十五だな。悟はなんの神様になるんだ？」
と父さんが突然声をだした。

寺尾に集中していたはずの僕の思考が父らしからぬトリッキーな発言に一瞬で奪われて僕は首を傾げた。

「は？」

「決めてるんだろ、教えるよー。なんの神様？」

「いやだから、……は？」

「え？ ……十五になれば、ウチはみんな神様になるでしょ」

僕は耳を疑った。そして実父の頭を疑った。

「父さん、最近眠れないの？」

「いや父は病気じゃないよ真剣だよ！」

父さんは馬鹿にして、とぷりぷり怒った後、はっと目をしばたいた。

「言ってなかったらどうか。父は悟に、うちが神様だって話をしていなかったらどうか」

まじまじと僕をガン見しながら父は真剣な表情を作って、
「実は悟に話があるんだ。真面目な話だ。実はね、うちは神様の家系なんだ。」

十五になると、自分がなんの神様になるかを決めなくちゃならない。

だから十五になるまでに、自分がなんの神様になるか、決めておきなさい」

勘違いした不細工ナルシストのような不気味きわまりない決め顔で長台詞を言いきると、父はまた何も考えてなさそうな顔に戻った。

「はー、ごめんなさいね。言ったとばかり思っていたよ。で、なんの神さ」

「父さん、最近お腹痛いの？」

「信じてないね！ さては信じてないね！？」

「信じられるかああああッ！！」

父の言動に『半落ち』に向けたい意識を泣く泣くぶつける。今まで映画に注いだ感情が醒めた罪は重いのだ。

しかしながら父さんは、僕の魂の訴えに全く動じなかった。そればかりか、

「父怒った。怒ったぞう、みておれ。お前の左腕のほくら毛を」

突然両手を広げて、父さんは天を仰いだ。

「まさつぐさあん！」

誰やねん、と一瞬つつこみ、そっぴや天国にのぼったおじいちゃんマサツグじゃね？

「おじいちゃん。この忌々しき次男坊のほくら毛を伸ばしてくださいさ

い！」

瞬間、全身をべろべろ舐められるような感覚に襲われた。

ほくら毛という言葉に思わず、左腕をみる。左腕のちょうど肘の裏に、僕はほくらがあるのだ。そしてそのほくらから、周りよりちよつと濃い毛がたまに生えて抜いている。

はたして、そのほくらから、まさかのほくら気が伸び始めた。それも尋常な太さじゃない、髪の毛の様だ。それもただの髪の毛じゃない、シャンプーのCMも青ざめるような艶やかなほくら毛が。

「うわっ、うわわわあキメええええええ！」

「どうだっ。祖父・ほくら毛の神の力は！」

父さんは、いや糞親父はアイドルのようにウイंकをしてから、

「……信じた？」

僕はしたり顔の父を殴りたい右手を抑えて、そつと左腕の毛を引っ張った。しっかりと毛根に根をおろしたほくら毛は、ちよつと気持ちいい痛みとともに、抜けた。快感なのが悔しい。

そして僕は信じざるおえないだろう。父の発言を。うちは神様の家系なのだ。百万歩ハイステップムーンウォークして神様の家系だと信じようじゃないか。

だが突っ込ませてください。

「なんなのその地味な力！」

「地味だから良いんだよ、分かってないなあ」

そう、その顔むかつく！

人を小馬鹿にしたような表情に、やれやれと肩をすくめて父さん

は口を開いた。

「神様の家系は沢山あるんだよ。

大体の力は古い神様が所有しているけどそれ以上に、一人が調子こいて巨大な力を持つと、戦争になるんだよ。

イスラム教とか仏教とか、目立ちすぎてるのあるでしょ。ああいうのは駄目なの、争いのもと」

なるほど、それも一理あるかも。納得しようとして、僕は首を振った。

納得できないことがある。

「だって、献血も便検査もできるじゃん！」

「体は人間だからさ。幼虫みたいなもんなの。死んだら、神様になるの。まさつぐさあん！」

そうじゃよく、と何処からか死んだ声がした。懐かしい声なのに苛立つのは何でだろう、心狭いですか僕は。

「じゃあ！」

「じゃあ？」

噛みつくこうにも上手く考えが浮かばず、僕は少し考えてから、
「……神様なのに何でイケメンじゃないのさ」

そう。僕と父さんはイケメンじゃない。兄さんは母さんに似てイケメンだけど。

「……目立ちすぎるとダメって言っただろう？ キリストの惨劇というものがあってだな」

「キリストの惨劇？」

父はまるで百物語を語りだすように神妙な顔になった。

「キリストの惨劇……」。

キリストはジョニー・デップ似のイケメンだったから変に人気が出てしまう。

ある日、若干ストーカーっぽい気質のあった友達がネタに小説書いちゃう。

死んだあとに神様だったから何となく外に出たら大盛り上がり。小説はリレー小説に発展、その後紙芝居なり本となり大ブレイク。それが聖書と呼ばれて大事になってしまったんだよ！」

……うわぁ。

あまりの下らなさに言葉を失っている僕に何を勘違いしたのか、

父さんは

「イケメンは罪なんだよ……」。

だから知広はね、

幸せ

父に感謝」

——殴りたい、すごく殴りたい。

パッションを抑え込み、僕は平静を装った。同じ土俵に立つなどごめんだった。

「……そうなんだ。キリストは何の神様なの？」

「なんでもないものに浮かびあがる神様だよ」

なんでもないもの？

最初は疑問に感じたが、そういえばキリストの奇跡の中に、白い布に浮かび上がるものがあつたと思い出す。

聖骸布^{せいがいふ}、だっけ？

「あー……よく布とかに出る……意外と地味なんだね」

「最近ではパソコンとか、iPadなんかもキリストの仕事だよ」

「地味だけど凄いな！」

「先を読んでるよね」

はつと息をのむ。キリストの凄さにいつの間にか僕は父さんのペ
ースに吞まれていた。

「信じてくれた？」

戸惑う僕に、父さんが微笑んだ。

悔しいけれど、さっきのほくろ毛のことやマッサージの件もあるし、
信じるべき事実なんだろう。僕は神様になるのだ。

割り切ってしまうえば、なんだか楽しみになってきた。僕は神にな
るんだ！

「そついや父さんは何の神様なの？」

「聞いて驚くなよ！」

おじいちゃんがおじいちゃんだからきつと、地味なんだろうな。
そう思いつつ、父さんの発言を待つ。

父さんは薄目で、ミリオネアの如く溜めに溜めて溜めまくる。
そしてついに、カツと目を見開いた。

「エロいと髪がすぐ伸びる神様さ！」

……………え。

「……もしかしてウチ、体毛関係じゃないと駄目なの？」

「うん」

意外と有名だけど地味極まりない神のしたり顔を見ながら、俺は

その場で号泣した。

テレビの向こうでは、パトカーに乗った寺尾聡も泣いていた。

なんかの神さま（コメディ）（後書き）

キャラ重視のコメディが書きたくて。五分企画ではこっちを投稿し
ようか迷いました。

マゾクの王（ファンタジーコメディ）

生きることを許さぬ灼熱。マグマが崖下を泥のように流れているのを、少女は見下ろす。彼女を勇者と呼び慕う、虐げられし人々の声を思い出した。

ここは地獄の山と呼ばれる場所に隠された巨大な洞窟。大軍はけして渡ることの出来ないだろう細く切り立った道を、汗を拭うことも忘れてひたすら歩く。もうすぐ奴に会えるはずだと確信しながら――思いは現実となった。

「待ちわびていたぞ……」

陽炎の中に突然浮かび上がる影。洞窟の壁に伸びるそれはおぞましいほど巨大だった。まるで塔のように立ちはだかる影に、勇者は声を荒げる。

「私こそ。今日こそ裁きが下される日。魔王よ、覚悟！」

勇者は細い体に似合わぬ大剣を軽々と振り回し、切っ先を向けた。その所作に影が収束し、漆黒の長外套を纏う美しい青年へと変貌する。黒髪と黄金色の瞳が因美な青年、その薄い唇が僅かに動いたとき、鋭い牙が冷たく輝いた。

彼こそが、魔王。

「ふふ。……よろしい、望むところだ！」

青年は片手を掲げた。黒い霧がマグマから吹き上がり、細い帯となって空を踊る。

不気味な帯は瞬く間に太くなり、青年の片手に絡み付き、次の瞬間――、

——魔王を縛り上げた。

「さあ、勇者よ！ やってくれ！」

亀甲縛りに汗ばむ肉体。紅潮する頬に荒い息づかい。うつとりと潤む瞳に勇者は、

「え？」

ドン引きした。

「さあ、早くその太くて逞しい剣で私をやつざきにしてくれ！」

「えっ、えっ、えっ？」

狼狽しながらも勇者は、目の前に起きていることを整理すべく頭をフル回転させた。

残虐非道な殺戮を繰り返し、幾つもの国や町を燃やしてきた恐るべき魔王。どんな槍も剣も魔法も効かず、最凶の存在として人々の生活を脅かす悪の存在が、今まさに勇者の前であられもない姿となって勇者の攻撃を待ちわびている。唾液タラタラです。

「な……なんでやねん！」

あまりのことに関西弁が出てしまった勇者に、

「大丈夫。好きにしていから。思う存分殺していただけますと何よりです」

魔王は鼻息荒く近づいた。

「寄るな！ さては罨か！」

「縄ならもう済んでいる」

「そついう意味でないんですけど！」

言葉のキャッチボールが出来ていない。互いの方向性が若干異なっている。

何故なんだ、と勇者は牽制しながら思案する。考えを巡らせて行き着いた答えは、

「まさか、お前は私の前に魔王と戦った勇者か。魔王を殺した者が次の魔王になってしまふという呪いが存在し、戦いの末に魔王になつてしまったことを悲観して、死を望んでいるという設定で、お前を殺すと私は魔王になってしまうんだなっ!？」

「その設定でいこうかつ、さあっ!」

「違うの!？」

衝撃を受ける勇者を尻目に、束縛を自ら強めていく魔王。その体はピクピクと痙攣していた。

「勇者め、さすがだ。イくにイケないっ」

腰をくいくい上げて誘ってくる魔王に、ますます混乱する勇者。牽制を長々としているうちに、ついに魔王は口を開いた。

「ああッ」

ひととき大きく体をしならせる魔王。その姿は蠱惑的でした。ひとしきりビクンビクンした後、魔王はぐったりと地にひれ伏した。

「じらしプレイとは、高度な……しかし。まだまだ欲しいいいいい!」

「いやあああああッ!!」

亀甲縛りされつつ芋虫よろしく這い寄る興奮マックスな魔王の姿に、勇者は悲鳴をあげながら逃げ出した。脱兎の如く走り、たちまち消え去ってしまった。

「……くっ」

勇者の後ろ姿を見送ってから、魔王は縄を引きちぎり、ゆっくりと立ち上がった。

「不死身で最強の私を追いつめてくれる素晴らしい勇者はではなかったか。ああ、私の体をいたぶってくれる勇者はいないか……」

その大きな肩をしゅんと小さくしてから、

「いやいや、まだ諦めん！」

妖艶な視線をきらりと天へ注ぎ、拳を握る。そして世界中に散らばる魔物たちへと声を発した。

「者共であえ！ 人間を襲うのだ！ ……滅亡しない程度にお願いします！！」

真性でした。

マゾクの王（ファンタジーコメディ）（後書き）

キャラ小説が書きたくて

流行のチートが書きたくて

なんかよくある感じになってしまいました

姪の凶行（ノンフィクション、コピペ風）（前書き）

萌えコピ用に書いたものなのでザックリコピペ風です。

姪の凶行（ノンフィクション、コピペ風）

ただいま3歳で人生楽しんでる姪がいる

ぺらぺら喋るようになり、ちよつと生意気になってきた
この間のこと

お風呂に入った後に裸でエンジョイしている姪

「姪！ 服着なさい！」

と義姉が叱っても

「きゅあびーむ！」とかいって全然服着ない

超ハイテンション

さすがに風邪ひいちゃうよなと思い

「おっさんみたいだからやめなよ」と諫めると、

「姪はおちんちんはえてるもん！ だからいいんだよ！」

超超ハイテンション

「へえ、どこにはえてんの？」

どっからどうみても幼女です

「ここ！」

そういつて、姪は尻を指さした

「はえてませーん」

「がんばると出てくる！」

そういつてよりによつて

きばりだす

それ尻尾じゃね？という突っ込みは間に合わず
出てくる茶色いおちんちん

まさか出るとは思っていなかったのだろう

泣きだす姪

二回目の風呂に引きずられる姪

う・こと共に残される私

掃除のあと義姉に怒られました

「ごめん、今日はおちんちん出ない日みたい」
とまだ言っていた

将来は男の子かも？

ランチキ（少し不思議）

朝、目覚める。

少しずつ、大人になっていくのが分かる。

知能がこり固まっていく。馬鹿にさえなっていくような気がする。体がよく疲れるようになった。ネットをずっとしていればいいのに。ずっと眠っていられればいいのに。

前ほどゲームが楽しくない。創造力がなくなっているよう。心が枯れていくよう。

ああつまらない。楽しくない。逃げたい。どこかへ。休みたい。いつそ。

別人に、なれたらいいのに。

……そんな風に、感じたことって、ない？

春は住宅街にある塀に囲まれた十字路で、隠れるように息を潜めていた。手に握りしめたものに力を込めながら、じっと機会を待つ。何処からか足音が近づいていた。

息を切らしながら駆けてくる。高い呼吸音で、誰が向かってきているのは検討がついた。高鳴る心臓を理性で押さえ込み、ぎりぎりのタイミングを逃すまいと神経を集中する。足音が最大まで高まる、その一步が踏み込まれたとき。

春は姿勢を低く保ちながら、素早く突き伸ばした――、包丁を握りしめる両の手を。

「ぎゃあッ！」

肉に刃をたてる確かな手応えとともに、甲高い悲鳴と血飛沫が上がった。恐怖に戦慄し、春を睨み付ける横顔。更に一步踏み込んで、怯える白い喉を血塗れの包丁で決る。声を奪うために。

「さよなら、真昼」

眼鏡、三つ編み、セーラー服の古風な少女が、錆びた臭いを撒き散らしながらアスファルトに倒れ込む。血を止めようと傷口を懸命に押さえるも、止まらない。

喉から血泡を吹く真昼に視線を落しながら、春は微笑んだ。躊躇いなく彼女を蹴る。くると曝された背中には、純朴そうな少女には似合わないマシンガン。

「貰うね。もう必要ないもんね」

春は華奢な真昼からマシンガンを奪い担ぐと、セーラー服の端で包丁についた血を丁寧拭った。

刃の鏡に返り血を浴びた自身が映る。薄茶のショートヘアには血がつき、お気に入りダークグレイのパーカーとジーンズはすっかり汚れてしまっている。まるで殺人鬼だ。いや、殺人鬼なのだけれども。

「みんな殺人鬼だからなあ……」

呟きながら包丁をしまおうとして、真昼がまだ生きていることに気づく。彼女は道路になめくじのように這い、血の線を作りながら逃れようとする。

「可哀想に」

情けが出た。留目をさしてやろうと、包丁を再び握りしめる。真昼は地平線を睨み付けながら震えている。

「そういえば……」

不意に浮かぶ。

「君は何から逃げていた？」

思い至り、春は大地を蹴った。真昼に留目を刺さずに背を向ける。

しくじった、と舌打ちをした瞬間、背後からブレーキ音が轟いた。首だけ振り向くと、紺色の軽自動車が十字路に飛び込んできたところだった。

車の前輪が真昼の体に乗り上げ、バキバキという骨の砕ける音が響く。

「自然に優しい音の少ない車ってヤツか、雪哉だっけ！」

運転をしているのは雪哉という十後半の男。獅子のような髪を揺らしながら、雪哉はにやにやと笑いハンドルを回している。

「春ちゃんみっけ！」

雪哉の絶叫し、アクセルを踏み込む――。

殺しあいは唐突に始まった。

『殺せ、殺せ、殺せ、生きるために殺せ』

ある日のことだ。何の前触れもなく頭にそんな言葉が響き、意識を失った。

目覚めると、いたのは慣れ親しんだ街のど真ん中の公園だった。

春は何故か包丁を握りしめていた。

最初は夢か何かかと思いい、恐怖を感じながらも帰宅しようとした。しかしその道すがら、奇妙なことに気づいた。街が、無人であると鳥の声さえ聞こえないことに戸惑っていると、再び言葉が頭蓋に直接響いた。

『生き残りたければ殺せ、殺すんだ』

何事かと頭を押さえながら街をふらつくと、人が二人死んでいた。小学生中学年くらいの女の子と初老の男性が、それぞれ別の離れた場所で、血だまりの中に横たわっていたのである。

啞然として見やると、一見して共通点のない二人にはある共通点

があつた。春の知っている人物だったのだ。

春はあるコミュニティに所属している。真昼、雪哉を含むその他大勢、約二十人ほどで構成されたコミュニティである。

老若男女の集まる、一人一人メンバーの色が異なるこのコミュニティには、ある目的があつた。それは、一人の人物を観察すること。どこにでもいそうな存在。奴を皆で観察し、互いに意見を言い合うのだ。

彼はコミュニティの存在を知らなかった。春達は思うがままに彼のことを観察していたのである。

殺しあっているのはコミュニティの人間だ、そう断定するのに時間はかからなかった。

街にはいたるところに、見知った人物たちの死体が転がっていたし、殺し合う現場にも居合わせた。

春は恐怖を……、感じなかった。

訳は分からないが、ゲームが始まったのである。殺し合うというスリリングなゲームが。

これは正当防衛だ。殺さなければ、殺されるのだ。最後の一人になるまで。

春は細い道に入り込み、車の追跡から逃れた。土地勘がある。足の逃亡でも何とかなりそうだ。

裏道に隠れて、春はマシンガンを確認した。この武器は春と同じように、目覚めたとき手にいれたものだろうか。

「不公平だな」

こっちは包丁という至近距離でしか使えない危険度の高い武器で、三人は殺したというのに。

毒づきながらも春はマシンガンの弾がまだ残っていることを認めた。

「もうすぐ日が暮れるな……」

仰ぐと、空には月が浮かび紺色に染まり始めていた。夜になったらどうすれば良いか。

「一度家に戻るかな」

お互いの家の場所は知らない。危険を回避するには十分だろう。

春は暫く考え決断すると、家路へと慎重に戻った。

帰宅すると、どっと全身に疲れが覆い被さってきた。共働きの両親はまだ帰ってきていないようだ。

「ごはん……」

念のためにマシンガンだけ持って、春はキッチンへと向かった。電気はつけない。感づかれる危険があるから。

暗がりの中を進んで、春はキッチンの扉を開けた。

カチリ。

その瞬間、こめかみに嫌な音が響いた。首をそのままに、視線だけ横へやると、一人のリクルートスーツ姿の女性が拳銃を突きつけていた。

「あらこんばんは」

「真美さんだっけ。打ったら、打つけど」

「わかってるわよう」

真美はふふんと微笑むと、

「休戦しない？」

「信用できない」

「武器を同時に置く、とか。疲れたでしょ？」

春は少しだけ考えを巡らせると、「いいよ」と頷いた。殺しあい
で日中に削った体力と精神力は凄まじく、疲れは極限に達していた。
すぐにでも眠りたかった。

目配せしながら同時に武器を置く。

「ごはん、これで良いかしら」

お湯が注がれたカップラーメンを渡される。

「いきましょ」

リビングへと促され、春は息をのんだ。そこにいたのは真美だけ
ではなかった。五人ほど。皆、コミュニティのメンバーだった。

「ここを襲われたら、一発かな」

「かもね」

春の苦笑いに真美が同調する。しかし、

「でも襲わないわよ、きっと」

「なぜ？」

「なぜって……我が家だし」

「我が家？」

春が首を傾げると、真美は目を丸めた。それから、

「あんた記憶がないんだ」

にたりと笑い、真美は春の手を握った。

「こっちに来なよ」

促されて、春は二階へと上がった。二階には両親の書斎と寝室、
そして春の部屋がある。真美は春の部屋の前にたつと、顎をしゃく
った。

「開けなさいよ」

素直に従い、春はドアノブへと手を掛ける。そして。

「こいつは……」

春の部屋にいたのは、一人の人物だった。コミュニティに観察さ

れている存在である。

静かに、静かに眠っていた。

「私たちの主人格よ」

「主人格？」

「まだ気づかない？」

そう問われて、春は哑然とした。一気に血の気が引く。

「思い出したみたいね。私たちはこいつの中の登場人物に過ぎないのよ」

震える春に、真美は続けた。

「こいつは今、大人になろうとしているの。無意識に想像や妄想を捨てようとしている。妄想の中の自分たちに殺しあいを見せて、数を減らし、現実的な考えで世界に順応する準備をする。そうして、大人になるつもりなのよ」

『生き残るために殺せ』とは、そういう意味だったのか。春は込み上げる感情にぶるぶると身を縮ませた。収束し集束し、感情が一気に噴き出す。

出てきたのは、哄笑だった。泣き出すかと思いきや笑い出した春に、真美は眉間を寄せる。

「意外な反応ね」

「そうかなあ？」

クツクと唇を曲げながら、春は横たわる人物へと歩み、見下ろした。深く閉じられた夢見がちな目蓋に、微笑みかける。

「ねえ」

「なに？」

「僕に、休戦よりも良い考えがあるんだけど……」

春はそつと近寄る。手には包丁。武器は握られている。

春は笑う。

「別にいいじゃないかって、良いじゃん」

ランチキ（少し不思議）（後書き）

小説を書いているうちに、なにかを想像するうちに、たまに我を忘れたりする。

想像するって残酷なことだよな、と思うことがある。
そんなことがふと浮かんで書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3547e/>

やみなべごはん

2010年10月9日06時06分発行